千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第 34 集

流山運動公園周辺地区
埋蔵文化財調査報告書5

― 流山市前平井堀米遺跡 ―

令和２年12月

千 葉 県 教 育 委 員 会

流山運動公園周辺地区
埋蔵文化財調査報告書5

ながれやま し まえ ひら い ほり ごめ
― 流山市前平井堀米遺跡 ―

序　　文

いにしえより温暖な気候に恵まれた千葉県には、先人たちの生活の痕跡が埋蔵文化財包蔵地（遺跡）として数多く残されています。これらの埋蔵文化財は県民共有の財産として、地域の歴史や文化の解明に欠かすことのできない貴重なものです。

千葉県教育委員会では、埋蔵文化財の保護と各種開発事業との調整、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の普及などを目的とした諸活動に加え、千葉県が行う開発事業に係る埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査や調査成果の整理、報告書の刊行について実施しております。

本書は、千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第３４集として、千葉県県土整備部による流山運動公園周辺地区土地区画整理事業に伴って実施した流山市前平井堀米遺跡の発掘調査報告書です。

これまでに行われた調査では、奈良・平安時代の集落跡や中・近世の生活の痕跡を示す土坑群などが発見され、この地域の歴史を知る上で貴重な成果を数多く得ることができました。

刊行に当たり、本書が学術資料としてだけでなく、郷土の歴史に対する理解を深めるための資料として多くの方々に広く活用されることを期待しております。

最後に、発掘調査から整理作業を通じ、地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係諸機関には多大な御協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

令和２年12月

千葉県教育庁教育振興部
文化財課長　田 中 文 昭

凡　　例

1　本書は、千葉県県土整備部による流山運動公園周辺地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書は、千葉県流山市前平井字堀米110ほかに所在する前平井堀米遺跡（遺跡コード220-033）の第１次から第17次までの調査成果を収録している。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県県土整備部の委託を受け、平成24年度まで公益財団法人千葉県教育振興財団が実施し、平成25年度からは千葉県教育庁教育振興部文化財課が実施した。

4　調査組織及び発掘調査と整理作業の期間・担当者等は、第１章に記した。

5　本書の執筆は、第２章を主任上席文化財主事 落合章雄が行い、その他は主任上席文化財主事 蜂屋孝之が行った。編集は蜂屋が行った。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで以下の機関及び方々からご指導、ご協力を得た。

　千葉県県土整備部市街地整備課・流山区画整理事務所、流山市教育委員会、公益財団法人千葉県教育振興財団、栗田則久、小林清隆、太田宏敬、津田芳男

7　本書で使用した地図の座標値は、日本測地系にもとづく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北である。

8　本書で使用した地形図は下記の通りである。

第１・２・６・７・８図　流山市発行　1／2,500　流山市都市計画地図

第４図　柏書房株式会社発行　1989『明治前期関東平野地誌図集成』

第５図　国土地理院発行　1：25,000「流山」（NI-54-25-1-2）・「松戸」（NI-54-25-2-1）平成17年発行

9　図版１で使用した遺跡周辺航空写真は、昭和48年に京葉測量株式会社が撮影したものである。

【遺構種別記号】

SD：溝状遺構・区画整形遺構　SE：井戸　SH：ピット群　SI：竪穴住居跡　SK：土坑・陥穴・地下式坑

本　文　目　次

第１章　はじめに…… 1
　第１節　調査の概要 …… 1
　　１　調査の経緯と経過 …… 1
　　２　調査の方法と調査概要 …… 4
　第２節　遺跡の位置と環境 …… 5
　　１　遺跡の地理的環境 …… 5
　　２　周辺の遺跡と歴史的環境 …… 7
第２章　旧石器時代の遺構と遺物 …… 25
　第１節　概要 …… 25
　第２節　遺構と遺物 …… 25
第３章　縄文時代の遺構と遺物 …… 30
　第１節　概要 …… 30
　第２節　遺構 …… 30
　第３節　出土遺物 …… 30
　　１　縄文土器 …… 30
　　２　石器 …… 35
　　３　土製品 …… 38
第４章　古墳時代の遺構と遺物 …… 39
　第１節　概要 …… 39
　第２節　遺構 …… 39
第５章　奈良・平安時代の遺構と遺物 …… 51
　第１節　概要 …… 51
　第２節　遺構 …… 51
第６章　中・近世の遺構と遺物 …… 101
　第１節　概要 …… 101
　第２節　地下式坑・土坑・井戸・その他 …… 101
　第３節　溝状遺構 …… 128
第７章　遺構外出土遺物 …… 140
　第１節　概要 …… 140
　第２節　出土遺物 …… 140
第８章　まとめ …… 145

報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　流山運動公園周辺地区土地区画整理事業地内遺跡 ……2
第２図　前平井堀米遺跡の調査次別範囲と地形……3
第３図　グリッド分割図 ……4
第４図　遺跡の立地と周辺の地形 ……6
第５図　遺跡の位置と周辺の遺跡 ……8
第６図　上層確認調査トレンチ配置 ……15
第７図　下層確認調査グリッド配置及び本調査地点 ……16
第８図　上層遺構分布図 ……17
第９図　遺構配置図１……18
第10図　遺構配置図２……19
第11図　遺構配置図３……20
第12図　遺構配置図４……21
第13図　遺構配置図５……22
第14図　第１ブロック出土遺物分布 ……26
第15図　第２ブロック出土遺物分布 ……27
第16図　第１・２ブロック出土遺物 ……28
第17図　単独出土石器 ……29
第18図　(11)SK008・(11)SK009 ……31
第19図　縄文土器１……32
第20図　縄文土器２……33
第21図　縄文土器３……34
第22図　縄文時代石器１……36
第23図　縄文時代石器２……37
第24図　土製品 ……38
第25図　(9)SI006 ……40
第26図　(10)SI001 ……41
第27図　(10)SI005 ……42
第28図　(10)SI010 ……43
第29図　(10)SI019 ……45
第30図　(11)SI001 ……46
第31図　(11)SI013 ……48
第32図　(13)SI001(1)……49
第33図　(13)SI001(2)……50
第34図　(4)SI001 ……52
第35図　(4)SI002 ……53
第36図　(5)SI005(1)……55
第37図　(5)SI005(2)……56
第38図　(5)SI006 ……57
第39図　(5)SI007 ……57
第40図　(5)SI008 ……58
第41図　(5)SI009 ……60
第42図　(5)SI010 ……60
第43図　(5)SI011 ……61
第44図　(5)SI012 ……62
第45図　(9)SI001 ……63
第46図　(9)SI002(1)……65
第47図　(9)SI002(2)……66
第48図　(9)SI003 ……67
第49図　(9)SI004 ……68
第50図　(9)SI005 ……70
第51図　(9)SI007(1)……71
第52図　(9)SI007(2)……72
第53図　(9)SI008……73
第54図　(10)SI002……73
第55図　(10)SI003……75
第56図　(10)SI006……76
第57図　(10)SI007……77
第58図　(10)SI008……78
第59図　(10)SI011……79
第60図　(10)SI012……80
第61図　(10)SI013……81
第62図　(10)SI014……83
第63図　(10)SI017……84
第64図　(10)SI018……85
第65図　(10)SI020A ……86
第66図　(10)SI020B・(10)SI020C ……87
第67図　(10)SI021 ……89
第68図　(11)SI002……90
第69図　(11)SI003……91
第70図　(11)SI004……92

第71図　(11)SI006……93
第72図　(11)SI011……94
第73図　(11)SI012……95
第74図　(11)SI014……96
第75図　(12)SI001……97
第76図　(15)SI001……98
第77図　(15)SI002……98
第78図　(16)SI031……99
第79図　(5)SK013・(5)SK014・(5)SK020・(5)SH015・(5)SH023……102
第80図　(8)SK100・(8)SK101・(8)SK102・(8)SK103・(8)SK104……104
第81図　(8)SK105・(8)SK106・(8)SK107A・(8)SK107B・(8)SK107C……105
第82図　(8)SK108・(8)SK109・(8)SK110……107
第83図　(8)SK111・(8)SK112・(9)SX009……109
第84図　(10)SK004・(10)SK023……110
第85図　(11)SK005A・(11)SK005B・(11)SK007A・(11)SK007B……111
第86図　(14)SK001・(14)SK004……113
第87図　(14)SE003・(15)SK004……114
第88図　(16)SE002・(16)SK003・(16)SK004・(16)SK005・(16)SE008……116
第89図　(16)SK009・(16)SE011・(16)SE012……117
第90図　(16)SK013・(16)SK017・(16)SE021・(16)SE022……119
第91図　(16)SK018(1)……120
第92図　(16)SK018(2)……121
第93図　(16)SK018(3)……122
第94図　(16)SK018(4)……123
第95図　(16)SK018(5)……124
第96図　(16)SK025・(16)SK026……126
第97図　(16)SK027・(16)SK032……127
第98図　(5)SD004A・(5)SD004B……129
第99図　(5)SD003・(5)SD004B・(5)SD016・(5)SD017・(5)SD018・(5)SD019……130
第100図　(5)SD003・(5)SD018・(5)SD019 出土遺物……131
第101図　(10)SD022……132
第102図　(11)SD010A・(11)SD010B・(11)SD010C・(11)SD010D・(15)SD003……133
第103図　(16)SD015・(16)SD023・(16)SD024・(16)SD028……134
第104図　(16)SD024 出土遺物……135
第105図　(16)SD001・(16)SD014・(16)SD015・(16)SD016・(16)SD019・(16)SD020・(16)SD029・(16)SD030……136
第106図　(16)SD001・(16)SD014・(16)SD015・(16)SD016・(16)SD029 出土遺物……137
第107図　(16)SD006・(16)SD007・(16)SD033・(16)SD034……138
第108図　遺構外出土遺物……141
第109図　出土銭貨……142

表　目　次

第１表　前平井堀米遺跡(1)～(17)調査一覧表……4
第２表　周辺遺跡一覧表……9
第３表　前平井堀米遺跡上層遺構一覧表……23・24
第４表　旧石器時代石器一覧表……29
第５表　縄文時代石器一覧表……38
第６表　砥石一覧表……143
第７表　石臼一覧表……143
第８表　板碑一覧表……144
第９表　銭貨一覧表……144

図　版　目　次

図版１　遺跡周辺航空写真
図版２　調査前風景(2)地区
図版３　遺構配置状況(5)地区
図版４　遺構配置状況(5)地区･旧石器時代第１ブロック遺物出土状況(8)地区・遺構配置状況(9)地区
図版５　旧石器時代第２ブロック遺物出土状況(10)地区・遺構配置状況(16)地区・調査風景(5)地区
図版６　(4)SI001・(4)SI002・(5)SI005・(5)SI006・(5)SI007
図版７　(5)SI008・(5)SI009・(5)SI010・(5)SI012・(9)SI001・(9)SI002・(9)SI003
図版８　(9)SI004・(9)SI005･(9)SI006･(9)SI007
図版９　(9)SI008･(10)SI001･(10)SI002･(10)SI003・(10)SI005
図版10　(10)SI006・(10)SI007・(10)SI008・(10)SI010・(10)SI011
図版11　(10)SI011・(10)SI012・(10)SI013・(10)SI014・(10)SI017・(10)SI018
図版12　(10)SI019・(10)SI020A・(10)SI020B・(10)SI021・(11)SI001・(11)SI002
図版13　(11)SI003・(11)SI004・(11)SI006・(11)SI011・(11)SI012・(11)SI013
図版14　(11)SI013･(11)SI014･(12)SI001･(13)SI001･(15)SI001･(15)SI002･(16)SI031
図版15　(16)SI031･(5)SK013･(5)SK014･(5)SK020・(8)SK100･(8)SK101･(8)SK102
図版16　(8)SK103･(8)SK104･(8)SK105･(8)SK106･(8)SK107A･(8)SK107B･(8)SK108
図版17　(8)SK109･(8)SK110･(8)SK111･(8)SK112･(10)SK004･(10)SK014A･(10)SK014B･(10)SK014C･(10)SK014D
図版18　(10)SK014C･(11)SK005･(11)SK007･(11)SK008･(11)SK009･(14)SK001･(14)SE003･(14)SK004
図版19　(15)SK004･(16)SK003･(16)SK004･(16)SK005･(16)SE008･(16)SK009･(16)SK011･(16)SK013
図版20　(16)SK017･(16)SK018･(16)SE022･(16)SK026･(16)SK027･(16)SK032
図版21　(5)SH015･(16)SE002･(15)SD003･(5)SD004A・(5)SD004B・(16)SE021･(16)SD001･(16)SD007･(9)SX009
図版22　竪穴住居跡出土土器(1)
図版23　竪穴住居跡出土土器(2)
図版24　竪穴住居跡出土土器(3)
図版25　竪穴住居跡出土土器(4)
図版26　竪穴住居跡出土土器(5)
図版27　竪穴住居跡出土土器(6)
図版28　竪穴住居跡出土土器(7)
図版29　竪穴住居跡出土土器(8)
図版30　竪穴住居跡出土土器(9)・遺構外出土土器
図版31　土製品・砥石・金属製品
図版32　中・近世遺物(1)
図版33　中・近世遺物(2)
図版34　中・近世遺物(3)
図版35　中・近世遺物(4)
図版36　中・近世遺物(5)
図版37　板碑・石臼
図版38　旧石器時代石器
図版39　縄文土器(1)
図版40　縄文土器(2)・縄文時代石器・土製品
図版41　縄文時代石器・銭貨

第１章　はじめに

第１節　調査の概要

１　調査の経緯と経過

千葉県企業庁は、常磐新線（現・つくばエクスプレス）の建設に関連して流山運動公園周辺地区土地区画整理事業を計画し、事業実施に先立って「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書を千葉県教育委員会教育長あてに提出した。千葉県教育委員会は、事業予定地内に27か所の周知の埋蔵文化財包蔵地が所在することを確認して、その旨回答した（第１図）。

その後、両者は事業予定地内の埋蔵文化財の取扱いについて慎重な協議を重ね、現状保存及び計画変更が困難な地点については、やむを得ず記録保存の措置を講じることとした。

記録保存のための発掘調査は、財団法人千葉県文化財センター（現・公益財団法人千葉県教育振興財団）が実施することとなり、千葉県企業庁との間に委託契約が締結され、平成９年度から発掘調査が開始された。事業主体は、平成18年度からは千葉県県土整備部が本区画整理事業を引継いでいる。

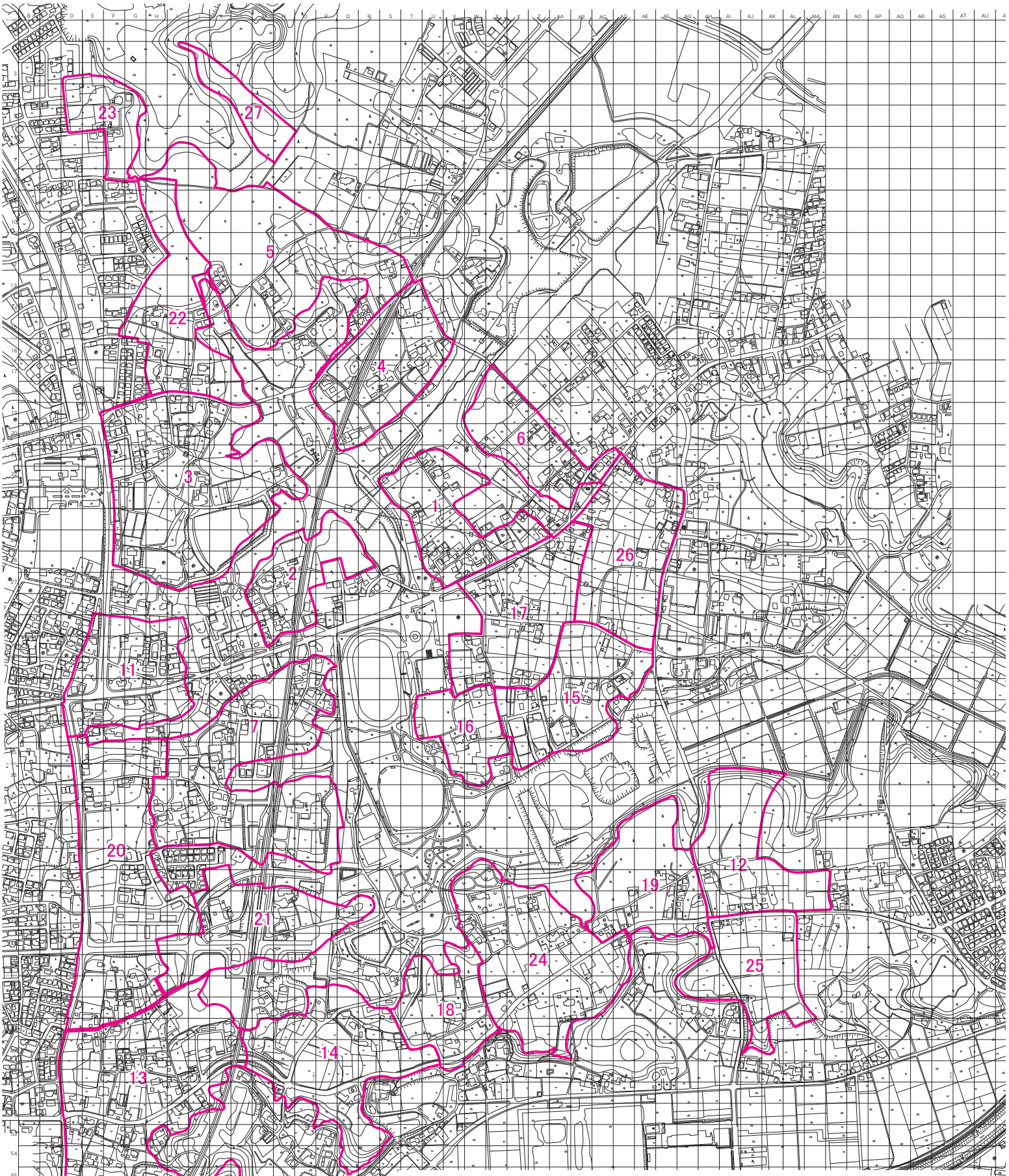
前平井堀米遺跡は、流山市前平井字堀米ほかに所在し、全遺跡面積は46,479㎡を測る。このうち88％にあたる40,840㎡について、平成９年度から平成24年度までの間に17次にわたる発掘調査を実施している。前平井堀米遺跡における未調査地区は限定的で、これまでの発掘調査によってほぼ遺跡の全容が明らかになっている（第２図）。当該遺跡内に依然として残る未調査区域については、今後調査を実施した上で、追加的な報告を行う予定である。

発掘調査及び整理作業に関わった各年度の担当職員、作業内容等は第１表のとおりである。上層の確認調査については、各調査区の対象面積に対し10％程度の確認トレンチを設定し、遺構の時期及びその広がりを確認した。その結果、４次調査において400㎡、５次調査において2,929㎡、８次調査において1,100㎡、９次調査において823㎡、10次調査において3,530㎡、11次調査において1,630㎡、12次調査において501㎡、16次調査において1,430㎡が本調査となった（第６図）。

下層の確認調査については、各調査区の対象面積に対し２％～４％程度の確認トレンチを設定し、石器出土地点の層位と広がりを確認した。その結果、平成14年度に実施した８次調査、平成15年度に実施した10次調査において旧石器時代の石器群が検出され調査を実施している。いずれの調査においても出土遺物の広がりが限定的であったことから、確認調査の範囲内で終了している（第７図）。なお、９～11・13～16次調査区では、標高が低い地点や谷部にあたっている地点などがあり、立川ローム層が失われていたことから、確認調査については不要とした。

区画整理事業地内においてこれまでに実施された発掘調査の報告書としては、思井堀ノ内遺跡についての中世編及び旧石器～奈良・平安時代編の２冊の報告書が財団法人千葉県教育振興財団（現・公益財団法人千葉県教育振興財団）から刊行され[注3・49]、思井上ノ内遺跡、中中屋敷遺跡の報告書が千葉県教育委員会から刊行されている[注4]。本書は、当事業に伴う報告書の５冊目となる。

前平井堀米遺跡の整理作業は、平成24年度に公益財団法人千葉県教育振興財団が、さらに平成29年度から令和２年度まで千葉県教育庁教育振興部文化財課が引き継いで実施し、令和２年度に報告書刊行に至っている。



1．市野谷梶内第Ⅰ遺跡　2．市野谷梶内第Ⅱ遺跡　3．市野谷地蔵谷ツ遺跡
4．市野谷中島遺跡　5．市野谷宮後遺跡　6．市野谷向山遺跡　7．後平井中通遺跡
8．思井上ノ内遺跡　9．思井鷹の見遺跡　10．思井堀ノ内遺跡　11．加東割遺跡
12．古間木芳賀殿第Ⅱ遺跡　13．中中ノ台遺跡　14．中中屋敷遺跡　15．野々下大屋敷遺跡
16．野々下西方遺跡　17．野々下山中遺跡　18．古間木山王第Ⅰ遺跡
19．古間木芳賀殿第Ⅰ遺跡　20．前平井遺跡　21．前平井堀米遺跡　22．三輪野山八幡前遺跡
23．三輪野山宮前遺跡　24．古間木山王第Ⅱ遺跡　25．柴崎大囲遺跡　26．野々下貝塚
27．市野谷芋久保遺跡

第1図　流山運動公園周辺地区土地区画整理事業地内遺跡（S=1/10,000）

第２図　前平井堀米遺跡の調査次別範囲と地形

第１表　前平井堀米遺跡(1)～(17)調査一覧表

【発掘調査】

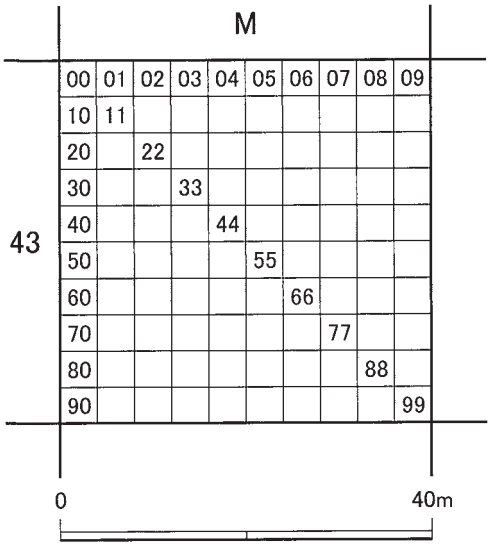
調査次数	年度	事業名	調査期間	調査体制			担当者	対象面積(㎡)	確認調査面積(㎡) 上層 確認／対象	確認調査面積(㎡) 下層 確認／対象	本調査(㎡) 上層	本調査(㎡) 下層
(1)	平成9	千葉県企業庁運動公園周辺地区土地区画整理事業	H10.2.20～H10.2.23	(財)千葉県文化財センター	北部調査事務所	調査部長　西山太郎 所長　折原　繁	主任技師 落合章雄・石田清彦	611	150／611	24/611	0	0
(2)	平成10	千葉県企業庁運動公園周辺地区土地区画整理事業	H11.1.5～H11.1.29	(財)千葉県文化財センター	西部調査事務所	調査部長　沼澤　豊 所長　鈴木定明	室長 都淳一	3,102	374／3,102	100／2,495	0	0
(3)	平成11	千葉県企業庁運動公園周辺地区土地区画整理事業	H12.2.21～H12.2.29	(財)千葉県文化財センター	西部調査事務所	調査部長　沼澤　豊 所長　及川淳一	研究員 廣瀬和之・山田貴久	616	62／616	20／516	0	0
(4)	平成12	千葉県企業庁運動公園周辺地区土地区画整理事業(その3)	H12.6.1～H12.6.29	(財)千葉県文化財センター	西部調査事務所	調査部長　沼澤　豊 所長　及川淳一	上席研究員 竹田良男	400	－／－	16／400	400	0
(5)	平成13	千葉県企業庁運動公園周辺地区土地区画整理事業(その2)	H13.10.1～H14.1.31	(財)千葉県文化財センター	西部調査事務所	調査部長　佐久間　豊 所長　田坂　浩	室長　郷堀英司 上席研究員　角谷敏昭	4,397	565／4,397	100／4,397	2,929	0
(6)	平成14	千葉県企業庁運動公園周辺地区土地区画整理事業(その2)	H14.5.8～H15.5.13	(財)千葉県文化財センター	西部調査事務所	調査部長　斎木　勝 所長　田坂　浩	室長　郷堀英司 上席研究員　竹内久美子	922	54／922	8／922	0	0
(7)	平成14	千葉県企業庁運動公園周辺地区土地区画整理事業(その2)	H15.1.20～H15.1.24	(財)千葉県文化財センター	西部調査事務所	調査部長　斎木　勝 所長　田坂　浩	研究員 豊田秀治	1,267	130／1,267	16／1,267	0	0
(8)	平成14	千葉県企業庁運動公園周辺地区土地区画整理事業(その3)	H14.11.7～H15.2.27	(財)千葉県文化財センター	西部調査事務所	調査部長　斎木　勝 所長　田坂　浩	研究員 豊田秀治	3,070	416／3,070	96／3,070	1,100	0
(9)	平成15	千葉県企業庁運動公園周辺地区土地区画整理事業(その4)	H15.4.7～H15.5.16	(財)千葉県文化財センター	西部調査事務所	調査部長　斎木　勝 所長　田坂　浩	上席研究員 郷堀英司	2,105	210／2,105	20／2,105	823	0
(10)	平成15	千葉県企業庁運動公園周辺地区土地区画整理事業(その4)	H15.10.1～H16.3.26	(財)千葉県文化財センター	西部調査事務所	調査部長　斎木　勝 所長　田坂　浩	上席研究員 郷堀英司	5,441	624／5,134	156／5,441	3,530	0
(11)	平成15	千葉県企業庁運動公園周辺地区土地区画整理事業(その4)	H16.1.7～H16.3.26	(財)千葉県文化財センター	西部調査事務所	調査部長　斎木　勝 所長　田坂　浩	上席研究員 福田　誠	3,529	344／3,529	40／3,529	1,630	0
(12)	平成16	千葉県企業庁運動公園周辺地区土地区画整理事業	H16.5.10～H16.5.19	(財)千葉県文化財センター	西部調査事務所	調査部長　矢戸三男 所長　田坂　浩	上席研究員 郷堀英司	501	－／－	12／501	501	0
(13)	平成16	千葉県企業庁運動公園周辺地区土地区画整理事業	H16.7.1～H16.8.6	(財)千葉県文化財センター	西部調査事務所	調査部長　矢戸三男 所長　田坂　浩	上席研究員 岡田光広	2,883	2,004／2,883	4／2,883	0	0
(14)	平成16	千葉県企業庁運動公園周辺地区土地区画整理事業	H16.10.1～H16.10.29	(財)千葉県文化財センター	西部調査事務所	調査部長　矢戸三男 所長　田坂　浩	上席研究員 郷堀英司	1,738	704／1,738	－／－	0	0
(15)	平成16	千葉県企業庁運動公園周辺地区土地区画整理事業(その2)	H17.1.6～H17.2.28	(財)千葉県文化財センター	西部調査事務所	調査部長　矢戸三男 所長　田坂　浩	上席研究員 福田　誠	367	367／367	－／－	0	0
(16)	平成18	千葉県県土整備部つくばエクスプレス沿線整備事業委託	H18.8.30～H18.12.15	(財)千葉県教育振興財団	西部調査事務所	調査部長　矢戸三男 所長　田坂　浩	主席研究員兼副所長 高橋博文	9,591	922／9,591	－／－	1,430	0
(17)	平成24	千葉県県土整備部つくばエクスプレス沿線整備事業委託(その1)	H24.5.7～H24.5.11	(公財)千葉県教育振興財団	調査研究部調査2課	部長　関口達彦 課長　橋本勝雄	主任上席文化財主事 鳴田浩司	300	68／300	6／300	0	0
合　計								40,840	6,994／39,632	618／28,437	12,343	0

【整理作業】

調査次数	年度	事業名	整理期間	調査体制			担当者	内容
(1)～(17)	平成24	千葉県県土整備部つくばエクスプレス沿線整備事業委託(その2)	H24.6.27～H25.3.4	(公財)千葉県教育振興財団	調査研究部調査2課	部長　関口達彦 課長　橋本勝雄	－	水洗・注記
	平成29	千葉県県土整備部運動公園周辺地区土地区画整理事業	H29.4.1～H30.3.31	千葉県教育庁教育振興部文化財課	発掘調査班	課長　萩原恭一 班長　山田貴久	文化財主事　館　祐樹	記録整理～分類の一部
	平成30	千葉県県土整備部運動公園周辺地区土地区画整理事業	H30.4.1～H31.3.31	千葉県教育庁教育振興部文化財課	発掘調査班	課長　古泉弘志 班長　山田貴久	主任上席文化財主事　安井健一 文化財主事　館　祐樹	分類の一部～実測の一部
	令和元	千葉県県土整備部運動公園周辺地区土地区画整理事業	H31.4.1～R2.3.31	千葉県教育庁教育振興部文化財課	発掘調査班	課長　大森けい子 班長　大内千年	主任上席文化財主事 落合章雄、安井健一、蜂屋孝之	実測の一部～原稿の一部
	令和2	千葉県県土整備部運動公園周辺地区土地区画整理事業	R2.4.1～R3.3.31	千葉県教育庁教育振興部文化財課	発掘調査班	課長　田中文昭 班長　大内千年	主任上席文化財主事 落合章雄、安井健一、蜂屋孝之	原稿の一部～刊行

2　調査の方法と調査概要

調査にあたっては、区画整理事業地内の遺跡を網羅するように、日本測地系に基づくグリッド設定を行った。X＝－14,800m、Y＝＋7,600mを起点とする40m×40mの方眼を大グリッドとし、北から南へ１～67、西から東へA～Z及びAA～ANとし、大グリッドはアルファベットと数字の組み合わせにより「C２」「K11」のように表示することとした。今回報告する前平井堀米遺跡(1)～(17)は、大グリッドで示すとH44を西端とし、R43を東端とする範囲にあたる(第２図)。大グリッドの中は、更に４m×４mの小グリッドに100分割し、小グリッドは北西角から東へ00、01、02…、南へ00、10、20…とし、南東角を99とした。これにより、大グリッドとの組み合わせで、例えば「M43－55」のように座標軸による小グリッドで地点を表示することとした(第３図)。



第３図　グリッド分割図

遺構番号については、１次調査から概ね遺構の性格に関係なく001から始まる３桁の数字の連番が使用されてきた。遺物への注記は、原則調査次数とともに調査中に付された遺構番号で行ったが、整理作業を進めていく中で報告書に掲載すると遺構番号に重複があることから、基本的に調査時の番号を踏襲するものの、遺構の種別記号を付した上でその前に(　)で調査次数の番号を付して、本報告書における遺構番号とした。遺構の種別記号は凡例に示したとおりで、調査時と本報告における遺構名の対照表は第３表のとおりである。

調査の結果、検出された遺構は、旧石器時代石器集中地点２か所、縄文時代陥穴２基、古墳時代竪穴住居跡８軒、奈良・平安時代竪穴住居跡36軒、中・近世地下式坑20基、土坑墓１基、土坑17基、井戸７基、溝状遺構28条、ピット群２か所である(第７～13図)。出土遺物については、検出された遺構に伴う遺物が出土しているほか、縄文時代の土器・石器などが包含層及び後世の遺構内から出土している。

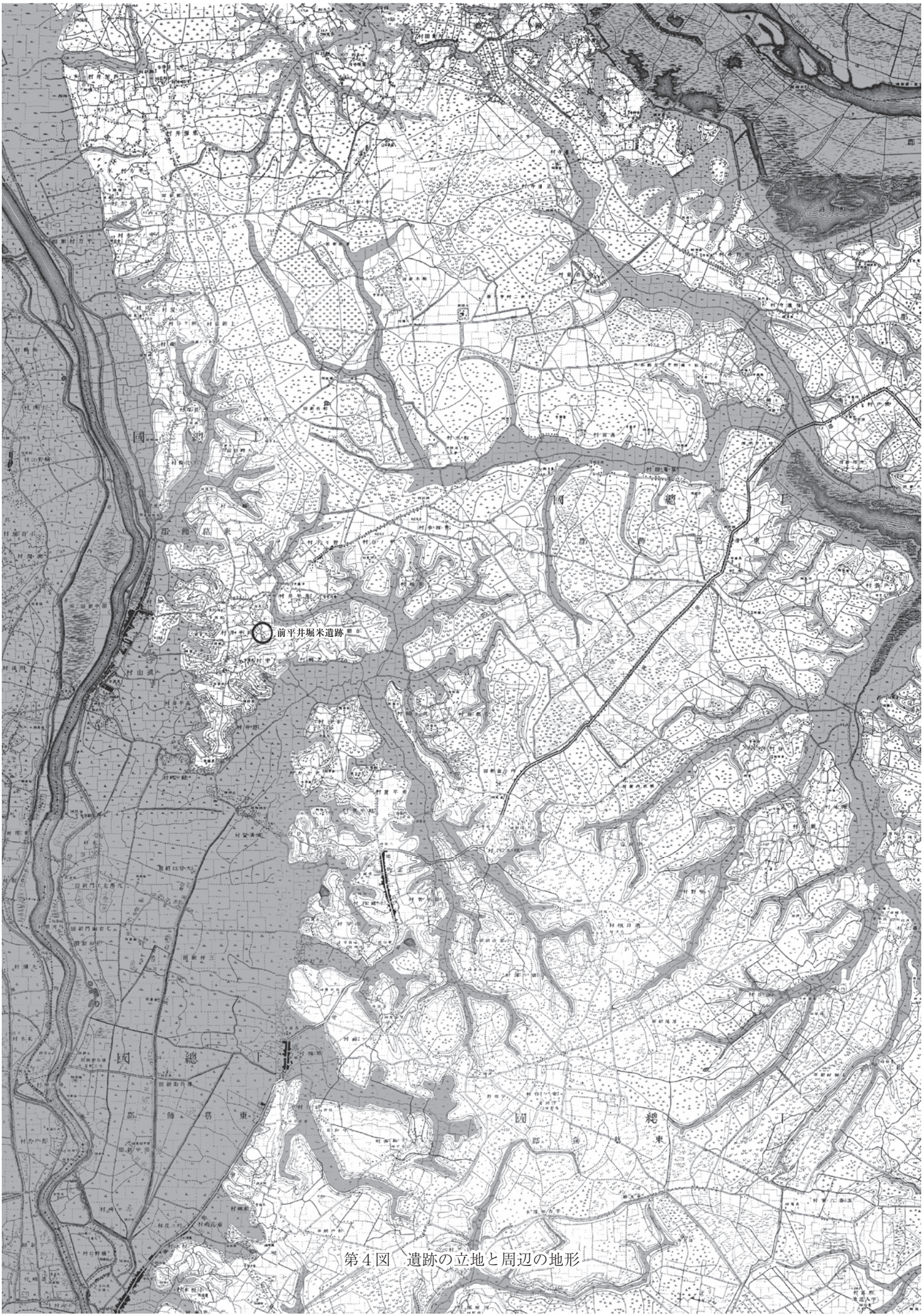
第２節　遺跡の位置と環境

１　遺跡の地理的環境

前平井堀米遺跡が所在する流山市は千葉県の北西端に位置し、江戸川の下流域に沿って南北に長い市域を有しており、北側で野田市、東側で柏市、南側で松戸市と接し、江戸川の西側対岸は、埼玉県となっている。市の中部や北部は下総台地の一部を構成して緩やかな高低差の台地となっており、ほぼ全域が住宅街や農地などの土地利用となっている。下総台地とは、千葉県北部一帯にかかる台地を指し、現在は江戸川開削によって切り離されているが一部は埼玉県東部に及んでいる。旧下総国の台地であり北総台地とも呼ばれている。千葉県北東部の成田市や香取市を中心とする台地、千葉県北西部の野田市など江戸川沿いから船橋市にかけての台地、埼玉県東端の幸手市、北葛飾郡杉戸町及び春日部市など江戸川沿いの台地(埼玉県では宝珠花台地、金杉台地などと呼ばれている)に大別され、香取市や香取郡東庄町などの利根川沿いでは標高が50メートルを越える所もあるものの、標高は概ね40m～20mであり、なだらかな起伏が続く台地がほとんどである。本遺跡はこの流山市の南西部、最も標高の高いところで約20mの台地上に立地している。台地の西側直下には江戸川が流れ東京湾へ注いでおり、南側は松戸市との境をなす支流の坂川が流れている。遺跡周辺の台地は、いずれも江戸川に注ぐ支谷が東側の下総台地を樹枝状に開析して形成されたものである。戸川や坂川の流れる古東京湾沿岸に形成された広い低地へと半島状に突出すような形状を呈しており、さらに両河川に注ぐ小支谷によって複雑に開析された舌状台地が連なっている。台地の基盤層は、下総層群と呼ばれる中期洪積世の海成砂層からなり、砂泥層や礫層なども挟んでいる。下総層群はまた、地蔵堂層、藪層、清川層、上岩橋層、成田層の５つの累層に区分されている。さらに上層には、下末吉ローム、武蔵野ローム、立川ロームなどの火山灰による風成層が堆積している(注1)。流山市域では、全体に台地の標高が低く、台地によっては後期旧石器群を含む立川ロームが失われている地点も多い。流山市域の台地上は、市域のほぼ全てが後期旧石器時代以降の埋蔵文化財包蔵地であることが確認されている。

前平井堀米遺跡が立地する台地そのものは、坂川から深く入り込んだ東側からの支谷によって開析された東西に長い台地であり、標高は谷部が約12m、台地の最高部が19mを示し、全体として東に向かい緩い傾斜をなしている。

本来なら一つの遺跡としてみてもよい西側の前平井遺跡においても最も高いところの標高は23m程度し



第４図　遺跡の立地と周辺の地形

かなく、江戸川に面する斜面は縄文海進によって形成された海食崖の急崖となっている。遺跡の南側を流れる坂川は、遺跡付近から南西へ約3.5kmの地点で江戸川へと合流する小河川であるが、縄文海進期には古東京湾の支湾となる「古流山湾」が形成されていた(注2)。谷奥部は下総台地へと深く入り込み、その谷頭は遺跡の北東側約7.5km にある手賀沼と、そこに注ぐ大堀川に接するような地点にまで延びている。ちなみに本遺跡から東側そして北側の台地へと入り込む坂川の支谷と手賀沼の北西部へと注ぐ大堀川支谷との間は分水嶺をなしている。手賀沼はかつての香取海の一部であり、太平洋へと通じる水系にあることから、この分水嶺は太平洋水系と東京湾水系を背景とし、分水嶺を通って房総半島へ入る場合の唯一の通路となっている点で重要である。

2　周辺の遺跡と歴史的環境

流山市は、1950年代以降に住宅開発がはじまり、高度経済成長期になると首都圏のベッドタウンとして大規模な土地区画整理事業による開発などが加速し、数多くの遺跡が調査されている。ここでは本事業地内周辺を中心に、代表的な調査成果を示してこの地域の歴史的環境を俯瞰したい(第５図、第２表)。

流山市内の旧石器時代の遺跡は近年、当区画整理事業地及び北東部に隣接する流山新市街地地区土地区画整理事業地内(以下、新市街地地区と略す)において著しく、資料が増加している。思井堀ノ内遺跡(５)(注3)、思井上ノ内遺跡(16)(注4)、三輪野山北浦(旧三輪野山第Ⅱ)遺跡(56)(注5・6)、西初石五丁目遺跡(63)(注7・8・9)、市野谷入台遺跡(61)(注8・10)、市野谷二反田遺跡(58)(注11)、大久保遺跡(60)(注12)、市野谷向山遺跡(52)(注8・12)、東初石六丁目第Ⅰ遺跡(79)(注12)、東初石六丁目第Ⅱ遺跡(77)(注12)、十太夫第Ⅱ遺跡(注12)、市野谷中島遺跡(51)(注8)、市野谷芋久保遺跡(注9)、市野谷立野遺跡(注13)、地図の外になるが桐ヶ谷新田第Ⅰ遺跡、中野久木遺跡、若葉台遺跡、桐ヶ谷南割(上貝塚)遺跡などで石器群が検出されている。思井堀ノ内遺跡ではⅢ層からⅨ層にかけて11ブロック、思井上ノ内遺跡ではⅣ層からⅨ層にかけて３ブロック、三輪野山北浦遺跡ではⅢ層からⅦ層にかけて６ブロック、市野谷入台遺跡ではⅢ層からⅦ層にかけて26ブロック、市野谷二反田遺跡ではⅣ層からⅨ層にかけて12ブロック、西初石五丁目遺跡ではⅢ層からⅨ層にかけて６ブロック、大久保遺跡ではⅣ層とⅨ層で41ブロック、市野谷向山遺跡ではⅣ層からⅨ層にかけて22ブロック、東初石六丁目第Ⅰ遺跡ではⅣ層からⅤ層にかけて３ブロック、東初石六丁目第Ⅱ遺跡ではⅣ層からⅤ層にかけて５ブロック、十太夫第Ⅱ遺跡ではⅤ層からⅥ層にかけて１ブロック、市野谷中島遺跡ではⅣ層からⅤ層にかけて１ブロック、市野谷芋久保遺跡ではⅢ層からⅩ層にかけて46ブロック、市野谷立野遺跡ではⅣ層中部から下部にかけて４ブロックがそれぞれ調査されている。その他、上層遺構覆土中からの遺物出土事例は数多く報告されている。

縄文時代の遺跡はきわめて多い。草創期は遺構の検出事例はなく、長崎遺跡(116)(注14)で有茎尖頭器の出土が報告されるなどごくわずかな遺物の出土しか確認されていないが、早期になると遺構の検出事例が増え、遺物も多くの遺跡で出土するようになる。思井堀ノ内遺跡では野島式から鵜ガ島台式期を中心とする竪穴住居跡２軒、炉穴35基などが検出され、思井上ノ内遺跡では鵜ガ島台式を中心とする早期後葉の竪穴住居跡２軒、土坑２基、炉穴25基などが検出されている。三輪野山第Ⅲ遺跡(55)(注15)では鵜ガ島台式期の竪穴住居跡１軒と炉穴10基が調査されている。炉穴の検出例は数多く、三輪野山道六神遺跡(53)(注6)や大原神社遺跡(12)(注16)、平和台遺跡(11)(注17・18)、三輪野山八重塚第Ⅱ遺跡(42)(注19)、三輪野山八重塚遺跡(43)(注20・21)、加北谷津第Ⅱ遺跡(39)(注22)、西平井二階畑遺跡(３)(注23)、市野谷立野遺跡(注9)などで報告されている。市野

第5図：遺跡の位置と周辺の遺跡（S≒1/25,000）

第２表　周辺遺跡一覧表

番号	遺　跡　名	時　　代
1	前平井堀米遺跡	古墳(後)、奈良・平安
2	西平井根郷遺跡	縄文、中世
3	西平井二階畑遺跡	縄文、中世
4	中中ノ台遺跡	平安、中近世
5	思井堀ノ内遺跡	旧石器、縄文(早・前・中・後)、古墳(中)、奈良・平安、中・近世
6	西平井大崎遺跡	縄文
7	思井鷹の見遺跡	縄文(早・前)、古墳、近世
8	鰭ヶ崎塚の越遺跡(三本松古墳)	古墳(後)
9	鰭ヶ崎塚の越台遺跡	古墳(後)
10	鰭ヶ崎貝塚	縄文(早・中・後)、平安
11	平和台遺跡	縄文(中)、古墳、平安、中・近世
12	大原神社遺跡	縄文(早)、古墳(後)、平安
13	宮本遺跡	縄文(早)、平安
14	前平井遺跡	縄文(前・中)、平安
15	後平井中通遺跡	旧石器、縄文(早・前・中・後・晩)、奈良・平安、中・近世
16	思井上ノ内遺跡	旧石器、縄文(早・前・中・後)、古墳、奈良・平安、中・近世
17	古間木山王第Ⅰ遺跡	縄文(前)、平安
18	古間木第Ⅰ塚	近世
19	古間木山王第Ⅱ遺跡	縄文、古墳(後)、奈良・平安
20	芝崎第２号墳遺跡	古墳
21	芝崎大囲遺跡	縄文(前・中)、古墳、平安
22	芝崎第１号墳遺跡	古墳
23	古間木芳賀殿第Ⅰ遺跡	縄文(前・中)、平安
24	古間木芳賀殿第Ⅱ遺跡	縄文(後)、平安
25	加村台遺跡・旧本多藩陣屋跡	弥生(中)、古墳(後)、平安、近世
26	加町畑遺跡	縄文、古墳、奈良・平安
27	加若宮第Ⅰ遺跡	旧石器、縄文、平安
28	加東割遺跡	縄文(前)、中近世
29	中中屋敷遺跡	旧石器、縄文(早・前・中・後・晩)、奈良・平安、中・近世
30	野々下西方遺跡	縄文(前・中)
31	野々下大屋敷遺跡	縄文(後)、平安
32	野々下山中遺跡	縄文(前)、平安
33	野々下貝塚	縄文(前・中・後・晩)
34	野々下根郷第Ⅰ遺跡	平安
35	野々下根郷第Ⅱ遺跡	縄文(後)、平安
36	野々下篠塚	縄文(後)、近世
37	古間木茱萸木谷遺跡	縄文(早・前・後)
38	古間木遠田遺跡	縄文(前)
39	加北谷津第Ⅱ遺跡(北谷津古墳)	縄文、古墳、平安
40	加北谷津第Ⅰ遺跡	旧石器、縄文、平安
41	加若宮第Ⅱ遺跡	縄文、平安
42	三輪野山八重塚Ⅱ遺跡	縄文(早)、平安
43	三輪野山八重塚	縄文、古墳、平安
44	三輪野山低地遺跡	縄文(後・晩)
45	三輪野山貝塚	旧石器、縄文(前・中・後・晩)
46	三輪野山八幡前遺跡	縄文、古墳、平安、近世
47	市野谷地蔵谷ッ遺跡	古墳(後)、平安
48	市野谷梶内第Ⅱ遺跡	縄文
49	市野谷梶内第Ⅰ遺跡	縄文(前・中)、古墳(中・後)
50	市野谷宮後遺跡	縄文
51	市野谷中島遺跡	旧石器、縄文(早・前・中・後・晩)、奈良・平安、近世
52	市野谷向山遺跡	旧石器、縄文(早・前・中・後・晩)、古墳(中・後)、平安、中・近世
53	三輪野山道六神遺跡	縄文、古墳、平安、中近世
54	三輪野山宮前遺跡	縄文(前)、古墳(後)、平安、近世
55	三輪野山第Ⅲ遺跡	縄文、古墳(後)、平安、近世
56	三輪野山北浦遺跡	旧石器、縄文(前・後)、古墳、平安、近世
57	市野谷芋久保遺跡	旧石器、縄文(早・前・中・後・晩)、中・近世
58	市野谷二反田遺跡	旧石器、縄文(早・前・中・後・晩)、古墳(前・後)、奈良・平安、中・近世
59	市野谷立野遺跡	旧石器、縄文(早・前・中・後・晩)、古墳(後)、近世
60	大久保遺跡	旧石器、縄文(早・前・中・後・晩)、奈良、近世
61	市野谷入台遺跡	旧石器、縄文(前・中・後・晩)、古墳(前・中)、奈良、中・近世
62	市野谷宮尻遺跡	旧石器、縄文(早・前・中・後・晩)、古墳(前・後)、奈良・平安
63	西初石五丁目遺跡	旧石器、縄文(早・前・中・後・晩)、弥生、古墳(前)、奈良・平安、近世
64	三輪野山向原古墳	縄文(前)、弥生、古墳(前)
65	大畔西割遺跡	縄文(早・中)、古墳(後)、平安
66	大畔中ノ割遺跡	縄文(早・前・中)、平安
67	花輪城跡	中世
68	下花輪林下遺跡	縄文(後)、古墳(後)
69	下花輪荒井前遺跡	旧石器、縄文(早・前・中・後)、弥生、古墳、奈良・平安、中近世
70	下花輪西山遺跡	縄文、古墳、中世
71	下花輪荒井遺跡	縄文(中・後)、平安、近世
72	上貝塚大門遺跡	縄文(前・後)、平安
73	桐ヶ谷浅間後遺跡	旧石器、縄文(前・後)、平安
74	大畔台遺跡	縄文(前)、古墳、中世
75	西初石桜窪遺跡	縄文(前・中・後)、近世
76	花山東遺跡	旧石器、縄文、奈良・平安
77	東初石六丁目第Ⅱ遺跡	旧石器、縄文(前・後)、平安
78	十太夫第Ⅰ遺跡	縄文(早・前・中・後)、平安、近世
79	東初石六丁目第Ⅰ遺跡	旧石器、縄文(中・後・晩)、平安、近世
80	十太夫第Ⅲ遺跡	縄文(早・前・中・後・晩)、平安
81	諏訪神社遺跡	縄文(中)
82	駒木諏訪腰遺跡	縄文(前)
83	幸田貝塚	旧石器、縄文(前・中・後)、古墳
84	中芝遺跡	弥生(後)、古墳(前・中・後)
85	道六神遺跡	縄文(早・前・中・晩)、弥生(後)、古墳(後)、奈良・平安
86	木戸口(中金)遺跡	縄文(晩)、古墳(中)
87	中金杉台遺跡	縄文(後)
88	原の山遺跡	縄文(早・前)、弥生、古墳(中・後)、平安
89	殿平賀遺跡	縄文(後)
90	殿平賀向堀遺跡	縄文(中)
91	東平賀遺跡	旧石器、縄文(前・中・後)、中世
92	殿平賀向山遺跡	旧石器、縄文(早・前)、古墳(前・中・後)
93	東平賀向台遺跡	古墳
94	小金城跡(大谷口小金城跡)	縄文、古墳、平安、中世
95	小金古墳群	古墳
96	西(小金)(北小金)遺跡	縄文(前・中・後)
97	境外Ⅱ遺跡	旧石器、縄文(前)
98	溜ノ上(溜の脇)遺跡	旧石器、縄文(早・前・中・後・晩)、古墳(前・中・後)
99	境外(北小金駅付近)(東漸寺)遺跡	縄文(前・後)
100	山王前遺跡	縄文(前・中)
101	熊ノ脇遺跡	縄文(早・前・中)
102	幸谷城跡	中世
103	観音下遺跡	縄文(後)
104	後田遺跡	縄文(中・後)、平安、近世
105	馬橋城跡	中世
106	上野台(二ッ木向台Ⅱ)遺跡	弥生(後)
107	二ッ木向台(二ッ木)(二ッ木第２)遺跡	縄文(早・前・後)、弥生(後)、古墳(後)
108	勢至前遺跡	縄文(早・前)、古墳(後)
109	入遺跡	縄文(前)
110	富士見台(Ⅰ)遺跡	
111	長崎天形星遺跡	縄文(中)、古墳(中・後)
112	富士見台(Ⅱ)遺跡	縄文(中・後)
113	長崎五斗代遺跡	縄文(中)
114	長崎塚群	近世
115	長崎五枚割遺跡	縄文(前・中)、平安
116	長崎遺跡	縄文(早・前・中・後)
117	長崎金乗院遺跡	古墳、平安
118	野々下長田遺跡	縄文(早・前・中・後)
119	野々下元木戸遺跡	縄文(中・後)、古墳(後)、平安
120	野々下土手内遺跡	縄文(中)
121	向下遺跡	縄文(中・後)、平安
122	前ヶ崎城跡	中世
123	前ヶ崎遺跡	縄文(前)
124	名都借城跡	中世
125	清滝院前遺跡	縄文(前)、平安、近世
126	笹原(Ⅰ)遺跡	縄文(中)、弥生、古墳
127	名都借笹堀込遺跡	縄文(前・中)、平安
128	名都借並木遺跡	縄文(中)、平安
129	名都借宮ノ脇遺跡	縄文(中)
130	笹原(Ⅱ)遺跡	縄文(中)
131	根木内城跡	中近世
132	根木内遺跡	縄文(前・中・後)、中近世
133	行人台遺跡・行人台城跡	縄文(早・前・中)、古墳(中・後)、中世
134	久保平賀(殿平賀向山)遺跡	古墳
135	久保平賀古墳	古墳
136	二ッ木溜台遺跡	縄文(前)
137	仲通遺跡	旧石器、縄文(前・中)、古墳(中)
138	流山廃寺遺跡	奈良
139	上貝塚貝塚	旧石器、縄文(前・中・後・晩)、中・近世
140	三輪野山野馬土手	近世
141	駒木野馬土手	近世
142	市野谷駒木野馬土手	近世
143	十太夫野馬土手	近世
144	大畔野馬土手	近世
145	市野谷・野々下野馬土手	近世
146	長崎一丁目野馬土手	近世
147	野々下野馬土手	近世

谷立野遺跡ではこのほか早期と思われる大規模な礫群が検出されている。これらの遺跡は野島式期から鵜ガ島台式期を中心とし、茅山上層式以降の早期末になると遺跡数は急速に減少する。前期は初頭の花積下層式段階では遺跡数の少ない状況が続く。そうした中で坂川を隔てた対岸にあたる松戸市の幸田貝塚(83)[注24]は、花積下層式期から関山式期を中心とした多数の竪穴住居跡と大規模な貝層が形成されており、当地域における拠点的な集落である。流山市内では同じ時期の遺構は少なく、加町畑遺跡(26)[注25・26・27]で関山式期の竪穴住居跡が検出されている程度であるが、黒浜式期に至ると多数の遺構が確認されている。竪穴住居跡の検出事例では、思井堀ノ内遺跡、西初石五丁目遺跡、下花輪荒井前(旧下花輪第Ⅱ)遺跡(69)[注28]、三輪野山八幡前遺跡(旧下屋敷遺跡)(46)[注6・29]、加北谷津第Ⅰ遺跡(40)[注22]、同第Ⅱ遺跡、三輪野山八重塚遺跡[注30・31・32]、三輪野山北浦遺跡、三輪野山道六神遺跡、大畔西割遺跡(65)[注33]、三輪野山宮前遺跡(54)[注6・34]などが挙げられる。三輪野山宮前遺跡では黒浜式から諸磯ｂ式ないしは浮島Ⅱ式までの竪穴住居跡のほか、完形に近い土器や玉類を伴う土坑群が検出されており、墓域と推測される。なお、新市街地地区でも同時期の遺構が検出されており、市野谷芋久保遺跡や市野谷立野遺跡などで竪穴住居跡が確認されているが[注9・13]、内陸部に位置するためか全体に遺構数は少なく密度は希薄である。諸磯・浮島式期ではほかに長崎遺跡で貝層を伴う竪穴住居跡から良好な資料が出土しており、三輪野山宮前遺跡、三輪野山八幡前遺跡では諸磯式期及び浮島式期の竪穴住居跡が検出されている。中期では前半の五領ヶ台式期から阿玉台・勝坂式期までは遺跡が少ないが、中葉から後半にかけて遺跡が増加する。野々下元木戸遺跡(119)[注35・36]と向下遺跡(121)[注37]は包蔵地としては別々に扱われているが本来は同一の集落跡と考えられるもので、中期後半から後期前葉までの竪穴住居跡と土坑群、貝ブロックを伴うピットなどが検出されている。名都借宮ノ脇遺跡(名都借第Ⅱ遺跡)(129)[注38]では中期中葉の竪穴住居跡とフラスコ状土坑が検出されている。また地図の外になるが、中野久木谷頭遺跡では中峠式期から加曽利Ｅ式前半期にかけての大規模な環状集落が形成されている。中期末から後期初頭にかけては一時的な遺跡数の減少が認められるが、後期前葉の堀之内１式以降は多くの遺跡が所在する。思井上ノ内遺跡では堀之内１式から加曽利B1式にかけての竪穴住居跡11軒、土坑14基、貝ブロック８か所、埋葬人骨などが検出されている。中中屋敷遺跡[注39]が位置する江戸川と坂川に挟まれた台地の南端(先端)部には鰭ヶ崎(前ヶ崎)貝塚(10)が存在する。1950年代初頭に酒詰仲男氏と岡田茂弘氏に率いられた学習院高等科史学部が調査を実施し、堀之内式期から加曽利Ｂ式期にかけての遺構群が濃密に分布することが明らかになっている[注40]。目を北に転じると、市野谷二反田遺跡[注11]では後期初頭の称名寺式期を中心とする竪穴住居跡が13軒検出されているほか、大久保遺跡[注9]ではやはり称名寺式の埋設土器を伴う竪穴住居跡が検出されており、後期初頭は内陸部の遺跡で集落が営まれる傾向にある。古間木茱萸木谷遺跡(37)[注41]では部分的な調査ではあるが後期の竪穴住居跡が検出され、集落の存在が想定される。三輪野山貝塚(45)[注42・43・44]では後期から晩期にかけて100軒を超える竪穴住居跡、５か所の貝層、20基あまりの土坑墓群、晩期中葉と考えられる道路状遺構、水場遺構、埋葬人骨などが検出されているほか、環状に構築された竪穴住居跡をはじめとする遺構群に囲まれるようにすり鉢状に削られた窪地が存在する。削られた土砂は周囲に盛り上げられたと考えられ、いわゆる環状盛土と中央窪地の関係をよく示す成果である。三輪野山貝塚に関連すると思われる遺構は周辺遺跡からも検出されており、東側の三輪野山八幡前遺跡では三輪野山貝塚の中央地と一体になっていると思われる窪地が続いていて、それを取り囲むように後期前葉から晩期前葉にかけての竪穴住居跡が多数検出されているほか、窪地から集落東側へ延びる道路状遺構が検出されている。三輪野山宮前遺跡などでも同時期の竪穴住居跡や掘立柱建物が検出され

ている。貝塚も多く形成され、三輪野山貝塚のほか、野々下貝塚(33)(注45･46、上貝塚貝塚(139)(注5、地図の外になるが上新宿貝塚などは大規模な環状貝塚として知られている。いずれの貝塚も後期前葉の堀之内式期あたりから形成が開始され、晩期中頃まで存続するのが確認されているが、晩期終末頃は遺構・遺物ともほとんどみられなくなる。

弥生時代は遺跡の分布が希薄である。流山市域では江戸川流域の三輪野山北浦遺跡で中期の須和田式土器が出土し、加村台遺跡(25)と下花輪荒井前遺跡で宮の台式期の住居跡が検出されている程度である。その中で加村台遺跡では環濠と推測されるＶ字溝が検出されている。坂川流域では対岸の松戸市内で中芝遺跡(84)、道六神遺跡(85)、原の山遺跡(88)があるだけで、本遺跡の周辺地域は全般的に弥生時代の遺跡の少ない地域として知られている。

これに対して、古墳時代に入ると遺跡数が大きく増加してくる。前期から中期にかけては、江戸川流域では三輪野山地区で三輪野山宮前遺跡、三輪野山第Ⅲ遺跡、三輪野山北浦遺跡、三輪野山道六神遺跡等が、また坂川流域では市野谷地域で市野谷宮尻遺跡(62)(注47、市野谷入台遺跡、市野谷向山遺跡等が各々集落群を形成している。三輪野山道六神遺跡では北陸系の土器が、三輪野山宮前遺跡では東海系の土器が出土しており、他地域との交流を示すものと言える。市野谷地区は坂川流域では北側の最も奥まった地で、手賀沼に注ぐ大堀川支谷との分水嶺に近い地域である。市野谷宮尻遺跡は３世紀中頃から始まる集落遺跡で、前期の竪穴住居跡が90軒検出され、そのうちの１軒から東日本で最も古い墨書土器が出土している。市野谷入台遺跡では前期から中期にかけての竪穴住居跡が35軒検出されているほか、小規模ながら石製模造品の製作跡も検出されており、江戸川流域では最古級に位置づけられる。同じく坂川水系の最奥部に位置する西初石五丁目遺跡では前期の竪穴住居跡が20軒検出されており、そのうち１軒から小形仿製鏡が出土している。野々下元木戸遺跡と向下遺跡からは前期の竪穴住居跡が19軒検出されている。西初石五丁目遺跡や野々下元木戸遺跡・向下遺跡の竪穴住居は比較的短期間の構築にとどまっており、開拓集落的な様相を呈している。中期には遺構数の一時的な減少が認められるものの、後期になると集落規模は拡大し、遺跡も更に増加する。また三輪野山地区や市野谷地区以外にも分布域が広がり、思井上ノ内遺跡に近い江戸川流域の加地区から平和台地区にかけては、加村台遺跡(25)、加町畑遺跡、加北谷津第Ⅰ遺跡、同第Ⅱ遺跡、平和台遺跡等が顕著な集落遺跡群を形成してくる。とりわけ加町畑遺跡は後期の竪穴住居跡74軒のみならず、奈良・平安時代の竪穴住居跡126軒、掘立柱建物跡17棟が検出されており、拠点的集落の一つである。一方、古墳の分布は顕著ではないが、三輪野山地区に前期方墳の三輪野山向原古墳(64)が、本遺跡の南約500mには前方後円墳の三本松古墳(鰭ヶ崎塚の越遺跡内)が、そして加地区に終末期古墳の北谷津古墳(加北谷津第Ⅱ遺跡内)が所在している。

奈良時代から平安時代になると遺跡は飛躍的に増大する。思井上ノ内遺跡や思井堀ノ内遺跡の所在する思井地区から前平井遺跡(14)や平和台遺跡、加町畑遺跡、三輪野山宮前遺跡の所在する前平井地区、平和台地区、加地区、三輪野山地区にかけては特に集落遺跡が集中している地域である。思井堀ノ内遺跡からは８世紀後半から10世紀初頭にかけての竪穴住居跡26軒、掘立柱建物跡６棟、土器焼成遺構や鍛冶遺構が検出されたほか、「庄」と記された墨書土器40点以上や緑釉陶器、灰釉陶器などが出土しており、当地における拠点集落であるとともに初期荘園であった可能性が強い。思井上ノ内遺跡からは８世紀前半から10世紀にかけての竪穴住居跡16軒、掘立柱建物10棟、土器焼成遺構４基などが検出され、調査継続中の前平井遺跡は70軒を超える竪穴住居跡が検出されている。前平井地区の北側は加地区となるが、ここは特に集

落の発達が目覚ましく、既に古墳時代から多数の竪穴住居が作られるが、奈良時代前半に一時的に減少するものの後半になって飛躍的に増大する。本書で報告する前平井堀米遺跡についても、この地域の動静を反映した集落跡が検出されている。特に町畑遺跡では竪穴住居のほか掘立柱建物も多数構築され、武蔵国から多数の土器が搬入されるなど、当地区の中心的な位置を占めていたと推測される。さらに目を北に転じると、三輪野山地区には式内社比定社の茂侶神社が存在するが、神社の南側に広がる三輪野山宮前遺跡では社殿から南へ約150mの地点で９世紀前半以前と考えられる掘立柱建物跡群が検出されたほか、近接する８世紀後半の竪穴住居跡からは巡方やガラス玉、耳環などが、９世紀初頭の竪穴住居跡からは下総国分寺と同笵の六葉宝相華文軒丸瓦が出土しており、三輪野山遺跡群の古代集落の中でも中心的な位置にあたると考えられる。神社の西側に当たる三輪野山北浦遺跡では、９世紀後半の竪穴住居跡から皇朝十二銭の一つである隆平永寶が出土している。神社の南西側に当たる三輪野山道六神遺跡では、鍛冶遺構を伴う竪穴住居跡が検出されている。平和台地区には下総国分寺と同系瓦が出土する流山廃寺(138)[注48]が、鰭ヶ崎地区には平安時代創建とされる東福寺(10、鰭ヶ崎貝塚と同位置)が立地しているが、茂侶神社を含めたこれらの３寺社は下総国府と常陸国府を結ぶ古代東海道ないしはその支路沿いに立地していたと考えられており、奈良・平安時代の集落も３寺社の間に集中する。一方で当遺跡が立地する中地区や市野谷地区など、坂川の上流域にあたる地区は遺構の密度も相対的に低くなることから、古道とともに太日川(現江戸川)を利用した水運も重要な役割を果たしていたと考えられる。これらの遺跡群が古代葛飾郡桑原郷の中核をなす集落群であるとする指摘もなされている[注5]。

鎌倉時代以降の中・近世遺跡は比較的多い。このうち城郭跡は江戸川流域で本遺跡北方2.3kmの花輪城跡(67)、坂川対岸の南1.7kmの小金城跡(94)、同東1.7kmと2.2kmにある名都借城跡(124)、前ヶ崎城跡(122)があるが、これらは中世後期の戦国時代に小金城を本拠とした高城氏関係の城跡と考えられている。発掘調査された中・近世遺跡の多くが、地下式坑や土坑墓そして屋敷跡と考えられてきている台地整形区画等が検出されている中世後期以降の遺跡であり、鎌倉時代～室町時代前半の中世前期の遺跡は千葉県内の他地域と同様に少ない。

このうち思井堀ノ内遺跡[注49・50]からは13世紀～15世紀にかけての掘立柱建物群、方形周溝区画墓、土坑群、地下式坑群が検出されている。特に方形周溝区画墓からは青磁碗・皿、白磁皿、和鏡、円形木製品、木櫛、菊花形皿などが副葬された成人女性骨が出土している。時期は13世紀後半～14世紀初頭と考えられ、被葬者は13世紀代に当地を支配していた地頭矢木式部太夫胤家の妻である可能性が指摘されている。なお、掘立柱建物群も同時期と考えられ、矢木氏の居館であると推測される。市野谷入台遺跡では13世紀代と考えられる方形竪穴建物群が検出されている。さらに本遺跡周辺をみると前平井遺跡、前平井堀米遺跡(１)、加東割遺跡(28)[注51・52]、加町畑遺跡、西平井根郷遺跡(28)[注23]、西平井二階畑遺跡(３)[注53]、三輪野山宮前遺跡[注53]、三輪野山道六神遺跡[注54]、三輪野山第Ⅲ遺跡等から台地整形区画、地下式坑、土坑墓等が確認されており、思井地区から西平井、前平井地区、加地区、三輪野山地区が奈良・平安時代に引き続き拠点的な位置を占めていたことを想定させている。

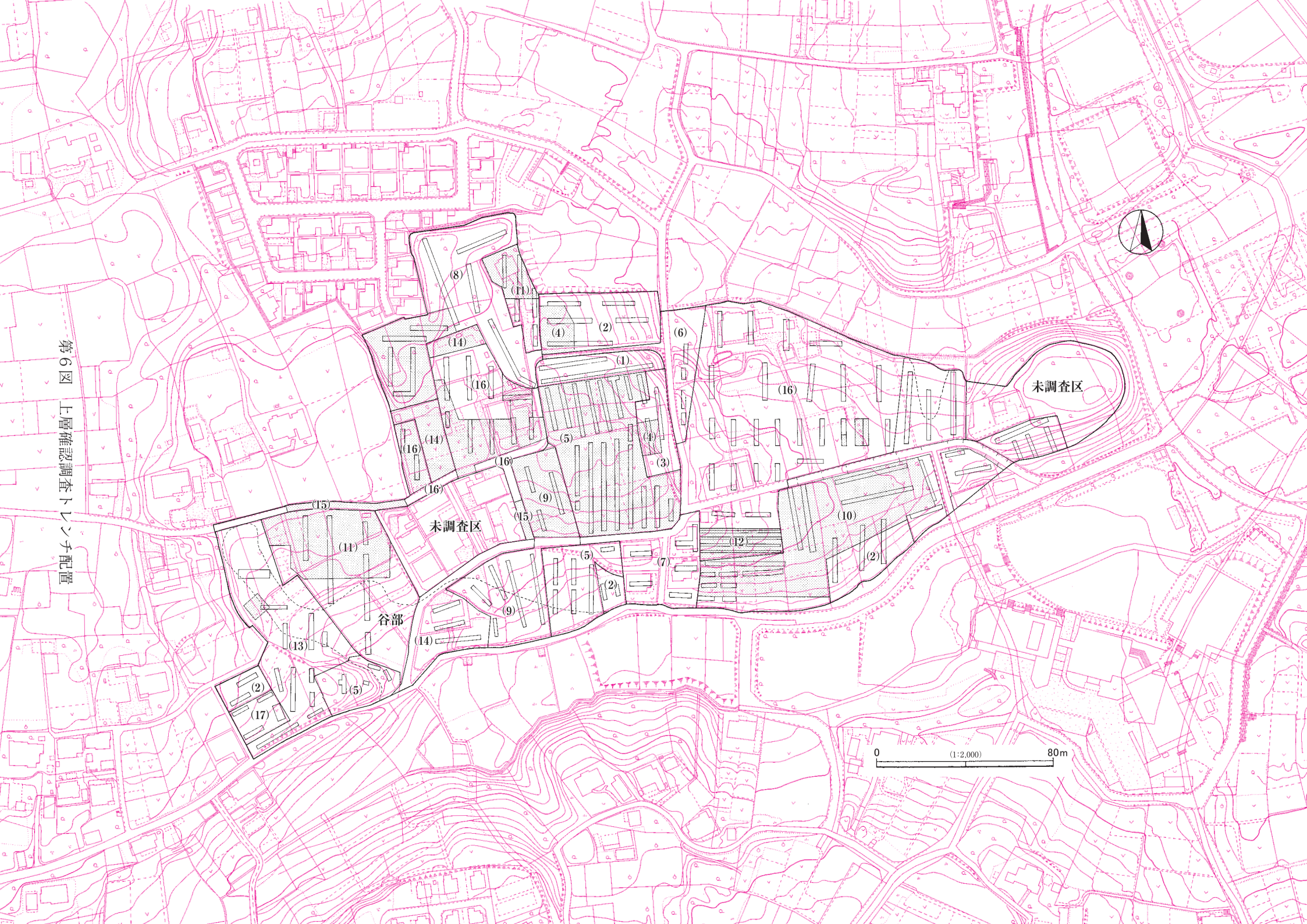
注

1　菊地隆男　1980「古東京湾」『アーバン クボタ』№18

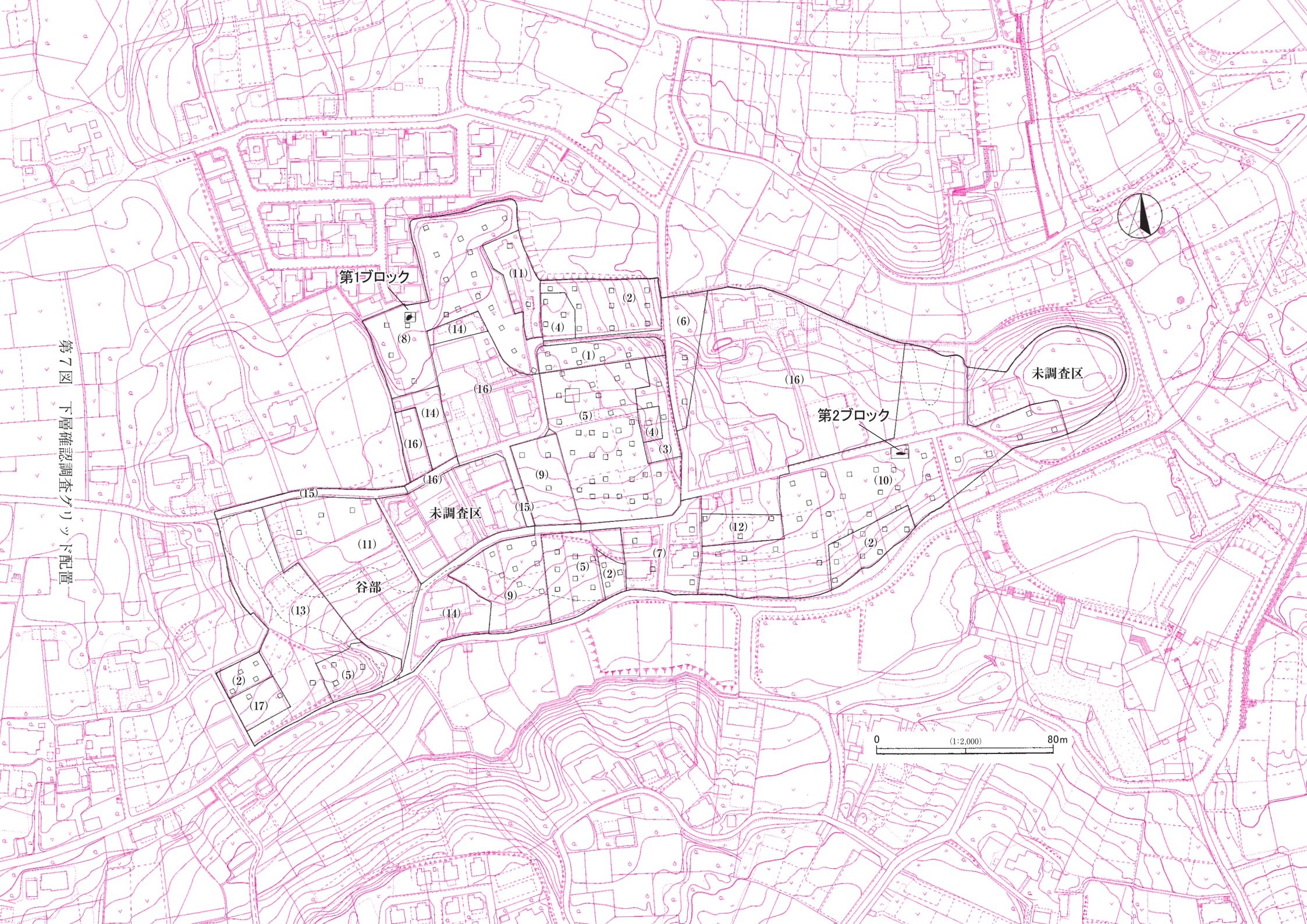
2　遠藤邦彦・小杉正人・松下まり子・宮地直道・菱田　量・高野　司「千葉県古流山湾周辺域における完新世の

環境変遷史とその意義」『第四紀研究』第28巻第２号
3　(財)千葉県教育振興財団　2010『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書２－流山市思井堀ノ内遺跡(旧石器～奈良・平安時代編)－』
4　千葉県教育委員会　2016『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書３－流山市思井上ノ内遺跡－』
5　(財)千葉県文化財センター　1996『主要地方道松戸野田線埋蔵文化財調査報告書－流山市南割遺跡・上貝塚第Ⅱ遺跡・上貝塚第Ⅰ遺跡・上貝塚貝塚・下花輪第Ⅲ遺跡・三輪野山第Ⅱ遺跡－』
なお、この報告書に掲載されている三輪野山第Ⅱ遺跡の調査範囲は、現在の三輪野山北浦遺跡と三輪野山道六神遺跡の２遺跡にまたがっている。また、下花輪第Ⅲ遺跡は現在桐ヶ谷浅間後遺跡と呼称されている。
6　流山市教育委員会　2015『流山市三輪野山遺跡群発掘調査概要報告書』
7　(財)千葉県教育振興財団　2008『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書２－流山市西初石五丁目遺跡－』
8　(公財)千葉県教育振興財団　2013『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書６－流山市市野谷中島遺跡・市野谷向山遺跡・市野谷入台遺跡・西初石五丁目遺跡－旧石器時代編』
9　(公財)千葉県教育振興財団　2015『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書７－流山市市野谷芋久保遺跡・市野谷中島遺跡(上層)・市野谷向山遺跡(上層)・市野谷立野遺跡・大久保遺跡(上層)・西初石五丁目遺跡・東初石六丁目第Ⅰ遺跡(上層)・十太夫第Ⅰ遺跡・十太夫第Ⅲ遺跡－』
10　(財)千葉県教育振興財団　2008『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書３－流山市市野谷入台遺跡－』
11　(財)千葉県教育振興財団　2009『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書４－流山市市野谷二反田遺跡－』
12　(財)千葉県教育振興財団　2011『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書５－流山市大久保遺跡(下層)・市野谷向山遺跡(下層)・東初石六丁目第Ⅰ遺跡(下層)・東初石六丁目第Ⅱ遺跡・十太夫第Ⅱ遺跡－』
13　(公財)千葉県教育振興財団　2016『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書８－流山市市野谷芋久保遺跡・市野谷中島遺跡・市野谷向山遺跡・市野谷立野遺跡・大久保遺跡(上層)・十太夫第Ⅲ遺跡－』
14　流山市遺跡調査会　1985『千葉県流山市長崎遺跡』
15　流山市教育委員会　1988『千葉県流山市三輪野山第Ⅲ遺跡』
16　山武考古学研究所　1982『大原神社遺跡』
17　流山市教育委員会　1993『千葉県流山市平和台遺跡発掘調査概報』
18　流山市教育委員会　2003「Ⅰ．平和台遺跡(２)」『平成13年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』
19　流山市教育委員会　1985『千葉県流山市三輪野山八重塚第Ⅱ遺跡』
20　三輪野山八重塚遺跡調査会　1982『千葉県流山市三輪野山八重塚遺跡』
21　流山市遺跡調査会　1985『千葉県流山市三輪野山八重塚遺跡Ｂ地点』
22　流山市教育委員会　1989『加地区遺跡群Ⅰ』
23　流山市教育委員会・駒澤大学考古学研究室　2004『流山市西平井・鰭ヶ崎地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ』
24　古里節夫　2000「幸田貝塚」『千葉県の歴史　資料編　考古１(旧石器・縄文時代)』千葉県
なお、ここでは省略したが、この遺跡については主に松戸市教育委員会によって数多くの調査が行われ、概報も多数刊行されている。
25　流山市教育委員会　1991『加地区遺跡群Ⅱ』
26　流山市教育委員会　1994『加地区遺跡群Ⅲ』

27　流山市教育委員会　2000『加地区遺跡群Ⅳ』
28　(財)千葉県教育振興財団　2010『流山市下花輪荒井前遺跡－高度浄水施設建設工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書－』
29　下屋敷遺跡調査会・流山市教育委員会　1986『流山市下屋敷遺跡発掘調査報告書』
30　流山市教育委員会　1991「Ⅲ．三輪野山八重塚遺跡Ｆ地点」『平成二年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』
31　流山市教育委員会　2002「Ⅰ．三輪野山八重塚遺跡Ⅰ・Ｊ地点」『平成12年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』
32　(株)東京航業研究所　2015『流山市三輪野山八重塚遺跡Ｋ地点－宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査－』
33　流山市教育委員会　2003「Ⅰ．大畔西割遺跡」『平成14年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』
34　流山市教育委員会　2010「Ⅱ．三輪野山宮前遺跡Ａ地点８」『平成21年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』
35　(株)地域文化財コンサルタント　2009『流山市野々下元木戸遺跡(第３次調査)』
36　流山市教育委員会・(株)東京航業研究所　2011『流山市野々下元木戸遺跡(第２次調査)』
37　流山市教育委員会・(株)地域文化財研究所　2012『向下遺跡　野々下元木戸遺跡(第４次)』
38　流山市教育委員会　1989『千葉県流山市名都借第Ⅱ遺跡発掘調査概報』
39　流山市教育委員会　1998「Ⅰ．中中屋敷遺跡」『平成９年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』
40　酒詰仲男・岡田茂弘他　刊行年不詳（1952～1953?）『千葉県前ヶ崎貝塚発掘調査報告』学習院高等科史学部
41　流山市教育委員会　1997「Ⅱ．古間木茱萸木谷遺跡」『平成８年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』
42　(財)千葉県文化財センター　2001『主要地方道松戸野田線住宅宅地関連埋蔵文化財調査報告書－流山市三輪野山貝塚・宮前・道六神・八幡前－』
43　(財)千葉県文化財センター　2004『主要地方道松戸野田線住宅宅地関連埋蔵文化財調査報告書(２)－流山市三輪野山貝塚・三輪野山宮前遺跡・三輪野山八幡前遺跡－』
44　流山市教育委員会　2008『流山市三輪野山貝塚発掘調査概要報告書』
45　(財)千葉県文化財センター　1995『流山市野々下貝塚確認調査報告書』
46　流山市教育委員会　2013「Ⅲ．野々下貝塚」『平成24年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』流山市教育委員会
47　(財)千葉県教育振興財団　2006『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書１－流山市市野谷宮尻遺跡－』
48　辻　史郎　1998「119　流山廃寺」『千葉県の歴史　資料編　考古３(奈良・平安時代)』千葉県
49　(財)千葉県教育振興財団　2006『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書1−流山市思井堀ノ内遺跡(中世編)−』
50　流山市教育委員会　2007「Ⅴ．思井堀ノ内遺跡」『平成 17 年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』
51　(財)千葉県文化財センター　1997『流山市若宮第Ⅱ遺跡－都市計画道路３・３・２号線(新川南流山線)埋蔵文化財発掘調査報告書－』
なお、調査範囲は若宮第Ⅱ遺跡から加東割遺跡にまたがっており、中世遺構が検出された部分は加東割遺跡の範囲内に当たる。
52　(株)地域文化財研究所　2014『加東割遺跡　３次』
53　流山市教育委員会　2011「Ⅲ．三輪野山宮前遺跡Ａ地点８－２」『平成22年度流山市市内遺跡発掘調査報告書』
54　北澤　滋　1998「三輪野山遺跡群(三輪野山道六神遺跡Ｂ地点)」『千葉県の歴史　資料編　中世１(考古資料)』千葉県

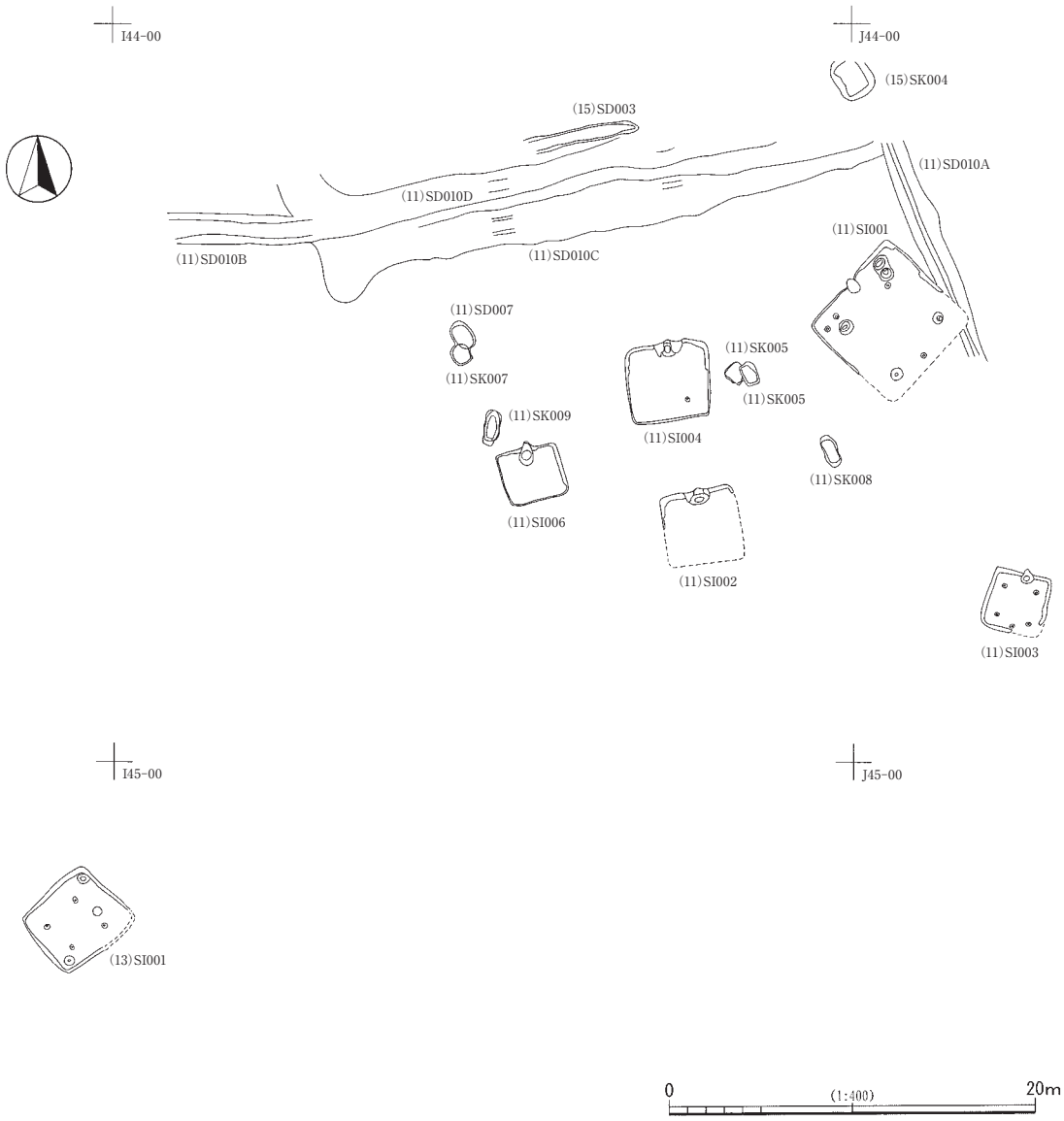


第6図　上層確認調査トレンチ配置

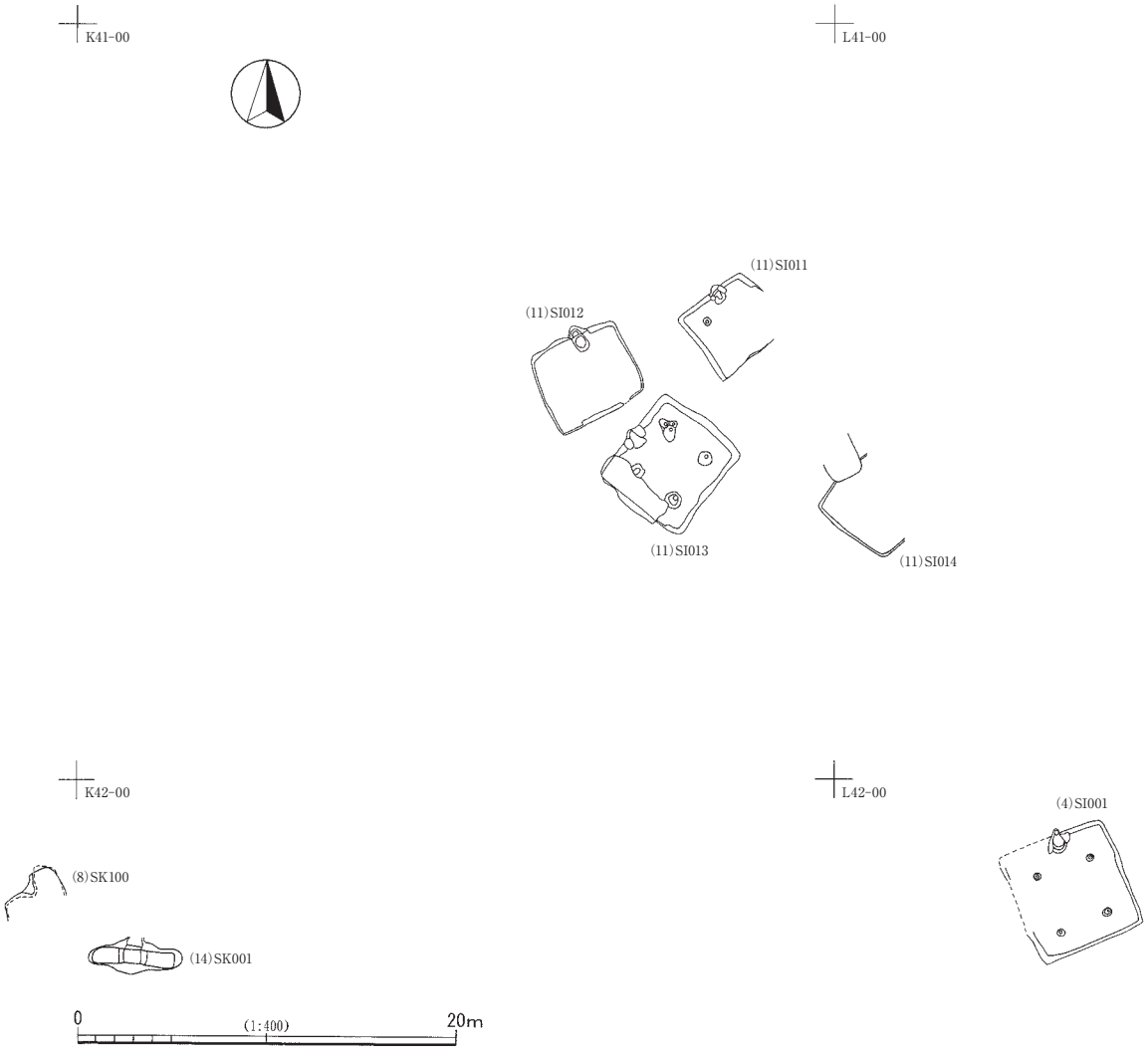


第7図　下層確認調査グリッド配置

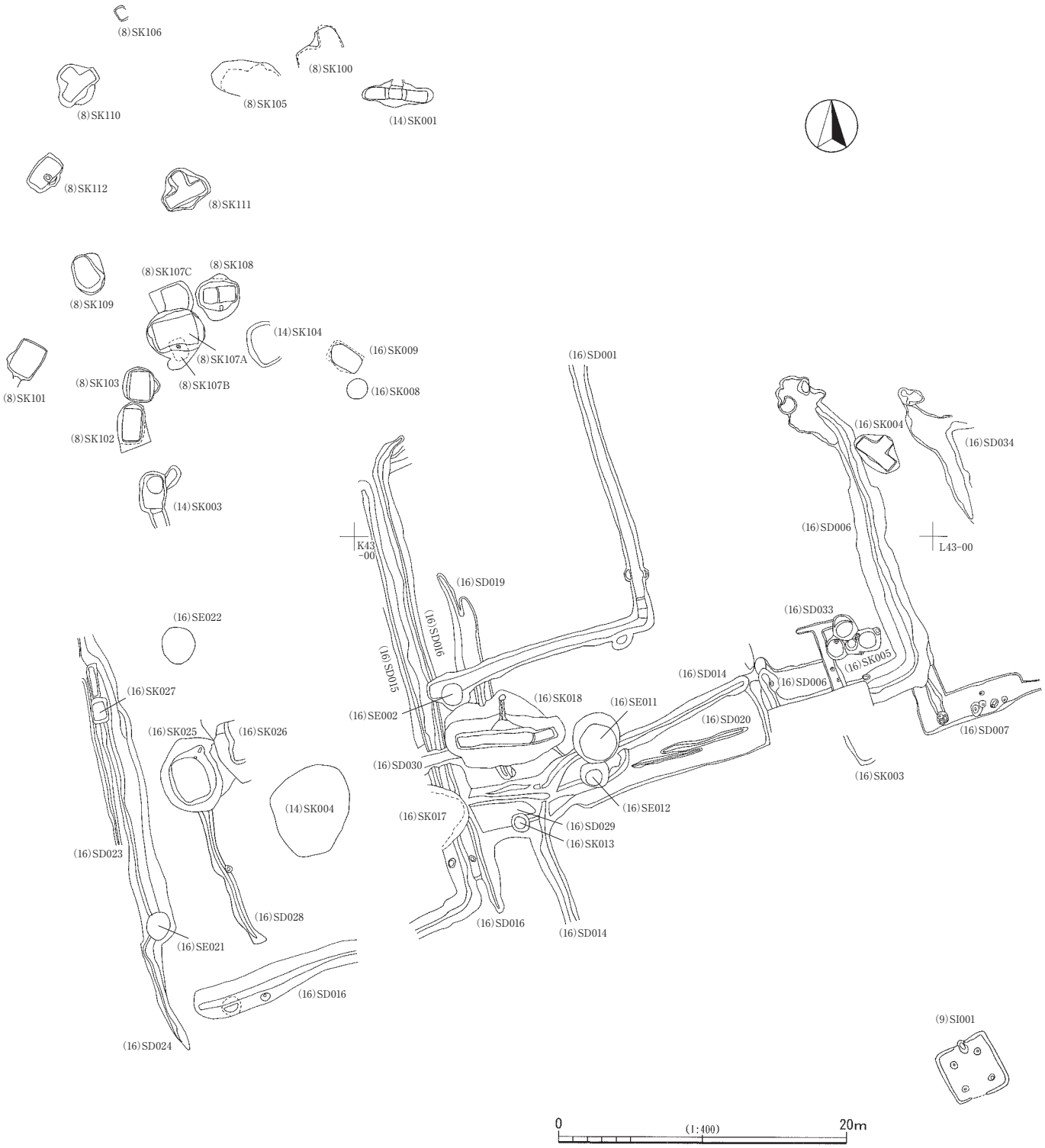
第8図　上層遺構分布図


I44-00
J44-00
(15)SK004
(15)SD003
(11)SD010A
(11)SD010D
(11)SD010B
(11)SD010C
(11)SI001
(11)SD007
(11)SK007
(11)SK005
(11)SK005
(11)SK009
(11)SI004
(11)SK008
(11)SI006
(11)SI002
(11)SI003
I45-00
J45-00
(13)SI001
0
(1:400)
20m

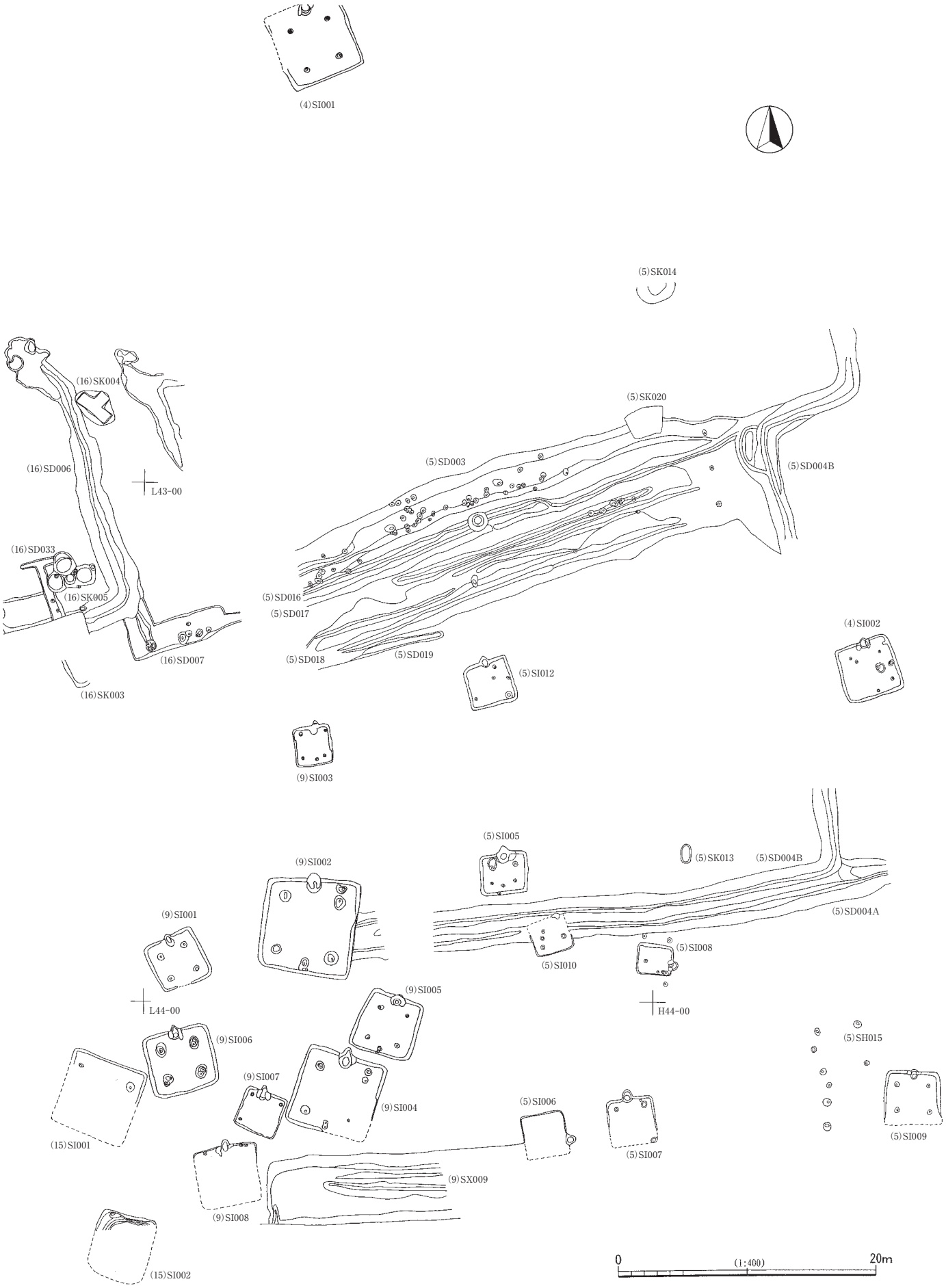
第９図　遺構配置図１


K41-00
L41-00
(11)SI011
(11)SI012
(11)SI013
(11)SI014
K42-00
L42-00
(4)SI001
(8)SK100
(14)SK001
0
(1:400)
20m

第10図　遺構配置図２


(8)SK106
(8)SK100
(8)SK110
(8)SK105
(14)SK001
(8)SK112
(8)SK111
(8)SK109
(8)SK107C
(8)SK108
(14)SK104
(16)SK009
(8)SK107A
(8)SK107B
(8)SK101
(8)SK103
(16)SK008
(8)SK102
(14)SK003
(16)SD001
(16)SK004
(16)SD034
(16)SD006
K43
-00
L43-00
(16)SD019
(16)SD033
(16)SE022
(16)SD016
(16)SD015
(16)SK005
(16)SD014
(16)SD006
(16)SK027
(16)SK018
(16)SE011
(16)SE002
(16)SD020
(16)SK025
(16)SK026
(16)SD007
(16)SD030
(16)SK003
(14)SK004
(16)SE012
(16)SK017
(16)SD029
(16)SK013
(16)SD023
(16)SD028
(16)SD016
(16)SD014
(16)SE021
(16)SD016
(16)SD024
(9)SI001
0
(1:400)
20m

第11図　遺構配置図３


(4)SI001
(5)SK014
(16)SK004
(5)SK020
(16)SD006
(5)SD003
(5)SD004B
L43-00
(16)SD033
(16)SK005
(5)SD016
(5)SD017
(4)SI002
(16)SD007
(5)SD018
(5)SD019
(5)SI012
(16)SK003
(9)SI003
(5)SI005
(9)SI002
(5)SK013
(5)SD004B
(9)SI001
(5)SD004A
(5)SI008
(5)SI010
L44-00
H44-00
(9)SI005
(5)SH015
(9)SI006
(9)SI007
(9)SI004
(5)SI006
(5)SI009
(15)SI001
(5)SI007
(9)SX009
(9)SI008
(15)SI002
0
(1:400)
20m

第12図　遺構配置図４

(10)SI006
(16)SI031
(10)SI005
(16)SK032
(10)SI010
(10)SI011
P44-00
O44-00
N44-00
(10)SI002
(10)SI001
(10)SI003
(10)SK004
(10)SK014B
(10)SI013
(10)SI014
(10)SI012
(10)SK014A
(10)SK014C
(10)SI007
(10)SI008
(10)SD022
(10)SI017
(10)SI018
(10)SI019
(10)SI020A・B
(10)SI020C
(12)SI001
(10)SI021
P45-00
O45-00
N45-00
0
(1:400)
20m

第13図　遺構配置図５

第３表　前平井堀米遺跡上層遺構一覧表

調査次	調査年度	報告時遺構名	調査時遺構名	遺構種別	時　　代	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	所在グリッド	備　　考
(11)	平成15	(11) SK 008	008	陥穴	縄文	1.80	0.80	1.72	I44-59	
(11)	平成15	(11) SK 009	009	陥穴	縄文	1.65	0.87	2.27	I44-55	
(4)	平成12	(4) SI 001	001	竪穴住居跡	8世紀1	6.10	5.90	0.45	L42-13	
(4)	平成12	(4) SI 002	002	竪穴住居跡	8世紀1	4.68	4.40	0.49	M43-34	
(5)	平成13	(5) SI 005	005	竪穴住居跡	9世紀1	3.72	3.28	0.45	L43-79	
(5)	平成13	(5) SI 006	006	竪穴住居跡	9世紀4	3.52	3.30	0.17	L44-28	
(5)	平成13	(5) SI 007	007	竪穴住居跡	8世紀4	3.70	3.60	0.28	L44-29	
(5)	平成13	(5) SI 008	008	竪穴住居跡	8世紀3	2.80	2.40	0.20	M43-90	
(5)	平成13	(5) SI 009	009	竪穴住居跡	8世紀1～2	4.40	4.20	0.30	M44-15	
(5)	平成13	(5) SI 010	010	竪穴住居跡	8世紀3～4	3.06	2.83	0.21	L43-88	
(5)	平成13	(5) SI 011	011	竪穴住居跡	8世紀代	－	－	－	M43-89	
(5)	平成13	(5) SI 012	012	竪穴住居跡	9世紀3	3.72	3.60	0.16	L43-36	
(9)	平成15	(9) SI 001	001	竪穴住居跡	8世紀3～4	4.20	4.10	0.21	L43-90	
(9)	平成15	(9) SI 002	002	竪穴住居跡	8世紀2～3	3.74	3.58	0.52	L43-82	
(9)	平成15	(9) SI 003	003	竪穴住居跡	8世紀4	3.04	2.86	0.30	L43-53	
(9)	平成15	(9) SI 004	004	竪穴住居跡	8世紀1	3.20	3.20	0.57	L44-13	
(9)	平成15	(9) SI 005	005	竪穴住居跡	8世紀1～2	4.88	4.87	0.49	L44-04	
(9)	平成15	(9) SI 006	006	竪穴住居跡	7世紀4	5.20	4.96	0.35	L44-10	
(9)	平成15	(9) SI 007	007	竪穴住居跡	8世紀4	3.35	3.30	0.47	L44-22	
(9)	平成15	(9) SI 008	008	竪穴住居跡	9世紀3	－	4.87	0.04	L44-31	
(10)	平成15	(10) SI 001	001	竪穴住居跡	7世紀4	3.22	3.05	0.21	O44-17	
(10)	平成15	(10) SI 002	002	竪穴住居跡	9世紀代	3.24	3.15	0.11	O44-38	
(10)	平成15	(10) SI 003	003	竪穴住居跡	8世紀1	4.80	4.00	0.31	O44-37	
(10)	平成15	(10) SI 005	005	竪穴住居跡	7世紀4	－	4.72	0.23	O43-79	
(10)	平成15	(10) SI 006	006	竪穴住居跡	8世紀2～3	4.34	4.30	0.17	P43-73	
(10)	平成15	(10) SI 007	007	竪穴住居跡	8世紀代	4.00	3.95	0.36	O44-71	
(10)	平成15	(10) SI 008	008	竪穴住居跡	8世紀2	3.65	3.57	0.44	O44-80	
(10)	平成15	(10) SI 010	010	竪穴住居跡	7世紀4	3.06	2.76	0.35	O43-85	
(10)	平成15	(10) SI 011	011	竪穴住居跡	8世紀1	4.00	3.40	0.65	O43-93	
(10)	平成15	(10) SI 012	012	竪穴住居跡	8世紀2～3	4.05	3.97	0.41	O44-24	
(10)	平成15	(10) SI 013	013	竪穴住居跡	8世紀3	3.64	2.88	0.36	O44-35	
(10)	平成15	(10) SI 014	014(A)	竪穴住居跡	8世紀4	4.26	3.75	0.42	O44-45	
(10)	平成15	(10) SI 017	017	竪穴住居跡	8世紀1	4.21	4.14	0.63	N44-77	
(10)	平成15	(10) SI 018	018	竪穴住居跡	9世紀代	2.97	2.52	0.50	N44-75	
(10)	平成15	(10) SI 019	019	竪穴住居跡	7世紀4	4.50	4.33	0.63	N44-94	
(10)	平成15	(10) SI 020A	020(A)	竪穴住居跡	8世紀2	4.56	3.63	0.33	N44-62	
(10)	平成15	(10) SI 020B	020(B)	竪穴住居跡	8世紀1～2	3.02	2.97	0.21	N44-62	
(10)	平成15	(10) SI 020C	020(C)	竪穴住居跡	8世紀3？	2.54	2.36	0.25	N44-72	
(10)	平成15	(10) SI 021	021	竪穴住居跡	8世紀1～2	3.50	3.00	0.85	N44-91	
(11)	平成15	(11) SI 001	001	竪穴住居跡	7世紀4	6.36	6.32	0.05	J44-40	
(11)	平成15	(11) SI 002	002	竪穴住居跡	8世紀2	－	4.05	0.18	I44-68	
(11)	平成15	(11) SI 003	003	竪穴住居跡	8世紀代	3.44	3.30	0.04	J44-72	
(11)	平成15	(11) SI 004	004	竪穴住居跡	8世紀3	4.50	4.15	0.16	I44-48	
(11)	平成15	(11) SI 006	006	竪穴住居跡	8世紀3～4	3.36	3.00	0.19	I44-65	
(11)	平成15	(11) SI 011	011	竪穴住居跡	8世紀代	4.46	4.13	0.29	K41-48	
(11)	平成15	(11) SI 012	012	竪穴住居跡	8世紀代	5.27	4.64	0.31	K41-46	
(11)	平成15	(11) SI 013	013	竪穴住居跡	7世紀3～4	6.05	5.32	0.43	K41-55	
(11)	平成15	(11) SI 014	014	竪穴住居跡	8世紀代	－	4.64	0.24	L41-60	
(12)	平成16	(12) SI 001	001	竪穴住居跡	9世紀代	4.65	4.45	0.09	N44-41	
(13)	平成16	(13) SI 001	001	竪穴住居跡	5世紀2～3	4.98	4.31	0.43	H45-29	
(15)	平成16	(15) SI 001	001	竪穴住居跡	8世紀代	－	6.09	0.27	K44-19	
(15)	平成16	(15) SI 002	002	竪穴住居跡	8世紀4	－	4.00	0.61	L44-40	
(16)	平成18	(16) SI 031	031	竪穴住居跡	8世紀3～4	3.86	3.48	0.11	L30-28	
(9)	平成15	(9) SX 009	009	台地整形区画	中世	－	－	－	L44-33	
(5)	平成13	(5) SK 020	020	地下式坑	中世	3.00	2.10	0.98	L42-89	
(8)	平成14	(8) SK 100	100	地下式坑	中世	3.12	－	2.8以上	J42-19	
(8)	平成14	(8) SK 101	101	地下式坑	中世	2.40	1.89	0.81	J42-74	
(8)	平成14	(8) SK 102	102	地下式坑	中世	2.52	1.28	1.30	J42-76	
(8)	平成14	(8) SK 103	103	地下式坑	中世	1.98	1.41	1.80	J42-76	
(8)	平成14	(8) SK 104	104	地下式坑	中世	2.60	－	0.89	J42-68	
(8)	平成14	(8) SK 105	105	地下式坑	中世	－	1.76	1.9以上	J42-18	
(8)	平成14	(8) SK 107A	107(A)	地下式坑	中世	2.96	1.80	1.73	J42-66	
(8)	平成14	(8) SK 108	108	地下式坑	中世	1.12	1.00	2.08	J42-57	
(8)	平成14	(8) SK 109	109	地下式坑	中世	2.29	1.50	1.63	J42-55	
(8)	平成14	(8) SK 110	110	地下式坑	中世	1.82	1.72	2.00	J42-15	底面T字状

調査次	調査年度	報告時遺構名	調査時遺構名	遺構種別	時　　代	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	所在グリッド	備　　考
(8)	平成14	(8) SK 111	111	地下式坑	中世	2.05	2.80	1.90	J42-47	底面T字状
(8)	平成14	(8) SK 112	112	地下式坑	中世	2.22	1.38	2.46	J42-34	
(10)	平成15	(10) SK 023A	014(B)	地下式坑	中・近世	3.20	2.22	1.77	O44-35	
(10)	平成15	(10) SK 023B	015(C)	地下式坑	中・近世	1.90	1.72	2.45	O44-35	3基から構成される地下式坑
(10)	平成15	(10) SK 023C	014(D)	地下式坑	中・近世	2.22	1.68	1.67	O44-35	
(14)	平成16	(14) SK 001	001	地下式坑	中・近世	4.35	0.75	1.85	K42-20	
(14)	平成16	(14) SK 004	004	地下式坑	中・近世	5.06	3.72	1.26以上	J43-49	
(16)	平成18	(16) SK 004	004	地下式坑	中・近世	2.80	1.74	1.70	K42-89	
(16)	平成18	(16) SK 009	009	地下式坑	中・近世	2.40	1.46	2.02	J42-69	
(16)	平成18	(16) SK 025	025	地下式坑	中・近世	2.79	1.92	1.2以上	J43-47	
(16)	平成18	(16) SK 026	026	地下式坑	中・近世	3.04	-	0.86	J43-37	
(5)	平成13	(5) SK 013	013	土坑	中・近世	1.47	0.84	0.23	M43-70	
(5)	平成13	(5) SK 014	014	土坑	中・近世	2.98	-	1.15	M42-60	
(8)	平成14	(8) SK 107B	107(B)	土坑	中・近世	1.46	1.06	0.41	J42-66	粘土貼り土坑
(8)	平成14	(8) SK 107C	107(C)	土坑	中・近世	2.62	-	0.24	J42-56	
(10)	平成15	(10) SK 004	004	土坑	中・近世	1.58	0.89	0.28	O44-16	土坑墓か
(11)	平成15	(11) SK 005A	005(A)	土坑	中・近世	1.28	0.82	0.28	I44-48	
(11)	平成15	(11) SK 005B	005(B)	土坑	中・近世	1.07	1.03	0.05	I44-48	
(11)	平成15	(11) SK 007A	007(A)	土坑	中・近世	1.64	1.02	0.32	I44-44	
(11)	平成15	(11) SK 007B	007(B)	土坑	中・近世	1.18	1.00	0.34	I44-44	
(15)	平成16	(15) SK 004	004	土坑	中・近世	2.46	1.92	0.54	J44-00	
(16)	平成18	(16) SK 003	003	土坑	中・近世	-	-	0.49	K43-38	
(16)	平成18	(16) SK 005	005	土坑	中・近世	-	-	0.46	K43-18	
(16)	平成18	(16) SK 013	013	土坑	中・近世	1.35	1.24	1.08	K43-42	
(16)	平成18	(16) SK 017	017	土坑	中・近世	3.70	-	2.3以上	K43-41	地下式坑の可能性あり
(16)	平成18	(16) SK 018	018	土坑	中・近世	6.88	0.65	1.43	K43-32	特殊な土坑
(16)	平成18	(16) SK 027	027	土坑	中・近世	1.78	1.22	0.59	J43-35	
(16)	平成18	(16) SK 032	032	土坑	中・近世	1.88	0.99	0.23	O43-36	
(8)	平成14	(8) SK 106	106	土壙墓	中世	1.02	0.78	0.14	J42-05	土葬人骨、六文銭
(14)	平成16	(14) SE 003	003	井戸	中・近世	1.00	-	2.0以上	J42-96	
(16)	平成18	(16) SE 002	002	井戸	中・近世	1.50	-	1.9以上	K43-21	
(16)	平成18	(16) SE 008	008	井戸	中・近世	0.90	-	1.3以上	K42-70	
(16)	平成18	(16) SE 011	011	井戸	中・近世	1.80	-	1.9以上	K43-34	
(16)	平成18	(16) SE 012	012	井戸	中・近世	0.90	-	1.9以上	K43-44	
(16)	平成18	(16) SE 021	021	井戸	中・近世	1.25	-	1.3以上	J43-66	
(16)	平成18	(16) SE 022	022	井戸	中・近世	1.80	-	1.2以上	J43-26	
(5)	平成13	(5) SH 015	015	ピット群	中・近世	-	-	-	M44-13	ピット8基
(5)	平成13	(5) SH 023	005-P7	ピット群	中・近世	-	-	-	L43-77	ピット4基
(5)	平成13	(5) SD 003	003	溝状遺構	中・近世	L43-13 ～ M43-90				総延長約35m
(5)	平成13	(5) SD 004A	004	溝状遺構	中・近世	L43-84 ～ M43-74				総延長約50m
(5)	平成13	(5) SD 004B	004B	溝状遺構	中・近世	L43-84 ～ M43-63 ほか				総延長約90m
(5)	平成13	(5) SD 016	016	溝状遺構	中・近世	L43-23 ～ M42-93				総延長約35m
(5)	平成13	(5) SD 017	017	溝状遺構	中・近世	L43-23 ～ M42-83				総延長約35m
(5)	平成13	(5) SD 018	018	溝状遺構	中・近世	L43-33 ～ M42-93				総延長約35m
(5)	平成13	(5) SD 019	019	溝状遺構	中・近世	L43-33 ～ N43-35				総延長約10m
(10)	平成15	(10) SD 022	022	溝状遺構	中・近世	N44-63 ～ N44-69				総延長約24m
(11)	平成15	(11) SD 010A	010(A)	溝状遺構	中・近世	J44-10 ～ J44-41				総延長約14m
(11)	平成15	(11) SD 010B	010(B)	溝状遺構	中・近世	I44-20 ～ I44-18				総延長約33m
(11)	平成15	(11) SD 010C	010(C)	溝状遺構	中・近世	I44-33 ～ J44-10				総延長約28m
(11)	平成15	(11) SD 010D	010(D)	溝状遺構	中・近世	I44-22 ～ I44-33				総延長約8m
(15)	平成16	(15) SD 003	003	溝状遺構	中・近世	I44-15 ～ I44-16				総延長約7m
(16)	平成18	(16) SD 001	001	溝状遺構	中・近世	K43-21 ～ K42-73				総延長約35m
(16)	平成18	(16) SD 006	006	溝状遺構	中・近世	K42-77 ～ K43-38				総延長約27m
(16)	平成18	(16) SD 007	007	溝状遺構	中・近世	K43-29 ～ L43-21				総延長約10m
(16)	平成18	(16) SD 014	014	溝状遺構	中・近世	K43-63 ～ K43-26				総延長約24m
(16)	平成18	(16) SD 015	015	溝状遺構	中・近世	J43-87 ～ K42-90				総延長約50m
(16)	平成18	(16) SD 016	016	溝状遺構	中・近世	K42-80 ～ K43-62				総延長約34m
(16)	平成18	(16) SD 019	019	溝状遺構	中・近世	K43-01 ～ K43-42				総延長約15m
(16)	平成18	(16) SD 020	020	溝状遺構	中・近世	K43-43 ～ K43-37				総延長約15m
(16)	平成18	(16) SD 023	023	溝状遺構	中・近世	J43-25 ～ J43-55				総延長約12m
(16)	平成18	(16) SD 024	024	溝状遺構	中・近世	J43-15 ～ J43-87				総延長約30m
(16)	平成18	(16) SD 028	028	溝状遺構	中・近世	J43-47 ～ J43-78				総延長約10m
(16)	平成18	(16) SD 029	029	溝状遺構	中・近世	K43-42 ～ K43-43				総延長約6m
(16)	平成18	(16) SD 030	030	溝状遺構	中・近世	K43-31				総延長約3m
(16)	平成18	(16) SD 033	-	溝状遺構	中・近世	K43-17 ～ K43-28				総延長約5m
(16)	平成18	(16) SD 034	-	溝状遺構	中・近世	K42-79 ～ L42-90				総延長約12m

第２章　旧石器時代の遺構と遺物

第１節　概要

前平井堀米遺跡における旧石器時代の調査は、第７図に示したように、ほぼ全域で実施されたものの、立川ロームの堆積は台地中央の標高20m前後から南側緩斜面の標高10m前後の区域に限られていた。また、台地に深く入り込んだ小支谷が確認され、台地の開析が進んでいることも確認された。

石器のブロックが検出されたのは、８次及び10次の調査地区の２地点に限られている。

第２節　遺構と遺物

第１ブロック（第14・16図、図版４・38）

（８）調査区の北から入り込む小支谷の最深部、標高20mの台地縁辺部に位置する。主に安山岩製の礫と礫片で構成され、J42－06からJ42－16グリッドにかけて２ｍの範囲に遺物が集中する。出土層位は不明であるが、ローム層中の出土および出土標高から地表面から0.5m程の深度であり、おそらくⅥ層以下のハードローム層上面の出土であろう。

礫は一様に被熱し表面は赤化するが、原形を留めている個体が多く、破砕している個体は礫縁辺部もしくは片端部が欠損しており、敲石のような用法がなされたと考えられる。特に第16図４・７に顕著に認められる。図示した遺物のうち２のみ砂岩製であり、他は安山岩製の礫である。礫片中に石英斑岩製の個体が認められるが極めて希少である。

第２ブロック（第15・16図、図版５・38）

(10)調査区の標高14mの台地縁辺部に位置する。２点のみの出土であり、出土層位はⅨ層である。セクション図から理解できるように第２ブロック周辺の台地は著しく削平され、表土層直下は第２黒色帯が検出される状況である。

黒色安山岩製の剥片で構成され、いずれも５㎝内外の部厚な不定形剥片である。１・２ともに背面は多方向からの剥離により構成される。

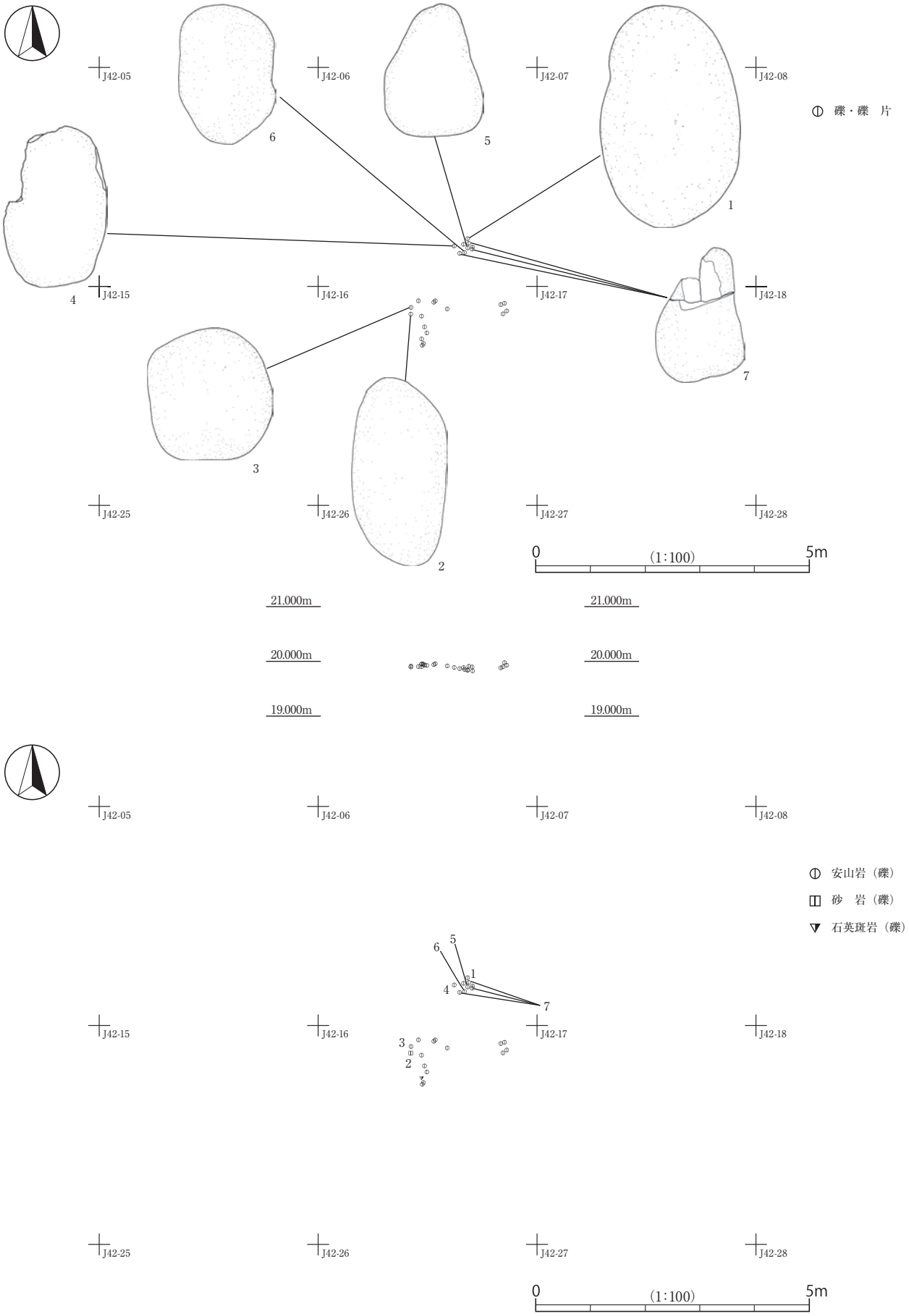
単独出土遺物（第17図、図版38）

本遺跡からはブロックを形成しないが、旧石器時代の遺物が少量出土している。先の第２ブロックのように後世の削平が著しいため、特に黒色安山岩製の石器については、本来はブロックを形成していたと考えられる。

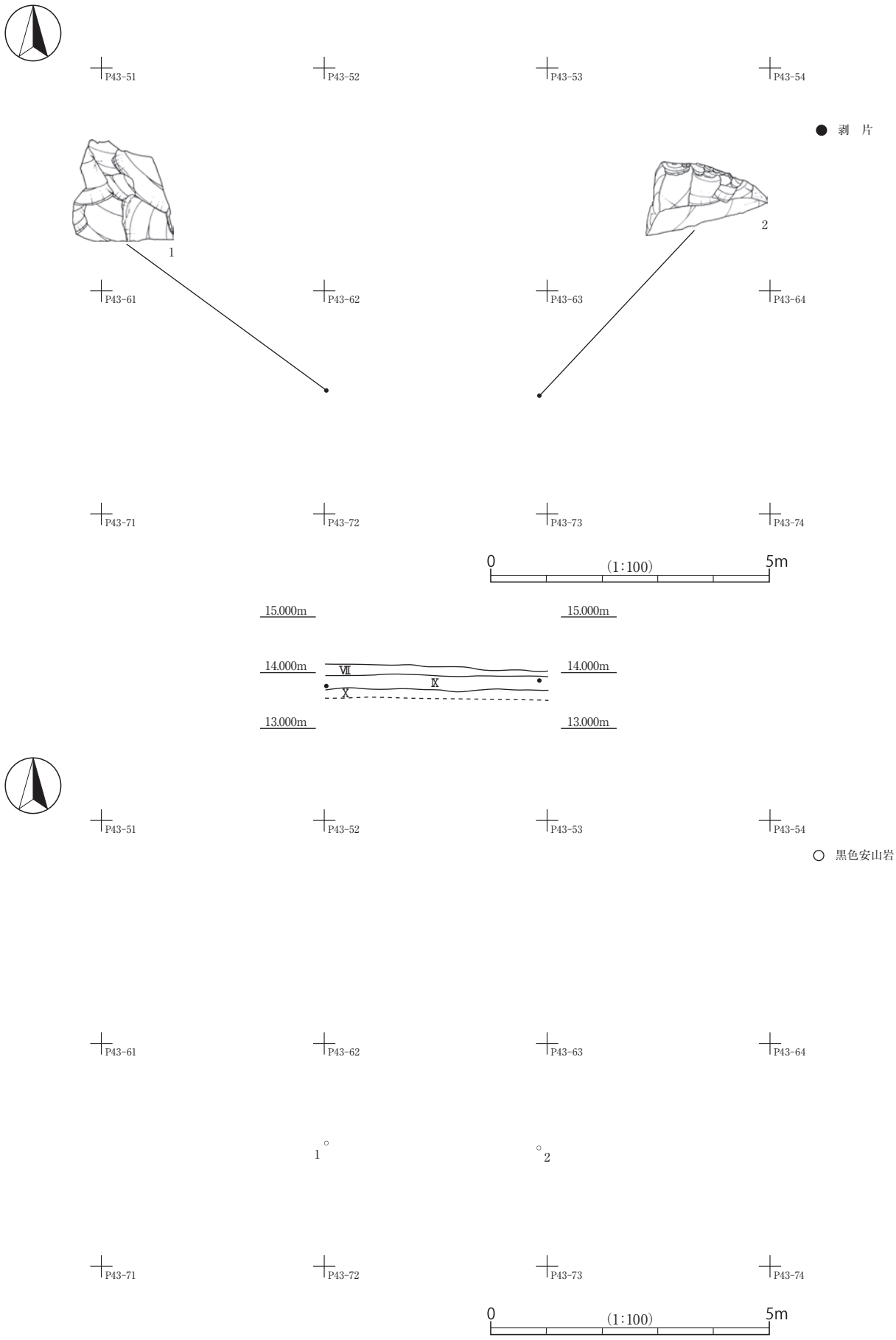
１は黒曜石製のナイフ形石器である。極端な横長剥片を素材とし、素材剥片の打面を除去するように調整が施される。背面を構成する剥離方向は腹面の剥離方向と同一であり、翼状剥片を連続的に作出する瀬戸内技法に類似する。

２は黒曜石製、３は黒色頁岩製の調整痕の認められる剥片である。２は部厚い剥片の腹面側から調整が施される。３は素材剥片の片側縁に調整が認められる。中途から２分する。

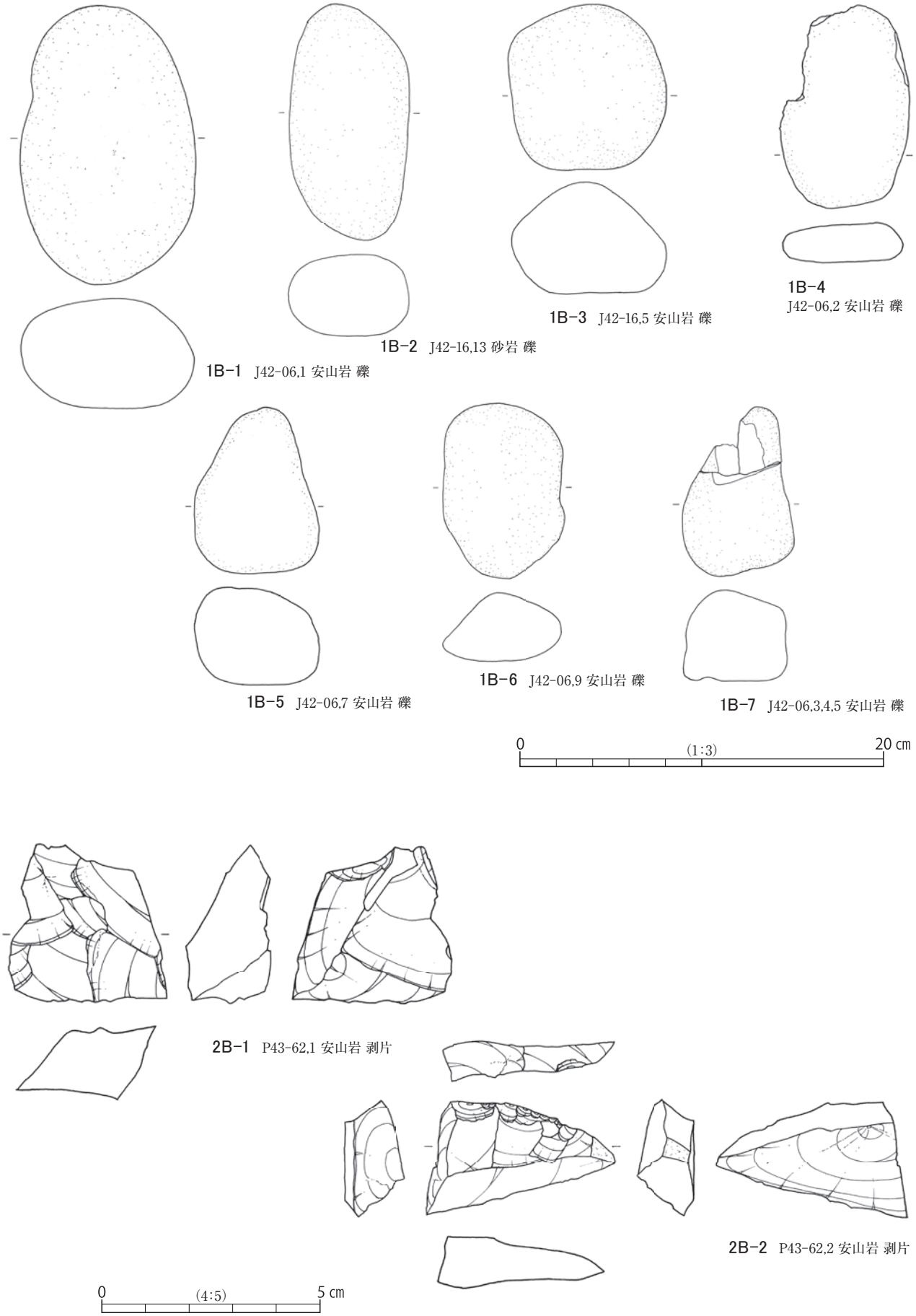
４は黒曜石製の使用痕の認められる剥片である。縦長剥片であり、使用部位は片側縁を主とし、中途から２分した折断面にも微細な使用痕が認められる。



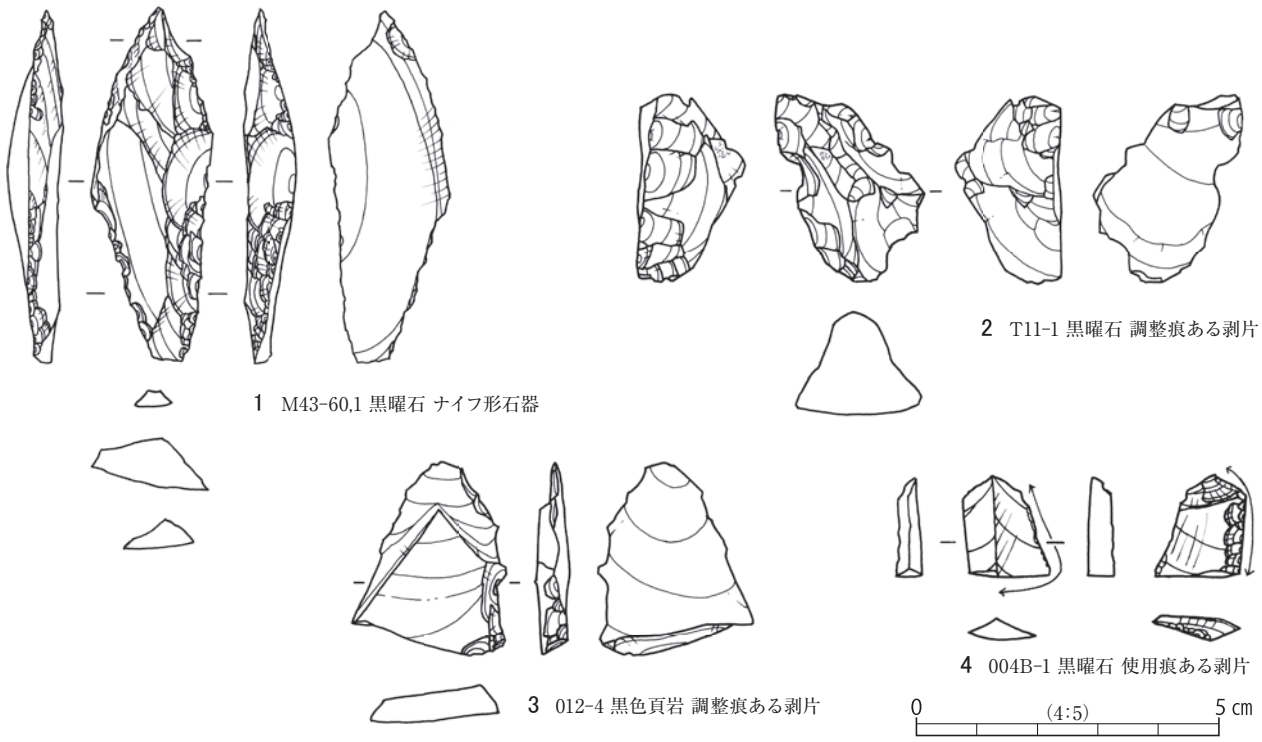
第14図　第１ブロック出土遺物分布



第15図　第２ブロック出土遺物分布



第16図　第１・第２ブロック出土遺物



第17図　単独出土石器

第４表　旧石器時代石器一覧表

No.	挿図番号	調査次数	ブロック	グリッド	遺物番号	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
1	第16図 1B-1	（8）	第１ブロック	J42-06	1	礫	安山岩	－	－	－	1290.00	被熱
2	第16図 1B-4	（8）	第１ブロック	J42-06	2	礫	安山岩	－	－	－	245.21	被熱
3	第16図 1B-7	（8）	第１ブロック	J42-06	3	礫片	安山岩	－	－	－	9.97	被熱
4	第16図 1B-7	（8）	第１ブロック	J42-06	4	礫片	安山岩	－	－	－	41.59	被熱
5	第16図 1B-7	（8）	第１ブロック	J42-06	5	礫	安山岩	－	－	－	242.92	被熱
6	－	（8）	第１ブロック	J42-06	6	礫	安山岩	－	－	－	235.87	被熱
7	第16図 1B-5	（8）	第１ブロック	J42-06	7	礫	安山岩	－	－	－	444.99	被熱
8	－	（8）	第１ブロック	J42-06	8	礫	安山岩	－	－	－	379.65	被熱
9	第16図 1B-6	（8）	第１ブロック	J42-06	9	礫	安山岩	－	－	－	280.34	被熱
10	－	（8）	第１ブロック	J42-16	1	礫片	安山岩	－	－	－	31.07	被熱
11	－	（8）	第１ブロック	J42-16	2	礫片	安山岩	－	－	－	88.67	被熱
12	－	（8）	第１ブロック	J42-16	3	礫	安山岩	－	－	－	346.68	被熱
13	－	（8）	第１ブロック	J42-16	4	礫片	安山岩	－	－	－	11.87	被熱
14	第16図 1B-3	（8）	第１ブロック	J42-16	5	礫	安山岩	－	－	－	665.00	被熱
15	－	（8）	第１ブロック	J42-16	6	礫片	安山岩	－	－	－	65.38	被熱
16	－	（8）	第１ブロック	J42-16	7	礫片	安山岩	－	－	－	129.89	被熱
17	－	（8）	第１ブロック	J42-16	8	礫片	安山岩	－	－	－	49.54	被熱
18	－	（8）	第１ブロック	J42-16	9	礫	安山岩	－	－	－	194.18	被熱
19	－	（8）	第１ブロック	J42-16	10	礫片	安山岩	－	－	－	109.74	被熱
20	－	（8）	第１ブロック	J42-16	11	礫片	安山岩	－	－	－	45.73	被熱
21	－	（8）	第１ブロック	J42-16	12	礫片	安山岩	－	－	－	61.28	被熱
22	第16図 1B-2	（8）	第１ブロック	J42-16	13	礫	砂岩	－	－	－	610.27	被熱
23	－	（8）	第１ブロック	J42-16	14	礫片	安山岩	－	－	－	26.55	被熱
24	－	（8）	第１ブロック	J42-16	15	礫片	石英斑岩	－	－	－	267.42	被熱
25	－	（8）	第１ブロック	J42-16	16	礫片	安山岩	－	－	－	8.83	被熱
26	第16図 2B-2	（10）	第２ブロック	P43-62	1	剥片	黒色安山岩	3.54	3.99	1.85	17.92	
27	第16図 2B-2	（10）	第２ブロック	P43-62	2	剥片	黒色安山岩	2.50	4.44	1.30	11.76	
28	第17図１	（5）	単独出土	M43-60	1	ナイフ形石器	黒曜石	5.80	1.99	0.82	7.73	
29	第17図２	（5）	単独出土	T11	1	調整痕ある剥片	黒曜石	2.94	2.35	1.68	7.24	
30	第17図３	（5）	単独出土	SI012	4	調整痕ある剥片	黒色頁岩	3.00	2.52	0.46	3.72	
31	第17図４	（5）	単独出土	SD004B	1	使用痕ある剥片	黒曜石	1.31	1.08	0.33	0.47	

第３章　縄文時代の遺構と遺物

第１節　概要

調査区内から検出された縄文時代の遺構は、陥穴２基のみである。遺物は縄文時代早期、前期、中期、後期の土器や石器が少量出土しているほか、石棒、玦状耳飾などが出土している。調査区全域で奈良・平安時代などの竪穴住居跡においても遺構の遺存状態が悪かったことから、後世の開墾などの影響が大きく反映されていると考えられる。縄文時代の遺物を包含しているⅡ層の存在もほとんどの地点で確認できないことから、縄文時代の痕跡は、極めて希薄である。

第２節　遺構

概要で記したように、遺構は陥穴２基のみである。形態から中期以降の可能性がある。前期の黒浜式土器の出土量が多かったことから、縄文海進が海退に転じて古流山湾から海が退く中で、黒浜式期にはこの台地にも人々が訪れ、竪穴住居などが営まれた可能性がある。

(11)SK008（第18図、図版18）

J44－59グリッドで検出された。長楕円形を呈する。長軸長1.80m、短軸長0.80m、検出面からの深さ1.72mを測る。底面の長軸長は1.15m、短軸長0.59mである。底面は平らである。出土遺物は皆無であった。

(11)SK009（第18図、図版18）

J44－55グリッドで検出された。長楕円形を呈する。長軸長1.65m、短軸長0.87m、検出面からの深さ2.18mを測る。底面の長軸長は1.30m、短軸長0.54mである。底面はやや起伏がある。覆土は暗茶褐色土を主体とし、中位以下では白色砂質粘土粒の混入が多かった。出土遺物は皆無であった。

第３節　出土遺物

出土した遺物の総量は少なかった。その中で、縄文土器が最も多く、石器は少量である。石製品・土製品は微量である。縄文時代遺物の包含層は各調査区からは確認されておらず、台地全体から散発的な出土にとどまっている。出土した縄文土器の時期は早期から後期に及んでおり、石器もそれらの時期に伴うものと考えられる。

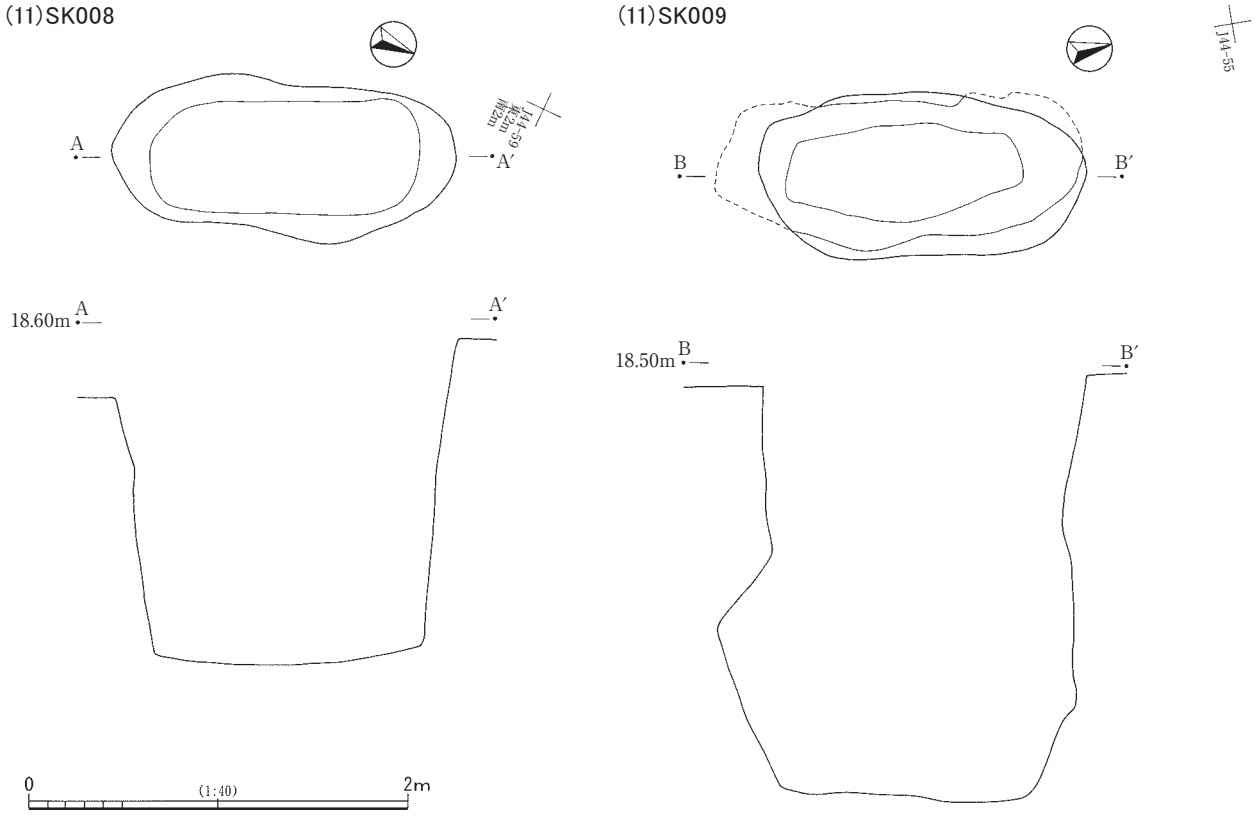
１　縄文土器

出土した早期から後期の縄文土器のうち最も多かったのが、前期の土器である。分類は以下のように行った。

第Ⅰ群土器　早期の土器
第Ⅱ群土器　前期の土器
第Ⅲ群土器　中期の土器
第Ⅳ群土器　後期の土器

第Ⅰ群土器（第19図、図版39）

早期を本群とする。早期の土器は僅かに１点のみである。茅山上層式と考えられる。胴部上位の屈曲部



第18図　(11)SK008・(11)SK009

の破片で、突帯には半截竹管によるキザミが施されている。口縁部は茎束条痕が粗く施され、間隔のあいた斜行沈線が施文されている。胎土に繊維を含む。

第Ⅱ群土器

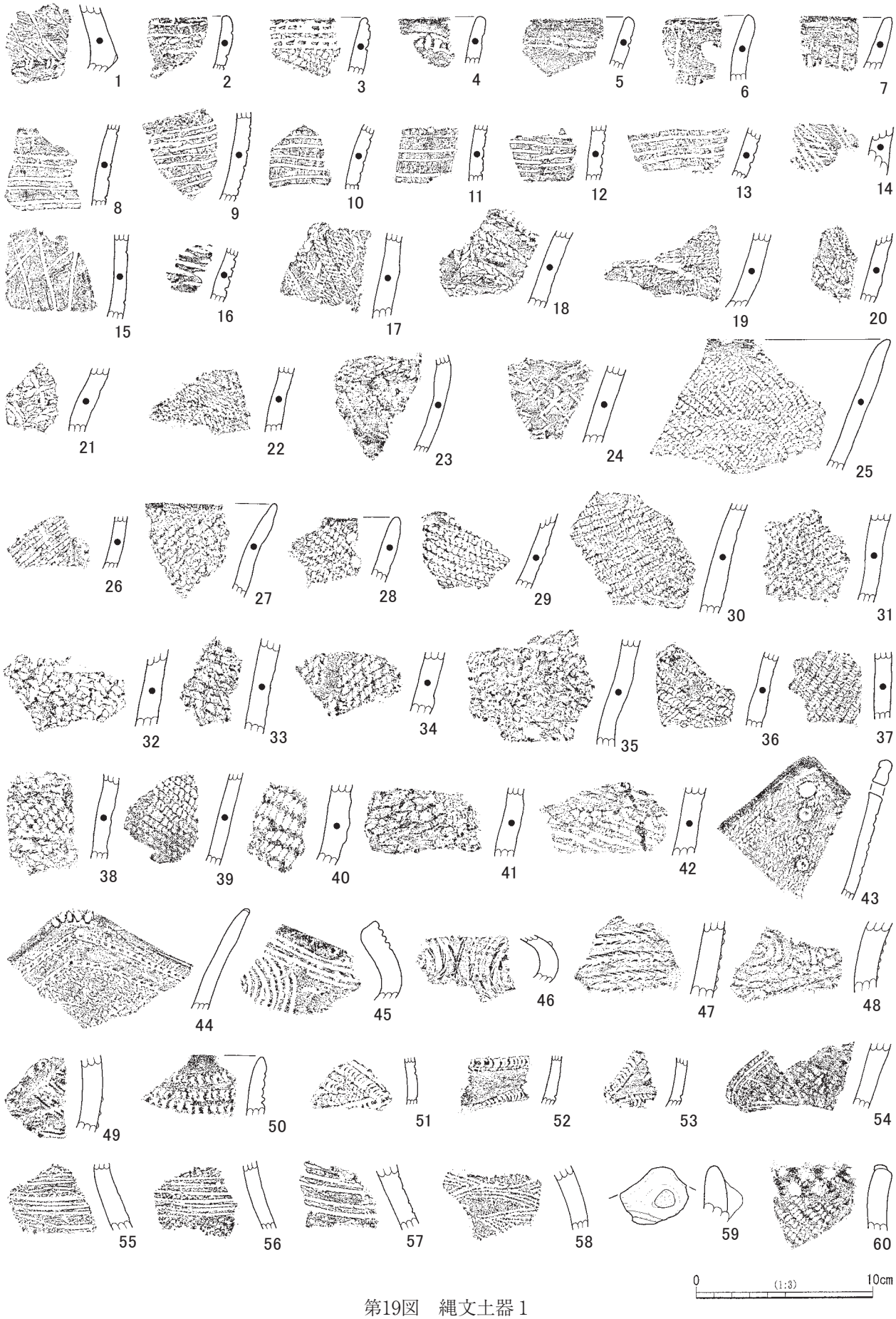
前期を本群とする。黒浜式、諸磯式、浮島式、興津式が出土している。このうち最も多かったのが黒浜式であった。

第１類（第19図２～42、図版39）

黒浜式を本類とする。全て破片で､器形を復元できるものはなかった。胎土に繊維を多量に含んでいる。２～15は半截竹管ないしは棒状工具による結節沈線文や沈線が施されているもので、縄文を伴うものもある。16は半截竹管による押引状の深い沈線が密に施されている。17～23は撚糸施文である。24は網目状の撚糸文である。25～42は縄文施文のものである。単節縄文や無節縄文が施されるほか、17は多条縄文であろう。

第２類（第19図43～60・第20図61～65、図版39）

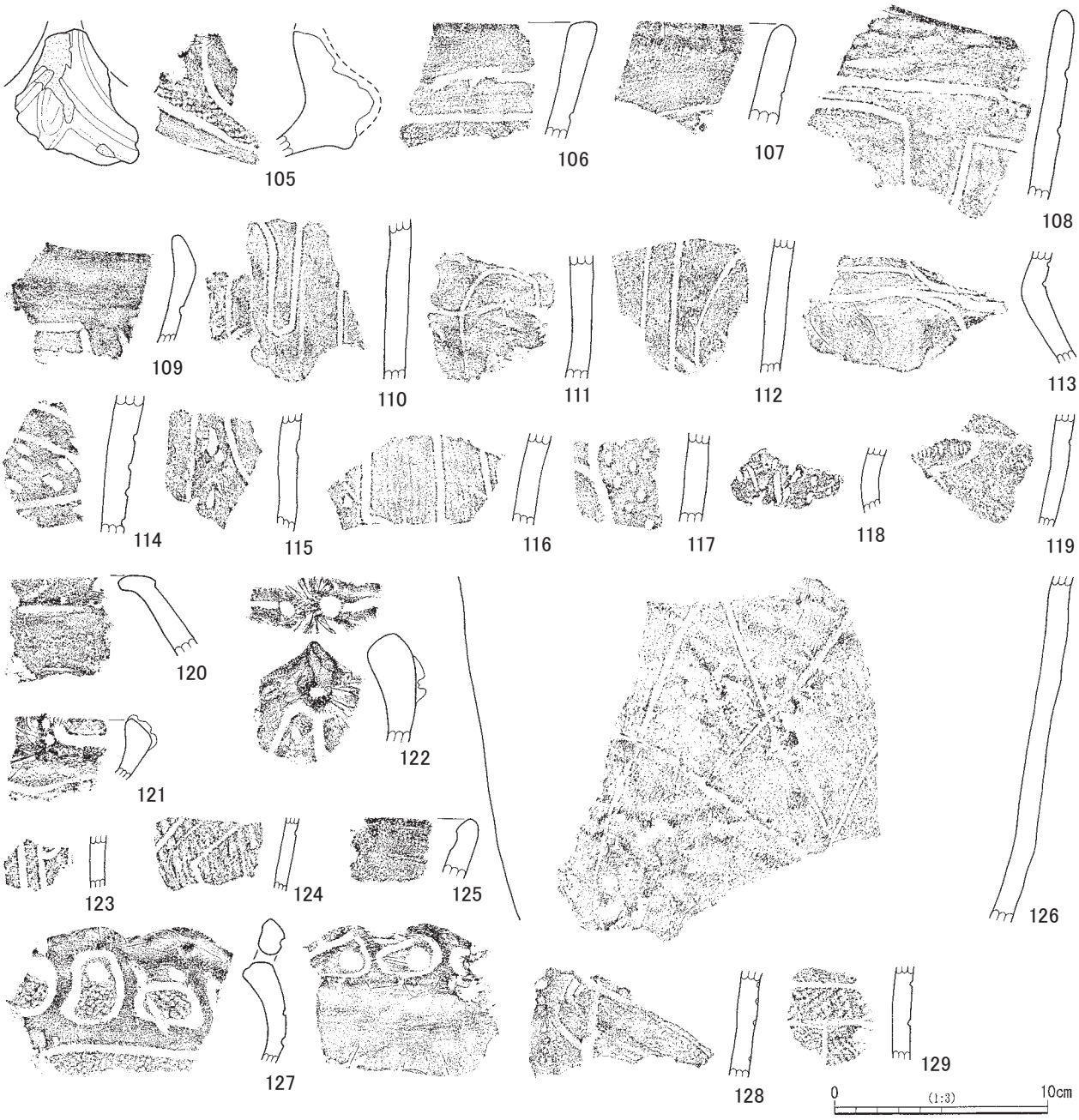
諸磯式を本類とする。焼成がよく、胎土に粗い砂粒が目立つものがある。43・44は縄文地文の大波状口縁深鉢であろう。43は波頂部から竹管による刺突列が垂下する。44は波頂部にキザミが施され、口縁部の凹凸に合わせ２条の結節沈線文が施されている。諸磯ａ式であろう。45・50～59は半截竹管による並行沈線や結節沈線文が施されるものである。49 は強く内湾する口縁部である。47～49 は細かいキザミを伴う微隆起線文である。48 などは特に焼成が硬く胎土に砂粒が多い。58は細い半截竹管による木葉文か。59


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
0
(1:3)
10cm

第19図　縄文土器１

61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
0
(1:3)
10cm

第20図　縄文土器２



第21図　縄文土器３

は波状縁に突起を伴う。60はRL縄文を地文とし、口唇部には交互に縄文原体を押しつけた蛇行する隆帯が伴っている。45～60は諸磯ｂ式ないしは諸磯ｃ式であろう。61～65は諸磯式に伴う縄文施文のものである。

第３類（第20図66～93・100、図版39・40）

浮島式・興津式を本類とする。量的には微量である。浮島Ⅲ式から興津式にかけての時期に限られ、諸磯式とはやや時期がずれるようである。

66・67は同一個体である。波状縁を呈し口唇部に半截竹管による押引文が施されている。68は変形爪形文の下に矢羽根状の沈線文が施されている。69は口唇部に半截竹管の縦のキザミ、胴部には列点状の半截竹管文が施されている。70・71は別個体である。口縁部が大きく外反し、横位の沈線の間に貝殻腹縁文が

充填されている。72～74・76・78・85～87は変形爪形文である。77は幅を狭く割った貝殻か先がささくれた半截竹管による刺突文である。79～83は貝殻腹縁による波状文である。75・88・89は凹凸文である。75は口唇部外面に縦のキザミが施され、直下に凹凸文が施されている。90は撚糸地文である。91～93は条線が施されている。100は無文の胴部下半である。粗い砂粒が多く焼成もよいことから、前期後半の時期と考えられる。

第Ⅲ群土器（第20図94～99・101～104、図版40）

中期を本群とする。量的には微量で、図示したものがそのほとんどである。94～99・101・102は磨り消し手法を伴う加曽利E3式の深鉢であろう。いずれもRL単節縄文の地文で太い沈線で文様が施されている。103は撚糸地文で横位波状の沈線文が施されている。連弧文系の土器である。104は太いLR単節縄文が施されている。

第Ⅳ群土器（第21図105～129、図版40）

後期を本群とする。量的には微量で、図示したものがそのほとんどである。時期は称名寺式から堀之内１式の古い段階にかけての時期と思われるものと、加曽利Ｂ式が僅かに含まれている。105は波状縁の深鉢であろう。口縁部の突起部分とみられ、しっかりした突起と沈線による区画が施され、LR縄文が充填されている。称名寺Ⅰ式。106～113は沈線によって文様が施されるものである。106～109は無文帯の口縁部である。114～118は沈線の区画内に列点文が充填されるものである。119は沈線の区画内に櫛歯による刺突が施されている。106～119は称名寺Ⅱ式であろう。

120は深鉢の口縁部であろう。口縁部は受け口状に平らになっている。樽状の器形か。称名寺式と考えられる。121・122は８の字浮文を伴っている。122は一部欠けている。123・124は縄文地文に沈線が施されている。121～124は堀之内１式であろう。125は無文の口縁部である。称名寺式から堀之内１式であろう。126は深鉢の胴部破片である。外面の調整はいたって粗い。斜格子状の沈線が雑に施されている。称名寺式であろう。127は浅鉢である。胴部が膨らみ口縁部が外反する。２つの貫通孔に伴う小突起が波状縁を構成している。口縁部には沈線の小区画が並び内部にRL単節縄文が充填されている。胴部は横位の区画線が施され、RL単節縄文が充填されている。口縁内面にも貫通孔の周囲にメガネ状に沈線が施されている。内外面ともに器面の調整がよい。千葉県内では珍しい施文で、浅鉢である点もあまり見ない例である。128は縦位の浅く弱い刺突による列点文が施され、斜方向の楕円状の区画文が繰り返し施されるようである。127・128の時期は称名寺式から堀之内１式であろう。129は幾何学的な帯状の沈線区画文が施され、内部にLR縄文が充填されている。加曽利B1式～B2式の時期であろう。

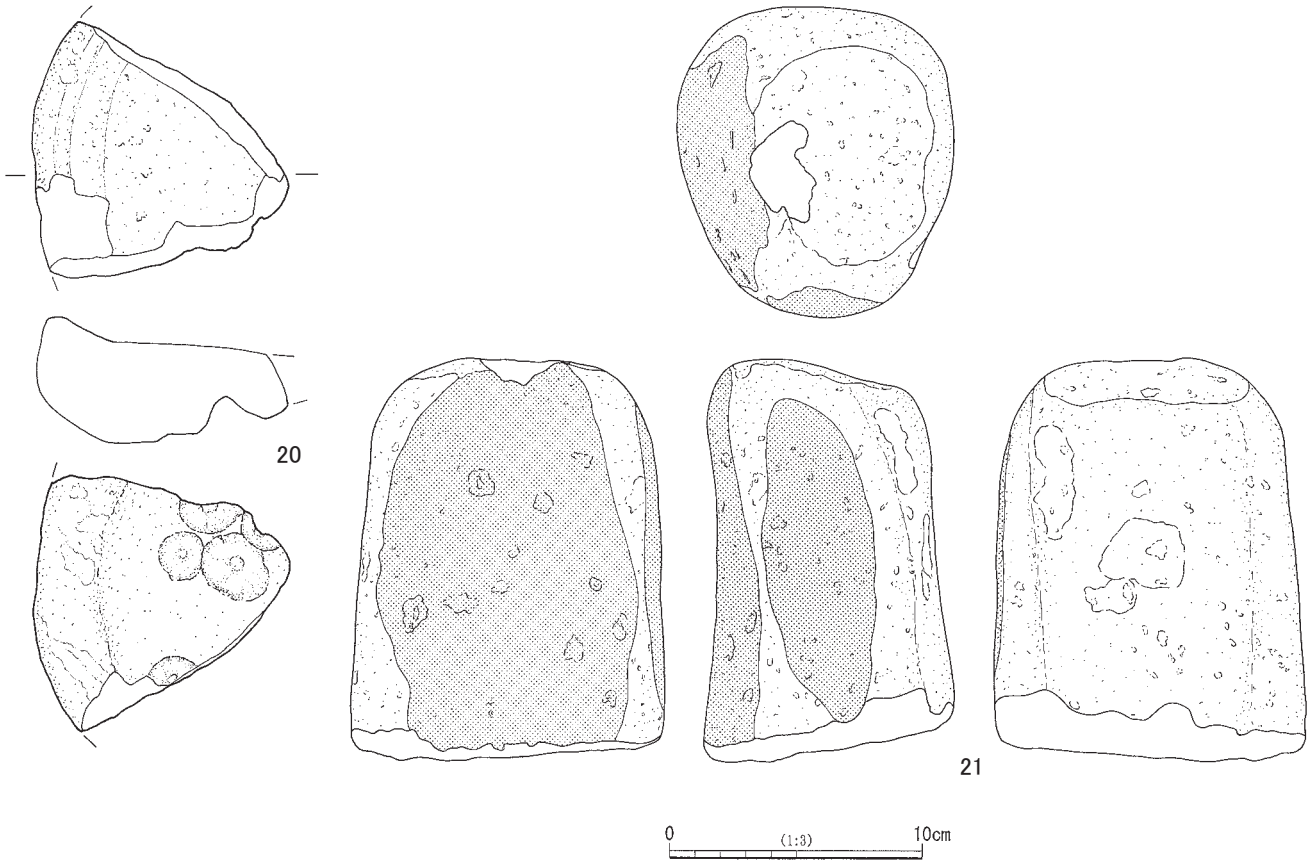
２　石器（第22・23図、図版40・41）

概要でも記したように、縄文時代の遺構が陥穴に限られ、しかも通常、遺物包含層となるⅡ層が無かったことから、各調査区で出土した縄文時代の石器及び土製品は散発的な出土数にとどまっている。

出土した石器の点数は、31点である。器種は石鏃５点、磨製石斧３点、打製石斧３点、凹石２点、磨石４点、敲石２点、石皿８点、石棒２点、両極石核２点である。縄文土器が早期から後期まであることから、石器も同様の時期幅を伴っていると考えられる。

１は石鏃である。凹基式の三角形状を呈する。先端が欠損している。両脚外縁端が調整され内側に丸味を帯びている。２は大型の石鏃である。正三角形に近く浅い凹基である。石材としては、珍しいホルンフェルスを使用している。３は前期の乳棒状磨製石斧であろう。刃部は両刃で使用によるとみられる欠損があ

第22図　縄文時代石器１



第23図　縄文時代石器２

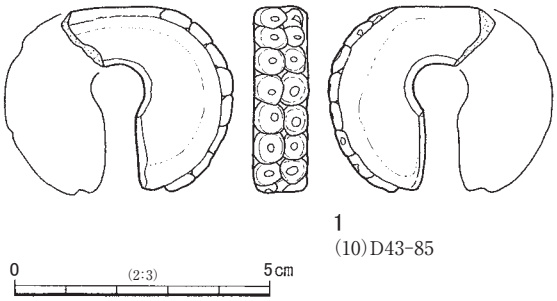
り、研磨し刃部再生している。４・５は定角形の磨製石斧である。共に刃部を欠損しているが、５は刃部がほぼ潰れており、敲石に転用している可能性がある。時期は中期から後期であろう。６・７は打製石斧である。６は撥形、７は分銅形であろう。６は刃部には細かい調整が施され、中央が部分的に研磨されている。７は抉り部分に敲打痕が顕著に残っている。８・９は凹石である。８は２側面中央に凹みと敲打痕を伴う。９は平たい礫の表裏に凹みを伴う。片側に敲打による剥離があり、敲石としても使用されたようである。11～14は磨石である。11は握りやすい大きさの円礫の一面が良く磨れている。12～14はいずれも欠損している。扁平な円礫の両面が磨られている。

15・16は敲石である。15は長細い円礫の一端と側面に敲打痕を伴っている。また、欠損後欠けた面が磨られており、あるいは後世に砥石として使用されたのかもしれない。16はやや大きめの円礫を使用しており、縁辺に敲打痕を伴うほか、一部に線状痕を伴う研磨が行われている。

10・17・18・20は石皿である。10は扁平で、片面に研磨面がある定型的な石皿の可能性がある。17は定型的な石皿で、掻き出し部分の破片であろう。底面には深い凹みが見られる。18は研磨面以外の面は欠損している。中期ないしは後期の石皿であろう。20は周囲に突帯を伴う石皿である。底面には凹みが複数見られる。19は緑泥片岩の石棒の破片と考えられる。３か所に凹みがある。太い径の石棒であったと推測され、時期は中期であろう。21は石棒の先端部と考えられるが、あまり加工された痕跡をとどめていない。側面に凹みが認められる。時期は中期であろう。ただし、２側面に研磨の痕跡があり後世に砥石として転用されたと考えられ、７世紀後半の(10)SI010の竪穴住居跡から出土している。

3　土製品（第24図、図版40）

縄文時代に属すると考えられる土製品は１点のみである。１は玦状耳飾である。約３分の１が欠損している。最大長3.60㎝、推定幅4.40㎝、最大厚1.15㎝である。断面は角の張る長方形を呈し、側面には細くした粘土紐を小さな輪にしてタコの吸盤のように２列に貼り付けた装飾が施されている。時期は前期後半と考えられる。



第24図　土製品

第５表　縄文時代石器一覧表

（　）は現存長

No.	挿図番号	調査年次	出土地点	遺物番号	種　類	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重　量(g)	石　材	備　考
1	第22図 1	(13)	SI001	1	石鏃	(19.0)	16.5	3.7	1.08	チャート	
2	第22図 2	(9)	SX009	2	石鏃	24.5	24.8	7.0	3.61	ホルンフェルス	
3	－	(4)	SI002	1	石鏃	14.0	15.0	3.5	0.54	チャート	
4	－	(10)	SI002	4	石鏃	10.9	15.2	4.4	1.01	チャート	
5	－	(9)	SI003	10	石鏃	19.7	14.3	3.5	0.88	チャート	
6	第22図 3	(14)	SI002	1	磨製石斧	116.0	38.5	23.9	153.08	緑泥片岩	
7	第22図 4	(16)	SK018	2	磨製石斧	(81.2)	50.3	28.0	136.40	蛇紋岩	
8	第22図 5	(16)	SE021	2	磨製石斧	(78.2)	44.4	25.4	152.04	緑泥片岩	
9	第22図 6	(13)	H44-89	1	打製石斧	(60.6)	46.1	15.1	55.88	ホルンフェルス	
10	第22図 7	(5)	SD003	25	打製石斧	(93.9)	(60.2)	25.7	145.46	安山岩	
11	－	(2)	9801T	1	打製石斧	(56.5)	(67.8)	13.2	186.24	ホルンフェルス	
12	第22図 8	(16)	SE012	2	凹石	88.3	52.8	51.4	338.51	ハンレイ岩	
13	第22図 9	(16)	T14	2	凹石	102.7	67.8	31.4	309.58	安山岩	
14	第22図 10	(8)	SK102	2	石皿	(112.5)	(59.1)	57.7	460.31	安山岩	
15	第22図 11	(16)	SK003	2	磨石	70.5	62.7	47.4	322.32	石英斑岩	
16	第22図 12	(5)	SD003	11	磨石	(58.9)	(78.1)	38.2	302.88	安山岩	
17	第22図 13	(16)	SE021	2	磨石	(67.6)	(53.1)	36.5	149.62	安山岩	
18	第22図 14	(16)	SK009	1	磨石	(37.5)	(46.5)	(31.1)	86.11	安山岩	
19	第22図 15	(16)	SE021	2	敲石	108.3	48.3	30.0	198.51	砂岩	
20	第22図 16	(13)	SI001	1	敲石	103.6	76.3	88.9	847.56	砂岩	
21	第22図 17	(16)	SK018	2	石皿	(102.0)	(68.4)	49.4	341.73	安山岩	
22	第22図 18	(5)	L44-93	1	石皿	(100.0)	(81.8)	(87.8)	562.75	安山岩	
23	第23図 20	(8)	SK102	2	石皿	(100.3)	(100.1)	48.7	436.11	多孔質安山岩	
24	－	(5)	SD003	35	石皿	(58.3)	(58.0)	33.3	72.22	多孔質安山岩	
25	－	(8)	SK105	1	石皿	(93.1)	(52.7)	(27.4)	186.14	雲母片岩	砥石に転用された可能性あり
26	第22図 19	(16)	SK025	2	石棒	(85.3)	(87.4)	(17.4)	112.30	緑泥片岩	
27	第23図 21	(10)	SI010	10	石棒	(156.0)	119.9	97.9	2881.13	安山岩	後世に砥石に転用
28	－	(16)	SK025	2	石皿	(95.5)	(34.9)	(82.0)	292.21	安山岩	
29	－	(8)	SK102	2	石皿	(107.8)	(44.9)	(98.2)	441.71	多孔質安山岩	
30	－	(5)	SD003	1	両極石核	40.4	35.7	8.6	17.66	頁岩	
31	－	(5)	SI010	5	両極石核	40.4	39.5	16.3	36.16	頁岩	

第４章　古墳時代の遺構と遺物

第１節　概要

５世紀～７世紀の竪穴住居跡が８軒検出されている。このうち５世紀中葉の古墳時代中期の竪穴住居跡はわずかに１軒しかない。残る７軒は古墳時代後期の７世紀後葉と考えられるが、８世紀代に含めた竪穴住居跡の中には、７世紀末～８世紀初頭と考えられるものもあり峻別は難しく、７世紀後葉～８世紀代にかけての集落が継続しているのであろうと推測される。１軒しか検出されなかった中期の竪穴住居跡は、遺跡内の南西端の南緩斜面に位置している。西側の前平井遺跡でも中期の集落群は検出されていない。７世紀後葉の竪穴住居跡群は、散漫な展開を示しており、まとまりがない。８世紀代の竪穴住居跡群と混在しており、各地点で細々と継続していくのではないかと考えられる。竪穴の遺存状態についてはあまり良くない。中・近世の耕作などの影響がその原因と考えられる。竪穴住居跡内のカマドは総じて北西方向に設置されている。遺物の出土量は、中期の竪穴住居跡を除けば少なかった。以下、各竪穴について詳述する。なお、残存するカマドの構築材及び焼土はスクリーントーンで示した。

第２節　遺構

(9) SI006（第25図、図版８・25）

位置・形態　Ｌ44－10グリッドを主体に検出された。平面の形態は隅丸の方形を呈し、規模は5.2m×5.0mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はＮ－14°－Ｗである。検出面から床面までの深さは、北壁35cm、西壁29cm、南壁15cm、東壁27cm、遺存状態はよい。

覆土　黒褐色土を主体とし、焼土及び炭化材が全体的に混入していることから、焼失住居の可能性があるが焼土などの混入状況は、量的には少ない。

施設等　ピット５基と周溝、カマドが検出された。P1～P4は規則的に配列されており、柱穴と考えられる。P2・P3では柱痕が２箇所確認されており、建て替えが行われたと考えられる。床面からの深さはP1が69cm、P2が北側71cm、南側72cm、P3が北側56cm、南側66cm、P4が84cmである。南壁近くのP5は深さ20cmあり、入口の梯子ピットと考えられる。周溝は全周する。北壁のカマドは、煙道部の突出が大きい。袖部が良好な状態で遺存する。

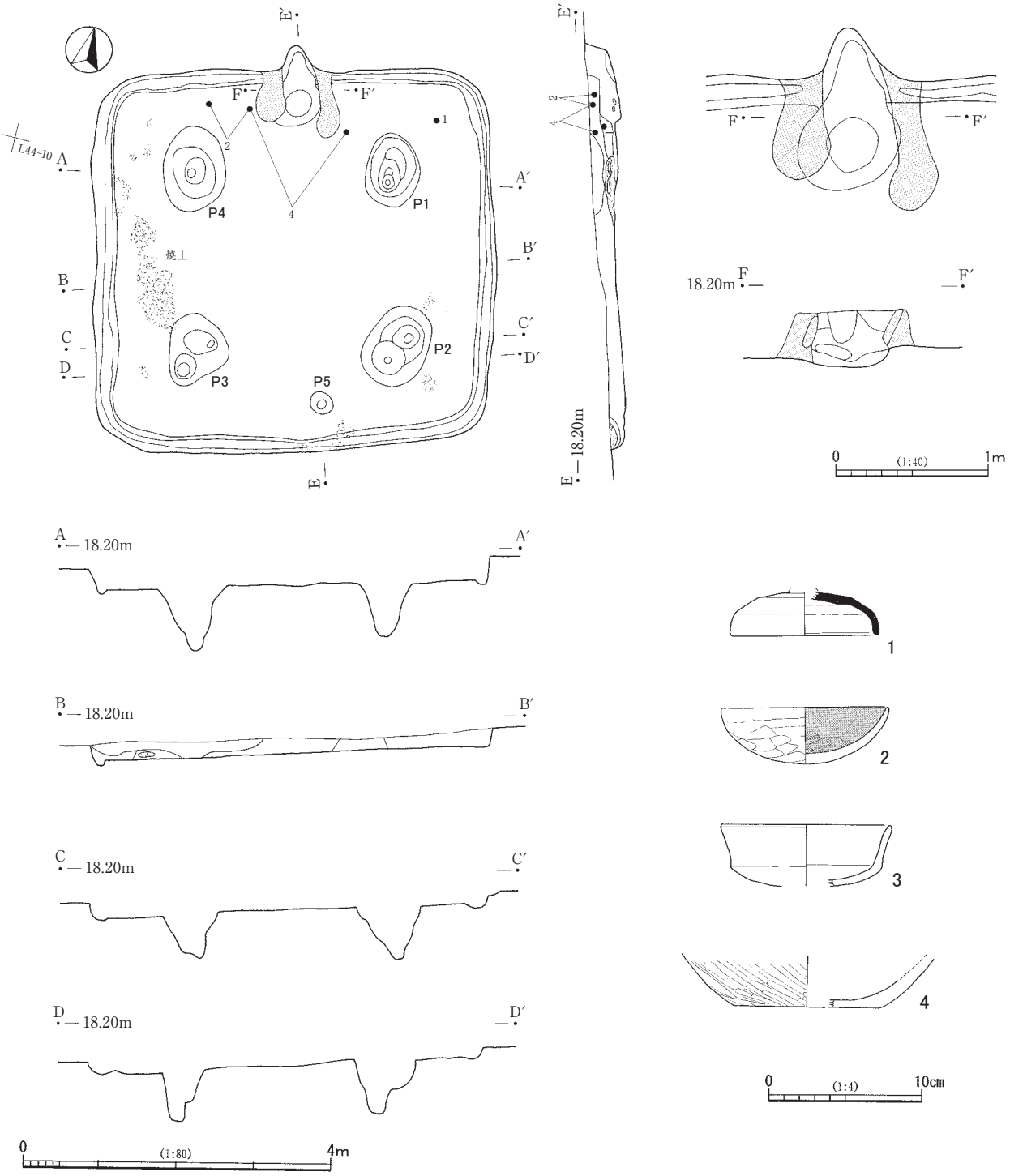
遺物出土状況　出土量はあまり多くない。カマド周辺の覆土中からまとまって出土している。

出土遺物　図示できた遺物は、須恵器蓋１点、土師器坏２点、甕１点である。１は蓋である。宝珠つまみが欠損している。東海系の須恵器と考えられる。２・３は丸底の坏である。２は体部外面は手持ちヘラケズリが施され、内黒である。３は６世紀代の土師器と考えられ、覆土内への混入と考えられる。４は甕の底部である。体部外面にヘラミガキ調整が施される。出土遺物より、本竪穴は７世紀末葉と考えられる。

(10) SI001（第26図、図版９・26）

位置・形態　Ｏ44－17グリッドを主体に検出された。平面の形態はやや歪みのある隅丸の方形を呈し、規模は3.2m×3.1mで小規模である。カマドは北西コーナーの隅カマドである。主軸方位はＮ－17°－Ｗである。検出面から床面までの深さは、北壁21cm、西壁21cm、南壁20cm、東壁17cmで、遺存状態は良い方である。

覆土　黒褐色土を主体とし、大きく上下の２層に分かれる。上層では目立った混入物は確認されなかった。

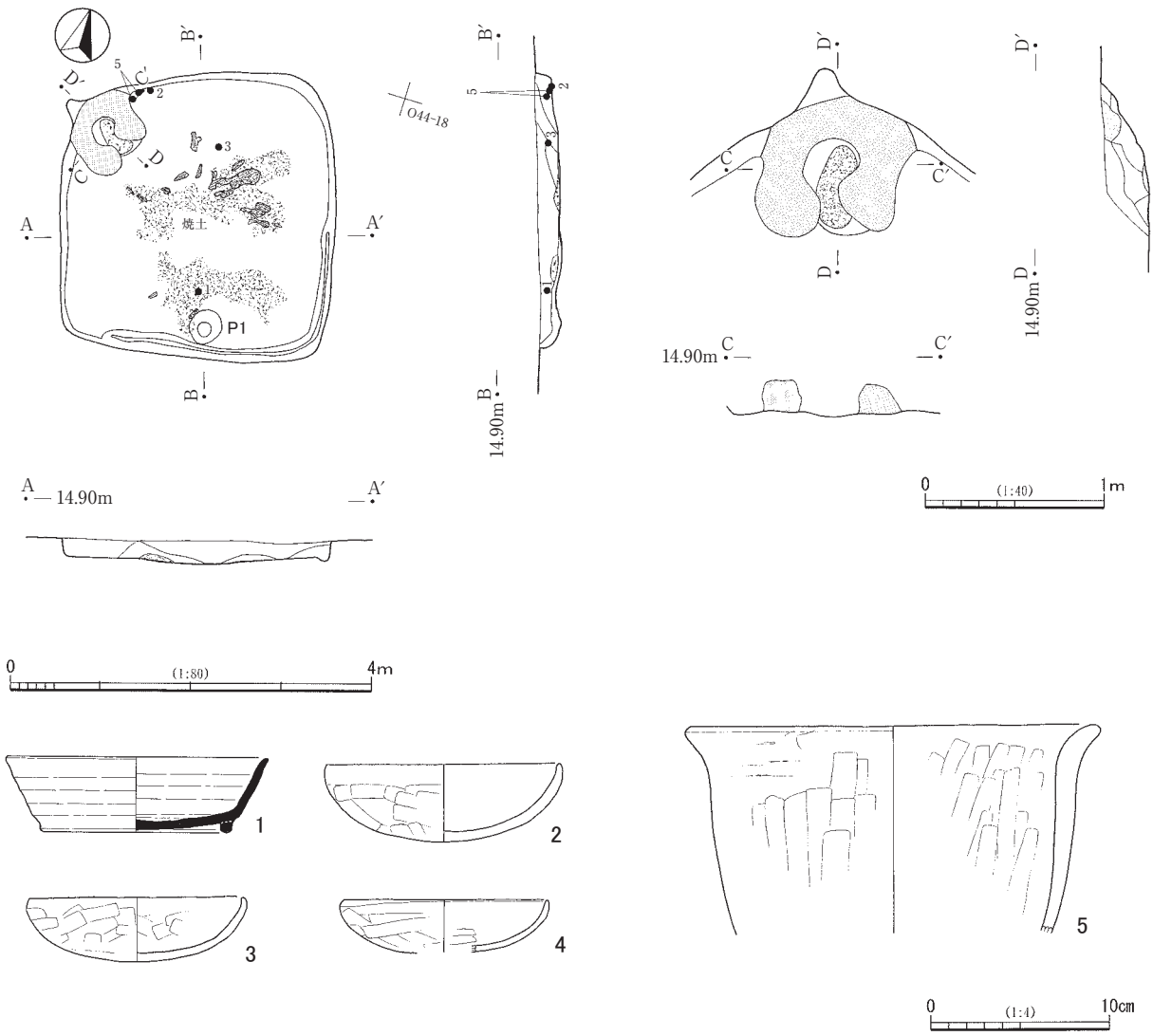


第25図　(9)SI006

中位から床面にかけて焼土が堆積し、中央部には炭化材が集中していた。焼失住居の可能性がある。

施設等　ピット１基と周溝、カマドが検出された。ピットは南壁近くから検出された。床面からの深さが８cmあり、入口の梯子ピットと考えられる。周溝は南壁と東壁の一部で検出された。北西コーナーのカマドは、煙道部が小さく突出する。比較的良好な遺存状態である。天井部は遺存していない。

遺物出土状況　出土量はあまり多くない。中央及びカマド周辺の覆土中からまとまって出土している。



第26図　(10)SI001

出土遺物　図示できた遺物は、須恵器坏１点、土師器坏３点・甕１点である。１はやや大きめの須恵器高台付坏である。２～４は丸底の土師器坏である。いずれも体部外面に手持ちヘラケズリが施される。５は甕である。体部内外面にヘラケズリ調整が施される。出土遺物より、本竪穴は７世紀末葉と考えられる。

(10)SI005（第27図、図版９・26）

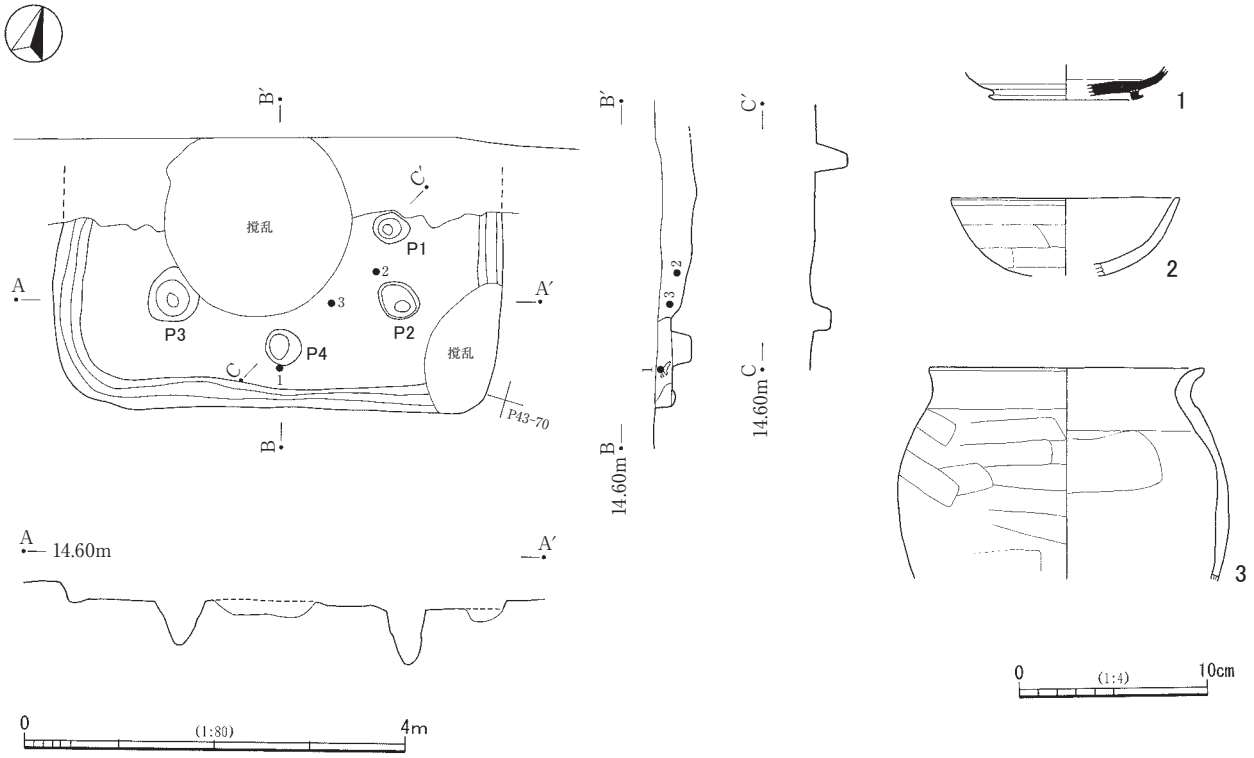
位置・形態　O43－79グリッドを主体に検出された。北側の大半は道路及びその工事で失われ、調査できた範囲も植栽の植え込みによって撹乱されている。平面の形態は隅丸の方形を呈すると考えられる。規模は遺存している東西方向で4.7mを測る。カマドは北壁に設置されていたと考えられる。主軸方位はN－17°－Wである。検出面から床面までの深さは、西壁23cm、南壁22cm、東壁15cmである。

覆土　暗褐色土を主体とする。

施設等　ピット４基と周溝が検出された。中央東寄りのP1は床面からの深さが37cmあるが、位置的には主柱穴ではなかろう。P2は深さ57cm、P3は41cmあり柱穴と考えられる。P4は深さ18cmあり、入口の梯子ピットと考えられる。周溝は全周すると考えられる。

遺物出土状況　出土量は少ない。多くが攪乱された中から出土している。

出土遺物　図示できた遺物は、須恵器高台付坏１点、土師器坏１点・甕１点である。１は須恵器高台付坏である。猿投産と考えられる。２は土師器坏である。体部外面に手持ちヘラケズリが施される。３は土師器甕である。体部外面にヘラケズリが施される。出土遺物から、１は８世紀に入る可能性があるが、土師器から本竪穴の時期を７世紀第４四半期としておく。



第27図　(10)SI005

(10)SI010（第28図、図版10・27）

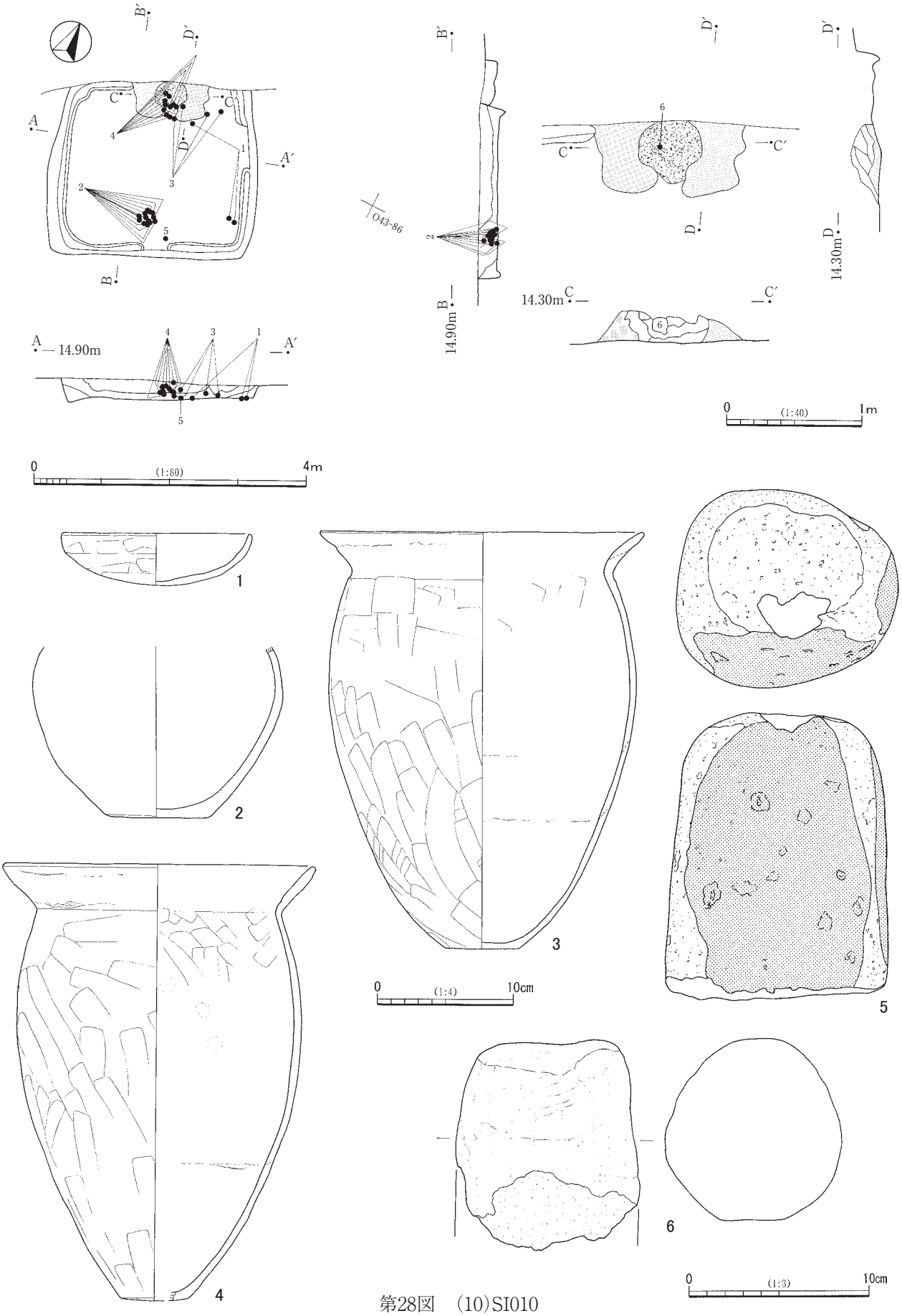
位置・形態　O43－85グリッドを主体に検出された。本竪穴の北側が攪乱を受けている。平面の形態はやや歪んだ方形を呈し、規模は3.1m×2.8mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はN－27°－Wである。検出面から床面までの深さは北壁20cm、西壁35cm、南壁33cm、東壁19cmである。

覆土　暗褐色土を主体としている。

施設等　周溝とカマドが検出されたが、柱穴等のピットは検出されなかった。周溝は南壁と東壁の中央でそれぞれ途切れる。北壁のカマドの一部は攪乱されているものの遺存状態はよい。火床面はよく焼けており、焼土が顕著に堆積していた。

遺物出土状況　カマド周辺と南壁付近の２か所に集中して遺物が出土している。出土遺物の多くは床面直上から出土している。カマド内からは支脚が出土した。

出土遺物　図示できた遺物は、土師器坏１点･甕３点、支脚１点、砥石１点である。１は土師器坏である。体部外面には手持ちヘラケズリが施される。２～４は土師器甕である。３・４は体部外面にヘラケズリが



第28図　(10)SI010

施される。４は内面がナデ調整である。５は砥石である。縄文時代中期の大型石棒の頭部を転用したものと考えられる。２側面が研磨面となっている。この砥石については、縄文時代石棒として第24図にも転載している。６はカマド内から出土した大型の支脚である。なお、本竪穴の覆土内から26点合計4.30kgのスラグが出土している。この中には椀形滓も含まれており、本竪穴が鍛冶関連の工房の可能性もある。出土遺物から、本竪穴は７世紀第４四半期と考えられる。

(10)SI019（第29図、図版12・28）

位置・形態　N44－94グリッドを主体に検出された。本竪穴は西側と南側の撹乱が顕著で、壁の立ち上がりを確認できなかった。平面の形態は、部分的に検出された周溝から、やや歪みのある方形を呈すると考えられる。規模は4.5m×4.3mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はN－9°－Wである。検出面から床面までの深さは北壁63cm、東壁44cmである。

覆土　暗褐色土を主体とし、壁際で僅かに焼土が混入する。

施設等　ピット４基と周溝、カマドが検出された。P1～P4は規則的に配列されており、主柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が26cm、P2が22cm、P3が69cm、P4が72cmである。周溝は北壁と東壁の全面に巡るが、西壁と南壁では部分的に失われている。北壁のカマドは煙道部の突出が小さい。袖部の遺存は良好である。火床面はよく焼けていた。

遺物出土状況　出土量はあまり多くない。

出土遺物　図示できた遺物は、須恵器坏１点、土師器壺１点･甕１点である。１は小型の須恵器坏である。緻密な胎土で、混入物がほとんどない。底部には回転ヘラケズリが施される。湖西産と考えられる。２は壺である。内外面が著しく摩耗し、時期的には古墳時代中期の可能性もあり、混入の可能性が高い。出土遺物から、本竪穴の時期は、７世紀第４四半期と考えられる。

(11)SI001（第30図、図版12・29）

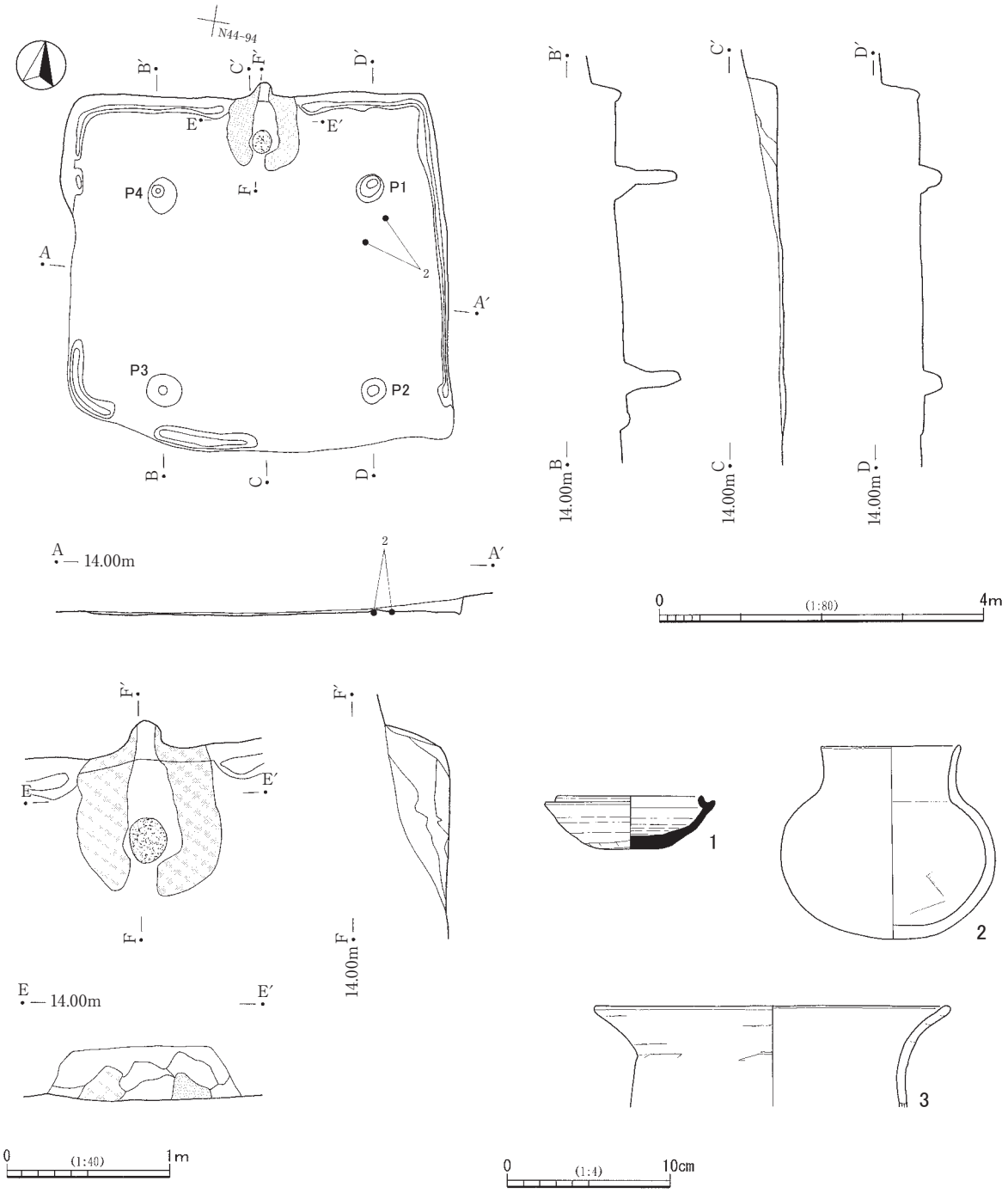
位置・形態　J44－40グリッドを主体に検出された大型の竪穴である。遺存状態が非常に悪い。南側約半分は､床面も失われている。平面の形態は方形を呈すると考えられる。規模は他の竪穴と比較して大きく、遺存する東西方向で6.4mを測る。カマドは北西壁にあり、主軸方位はN－49°－Wである。検出面から床面までの深さは非常に浅く、北西壁５cm、南西壁５cm、北東壁５cmである。

覆土　覆土はほとんど検出できていない。

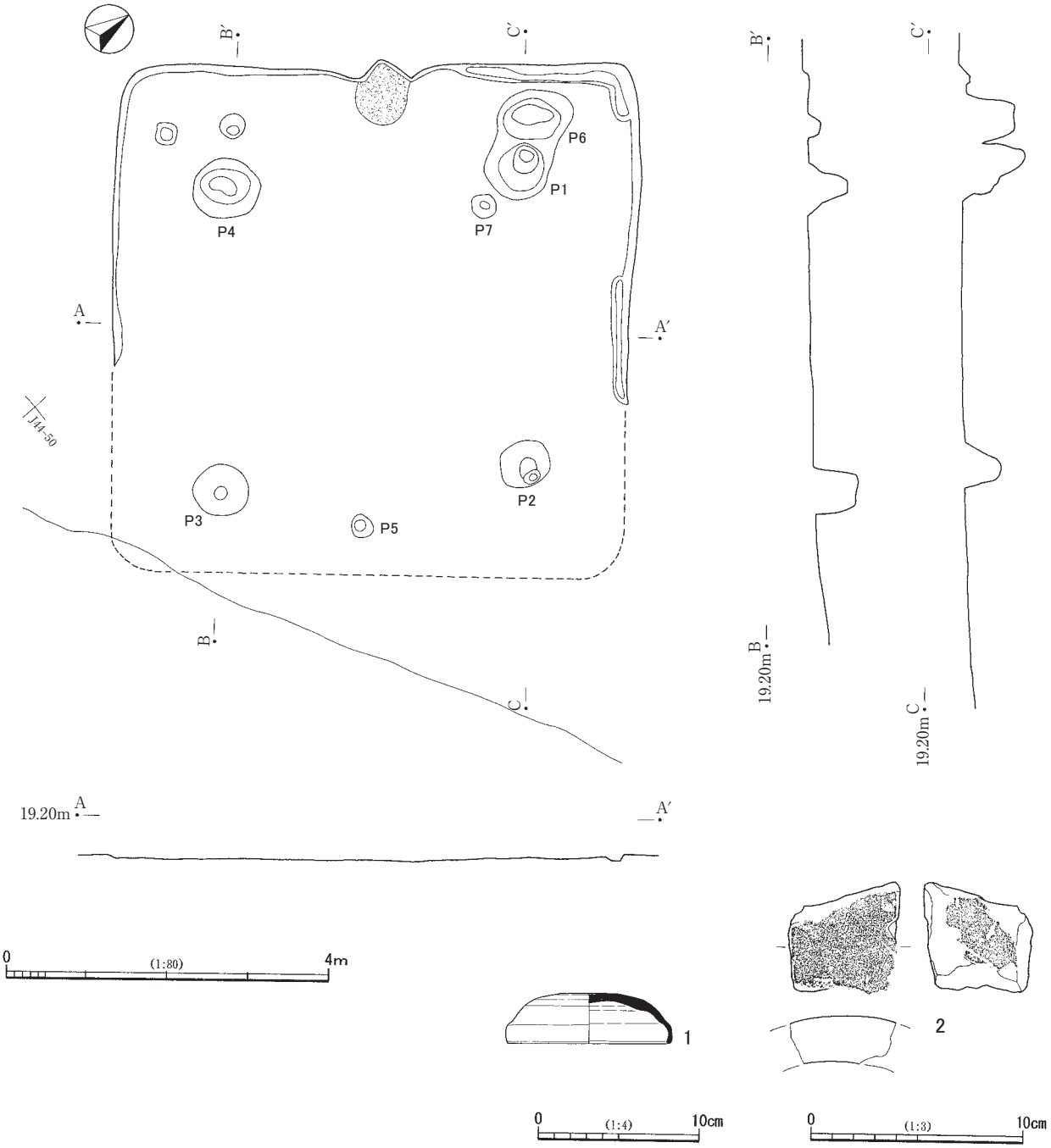
施設等　ピット６基と周溝、カマドが検出された。P1～P4は規則的に配列され、主柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が77cm、P2が51cm、P3が55cm、P4が51cmである。南東壁近くのP5は深さ７cmあり、入口の梯子ピットと考えられる。北コーナー近くのP6はP1と連結しているようにも見えるが、深さが61cmあり、貯蔵穴と考えられる。検出面の形態は不整楕円形を呈し、底面は平らである。P7は極端に浅いことから、柱穴ではなかろう。周溝は北西壁と北東壁で部分的に検出された。北西壁のカマドは火床面が僅かに検出された程度で、袖部の構築材などはほとんど失われていた。

遺物出土状況　出土量はほとんどない。P4の内部から須恵器の坏蓋が出土している。

出土遺物　図示できた遺物は、須恵器坏蓋１点、丸瓦１点である。１は小型の坏蓋である。上部は回転ヘラケズリが施される。胎土は緻密で混入物が少ないことから湖西産と考えられる。２は丸瓦の破片で、布目が見られない。この他にスラグの小片が合計132ｇ出土している。出土遺物から、本竪穴は７世紀第４四半期と考えられる。



第29図　(10)SI019



第30図　(11)SI001

(11) SI013（第31図、図版13・14・29）

位置・形態　K41－55グリッドを主体に検出された。西側の壁などが撹乱されている。平面の形態は方形を呈する。規模は他の竪穴と比較して大きく、6.1m×5.3mである。カマドは北西壁にあり、主軸方位はN－53°－Wである。検出面から床面までの深さは、北西壁43cm、南東壁15cm、北東壁37cmである。

覆土　暗褐色土を主体とし、粘性が強く、良く締まっている。焼土粒が多く混入していた。

施設等　ピット４基と周溝、カマドが検出された。P1～P4は規則的に配列し、主柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が46cm、P2が51cm、P3が51cm、P4が65cmである。P1は３つのピットからなり、西側のピットは深さ30cm、北側のピットは深さ51cmを測る。他の主柱穴では複数のピットが確認されていないが、竪穴が建て替えられた可能性を示唆している。周溝はほぼ全周していたと考えられる。西壁のカマドは大部分が崩落しており、遺存状態はあまり良くないが、袖部の内側が顕著に被熱していた。

遺物出土状況　出土量は微量である。P4の内部から土師器の甕が出土している。

出土遺物　図示できた遺物は、土師器甕１点である。頸部が比較的長い。体部外面はヘラケズリ調整が施される。内面は摩耗が著しい。この他にスラグ小片合計79ｇが出土している。出土遺物から本竪穴は７世紀第３～第４四半期であろう。

(13) SI001（第32・33図、図版14・29・30）

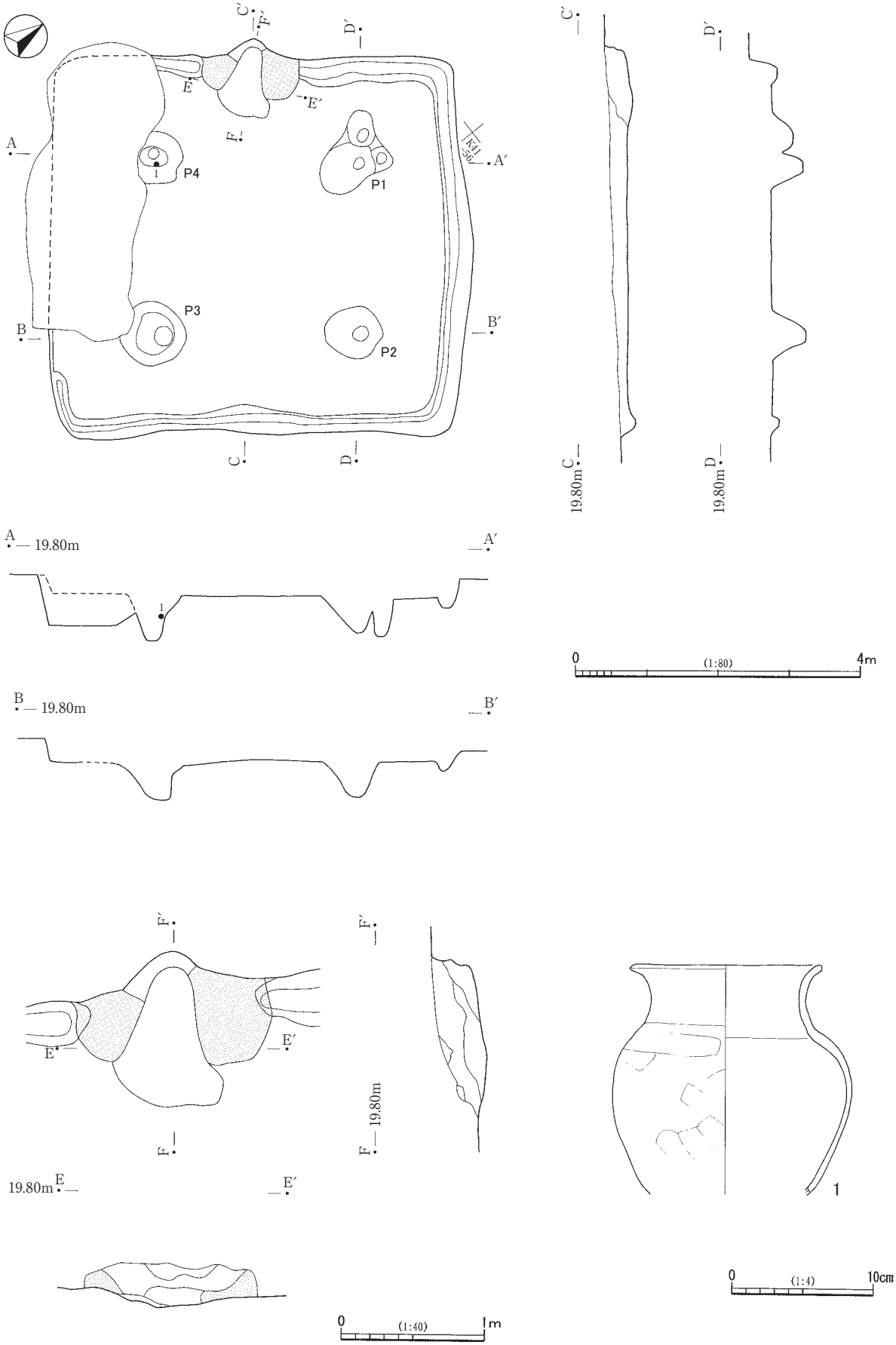
位置・形態　H45－29グリッドを主体に検出された。南面する緩斜面に位置する竪穴である。南東コーナーでは壁の立ち上がりが検出されなかった。平面の形態は南北方向にやや長い長方形を呈し、5.0m×4.3mである。竪穴の中央からやや北西側に寄った位置で炉が検出された。主軸方位はN－48°－Eである。検出面から床面までの深さは、北東壁36cm、北西壁25cm、南西壁43cm、南東壁38cmである。

覆土　黒色土を主体とし、混入物はほとんど無い。床面近くでは焼土やロームが僅かに混入していた。

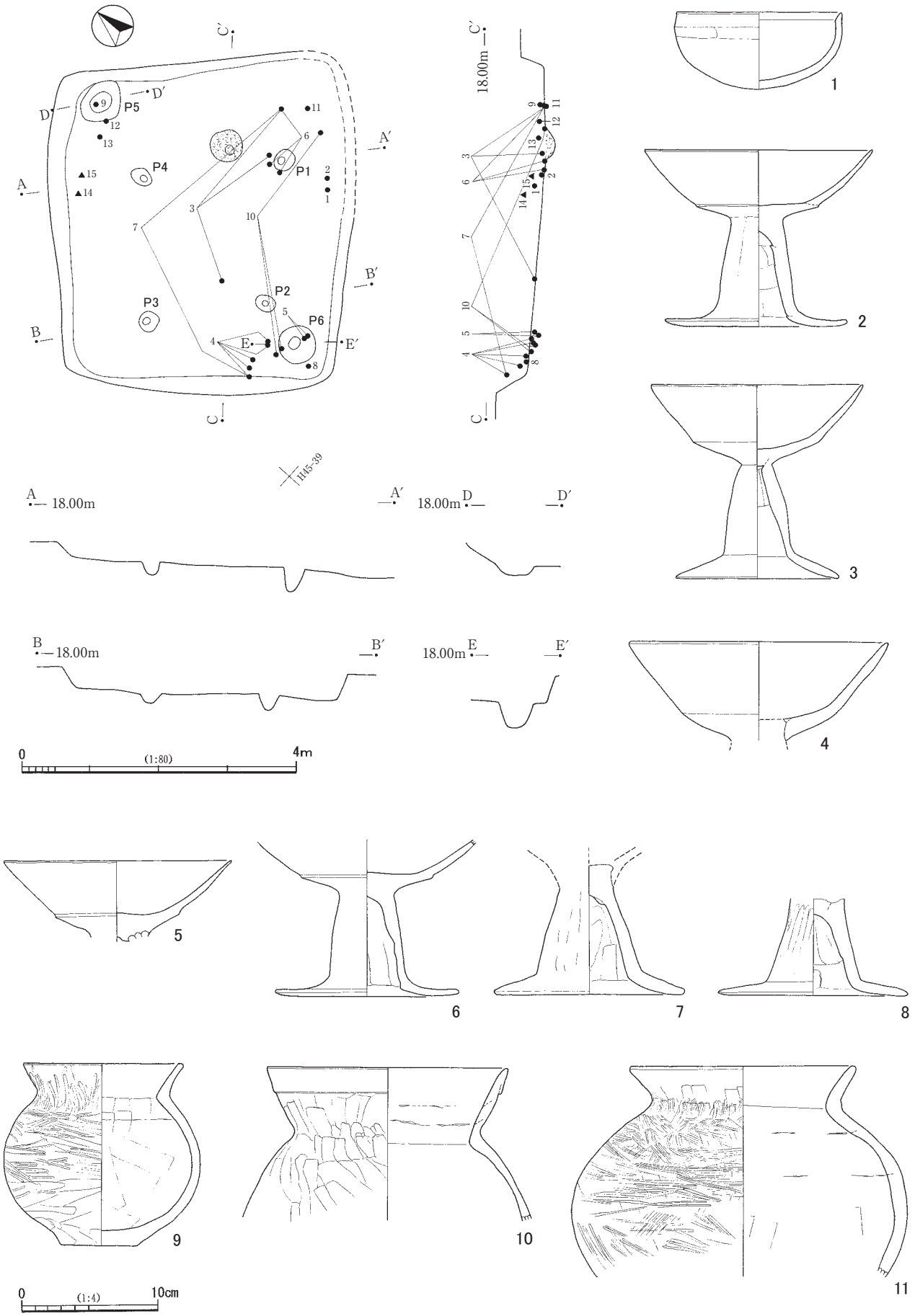
施設等　ピット６基と炉跡が検出された。P1～P4は規則的に配列され、主柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が32cm、P2が22cm、P3が15cm、P4が18cmで、いずれも小さく浅めである。南北のコーナーで検出された２つのピットは貯蔵穴と考えられる。深さは北貯蔵穴が20cm、南貯蔵穴が34cmを測る。炉跡は小さく、焼土が充満していた。

遺物出土状況　出土量は多かった。西コーナーを除いて各コーナーで遺物がまとまって出土している。出土遺物のほとんどは床面からの出土である。高坏が多いのはこの時期の特徴といえる。

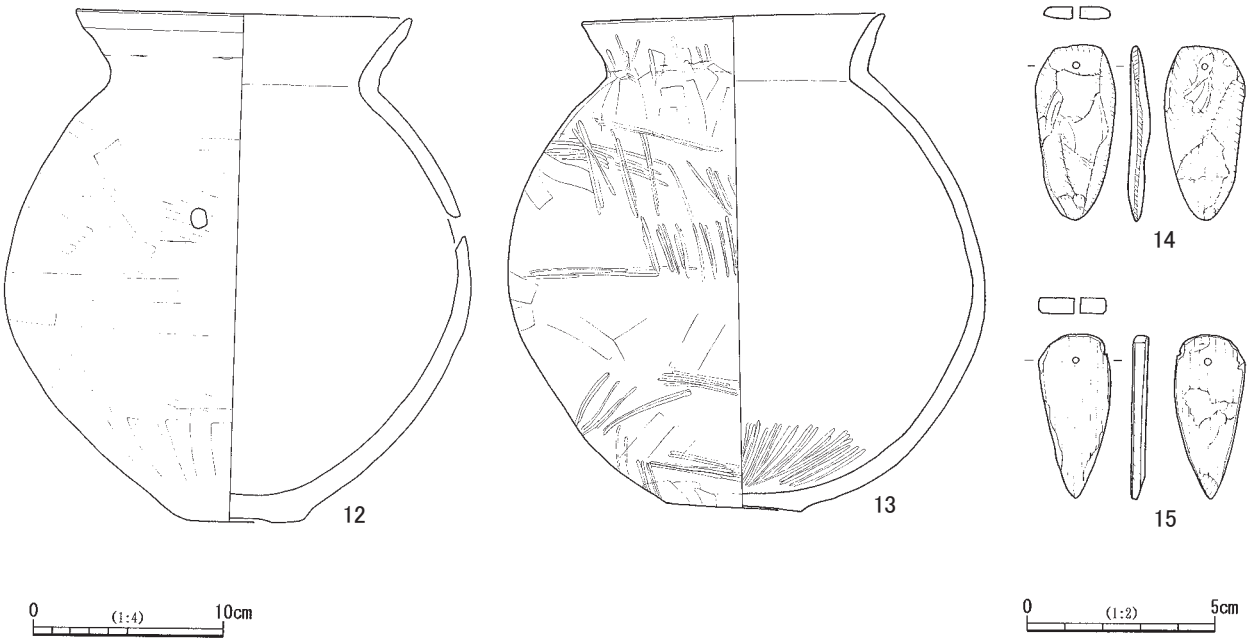
出土遺物　図示できた遺物は、土師器坏１点・高坏７点・甕５点、剣形石製模造品２点である。１は土師器坏である。体部内外面の摩滅が著しい。２～８は高坏である。総じて丁寧なヘラナデ調整が施される。７・８はヘラケズリ調整が残る。９～13は土師器甕で、９の小型の甕は体部外面にヘラケズリ調整後、ヘラミガキが施される。10は口縁部が折り返される。体部外面はヘラケズリ調整が施される。11は厚手の作りである。口縁部のヨコナデ、体部外面はハケ目調整を施した後ヘラケズリが僅かに施される。12は胎土に砂粒を多く含む。体部外面はナデ調整が施される。胴部中段に１か所、内面からの敲打による穿孔がある。13は口唇部にヨコナデが施され、体部外面にヘラケズリ後、ヘラミガキが施される。ヘラミガキは若干粗くヘラケズリ調整痕が残る。14・15は剣形石製模造品である。本遺跡から北側２kmの地点にある市野谷入台遺跡では集落の18軒から石製模造品が出土しており、このうちの４軒が工房跡とされている。本竪穴は５世紀中頃と考えられ、市野谷入台遺跡のⅢ期に相当する時期である。完成品しか出土していないことから、本竪穴が工房跡である可能性は低いだろう。



第31図　(11)SI013



第32図　(13)SI001(1)



第33図　(13)SI001(2)

第５章　奈良・平安時代の遺構と遺物

第１節　概要

８世紀から９世紀にかけての竪穴住居跡が43軒検出されている。遺物を伴い時期が決定できた竪穴住居跡は30軒、遺物が伴出しなかったため、時期を特定できない竪穴住居跡が10軒となっている。この10軒については、規模や施設、カマドの設置位置などから８世紀から９世紀代の竪穴住居跡と考えられる。

本時期の軒数は台地の大きさからすれば、少なくまばらな分布を示している。７世紀後葉の古墳時代後半から集落が継続的に営まれたと考えられる。地形的な集落の展開状況は、東西に長い台地の中央が最も標高の高い20m前後を示しており、その平らな部分に展開するグループと南緩斜面に展開するグループからなっている。わずかに数軒重複する竪穴住居跡もあるが、概ね、まばらな集落展開を示している。ただし、本来一遺跡と見なしてもよい西側に隣接する前平井遺跡でも同時期の集落が展開しており、さらに広い範囲で集落の展開状況を捉える必要があるだろう。

検出された竪穴住居跡は、総じて遺存状態はよくない。中世以降の開墾等の影響によるものと考えられる。竪穴の規模は、一辺が６ｍを越える大型の竪穴住居跡はほとんどなく、一辺４ｍ前後の小規模な竪穴住居跡が主体となっている。カマドは、概ね北側の壁に設置されている。時期的な変遷を詳しくみると、８世紀前半期の竪穴住居跡が14軒、８世紀後半期が最も多い15軒で、９世紀代は４軒と少なくなる。８世紀後半がピークとなり、９世紀に入ると集落は急速に規模を小さくしていくようである。以下、各竪穴住居跡について詳述する。

第２節　遺構

(4) SI001（第34図、図版６・22）

位置・形態　Ｌ42－13グリッドを主体に検出された。西側の大部分は床面に達する撹乱を受けている。平面の形態は方形を呈し、規模は大きく6.1ｍ×5.9mである。カマドは北壁やや東寄りにあり、主軸方位はＮ－22°－Ｗである。検出面から床面までの深さは北壁32cm、西壁22cm、南壁27cm、東壁45cmである。

覆土　暗褐色土を主体とし、２層に分かれる。下層にはロームブロックが混入する。

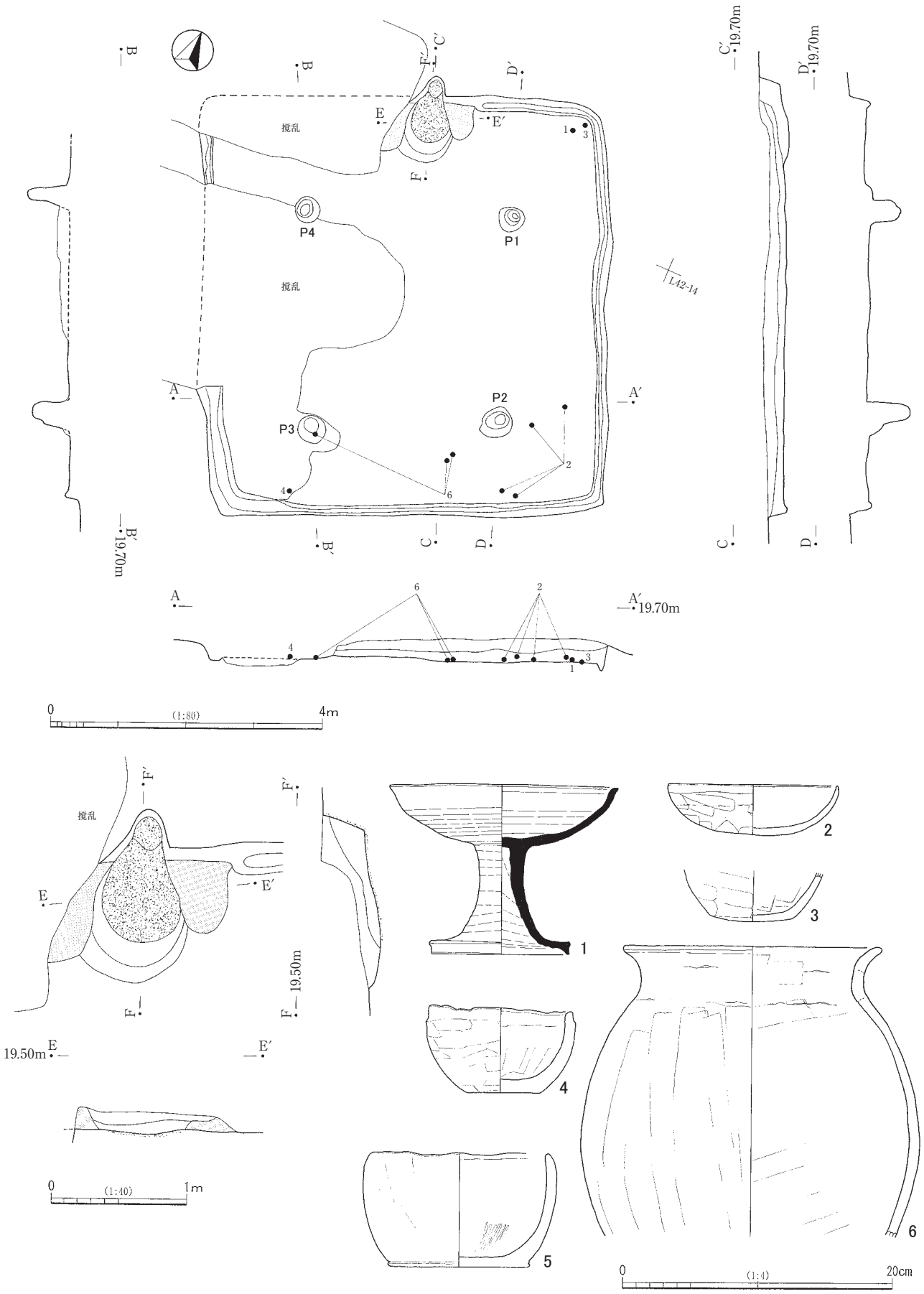
施設等　ピット４基と周溝、カマドが検出された。P1～P4は規則的に配列され、主柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が49cm、P2が22cm、P3が34cm、P4が50cmである。周溝は全周する。カマド内部の覆土には山砂が混入しており、天井部が崩落したと考えられる。また、西側の袖は撹乱を受けている。

遺物出土状況　出土量は少ない。南壁の近くでまとまっており、ほとんどが床面直上から出土している。

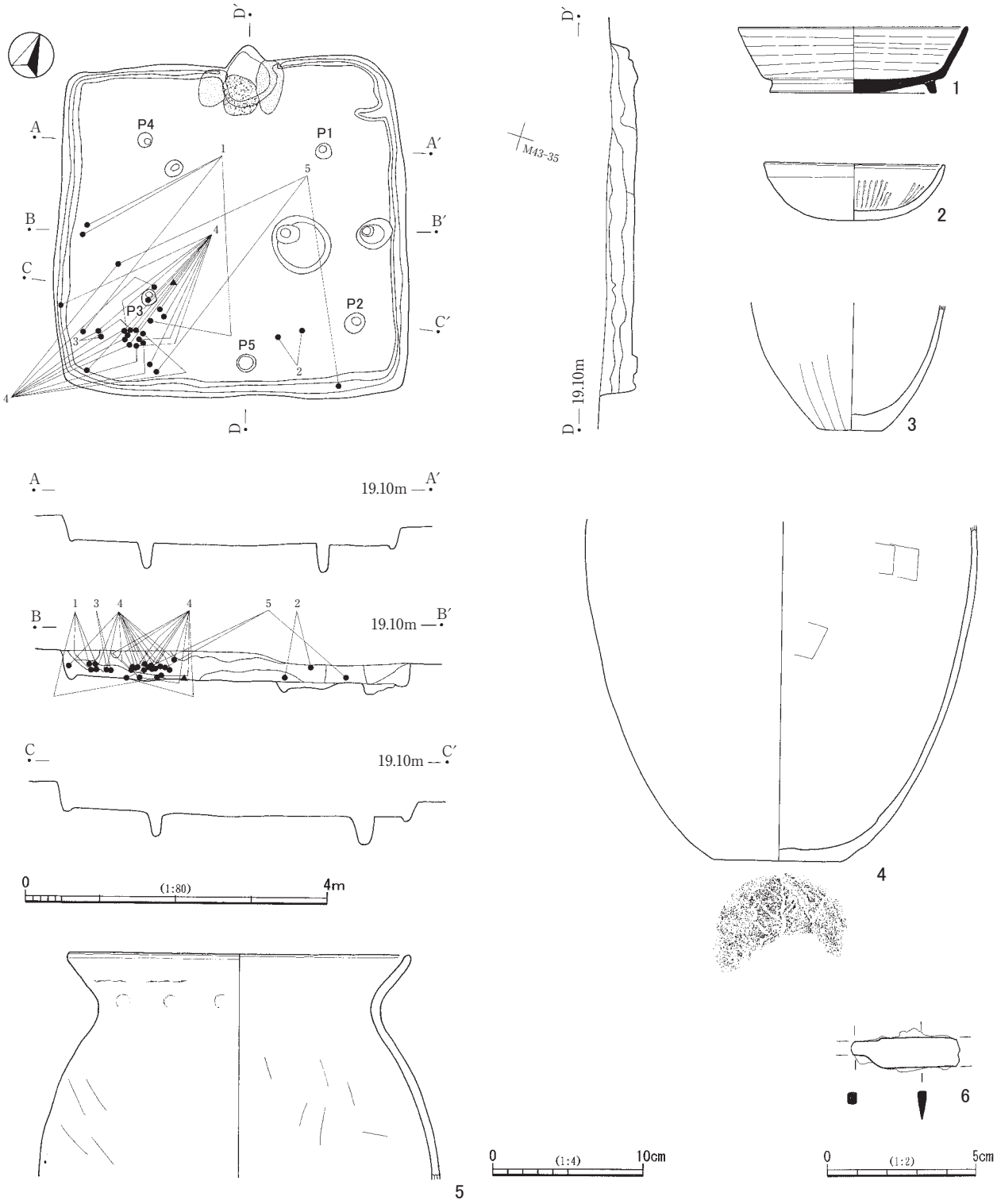
出土遺物　図示できた遺物は、須恵器高坏１点、土師器坏４点・甕１点である。１は湖西産須恵器の高坏である。２・３は土師器坏である。２点とも外面にヘラケズリが施される。４・５は深めの土師器坏である。４は器厚が厚く、外面に横方向のヘラケズリが施される。５は底部の径が大きく、特異な器形である。木葉痕が残っている。６は甕である。胴部外面に縦方向のヘラナデが施される。出土遺物から本竪穴は７世紀末～８世紀第１四半期と考えられる。

(4) SI002（第35図、図版６・22・31）

位置・形態　M43－34グリッドを主体に検出された。平面の形態は方形を呈し、規模は4.7m×4.4ｍである。


撹乱
撹乱
P1
P2
P3
P4
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
F
F′
L42-14
19.70m
19.50m
0
(1:80)
4m
(1:40)
1m
(1:4)
20cm
1
2
3
4
5
6

第34図　(4)SI001


D′
A
P4
P1
A′
B
B′
C
P3
P2
C′
P5
D
M43-35
19.10m
1
2
3
4
5
6
0
(1:80)
4m
(1:4)
10cm
(1:2)
5cm

第35図　(4)SI002

カマドは北壁にあり、主軸方位はＮ－18°－Ｗである。検出面から床面までの深さはやや深めで、北壁23cm、西壁33cm、南壁49cm、東壁31cmである。

覆土　大きく３層に分層された。上層は暗褐色土を主体とし、ローム粒と焼土粒が混入する。壁際の三角堆積土は黒褐色土を主体とする。下層は黄褐色土が主体となりロームブロックが多く混入する。

施設等　ピット５基と周溝、カマドが検出された。P1～P4は規則的に配列され、主柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が35cm、P2が34cm、P3が30cm、P4が34cmである。南壁付近のP5は深さが６cmで、入口の梯子ピットと考えられる。周溝は全周し、東壁の北側には間仕切り溝が確認されている。北壁のカマドは袖部の遺存があまりよくない。カマド内にもロームブロックが多く堆積していたことから、人為的な埋め戻しが行われた可能性がある。

遺物出土状況　出土量はあまり多くない。南西コーナーを主体に遺物が出土している。

出土遺物　図示できた遺物は、須恵器高台付坏１点・土師器坏１点・甕３点、鉄製刀子１点である。１は須恵器高台付坏である。２は土師器坏である。内面に暗文状の間隔の開いたヘラミガキが施されている。３・４・５は甕である。３は小型の甕で、外面には縦方向のヘラケズリが施される。４は胴部～底部にかけて遺存しており、底部には木葉痕が残る。５の外面はヘラナデが施され、頸部にヘラの痕跡が残る。６は刀子である。基部と刃部の半分を欠損している。

出土遺物から、本竪穴は８世紀第１四半期と考えられる。

(5) SI005（第36・37図、図版６・22・23・31）

位置・形態　Ｌ43－79グリッドを主体に検出された。平面の形態はやや東西に大きい長方形を呈し、規模は3.7ｍ×3.3ｍである。カマドは北壁にあり、主軸方位はＮ－４°－Ｗである。竪穴の遺存はよく、検出面から床面までの深さは、北壁40cm、西壁45cm、南壁36cm、東壁37cmである。

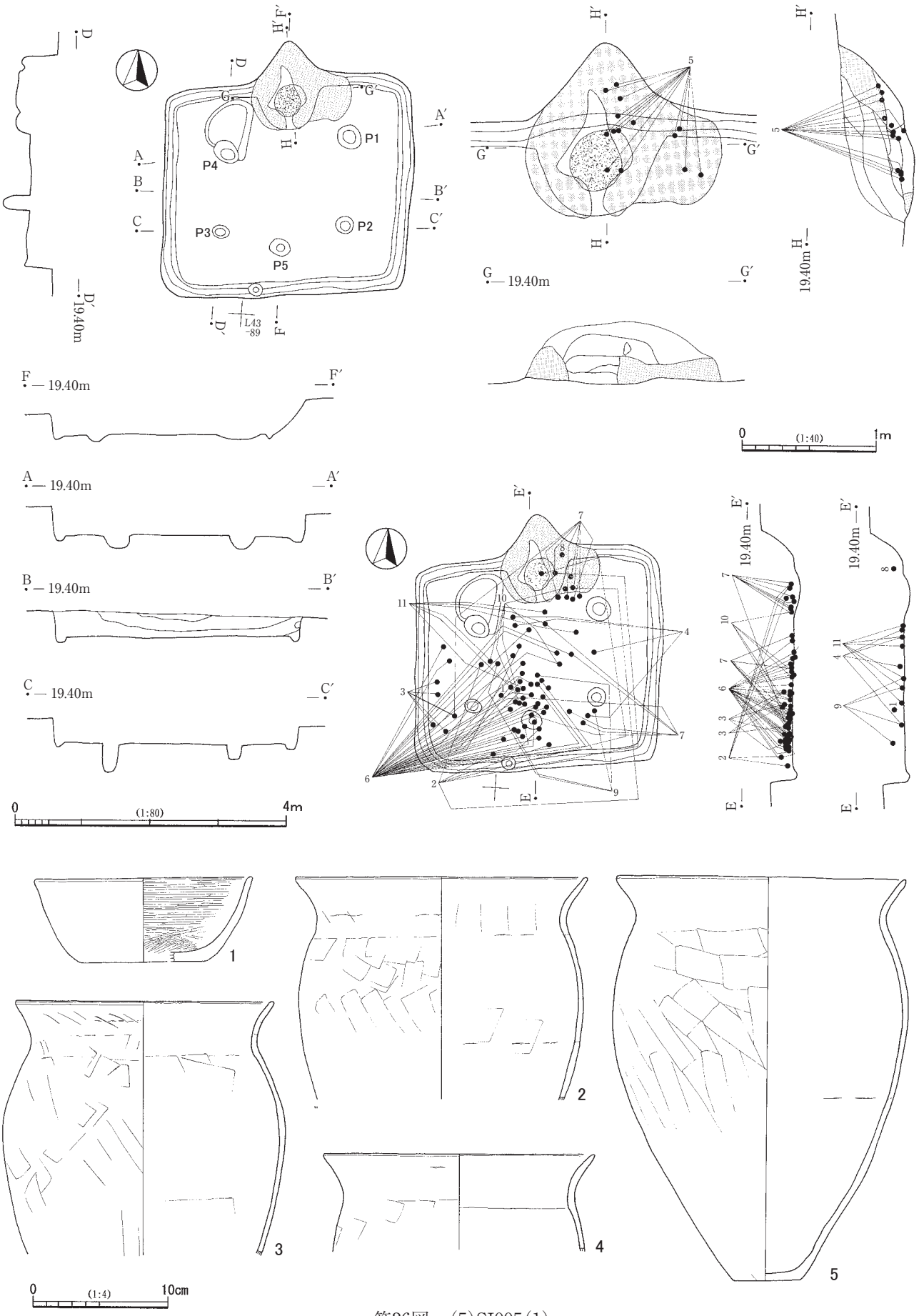
覆土　暗黒褐色土を主体とする。大きく３層に分かれ、上層はレンズ状に堆積する。覆土全体に焼土粒が混入する。上層ではカマドの構築材と考えられる山砂がブロック状に混入していた。

施設等　ピット５基と周溝、カマドが検出された。P1～P4は規則的に配置され、主柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が18cm、P2が22cm、P3が40cm、P4が26cmである。南壁近くのP5は深さ10cmの梯子ピットと考えられる。周溝は全周する。北壁のカマドは遺存状態が良好で、煙道まで構築材が残っていた。火床面はよく焼けており、焼土が厚く堆積していた。

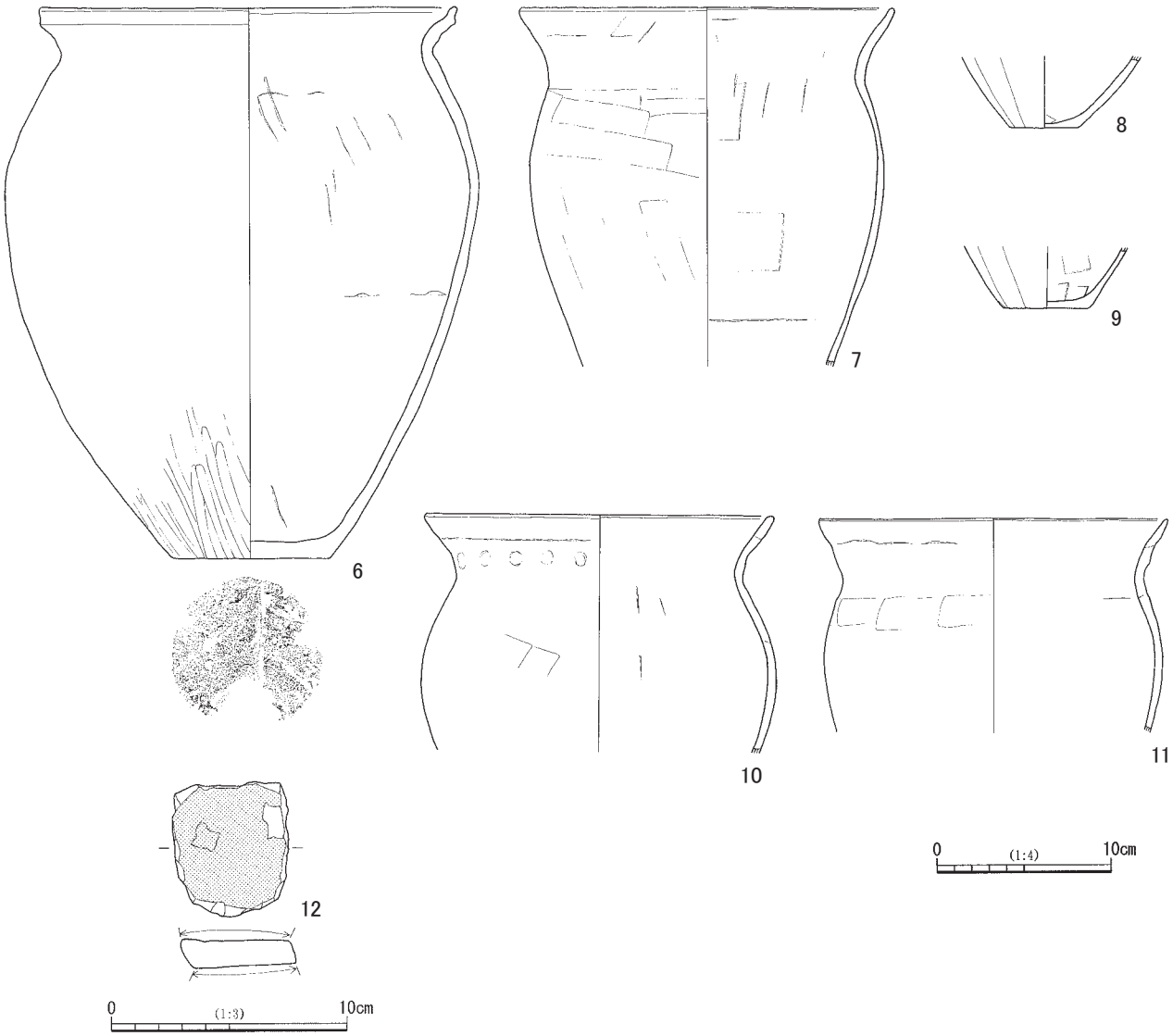
遺物出土状況　出土量は多く、中央やや南寄りの床面直上からまとまって出土した。カマドからは甕が１点出土している。甕の出土量が多いという特徴がある。

出土遺物　図示できた遺物は、土師器坏１点・甕８点・甑２点、砥石１点である。１は内面にヘラミガキが施される内黒処理された大型坏である。２～11は甕である。多くは在地産の甕であるが、他地域の資料が２点出土している。５は武蔵産の甕と考えられる。外面はヘラナデが施される。６は常陸産の甕と考えられる。胎土に金雲母及び砂粒を多く含み、胴下半部～底部にかけてヘラミガキが施される。また、底部には木葉痕が残る。10は頸部に指による押さえの痕跡が残る。また、その頸部には輪積み痕を若干残している。12の砥石は、粗めの砂岩製で、表裏を使用している。縁辺を打ち欠いて整形している。この他に図示しなかったが、覆土内からスラグ1.05kgが出土している。竪穴の撹乱が顕著であることから、中世以降のスラグの可能性もある。

出土遺物から、本竪穴は９世紀第１四半期と考えられる。



第36図　(5)SI005(1)



第37図　(5)SI005(2)

(5)SI006(第38図、図版６・23)

位置・形態　L44－28グリッドを主体に検出された。南側の大部分が溝状遺構によって撹乱されており、全体に遺存状況はよくない。平面の形態は方形を呈すると考えられる。規模は遺存する東西方向で3.3mを測る。カマドは南東コーナーの近くにある。主軸方位はN－80°－Eである。検出面から床面までの深さは浅く、北壁17cmである。

覆土　黒色土を主体とし２層に分かれる。全体的に硬くしまり、下層にはハードローム塊が混入する。

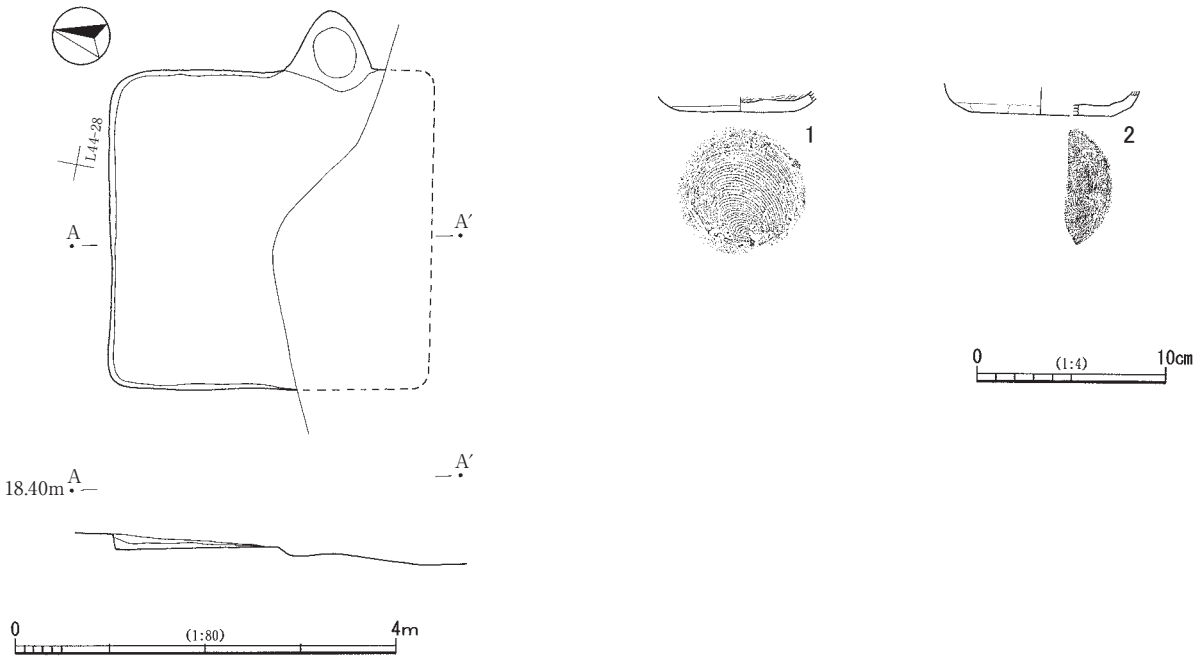
施設等　東壁にカマドが確認できたが遺存状態が極めて悪い。火床部と考えられる面が僅かに凹む。

遺物出土状況　出土量は少ない。撹乱の影響もあり、北側に限られている。

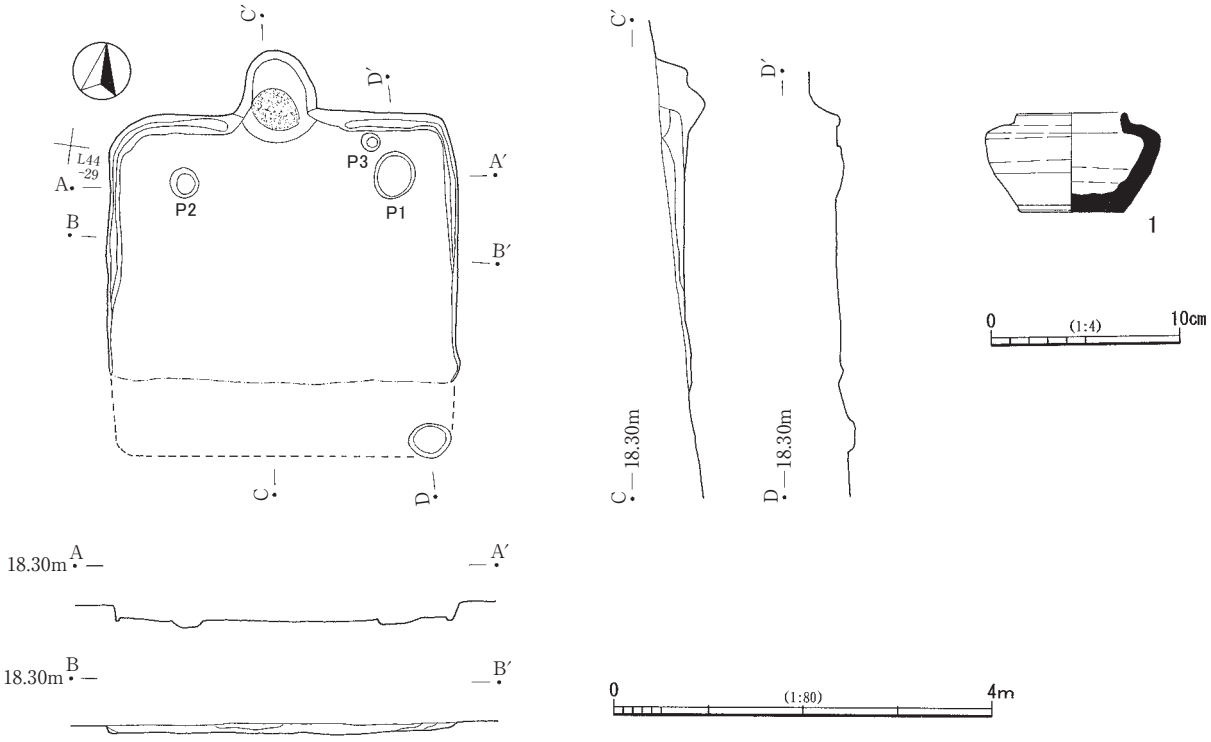
出土遺物　図示できた遺物は、土師器坏２点である。１は内面にヘラミガキが施される。２は底部付近にヘラケズリが施される。２点とも底部は、回転糸切りである。出土遺物から本竪穴９世紀第３～第４四半期と考えられる。

(5)SI007(第39図、図版６・23)

位置・形態　L44－29グリッドを主体に検出された。南側約４分の１は撹乱を受け、失われている。平面



第38図　(5)SI006



第39図　(5)SI007

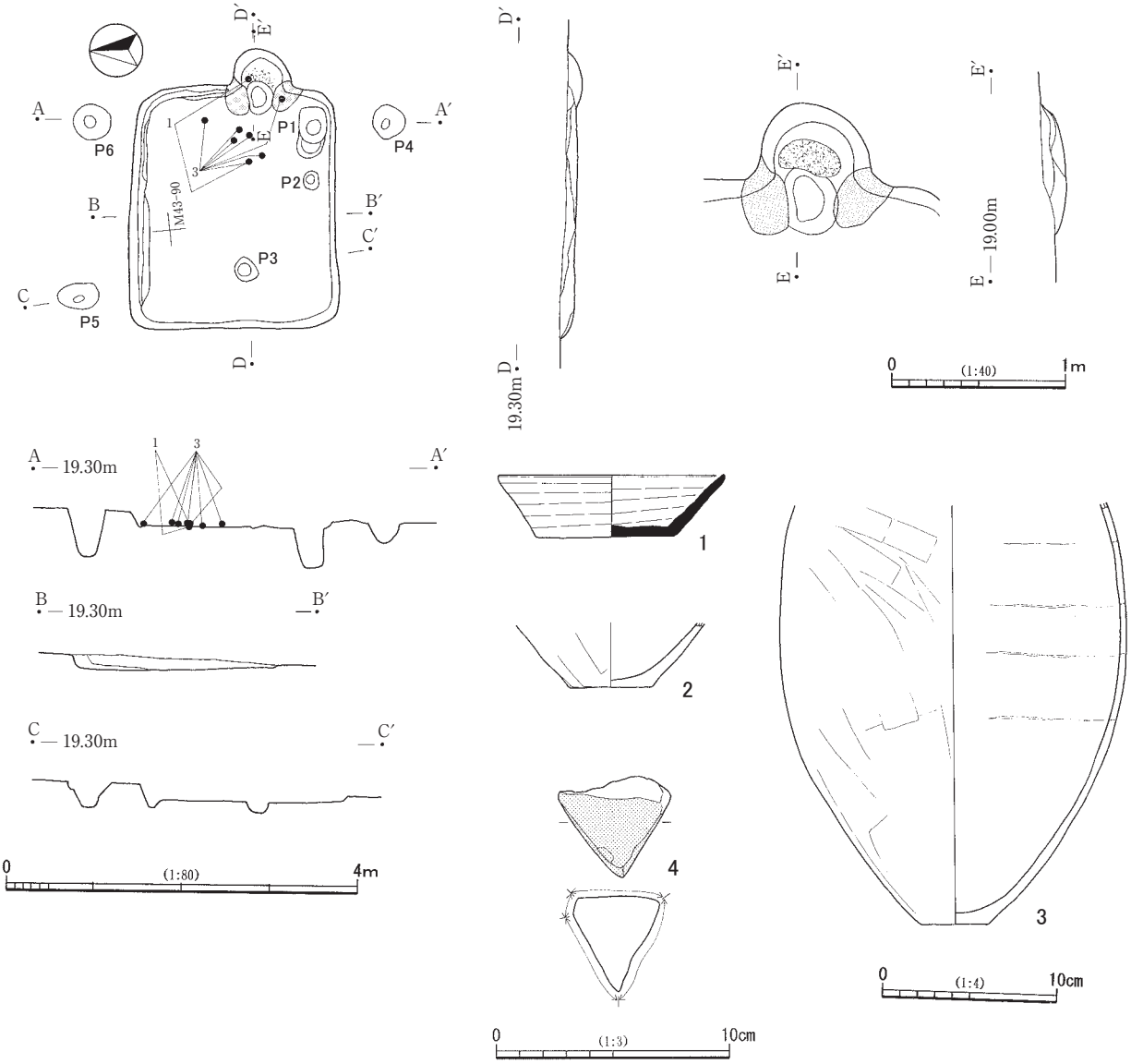
の形態は方形を呈すると考えられる。規模は遺存する東西方向で3.7mを測る。カマドは北壁にあり、主軸方位はN－18°－Wである。検出面から床面までの深さは北壁28cm、西壁16cm、東壁16cmである。

覆土　大きく２層に分かれ、上層は黒色土、下層は暗黒褐色土からなっている。ローム粒が少量混入する。また、カマド近くでは焼土粒が少量混入する。

施設等　ピット３基と周溝、カマドが検出された。P1・P2は浅すぎるため、柱穴の可能性は低い。床面からの深さは、P1が６cm、P2が６cmである。北壁付近のP3は性格が不明である。周溝はカマドを除く北壁と東西の壁に巡り、本来全周していたものと考えられる。北壁のカマドは煙道部が大きく突出する。袖部のカマド構築材はほとんど失われている。火床面はよく焼けており、焼土が厚く堆積していた。

遺物出土状況　出土量は微量である。

出土遺物　図示できた遺物は、須恵器短頸壺１点である。常陸産と考えられる。外面胴部下半は回転ヘラケズリが施される。出土遺物から、本竪穴は８世紀第４四半期～９世紀第１四半期と考えられる。



第40図　(5)SI008

(5) SI008（第40図、図版７・23・31）

位置・形態　M43－90グリッドを主体に検出された。平面の形態は長方形を呈し、規模は小さく2.8m×2.4mである。カマドは東壁やや南寄りにあり、主軸方位はN－95°－Eである。検出面から床面までの深さは浅く、北壁20cm、西壁16cm、南壁３cm、東壁13cmである。

覆土　黒色土を主体とし、壁際ではローム粒が混入する。

施設等　ピット６基と周溝、カマドが検出された。竪穴の外縁にもピットが検出されており、関連施設の可能性がある。竪穴内のピットは、規則性がなく、浅いものについては柱穴の可能性は低いと考えられる。P1は床面からの深さが46cmあることから、貯蔵穴と推測される。P2は深さ23cm、P3は深さ12cmである。P3は入口の梯子ピットの可能性がある。周溝は北壁の西端から東壁のカマドまでの一部である。カマドの煙道部の突出は大きく、袖部はほとんど残存していない。火床面はよく焼けており、焼土が厚く堆積していた。

遺物出土状況　出土量は少なかった。カマド周辺部の床面直上にまとまって出土している。

出土遺物　図示できた遺物は、須恵器坏１点、土師器甕２点、砥石１点である。１は新治産の須恵器坏と考えられる。底部はヘラ切り後にヘラケズリが施される。３は武蔵産の土師器甕である。体部外面にヘラケズリが施される。４は多面が使用された砥石である。出土遺物から、本竪穴は８世紀第３四半期と考えられる。

(5) SI009（第41図、図版７・23）

位置・形態　M44－15グリッドを主体に検出された。南側の壁は失われている。平面の形態は方形を呈すると考えられる。規模は遺存する東西方向で、4.4mを測る。カマドは北壁にあり、主軸方位はN－４°－Eである。検出面から床面までの深さは、北壁 30cm、西壁 18cm、東壁 19cmである。

覆土　黒褐色土を主体とし焼土粒が僅かに混入する。

施設等　ピット４基と周溝、カマドが検出された。P1～P4 は規則的に配置されており、主柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が48cm、P2が37cm、P3が52cm、P4が34cmである。周溝は全周していたと推測される。北壁のカマドの遺存は悪く、袖部の構築材はほとんど残存していない。

遺物出土状況　出土量は少ない。カマド付近に限られている。

出土遺物　図示できた遺物は、土師器坏１点・甕１点である。１は土師器坏である。体部外面にヘラケズリ調整が施される。２は土師器甕である。体部表面にはヘラケズリ調整が施される。頸部には輪積痕が僅かに見られる。出土遺物から、本竪穴は８世紀第１～第２四半期と考えられる。

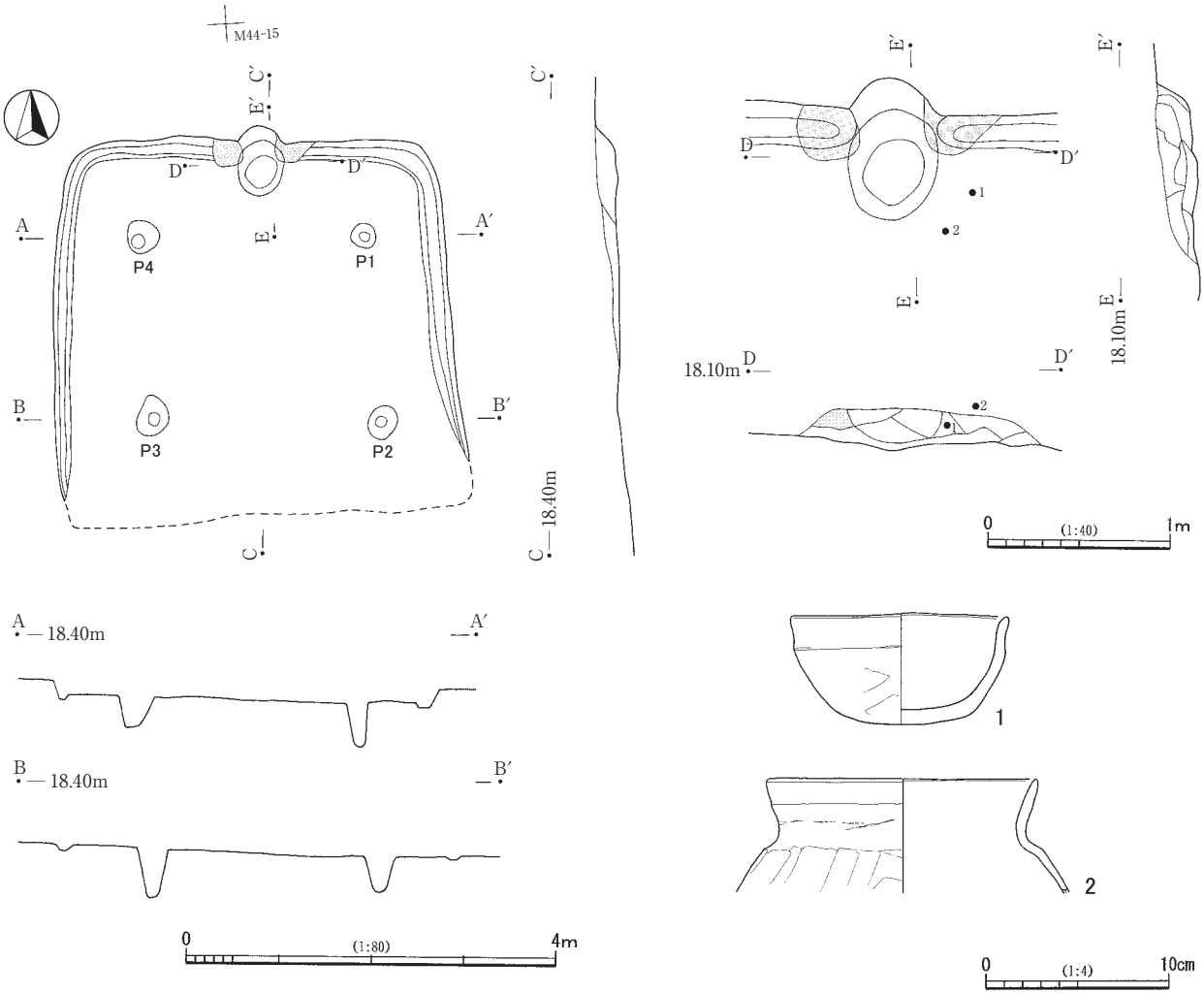
(5) SI010（第42図・図版７・23）

位置・形態　L43－88グリッドを主体に検出された。北側の約半分が中・近世の溝状遺構によって撹乱されている。平面の形態は方形を呈すると考えられる。規模は遺存する東西方向で3.1mを測る。カマドは北壁の東寄りにあり、主軸方位はN－19°－Wである。検出面から床面までの深さは、南壁21cmである。

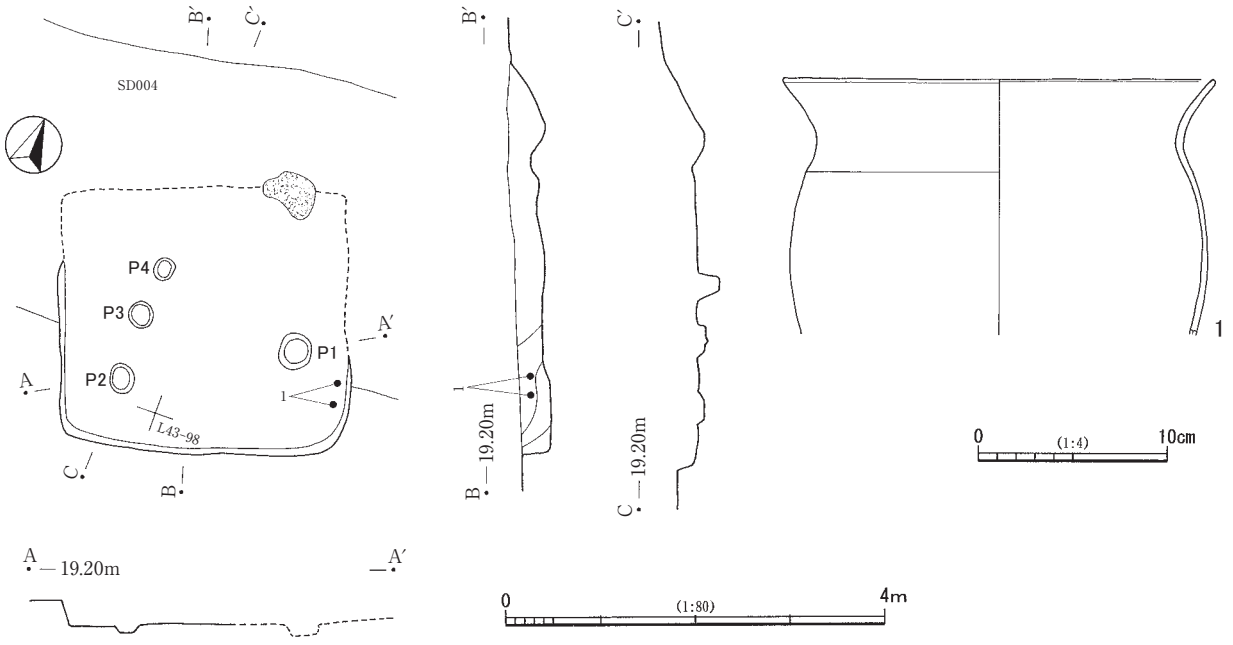
覆土　暗褐色土を主体とし、ロームの混入量が多い。焼土が少量混入する。

施設等　ピット４基と周溝、カマドが検出された。いずれのピットも浅く、床面からの深さはP1が９cm、P2が６cm、P3が８cm、P4が23cmで、柱穴の可能性は低い。カマドは北壁ないしは北東コーナーに位置していたものと推測される。火床部がかろうじて確認できた。

遺物出土状況　出土量は撹乱の影響もあり、微量である。



第41図　(5)SI009



第42図　(5)SI010

出土遺物　図示できた遺物は、土師器甕１点である。武蔵産と考えられる。器面の摩滅が顕著であるが、体部表面にはヘラケズリが施され、上部は横方向、下部は縦方向に施されている。出土遺物から、本竪穴は８世紀第３～第４四半期と考えられる。

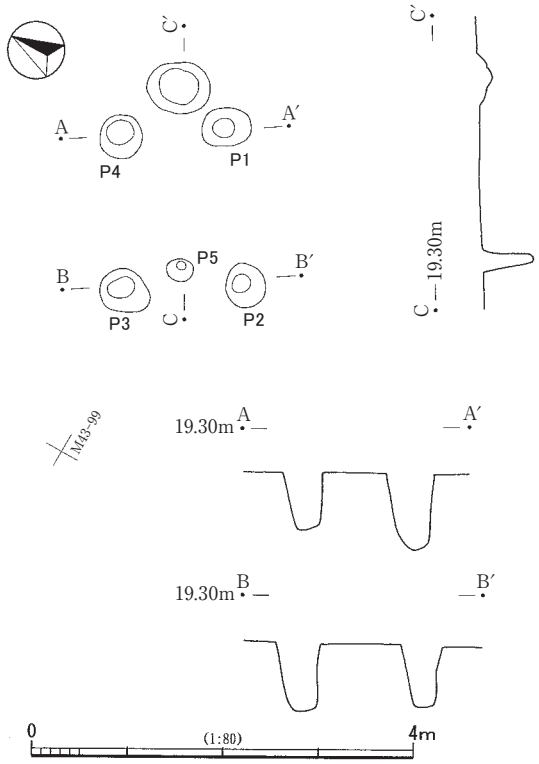
(5)SI011（第43図）

位置・形態　M43－89グリッドを主体に検出された。竪穴の掘り込みは失われており、柱穴などが確認されたにとどまる。一辺３ｍ以内の小規模な竪穴と考えられる。カマドは北東部と考えられる。主軸方位はＮ－60°－Ｅである。

覆土　削平されており、覆土は失われている。

施設等　ピット５基とカマドの痕跡が検出された。P1～P4は規則的に配列され、主柱穴と考えられる。検出面からの深さはP1が75cm、P2が66cm、P3が50cm、P4が42cmである。P5は深さ53cmある。入口の梯子ピットの可能性がある。カマドの痕跡とみられるピットからは焼土は検出されていない。

出土遺物がないことから時期は不明だが、柱穴がしっかり配置されているほか、隣接する竪穴住居群のあり方から８世紀代の竪穴の可能性が高いと考えられる。



第43図　(5)SI011

(5)SI012（第44図、図版７・23）

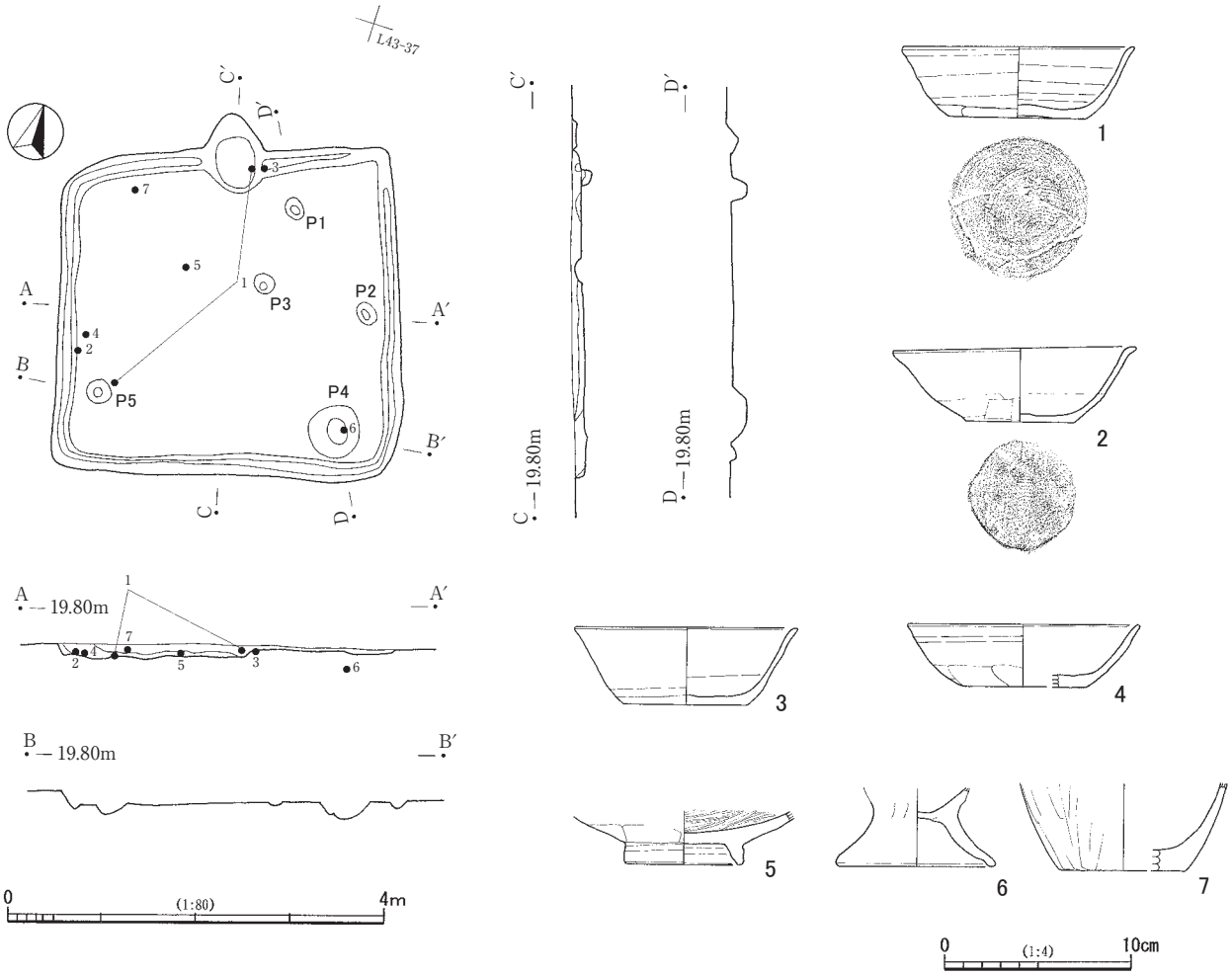
位置・形態　Ｌ43－36グリッドを主体に検出された。平面の形態はやや歪んだ方形を呈し、規模は3.7ｍ×3.6ｍである。カマドは北壁にあり、主軸方位はＮ－16°－Ｗである。検出面から床面までの深さは浅く、北壁９cm、西壁16cm、南壁８cm、東壁８cmである。

覆土　黒褐色土を主体とし、大きく上下２層に分かれる。上層は焼土粒が僅かに混入する。壁際ではロームブロックが少量混入する。

施設等　ピット５基と周溝、カマドが検出された。ピットはいずれも定型的な柱穴の配置とは異なることや浅いことなどから、柱穴と考えるのは難しい。床面からの深さはP1が18cm、P2が６cm、P3が11cm、P4が18cm、P5が12cmである。P4はいわゆる貯蔵穴かもしれない。周溝はほぼ全周する。北壁のカマドは遺存状態が悪く、カマドの構築材はほとんど残存していない。火床面は若干の焼土が堆積していた。

遺物出土状況　出土量はあまり多くない。床面から出土しているものが主である。

出土遺物　図示できた遺物は、土師器坏４点・高台付皿１点・台付甕１点・甕１点である。１～４は土師器坏である。１はロクロ成形の坏である。底部は回転糸切り後、回転ヘラケズリを施している。２の底部は回転糸切り後、周縁に手持ちヘラケズリを施す。３は回転糸切り後、全面に手持ちヘラケズリを施す。５は土師器高台付皿である。内黒でヘラミガキが施される。６は小型の土師器台付甕か。１・３のような８世紀後半～９世紀初頭の遺物も含まれるが、２・４・５などは９世紀第３四半期の遺物であることから、本竪穴の時期は、９世紀後半と考えられる。



第44図　(5)SI012

(9)SI001（第45図、図版７・23・31）

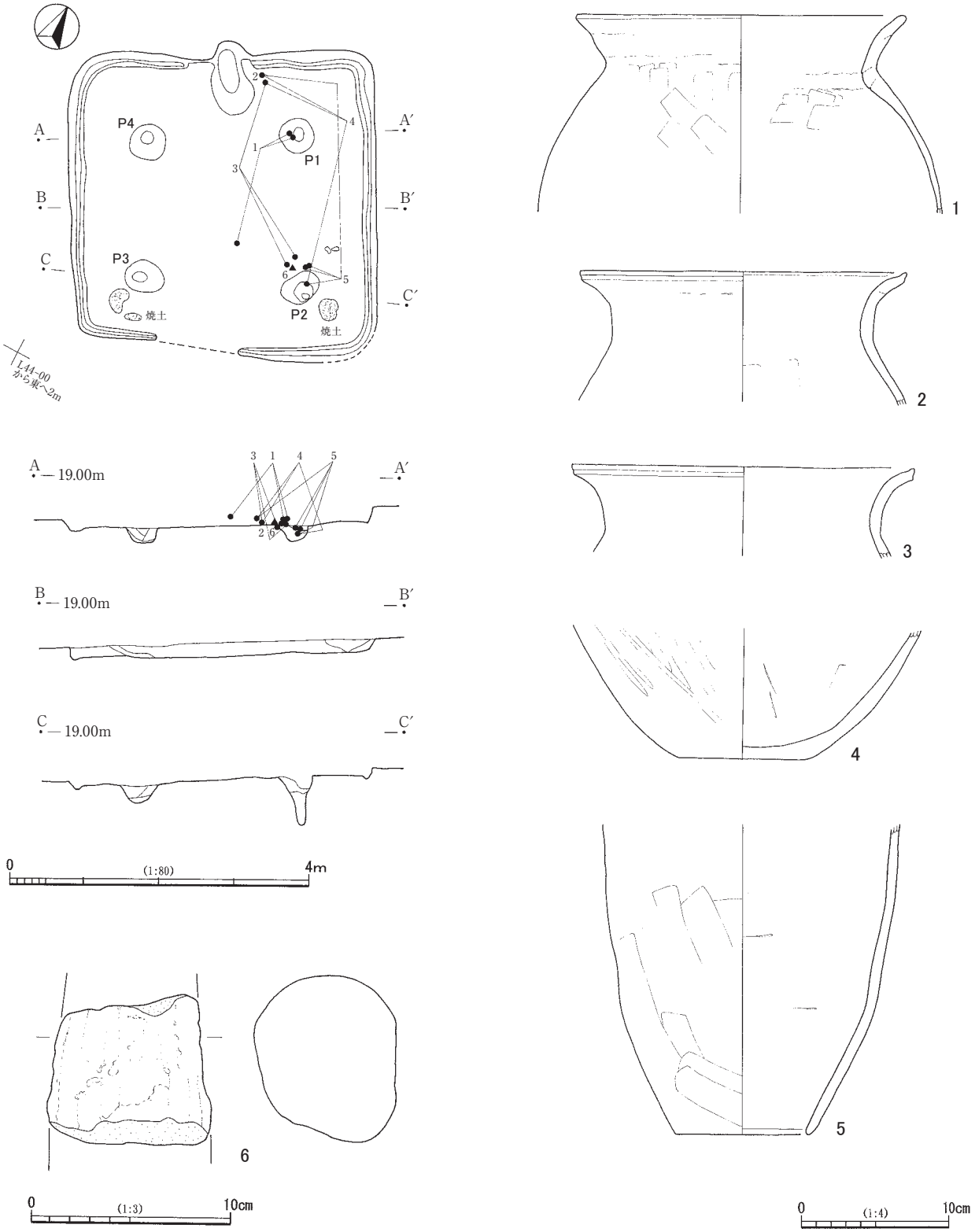
位置・形態　L43－90グリッドを主体に検出された。平面の形態はやや歪んだ方形を呈し、規模は4.2m×4.1mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はN－27°－Wである。検出面から床面までの深さは、北壁21cm、西壁14cm、東壁16cmである。南壁はほぼ失われている。

覆土　暗褐色土を主体とし少量の焼土が混入する。

施設等　ピット４基と周溝、カマドが検出された。P1～P4は主柱穴と考えられ、床面からの深さはP1が26cm、P2が62cm、P3が25cm、P4が25cmである。周溝は全周していたと考えられる。カマドの構築材はほとんど残存していない。

遺物出土状況　出土量は多くない。P2付近の床面近くに集中して出土している。甑や支脚もこの集中地点に含まれている。

出土遺物　図示できた遺物は、土師器甕４点・甑１点、支脚１点である。１～４は土師器甕である。１は体部外面にヘラケズリ調整が施される。２～４は胎土に雲母や砂粒を多く含んでおり、常陸産の甕と考えられる。４は胴下半部にヘラミガキ調整が施される。５の甑は胴部径がやや小さく、長胴な感じである。６の支脚は先端と基部を欠損している。出土遺物から、本竪穴は８世紀第３～第４四半期と考えられる。


P1
P2
P3
P4
焼土
焼土
A
A′
B
B′
C
C′
19.00m
19.00m
19.00m
0
(1:80)
4m
0
(1:3)
10cm
0
(1:4)
10cm
1
2
3
4
5
6

第45図　(9)SI001

(9) SI002（第46・47図、図版７・24・31）

位置・形態　L43－82グリッドを主体に検出された大型の竪穴である。東西に走る中・近世の溝によって撹乱を受けている。平面の形態はやや歪んだ方形を呈し、規模は7.4m×7.2mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はN－7°－Eである。検出面から床面までの深さは他の竪穴と比べて深く、北壁52cm、西壁46cm、南壁22cm、東壁33cmである。

覆土　色調によって大きく上下に分かれる。下層は黒褐色土を主体とし、混入物がほとんどない。上層は明褐色土を主体とし、少量の焼土が混入する。

施設等　ピット６基と周溝、カマドが検出された。P1～P4は規則的に配列され主柱穴と考えられ、総じて深かった。床面からの深さはP1が75cm、P2が91cm、P3が78cm、P4が101cmである。南壁近くのP5は深さ54cmあり、入口の梯子ピットと考えられる。北東コーナーのP6は深さ22cmある。小規模だが貯蔵穴と考えられる。周溝は撹乱を受けているが全周していると考えられる。カマドは遺存状態がよく、ほぼ全形を残している。火床面はよく焼けており、焼土が厚く堆積していた。

遺物出土状況　出土量は多かった。カマドの東側に遺物が集中して出土している。また、出土層位が大きく２つに分かれる。須恵器類は床面からの出土量が多く、土師器類は覆土中位から多く出土している。

出土遺物　図示できた遺物は、須恵器蓋３点・高台付坏４点・小型坏２点・長頸壺１点、土師器高台付坏１点・坏１点・甕５点・甑１点、土玉１点、支脚１点、鉄製品１点である。１は胎土に白色の砂粒を多く含む須恵器蓋で、新治産と考えられる。２・３は湖西産の須恵器蓋と考えられる。蓋の上面には自然釉がかかる。４～７は湖西産の須恵器高台付坏である。７は内面に自然釉がかかる。８・９の小型の須恵器坏は胎土に白色の砂粒を多く含み、新治産と考えられる。８は底部に人為的な穿孔が施されている。10は湖西産と考えられる丸底の須恵器長頸壺である。頸部に自然釉がかかっている。11は土師器高台付坏である。内外面に赤彩が施され、口縁部内面に２段の矢羽根状の暗文が施されている。畿内系の土器を在地で製作したものと思われ、平城京２期に相当すると考えられる。12は土師器坏である。器面が著しく摩滅している。13～17は土師器甕である。13・17は胎土に雲母及び砂粒を多く含み常陸産と考えられる。17は表面にヘラミガキ調整が施される。18は土師器甑である。体部表面にはヘラケズリ調整が施されている。19の土玉は、貫通孔を伴わない。20は支脚の頭部である。21の鉄製品は、閂（かんぬき）の通し金と思われる。出土遺物から、本竪穴は８世紀第２～第３四半期と考えられる。

(9) SI003（第48図、図版７・24・25）

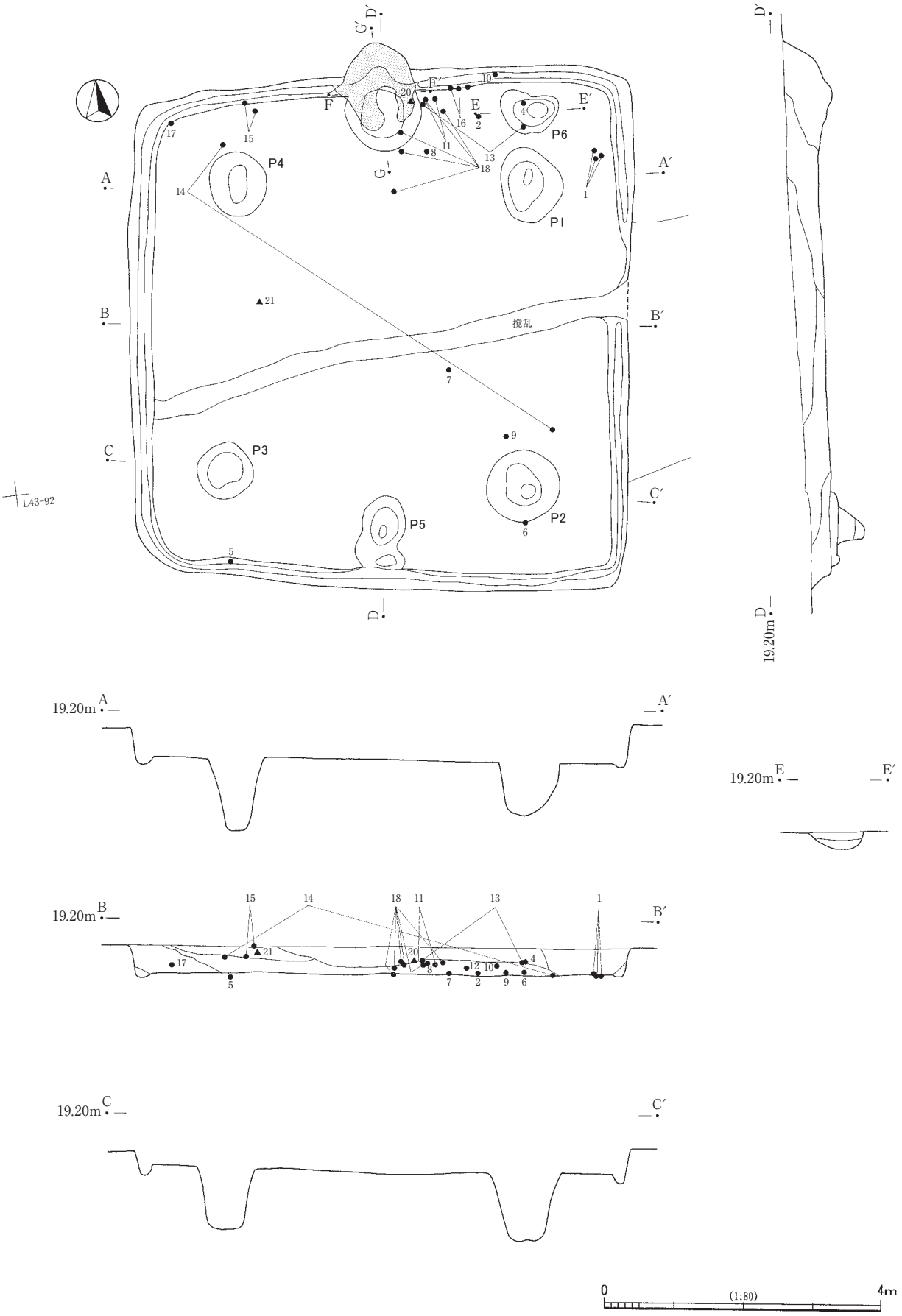
位置・形態　L43－53グリッドを主体に検出された。平面の形態は方形を呈し、規模は3.0m×2.9mで小規模である。カマドは北壁のやや東寄りに位置し、主軸方位はN－9°－Wである。検出面から床面までの深さは、北壁23cm、西壁22cm、南壁22cm、東壁30cmである。

覆土　暗褐色土を主体とし、混入物は少ない。

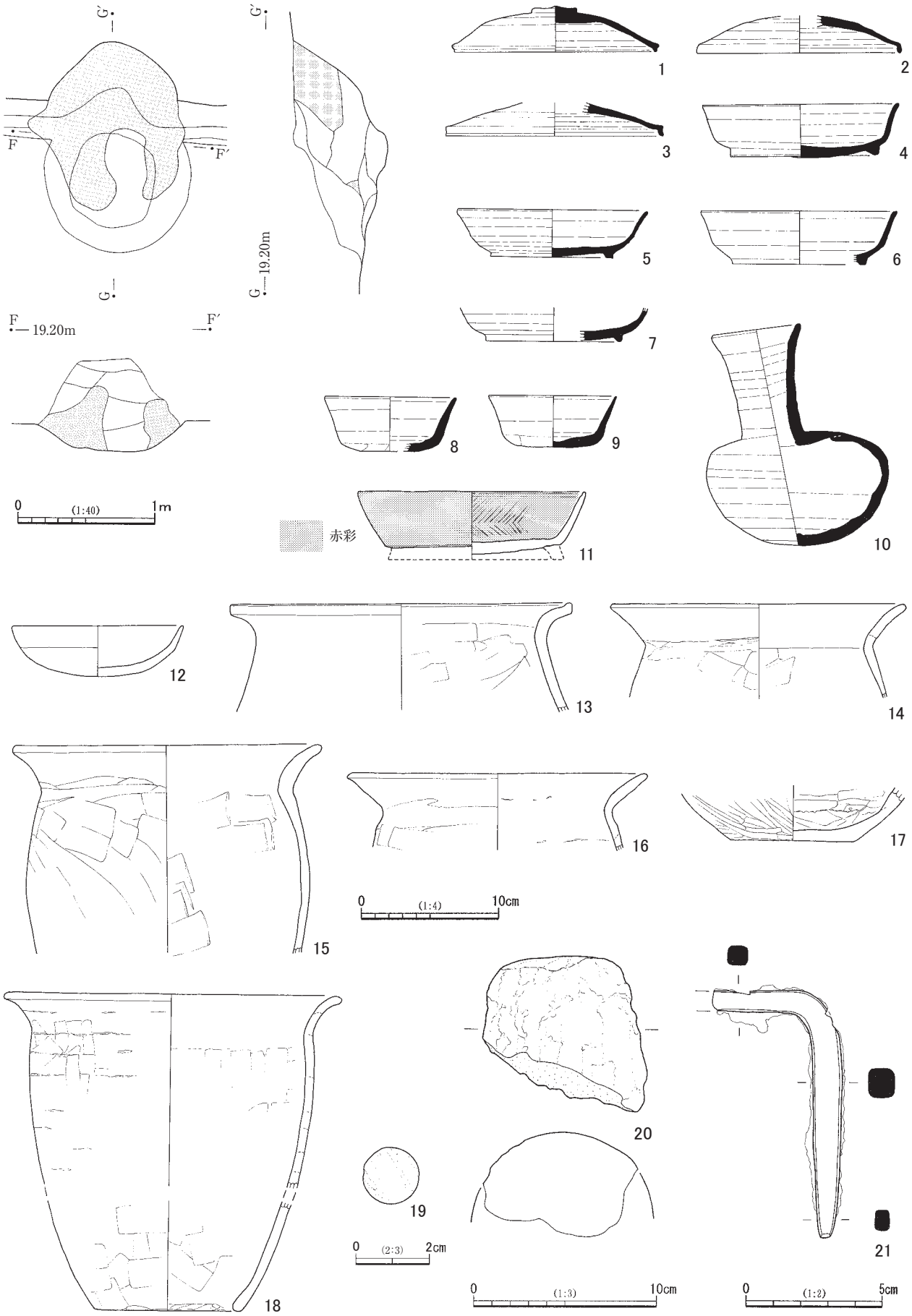
施設等　ピット５基が検出された。P1～P4は各コーナー寄りで検出されている。やや浅いが主柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が５cm、P2が53cm、P3が９cm、P4が８cmである。南壁近くのP5は深さ21cmあり、入口の梯子ピットと考えられる。周溝は部分的に途切れている。カマドの遺存状況は悪く、辛うじて袖部の構築材が残存していた。床面は中央部から北西方向にかけて硬化面が確認された。

遺物出土状況　出土量はあまり多くない。概ね北側から出土している。

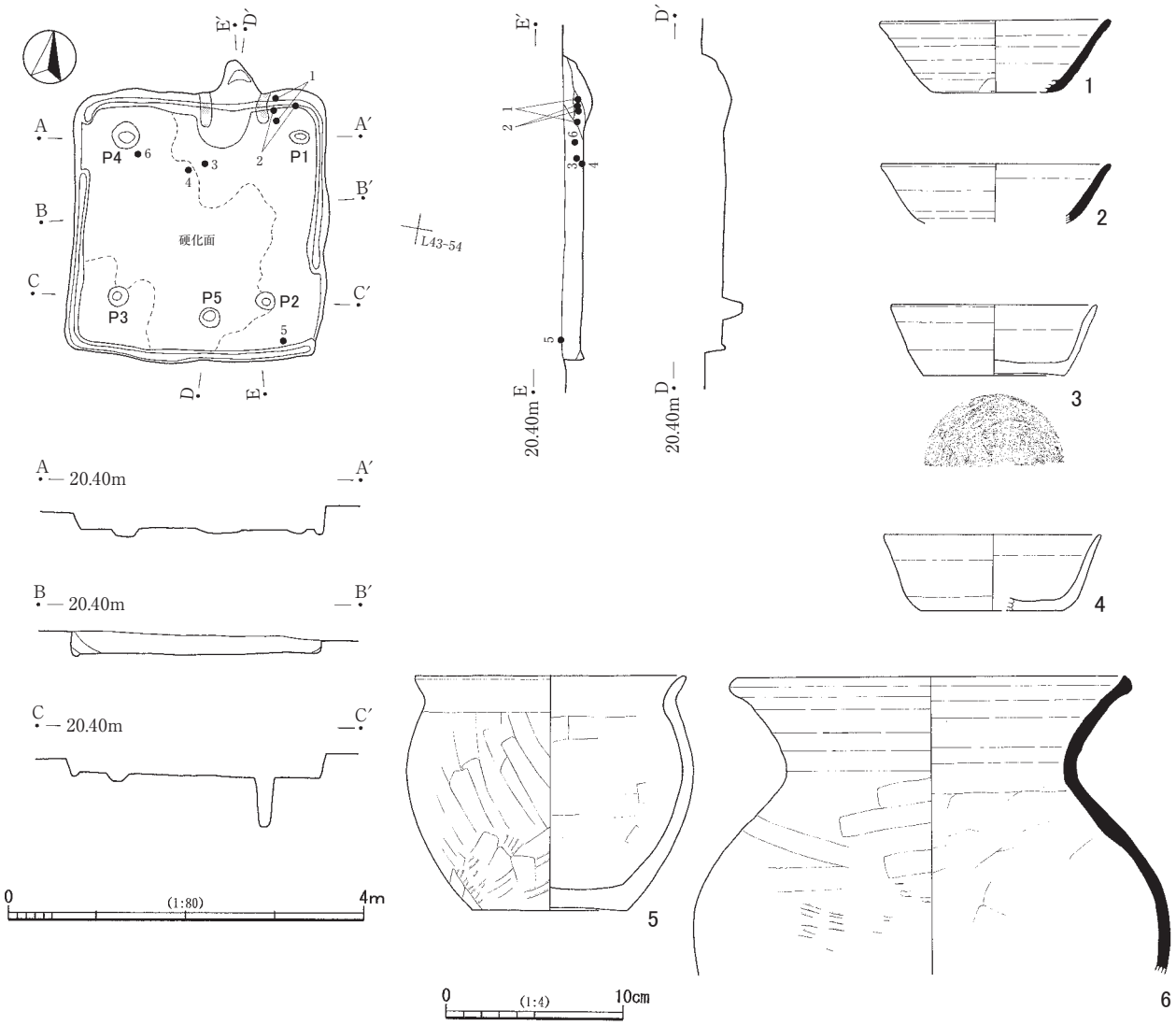
出土遺物　図示できた遺物は、須恵器坏２点・甕１点、土師器坏２点・甕１点である。１・２は須恵器坏、



第46図　(9)SI002(1)



第47図　(9)SI002(2)



第48図　(9)SI003

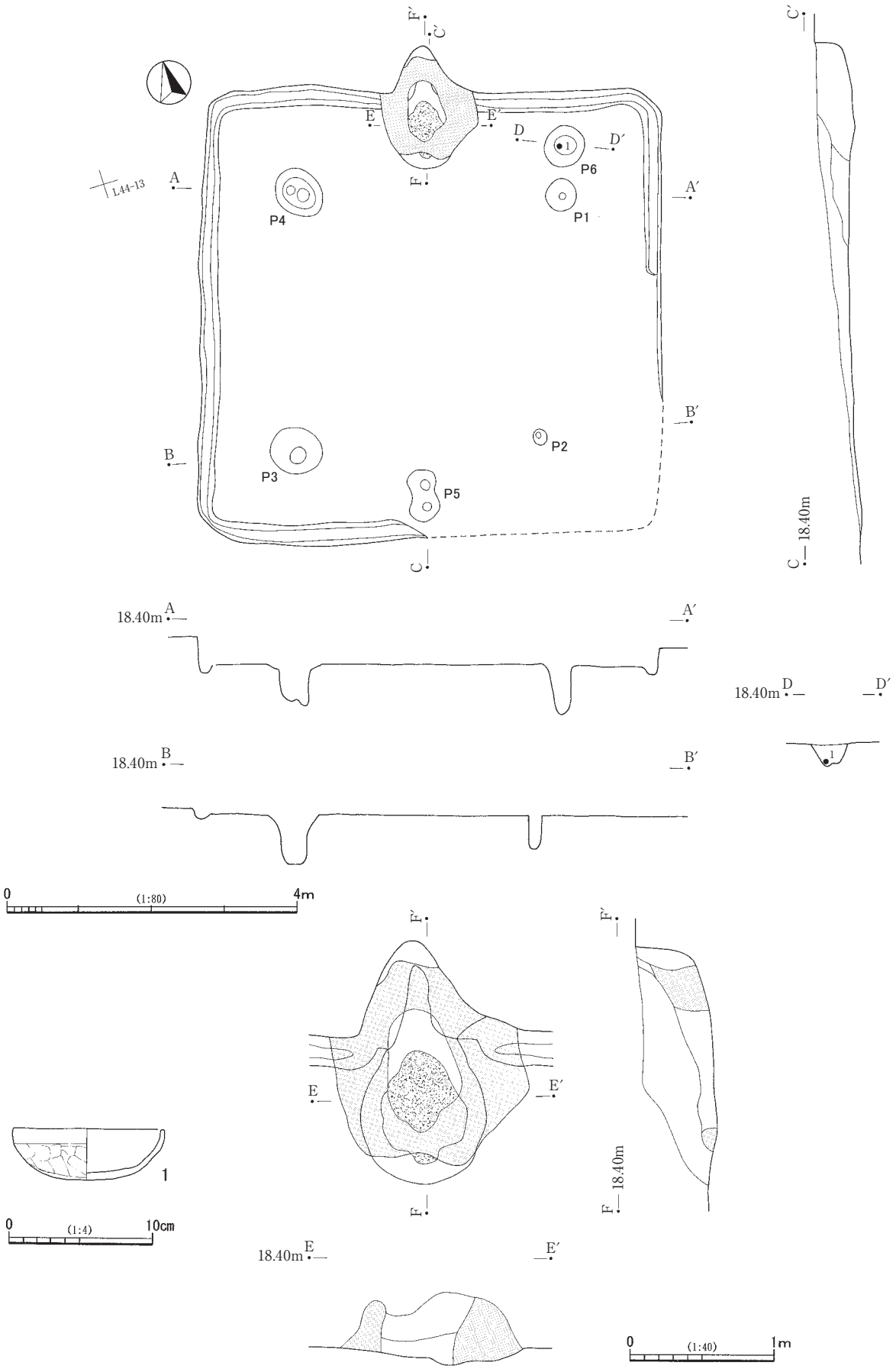
３・４は土師器坏である。１は胎土に白色の砂粒を多く含み、新治産と考えられる。２は胎土に雲母及び砂粒を多く含むことから常陸産と考えられる。３は底部に回転ヘラケズリが施される。５は小型の甕である。タタキを施した後、ヘラケズリ調整を施している。６は須恵器の甕である。胎土に雲母及び砂粒を多く含み、常陸産と考えられる。出土遺物から、本竪穴は８世紀第４四半期と考えられる。

(9)SI004（第49図、図版８・25）

位置・形態　L44－13グリッドを主体に検出された大型の竪穴である。平面の形態は方形を呈し、規模は6.4m×6.3mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はN－18°－Eである。検出面から床面までの深さは、北壁57cm、西壁34cm、南壁５cm、東壁32cmである。斜面に構築された竪穴で、南東側は壁が失われている。

覆土　暗褐色土を主体とし、ローム粒と焼土粒が少量混入する。

施設等　ピット６基と周溝、カマドが検出された。P1～P4は規則的に配列されており、主柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が66cm、P2が46cm、P3が69cm、P4が58cmである。南壁近くのP5は深さ25cmあり、入口の梯子ピットと考えられる。北東隅のP6は深さ32cmあり、貯蔵穴と考えられる。周溝は南東側が失


F′
C′
E
E′
D
D′
1
P6
P1
A
A′
L44-13
P4
F
B′
B
P2
P3
P5
C
C′
18.40m
18.40m A
A′
18.40m D
D′
18.40m B
B′
1
0
(1:80)
4m
F′
E
E′
F
F′
18.40m
F
1
0
(1:4)
10cm
18.40m E
E′
0
(1:40)
1m

第49図　(9)SI004

われている。カマドの遺存状態はよい。天井部が崩落した構築材が、内部に堆積していた。カマド内部の壁は被熱が著しい。

遺物出土状況　出土量は微量である。北東コーナーのP6の底から坏が１点出土している。

出土遺物　図示できた遺物は、土師器坏１点である。１は体部外面にヘラケズリ調整が施される。出土遺物から、本竪穴は８世紀第１四半期と考えられる。

(9) SI005（第50図、図版８・25）

位置・形態　Ｌ44－04グリッドを主体に検出された。平面の形態はやや台形様の方形を呈し、規模は4.9m×4.9mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はＮ－21°－Ｅである。検出面から床面までの深さは、北壁49cm、西壁20cm、南壁５cm、東壁30cmである。

覆土　暗褐色土を主体とし、ローム粒及び焼土粒が少量混入する。

施設等　ピット５基と周溝、カマドが検出された。P1～P4は規則的に配列されており、主柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が56cm、P2が49cm、P3が81cm、P4が46cmである。南壁近くのP5は深さ20cmあり、入口の梯子ピットと考えられる。周溝は全周する。カマドは、煙道部の突出が小さい。袖部の遺存はよい。床面は全体が硬化していた。

遺物出土状況　出土量はあまり多くない。北東隅に集中し、床面直上から完形の個体が出土している。

出土遺物　図示できた遺物は、須恵器坏蓋１点・高台付坏２点、土師器甕３点である。２・３は須恵器高台付坏である。３は湖西産であろう。４～６は土師器甕である。いずれも口縁部が最大径となっている。４・６は床面から完形で出土している。出土遺物から、本竪穴は８世紀第１～第２四半期と考えられる。

(9) SI007（第51・52図、図版８・25・26・31）

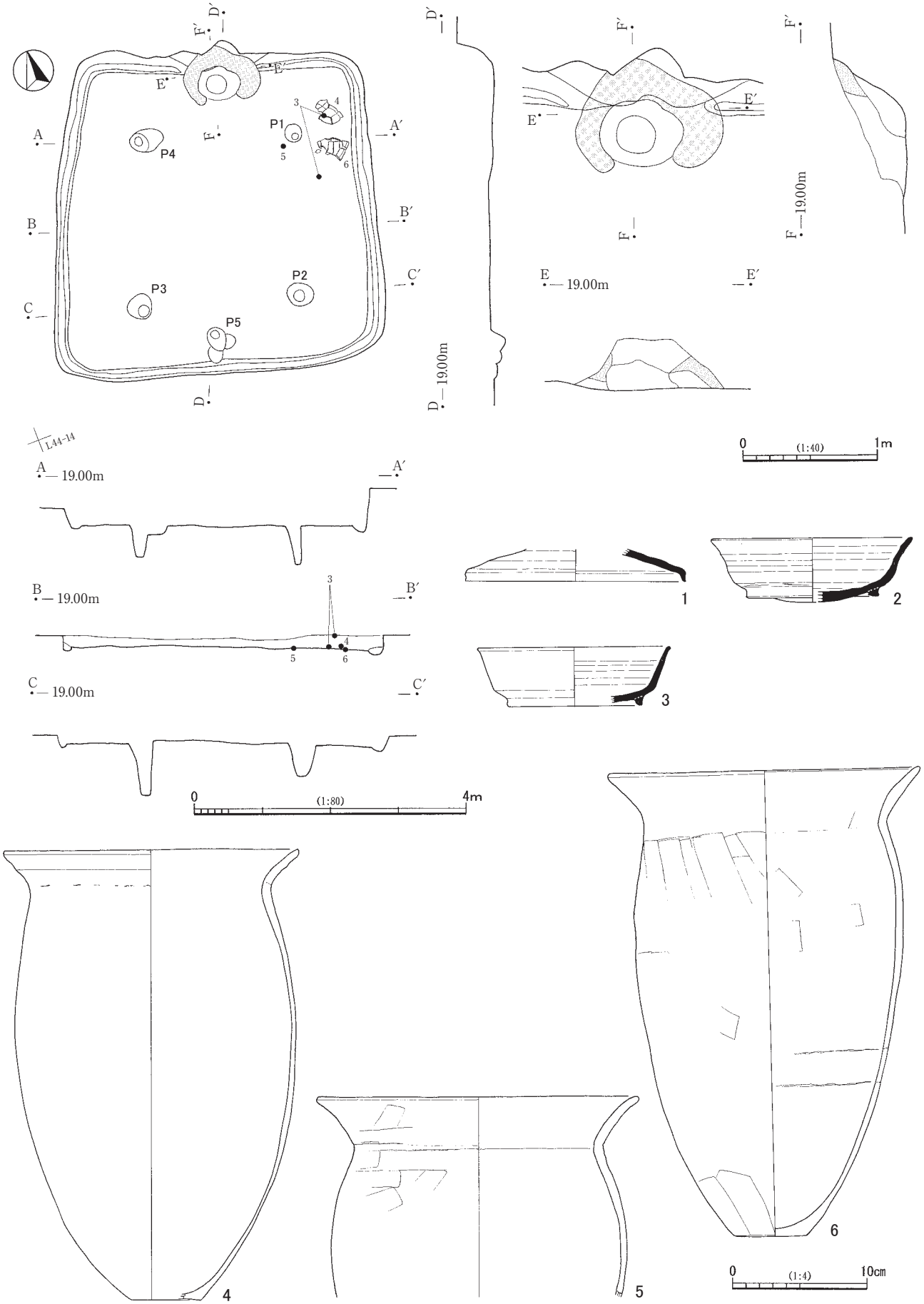
位置・形態　Ｌ 44－22グリッドを主体に検出された。平面の形態は方形を呈し、規模は3.4m×3.3mである。カマドは北壁のやや西寄りにあり、主軸方位はＮ－21°－Ｅである。検出面から床面までの深さは、竪穴の遺存はよく、北壁47cm、西壁40cm、南壁22cm、東壁31cmである。

覆土　暗褐色土を主体とし、焼土及び炭化材が少量混入する。壁際ではローム粒が多く混入する。

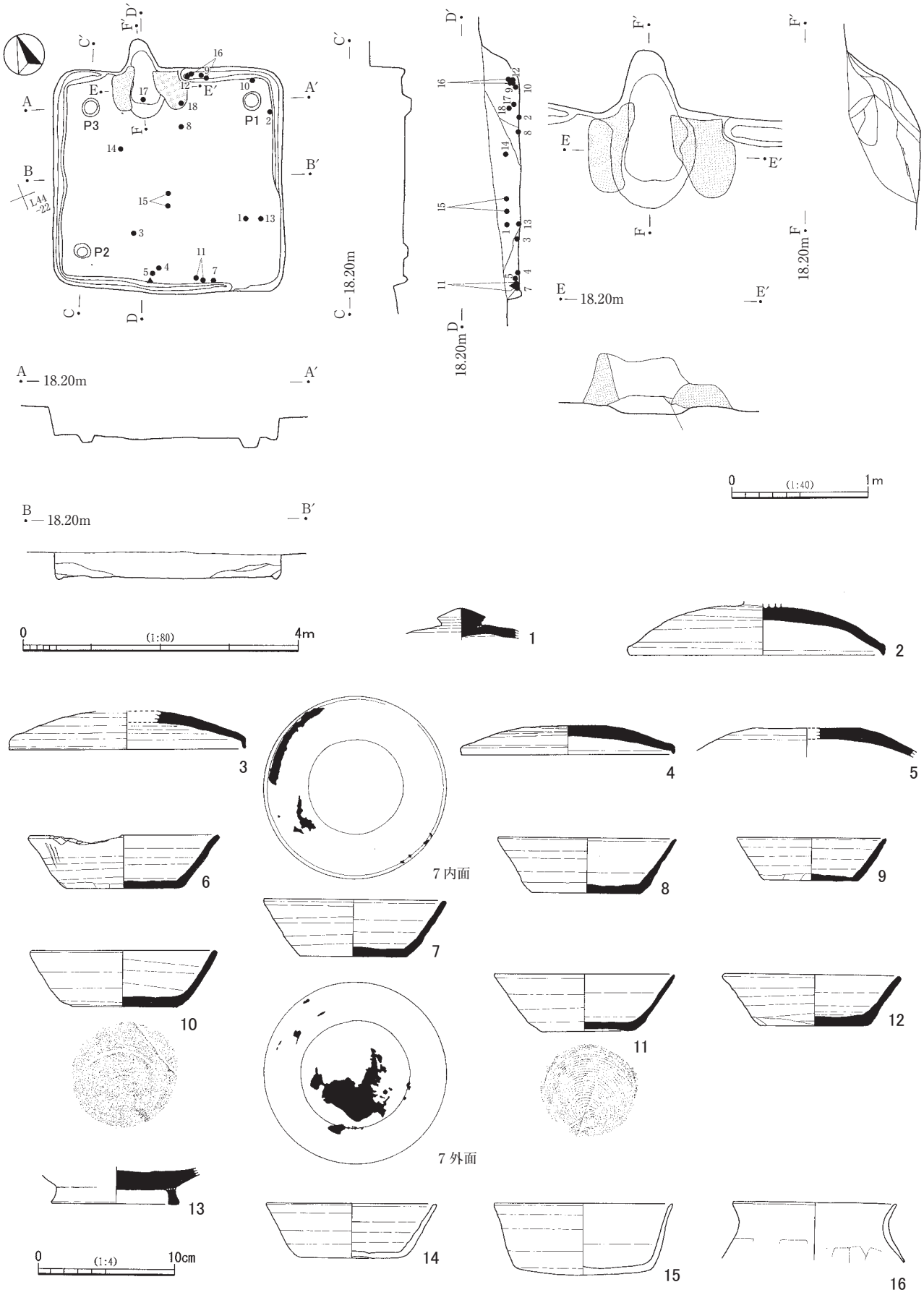
施設等　ピット３基と周溝、カマドが検出された。ピットは南東を除く３コーナー近くで検出されている。いずれも浅いが、柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が12cm、P2が５cm、P3が11cmである。周溝は南東コーナーで一部途切れている。カマドは煙道部が大きく突出する。袖部の遺存状態は良好である。火床面は良く焼けており、焼土が厚く堆積していた。

遺物出土状況　出土量は多い。他の竪穴住居跡と比べ、須恵器の量が際立って多い。南北壁際でまとまって出土している。床面から覆土中位にかけて出土している。

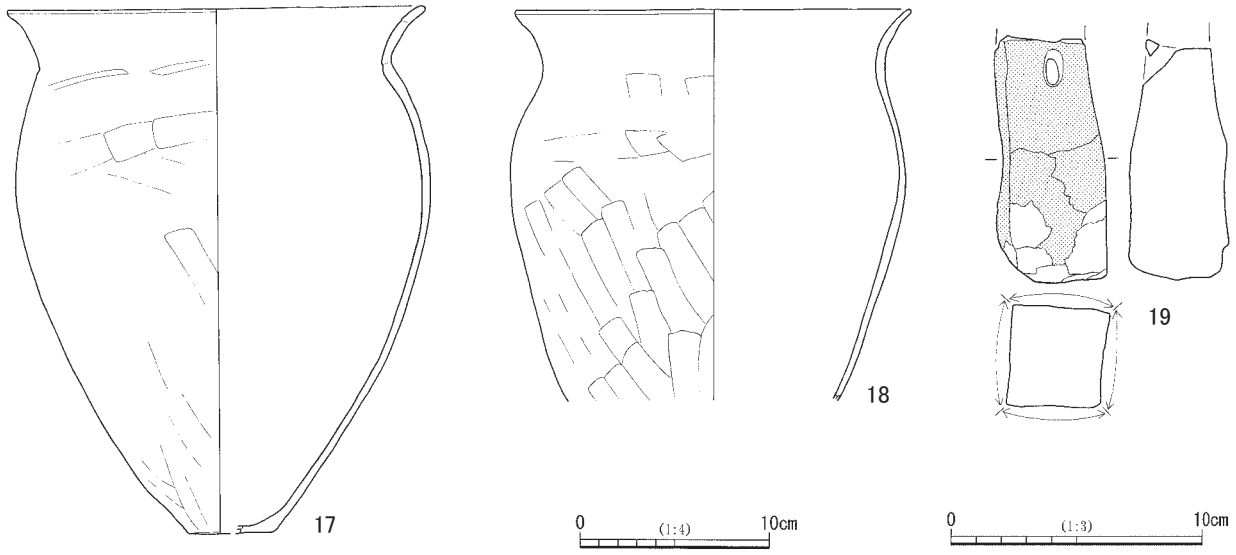
出土遺物　図示できた遺物は、須恵器蓋５点・坏７点・高台付坏１点、土師器坏２点・甕３点、砥石１点である。１～５は須恵器の蓋である。１は宝珠つまみ部分に自然釉がかかる。湖西産と考えられる。２は宝珠つまみが欠けている。胎土に砂粒を多く含む。３は東海系の須恵器と考えられる。４は宝珠つまみが失われている。４・５は胎土に雲母及び砂粒を多く含む。６～12は須恵器坏である。６～９・12は胎土に雲母及び砂粒を多く含む。６は、口唇部に意図的打ち欠きが認められる。７は内外面に黒い漆膜が付着している。特に体部内面にやや厚い付着がある。13は須恵器高台付坏ないしは盤である。14・15は箱形坏である。14は胎土に雲母及び砂粒を含む。16～18は甕である。16は小型の甕である。17・18は体部外面にヘラケズリ調整が施される。19は方柱状の砥石である。上部が欠損している。紐通しの穿孔が斜めに施さ


P1
P2
P3
P4
P5
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
F
F′
19.00m
0 (1:40) 1m
0 (1:80) 4m
0 (1:4) 10cm
1
2
3
4
5
6

第50図　(9)SI005



第51図　(9)SI007(1)



第52図　(9)SI007(2)

れている。出土遺物から、本竪穴は８世紀第４四半期と考えられる。

(9)SI008(第53図、図版９・26)

位置・形態　L44－31グリッドを主体に検出された。南側の大部分が撹乱を受け、失われている。平面の形態は方形を呈すると考えられ、遺存する東西方向で4.9ｍを測る。カマドは北壁にあり、主軸方位はN－10°－Wである。検出面から床面までの深さは浅く、北壁４cmである。

覆土　黒褐色土を主体とし、焼土粒が全体的に多量に混入する。

施設等　ピット３基とカマドが検出された。壁際にピットが３基検出された。最も西側のピットは床面からの深さが28cmあるが、柱穴とは言いがたい。カマドも遺存状態が悪く、構築材が僅かに残り、袖部がかろうじて想定できる。

遺物出土状況　出土量は微量である。北東の床面から出土している。

出土遺物　図示できた遺物は、土師器坏１点・台付甕１点である。１は坏である。底部は回転糸切り後、手持ちヘラケズリが施される。２は武蔵産の台付甕と考えられる。出土遺物から、本竪穴は９世紀第３四半期と考えられる。

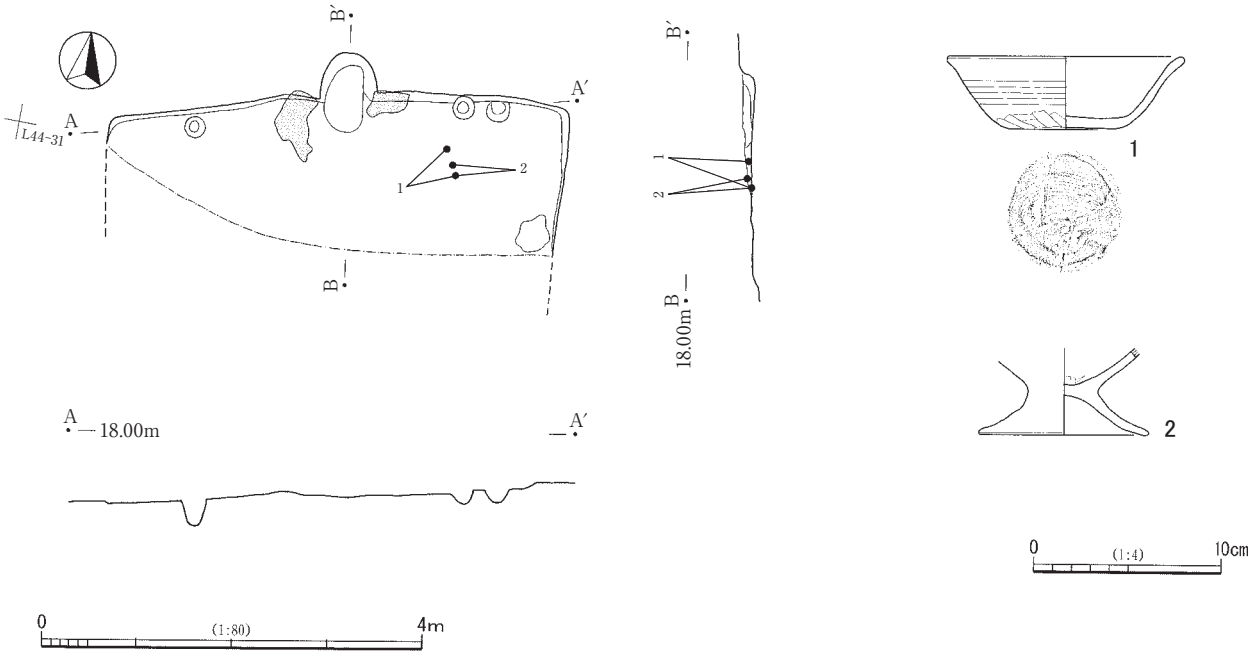
(10)SI002(第54図、図版９・26・31)

位置・形態　O44－38グリッドを主体に検出された。カマドから北側コーナーにかけてが、中・近世の溝状遺構によって撹乱を受け、失われている。平面の形態は方形を呈し、規模は3.2m×3.2mである。カマドは北西壁にあり、主軸方位はN－43°－Wである。検出面から床面までの深さはほとんどなく、北西壁11cm、南西壁９cm、北東壁８cmである。

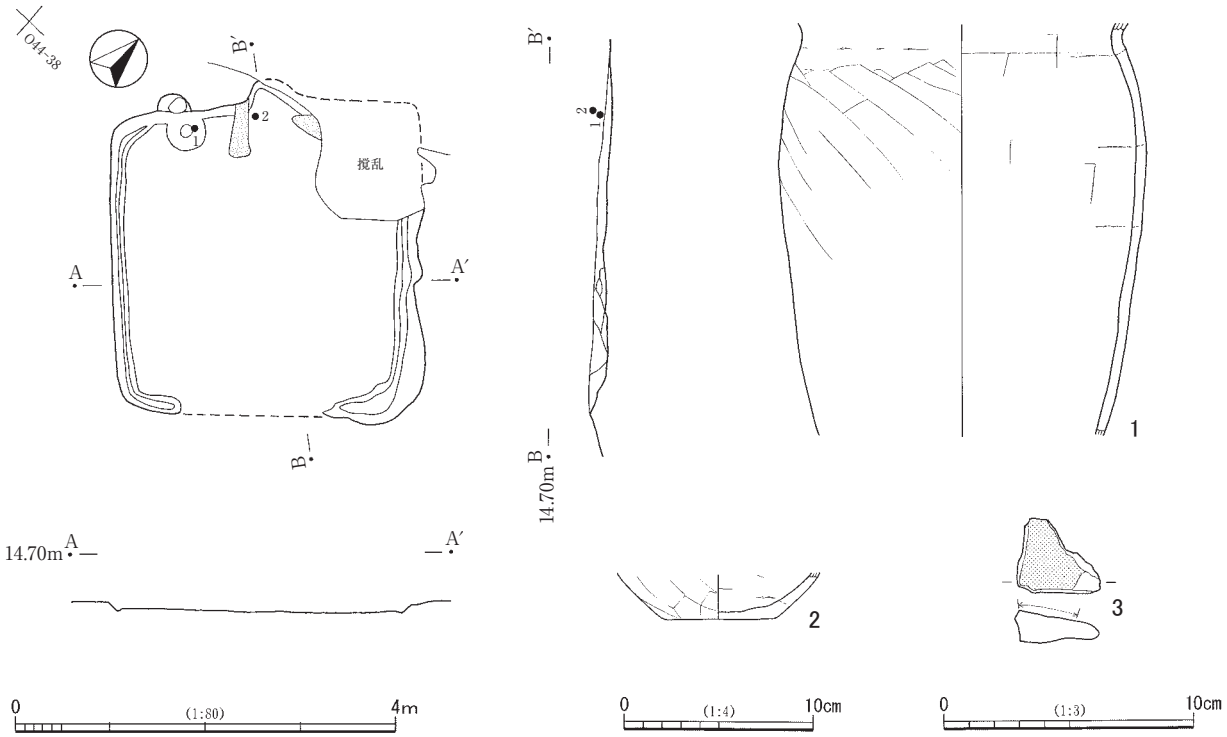
覆土　黒褐色土を主体とし、少量の焼土が混入する。

施設等　ピット１基と周溝、カマドが検出された。ピットはカマドの西側から検出された。床面からの深さが11cmである。周溝は南東の中央部分で途切れている。カマドの遺存状態は悪く、袖部の痕跡をわずかに残す程度である。床面は撹乱の影響で、凹凸が著しい。

遺物出土状況　出土量は微量である。カマド西側のピット付近と南東壁付近の覆土内で出土している。ま



第53図　(9)SI008



第54図　(10)SI002

た、カマドの前面で炭化材が集中して出土している。

出土遺物　図示できた遺物は、土師器甕２点、砥石１点である。１・２は甕である。ともに体部外面はヘラケズリが施される。出土遺物から、本竪穴は９世紀代と考えられる。

(10)SI003（第55図、図版９・26・31）

位置・形態　O44－37グリッドを主体に検出された。床面を剥がしたところ、一回り小さな竪穴住居跡の痕跡が確認された。主軸線を同じくしていることから、規模を大きくする建て替えが行われたものと考えられる。ただし、全面的な建て替えである点で、別々の竪穴として取り扱う方が妥当かもしれない。新竪穴の平面形態は長方形を呈し、規模は4.8m×4.0mである。カマドは北壁やや西寄りにある。主軸方位はN－36°－Wである。検出面から床面までの深さは南東方向で浅くなり、北壁22cm、西壁31cm、南壁４cm、東壁19cmである。旧竪穴の平面の形態は、やや歪みのある方形を呈すると考えられる。カマドの火床面と考えられる焼土が確認された。旧竪穴の規模は、一辺約3.6mの方形を呈すると推測される。

覆土　黒褐色土を主体とし、少量の焼土が混入する。建て替えにより旧竪穴を取り壊した後、貼り床を施して新たな竪穴を構築している。

施設等　新竪穴ではピット５基と周溝、カマドが検出された。規則的に配列された４基のピットは主柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が44cm、P2が31cm、P3が33cm、P4が47cmである。南壁近くのP5は深さ６cmあり、入口の梯子ピットと考えられる。周溝は北壁から西壁にかけて巡っている。カマドは、袖部が良く残っている。カマドの中央から支脚が出土している。旧竪穴では、ピット４基と周溝、カマドの火床面が検出された。ピットの深さは、P6が31cm、P7が28cm、P8が46cm、P9が46cmであり、いずれも主柱穴と考えられる。周溝は東壁から南壁の一部にかけて検出された。

遺物出土状況　出土量はあまり多くない。カマド周辺の覆土中からまとまって出土している。カマドからは支脚が立った状態で出土している。

出土遺物　図示できた遺物は、須恵器蓋２点、土師器坏１点･甕１点、支脚１点である。３の土師器坏は、器面の摩耗が著しいがヘラケズリされている。４の甕は、口縁部が最大径となり、体部外面はヘラナデ調整が施される。出土遺物から、本竪穴は８世紀第１四半期と考えられる。

(10)SI006（第56図、図版10・26・31）

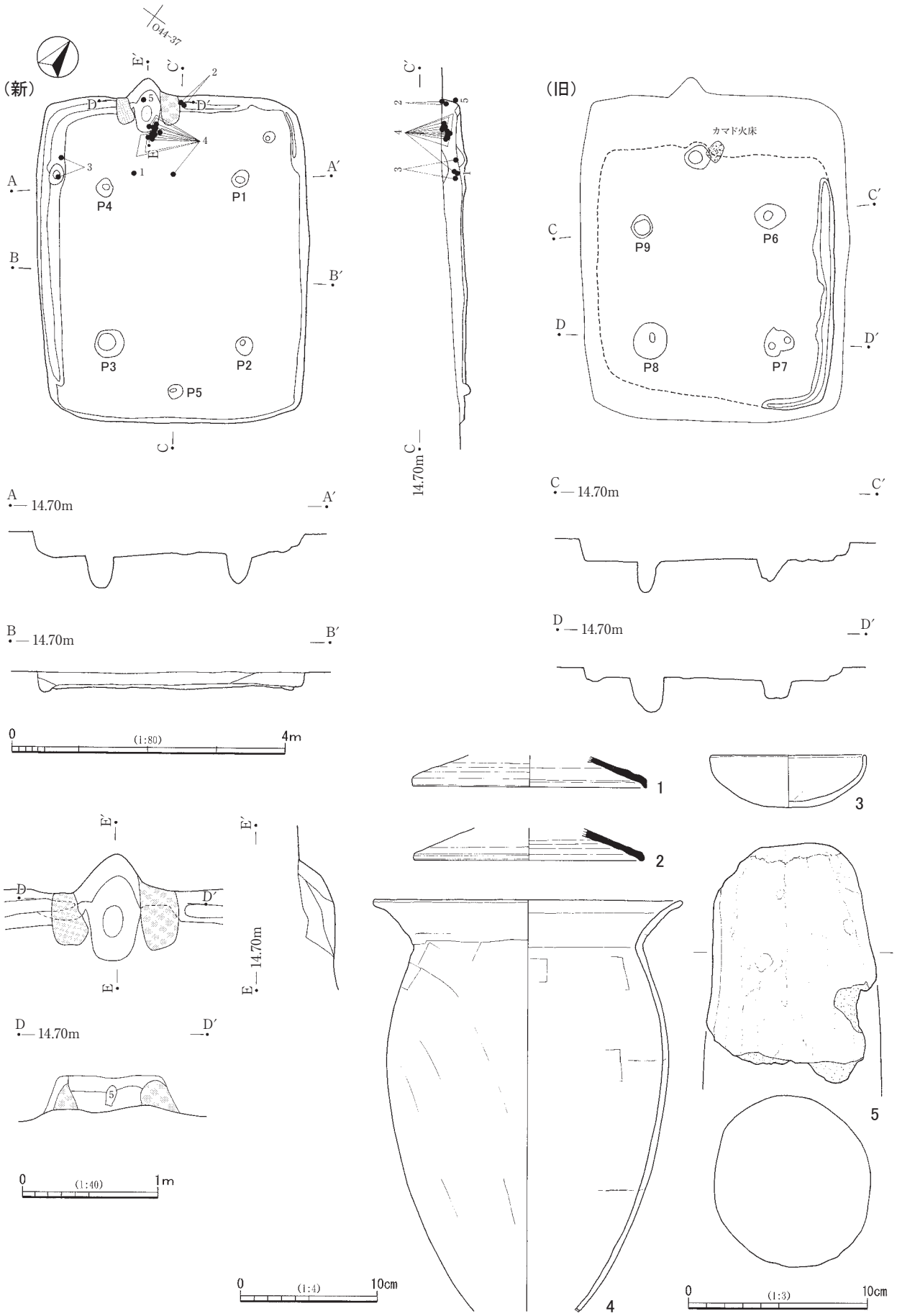
位置･形態　P43－73グリッドを主体に検出された。平面の形態は方形を呈し、規模は4.3m×4.3mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はN－21°－Wである。検出面から床面までの深さは、北壁12cm、西壁15cm、南壁17cm、東壁６cmである。竪穴の中央が円形に撹乱されている。

覆土　暗褐色土を主体とする。

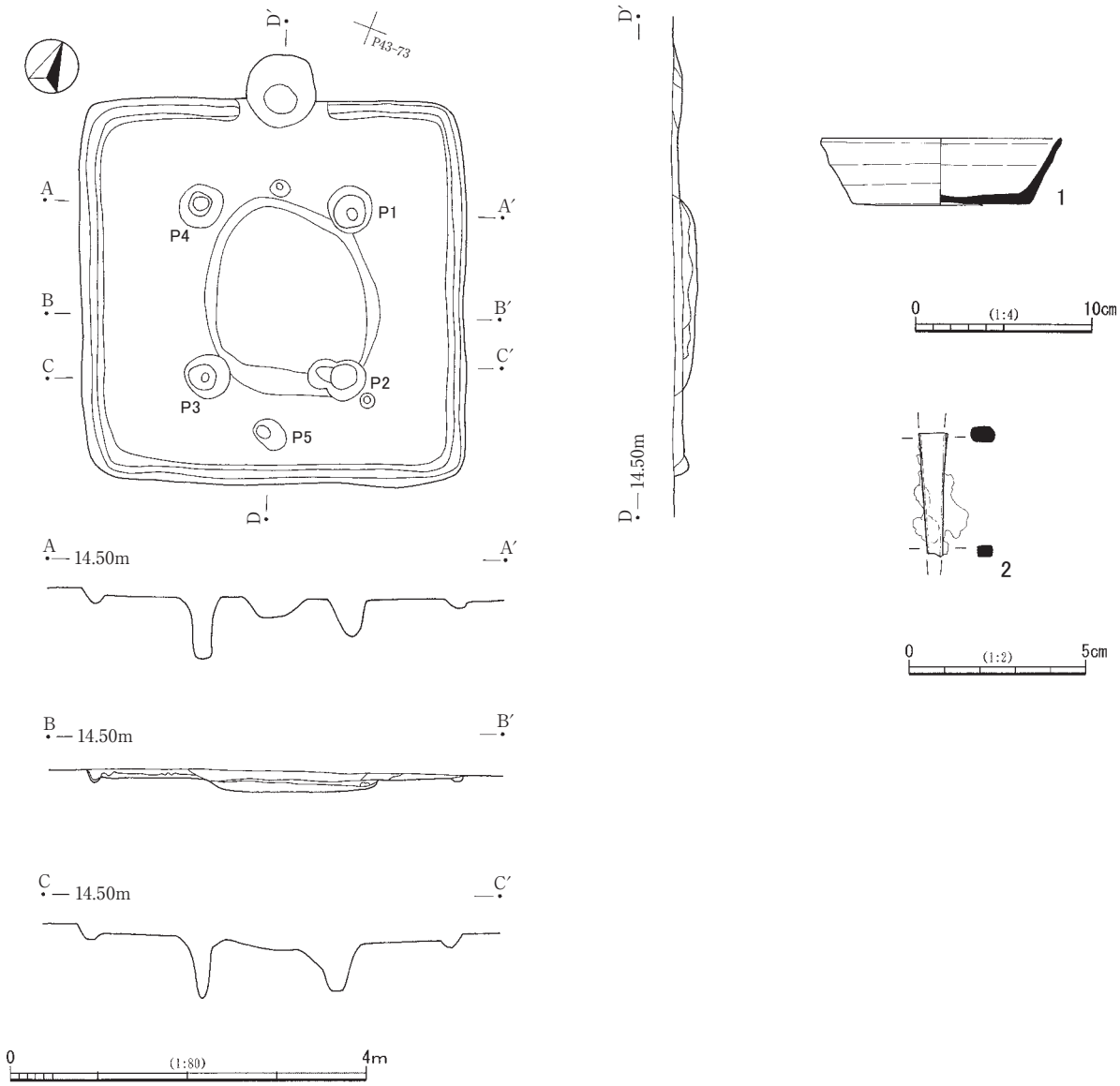
施設等　ピット５基と周溝、カマドが検出された。P1～P4は規則的に配列されており、主柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が42cm、P2が56cm、P3が70cm、P4が68cmである。南壁近くのP5は深さ16cmあり、入口の梯子ピットと考えられる。周溝は全周する。北壁のカマドは袖部のごく一部を残し失われていた。煙道部は大きく突出する。

遺物出土状況　出土量は微量である。鉄鏃が周溝内から出土している。

出土遺物　図示できた遺物は、須恵器坏１点、鉄鏃１点のみである。１の須恵器坏は、底部はヘラ切り後ヘラケズリ調整が施される。２は鉄鏃の茎である。出土遺物から、本竪穴は８世紀第２四半期～第３四半期と考えられる。



第55図　(10)SI003



第56図　(10)SI006

(10)SI007（第57図、図版10・26）

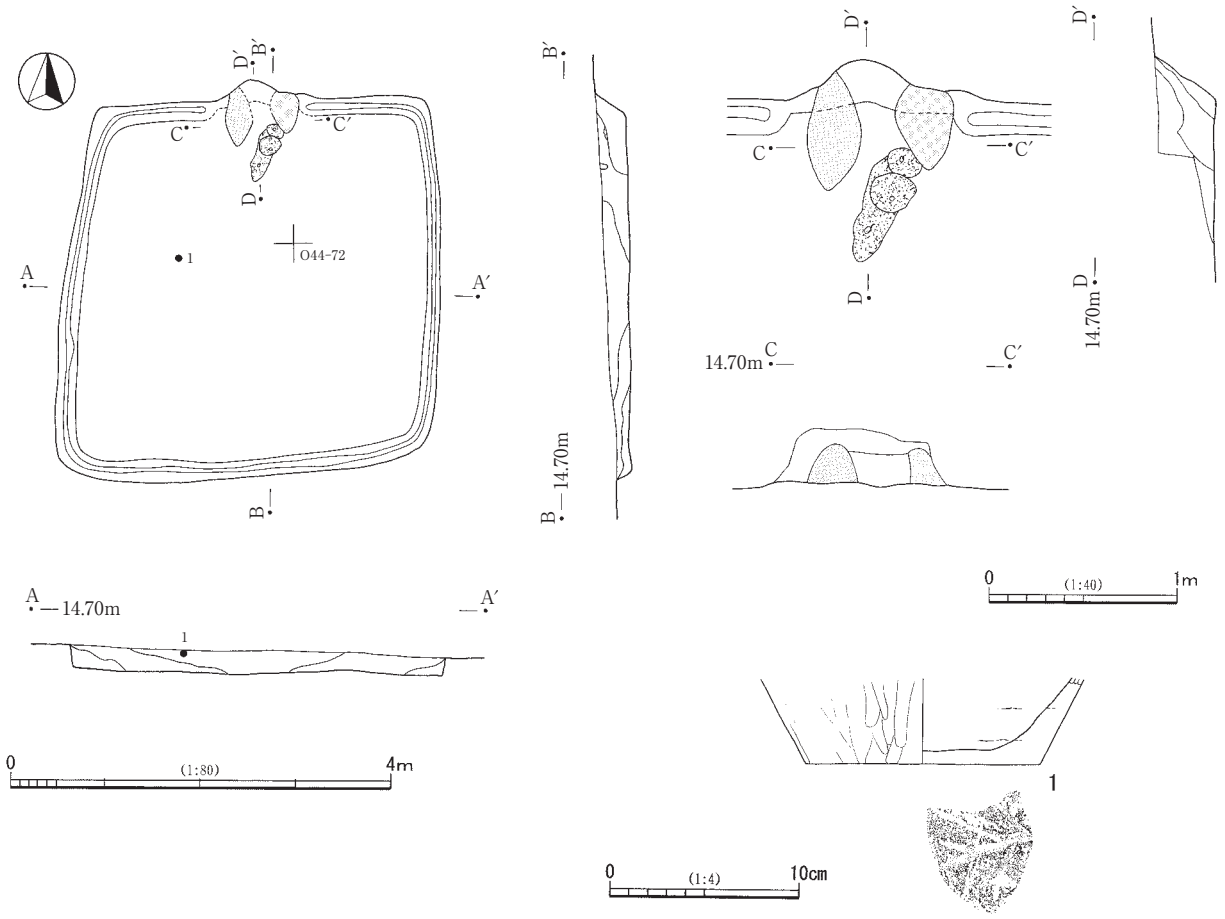
位置・形態　O44－71グリッドを主体に検出された。平面の形態はやや歪んだ方形を呈し、規模は4.0m×4.0mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はN－1°－Eとほぼ真北を向いている。検出面から床面までの深さは北壁36cm、西壁31cm、南壁15cm、東壁19cmである。

覆土　黒褐色土を主体とする。

施設等　周溝とカマドが検出された。周溝は全周する。北壁のカマドは煙道部の突出があまりない。袖部の遺存状態は良好である。

遺物出土状況　出土量は微量である。中央部の覆土中から甕の底部が出土している。

出土遺物　図示できた遺物は、土師器甕１点である。１は胎土に雲母及び砂粒を多く混入する。常陸産の甕と考えられる。体部外面はヘラケズリ調整の後、ヘラミガキ調整を施す。底部には木葉痕が残る。出土遺物から、本竪穴は８世紀代と考えられる。



第57図　(10)SI007

(10)SI008（第58図、図版10・27・31）

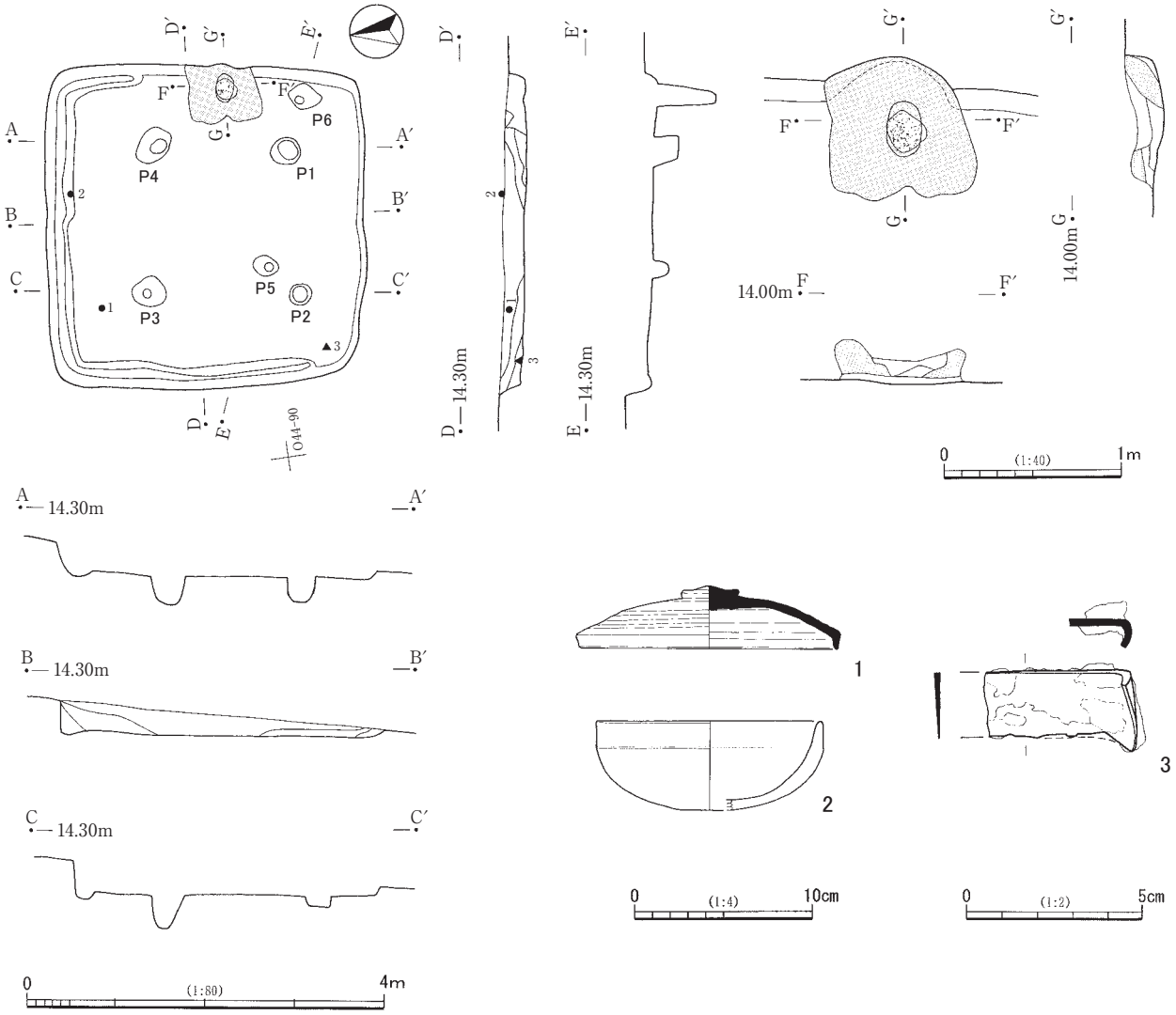
位置・形態　O44－80グリッドを主体に検出された。平面の形態は方形を呈し、規模は3.7m×3.6mである。カマドは東壁にあり、主軸方位はN－97°－Eである。検出面から床面までの深さは北壁44cm、西壁29cm、南壁７cm、東壁17cmである。

覆土　黒褐色土を主体とし、焼土が僅かに混入する。下層ではローム粒が少量混入する。

施設等　ピット６基と周溝、カマドが検出された。P1～P4は規則的に配列されており、主柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が29cm、P2が11cm、P3が37cm、P4が30cmである。P5は位置が内側に寄りすぎており、入口のピットではなかろう。深さは17cmを測る。P2が浅いことからあるいは主柱穴かもしれない。カマド脇のP6は小規模だが貯蔵穴と考えられる。深さは68cmを測る。周溝はカマドの北側から北壁を通り、西壁まで巡っている。東壁のカマドは煙道部の突出はほとんどない。カマドの構築材が良く残っているが、天井部は崩落している。火床面はよく焼けていた。

遺物出土状況　出土量は微量である。

出土遺物　図示できた遺物は、須恵器蓋１点、土師器坏１点、刀子１点である。いずれも覆土中から出土している。１は須恵器蓋である。胎土は混入物が少なく、僅かに白色粒が混じる。完形で出土している。２は土師器坏である。胎土には雲母や砂粒を多く含む。７世紀代の可能性が高く、覆土上面からの出土であることから、混入であろう。３は刀子である。出土遺物から、本竪穴は８世紀第２四半期と考えられる。



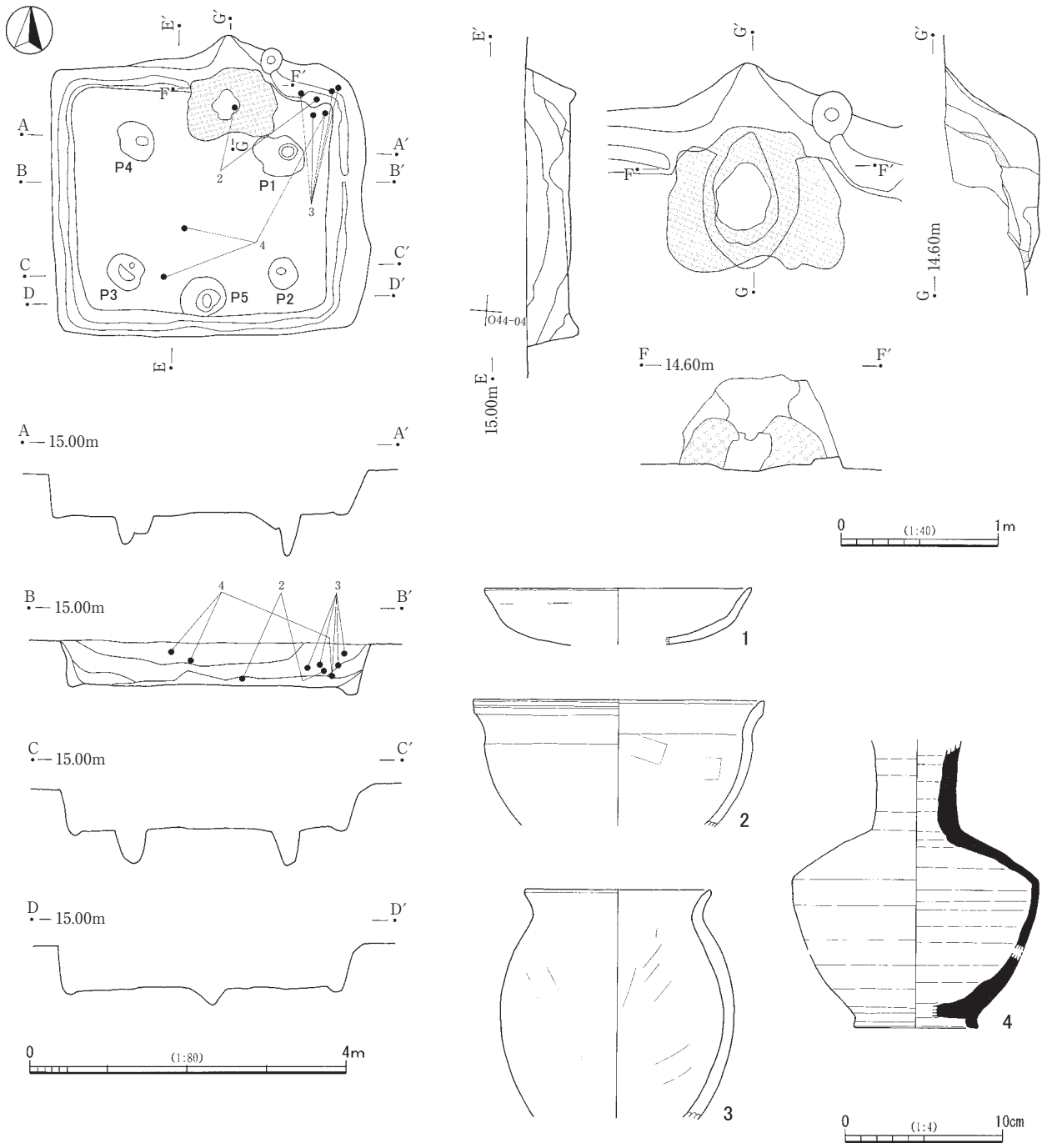
第58図　(10)SI008

(10)SI011（第59図、図版10・11・27）

位置・形態　O43－93グリッドを主体に検出された。竪穴は、深く遺存状態はよかった。平面の形態は若干長方形を呈する。規模は4.0m×3.4mである。カマドは北壁のやや東寄りにあり、主軸方位はN－4°－Wである。検出面から床面までの深さは他の竪穴に比べて深く、北壁60cm、西壁63cm、南壁65cm、東壁63cmである。

覆土　暗黒褐色土を主体とし、レンズ状に堆積する。全体的に焼土が少量混入する。下層ではロームが混入する。

施設等　ピット５基と周溝、カマドが検出された。P1～P4は規則的に配列されており、主柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が53cm、P2が45cm、P3が42cm、P4が22cmである。南壁近くのP5は深さ20cmあり、入口の梯子ピットと考えられる。周溝はほぼ全周する。カマドの遺存はよく、袖部のカマド構築材も良く残っている。煙道部は緩やかに突出する。火床面はよく焼けていた。



第59図　(10)SI011

遺物出土状況　出土量は少ない。カマド東脇、北東コーナーに集中し、その他は散発的である。カマド内からも遺物が出土しているが、ほとんどが覆土中からの出土である。

出土遺物　図示できた遺物は、須恵器長頸壺１点、土師器坏１点・鉢１点・甕１点である。１の土師器坏は、体部外面の摩滅が著しい。２の鉢は口縁部が幅のあるヨコナデが施されている。３の甕は器面の摩滅が顕著である。体部外面はヘラケズリが施されている。４は東海産と考えられる須恵器長頸壺である。肩がやや張る器形で、頸部から肩部にかけて自然釉がかかっている。出土遺物から、本竪穴は８世紀第１四半期と考えられる。

(10)SI012（第60図、図版11・27）

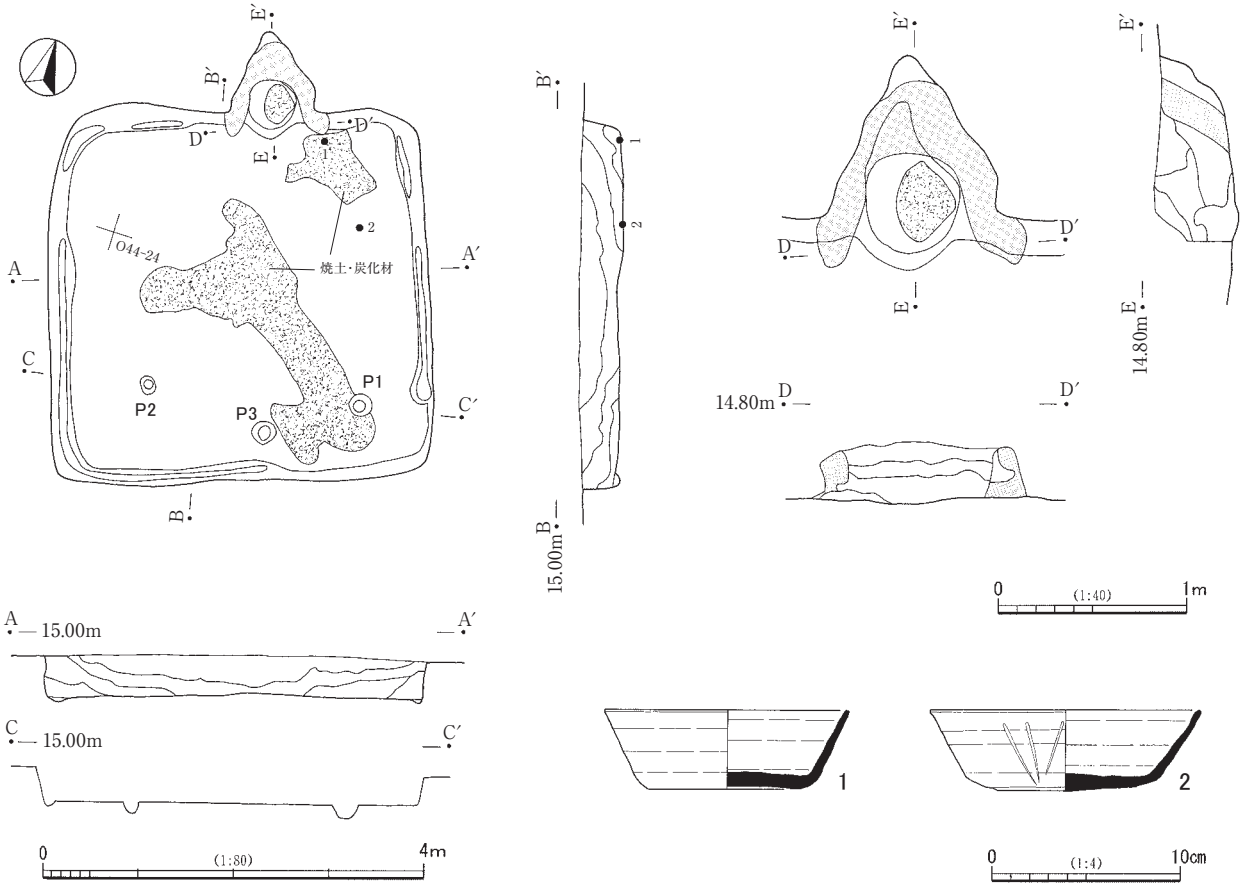
位置・形態　O44－24グリッドを主体に検出された。竪穴の遺存はよかった。平面の形態は方形を呈する。規模は4.1m×4.0mである。カマドは北壁のやや東寄りにあり、主軸方位はN－17°－Wである。検出面から床面までの深さは他の竪穴に比べて深い。北壁41cm、西壁40cm、南壁38cm、東壁41cmである。

覆土　暗褐色土を主体とし、レンズ状に堆積する。底面には焼土と炭化材が図示した範囲で検出されており、焼失住居跡の可能性がある。

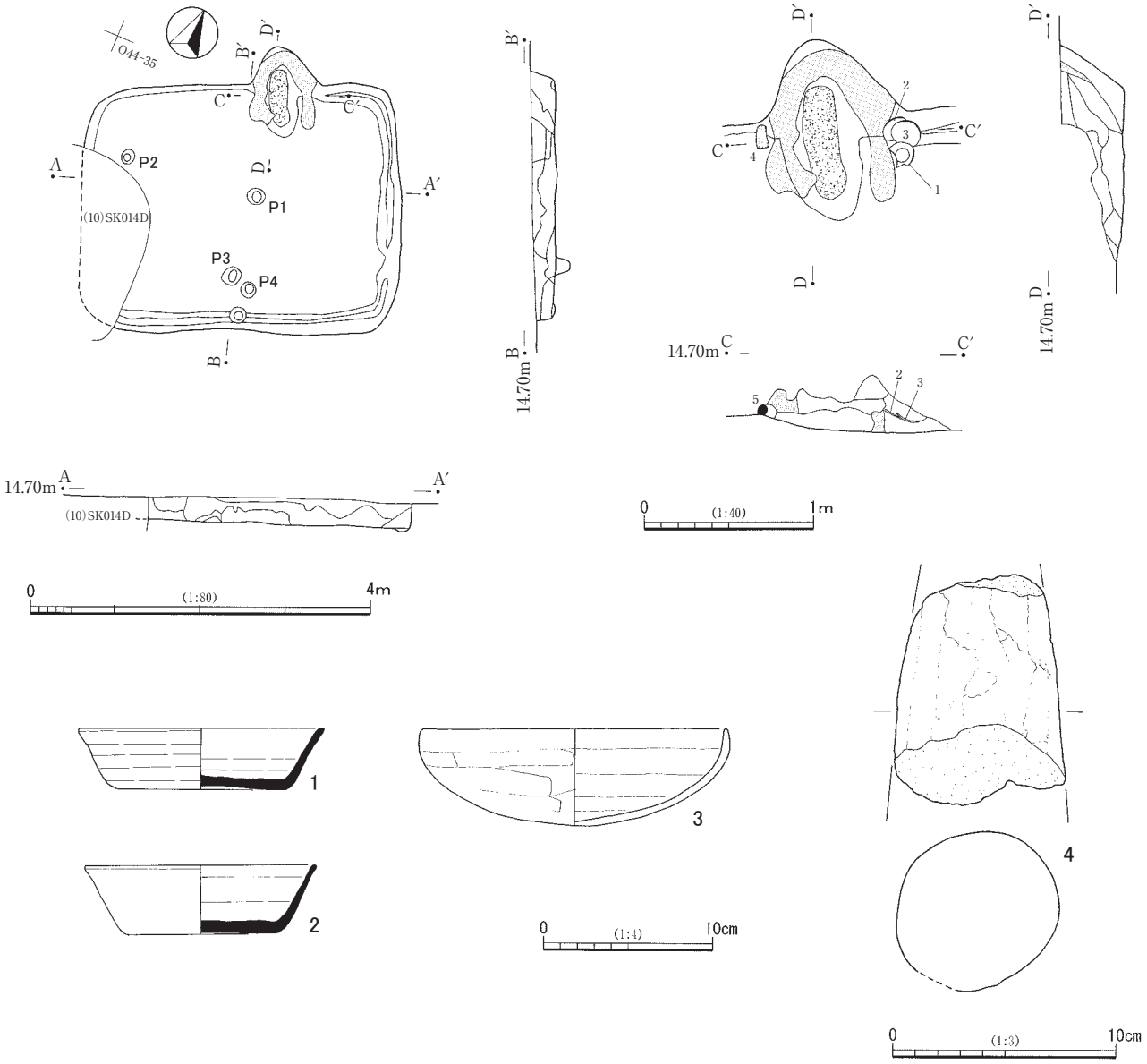
施設等　ピット３基と周溝、カマドが検出された。P1･P2は浅いが柱穴の可能性がある。深さは、P1が13cm、P2が10cmである。南壁近くのP3は深さ19cmあり、入口の梯子ピットと考えられる。周溝は部分的に確認された。カマドは規模が大きく、外側へ強く張り出して設けられている。袖部は竪穴内に僅かに出る程度のようである。火床面はよく焼けており、焼土が堆積していた。

遺物出土状況　出土量は少ない。北東コーナーの近くで、床面から出土している。

出土遺物　図示できた遺物は、須恵器坏２点である。２は焼成前に施された記号が体部外面に施されている。出土遺物から、本竪穴は８世紀第２四半期～第３四半期と考えられる。



第60図　(10)SI012



第61図　(10)SI013

(10)SI013（第61図、図版11・27・31）

位置・形態　O44－35グリッドを主体に検出された。平面の形態は東西方向に長い長方形を呈する。西側の一部が中世の地下式坑に壊されている。規模は3.6m×2.9mである。カマドは北壁のやや東寄りにあり、主軸方位はN－23°－Wである。検出面から床面までの深さは北壁31cm、南壁26cm、東壁36cmである。

覆土　褐色土を主体としロームの混入量が多い。上層には僅かな焼土粒が混入する。

施設等　ピット４基と周溝、カマドが検出された。P1は床面からの深さ12cm、P2は深さ14cmである。P3は深さ14cm、P4は深さ18cmあり、どちらも入口の梯子ピットであろう。周溝はカマドの東側から南壁にかけて設けられ、南東の一部で途切れている。カマドは外側に強く張り出しており、遺存状態は比較的良い。火床面はよく焼けており、焼土が薄く堆積していた。

遺物出土状況　出土量は少ない。カマド袖部の右脇では坏が３点、口縁部を上にして接して出土し、袖部左脇では、支脚が出土している。

出土遺物　図示できた遺物は、須恵器坏２点、土師器坏１点、支脚１点である。１・２は須恵器坏で胎土に雲母及び砂粒を多量に含み、常陸産であろう。２は体部外面のロクロ目が見えない。３は土師器坏で体部外面にヘラケズリ調整が施されている。本竪穴は出土した須恵器坏から８世紀第２四半期～第３四半期と考えられる。ただし、３の土師器坏の時期は７世紀後半の可能性がある。

(10)SI014（第62図、図版11・27・28・31）

位置・形態　O44－45グリッドを主体に検出された。平面の形態は南北方向に長い長方形を呈する。北側の床面は中世の地下式坑によって壊されている。規模は4.3m×3.8mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はN－5°－Wである。検出面から床面までの深さは北壁38cm、西壁42cm、南壁31cm、東壁38cmである。

覆土　暗褐色土を主体とし、下層には少量の焼土が混入する。

施設等　ピット２基と周溝、カマドが検出された。竪穴の中央やや南寄りと南壁近くにピットが検出された。P1は床面からの深さが28cm、P2は深さ10cmある。P2は入口の梯子ピットと考えられる。周溝は北壁を除いて巡っている。カマドの遺存状態はあまり良くない。煙道部の張り出しが大きい。袖部に僅かにカマド構築材が認められる程度である。

遺物出土状況　出土量は後世の攪乱を受けているにもかかわらず比較的多かった。床面から出土しているものが多い。中世土坑内の覆土から出土しているものがあるが、本竪穴に伴う可能性があるものは掲載した。北東と南西コーナーに焼土の堆積がある。

出土遺物　図示した遺物は、須恵器高台付坏２点・坏３点・甕１点、土師器坏５点である。１・２は高台付坏である。１は胎土に雲母及び砂粒を多く含む。３～５は坏である。３・４は胎土に雲母及び砂粒を多く含む。１～４は常陸産と考えられる。５は胎土に砂粒を多く含む。底部は回転糸切り後、回転ヘラケズリが施される。６～10は土師器坏である。６・７・９・10はロクロ整形土師器である。11は須恵器甕である。体部外面はタタキ、内面は指頭による押さえが全面に残る。胎土には雲母を多く含む。12～16は鉄製品である。12・13は鉄鏃である。同一個体かどうかはわからない。13は基部の木質が残っている。14は刀子である。15は鎌の可能性がある。16は釘であろう。このほか図示しなかったが31点合計200ｇのスラグが出土している。いずれも小片である。本竪穴は８世紀第４四半期と考えられ、縦長の長方形の特異な竪穴であり、鉄製品、スラグの出土があったことから鍛冶関連の工房の可能性があるかもしれない。

(10)SI017（第63図、図版11・28）

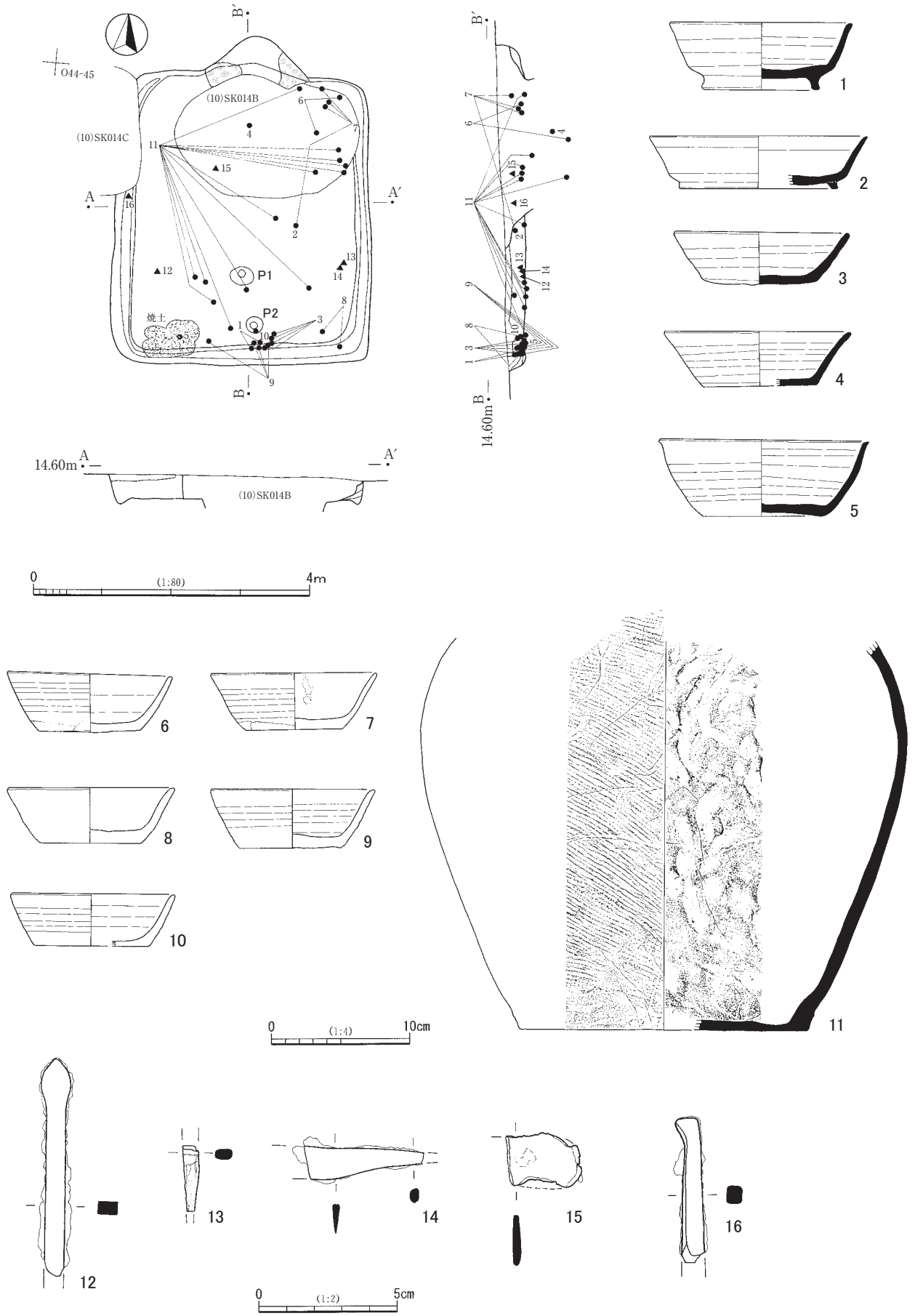
位置・形態　N44－77グリッドを主体に検出された。平面の形態は方形を呈する。規模は4.2m×4.1mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はN－11°－Wである。検出面から床面までの深さは北壁63cm、西壁51cm、南壁37cm、東壁48cmである。

覆土　暗褐色土を主体とし、少量のロームが混入する。下層には少量の焼土粒が混入する。

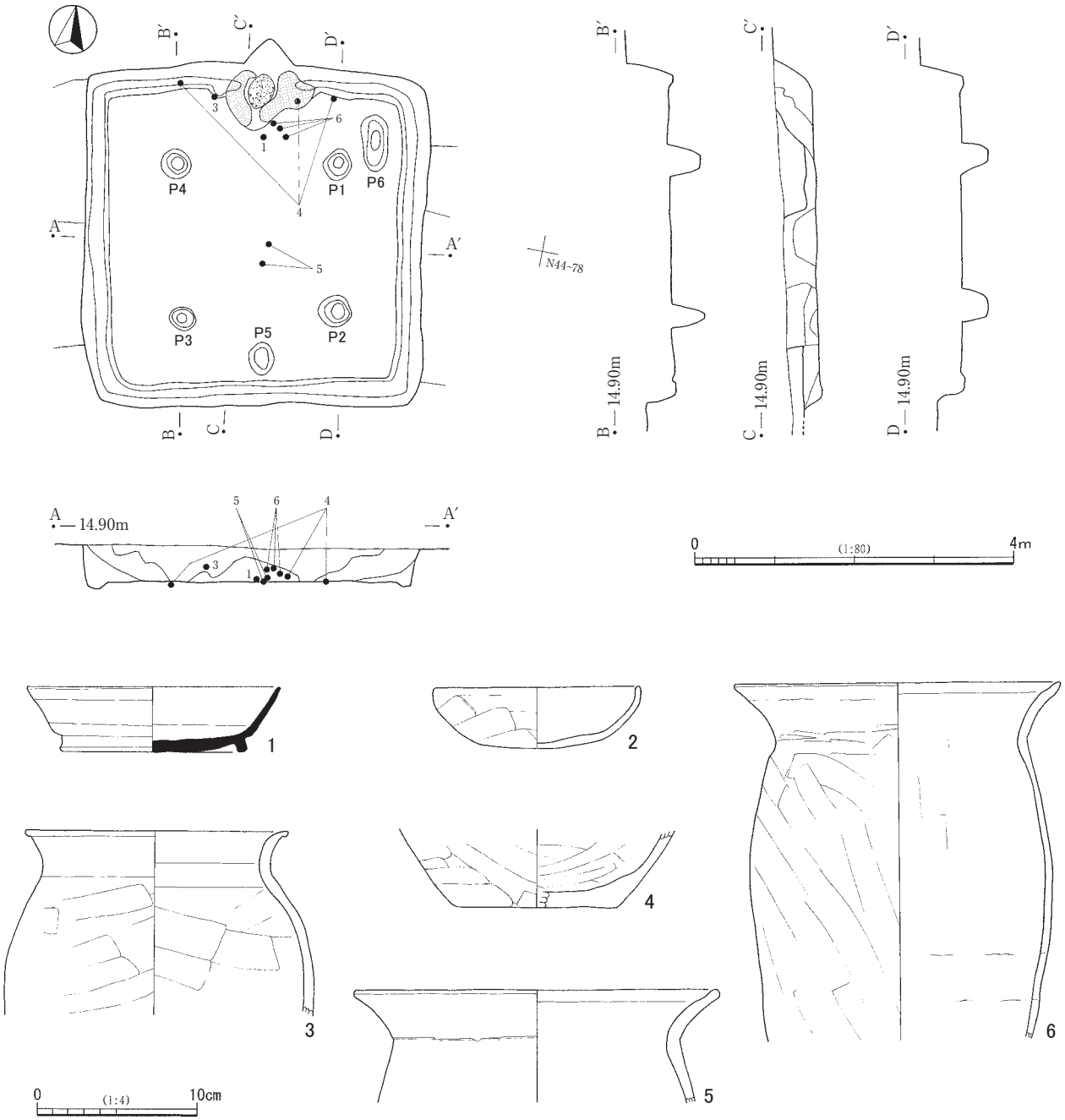
施設等　６基のピットと周溝、カマドが検出された。P1～P4は規則的に配列されており、主柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が36cm、P2が34cm、P3が40cm、P4が39cmである。南壁近くのP5は深さが14cmあり、入口の梯子ピットと考えられる。北東コーナーのP6は深さ27cmあり、貯蔵穴と考えられる。周溝は全周する。カマドの遺存状態はあまりよくない。煙道部は山形に突出する。火床面はよく焼けていた。

遺物出土状況　出土量はあまり多くない。遺物はカマド周辺の床面からややまとまって出土している。

出土遺物　図示できた遺物は、須恵器高台付坏１点、土師器坏１点・甕４点である。１は須恵器高台付坏である。胎土に雲母と砂粒を含む。常陸産であろう。２の土師器坏は、体部外面がヘラケズリされている。



第62図　(10)SI014



第63図　(10)SI017

３～６は甕である。３・４・６は体部外面にヘラケズリが施される。４・６は胎土に砂粒を多く含む。出土遺物から、本竪穴は８世紀第１四半期と考えられる。

(10)SI018（第64図、図版11・28）

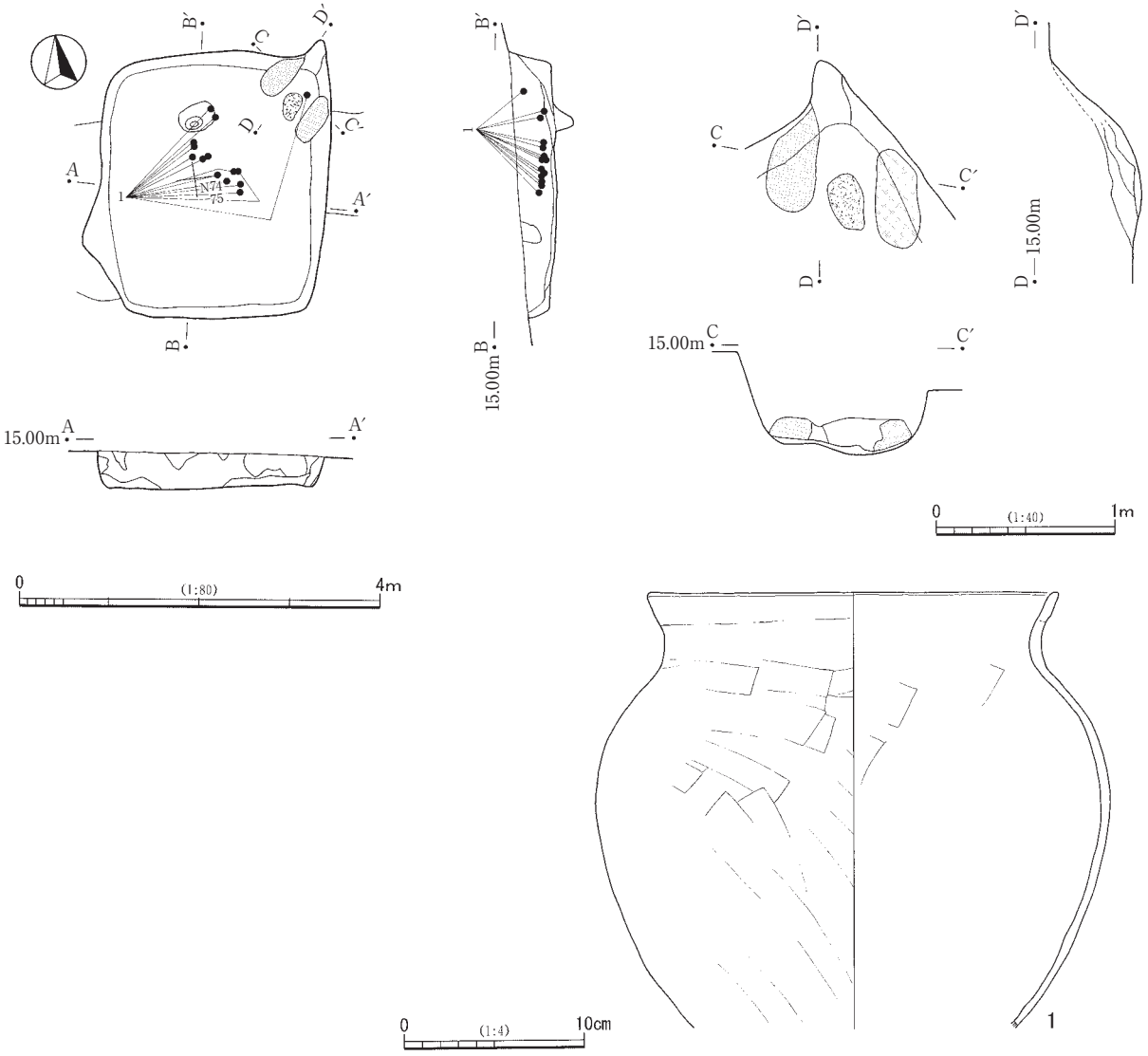
位置・形態　N44－75グリッドを主体に検出された。平面の形態は南北方向にやや長い長方形を呈する。規模は3.0m×2.5mで、小規模である。カマドは北東コーナーにあり、長軸方向を主軸とすれば方位はN－10°－Eである。検出面から床面までの深さは北壁50cm、西壁43cm、南壁26cm、東壁22cmで、竪穴の遺存状態はよかった。

覆土　黒色土を主体とし、焼土粒が僅かに混入する。

施設等　ピットはなく、北東コーナーのカマドのみである。遺存状態は袖部が辛うじて残る。火床面はよく焼けていた。

遺物出土状況　出土量は微量である。土師器甕１点が、床面の近くから出土している。

出土遺物　図示できた遺物は、土師器甕１点である。薄手の作りで、器面は摩滅している。体部外面にはヘラケズリが施される。甕のみのため時期を特定することは難しいが、竪穴の規模などを含め本竪穴は９世紀代と考えられる。



第64図　(10)SI018

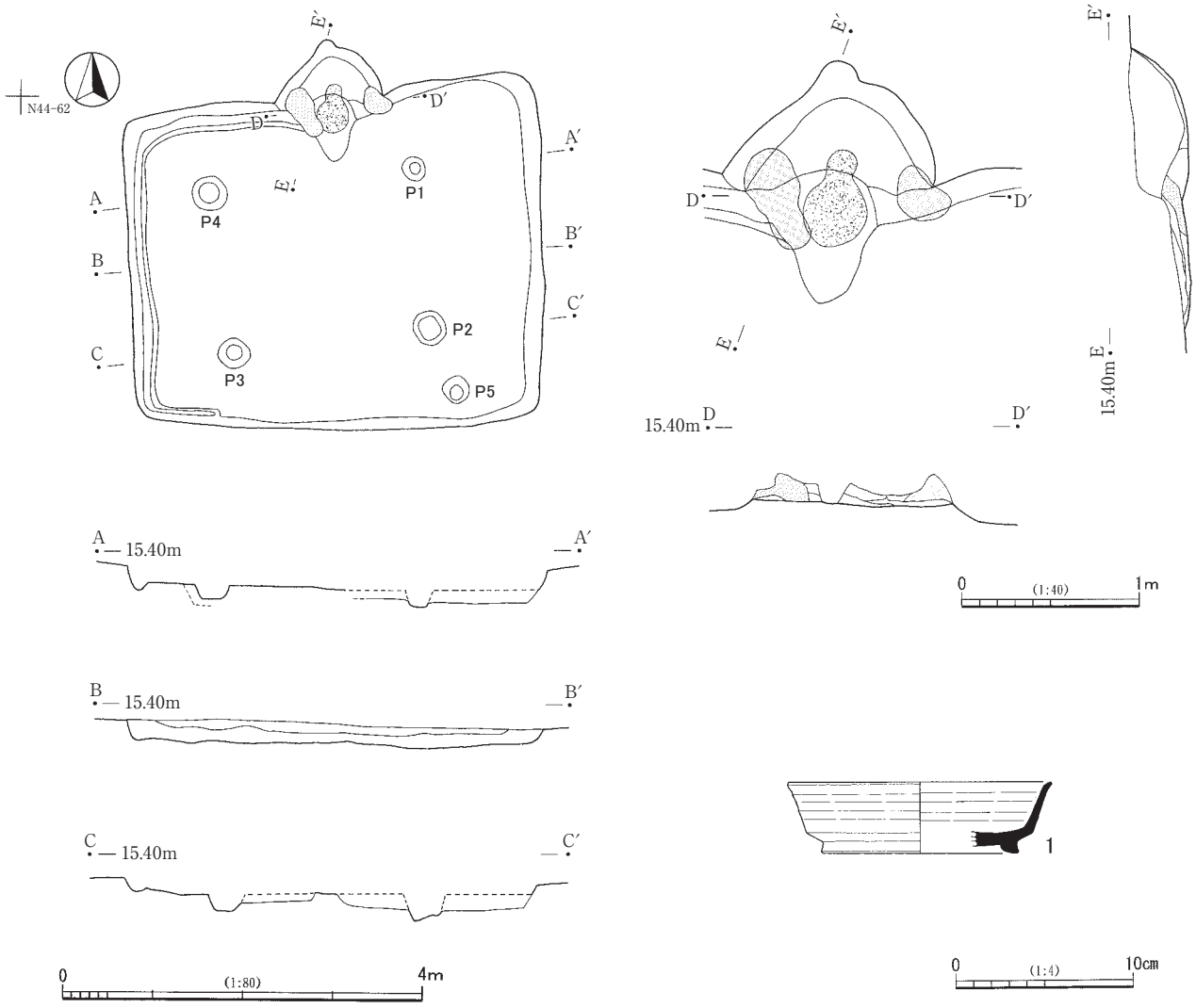
(10)SI020A（第65図、図版12・28）

位置・形態　N44－62グリッドを主体に検出された。本竪穴の平面の形態は東西方向に長い長方形を呈する。規模は4.6m×3.6mである。カマドは北壁にあり、主軸方位は真北を向く。検出面から床面までの深さは北壁31cm、西壁22cm、南壁22cm、東壁33cmである。本竪穴の床剥がし作業後に、もう一軒主軸方位の異なる竪穴が検出された。主軸が異なることから、建て替えなどではなく時期を異にする竪穴住居跡と考えられ、SI020Bという別番号とした。

覆土　黒褐色土を主体とし、少量の焼土粒が混入する。

施設等　５基のピットと周溝、カマドが検出された。P1～P4は規則的に配列されており、主柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が14cm、P2が26cm、P3が10cm、P4が19cmでいずれも浅い。P5は深さ14cmあり、入口の梯子ピット考えられる。周溝はカマドから南壁の一部まで巡っている。カマドの遺存状態はあまり良くない。袖部が僅かに残る程度である。火床面はよく焼けていた。

遺物出土状況　出土量は微量である。



第65図　(10)SI020A

出土遺物　図示できた遺物は、須恵器高台付坏１点である。１は緻密な胎土で、混入物がほとんどない。東海産と考えられる。出土遺物から、本竪穴は８世紀第２四半期と考えられる。

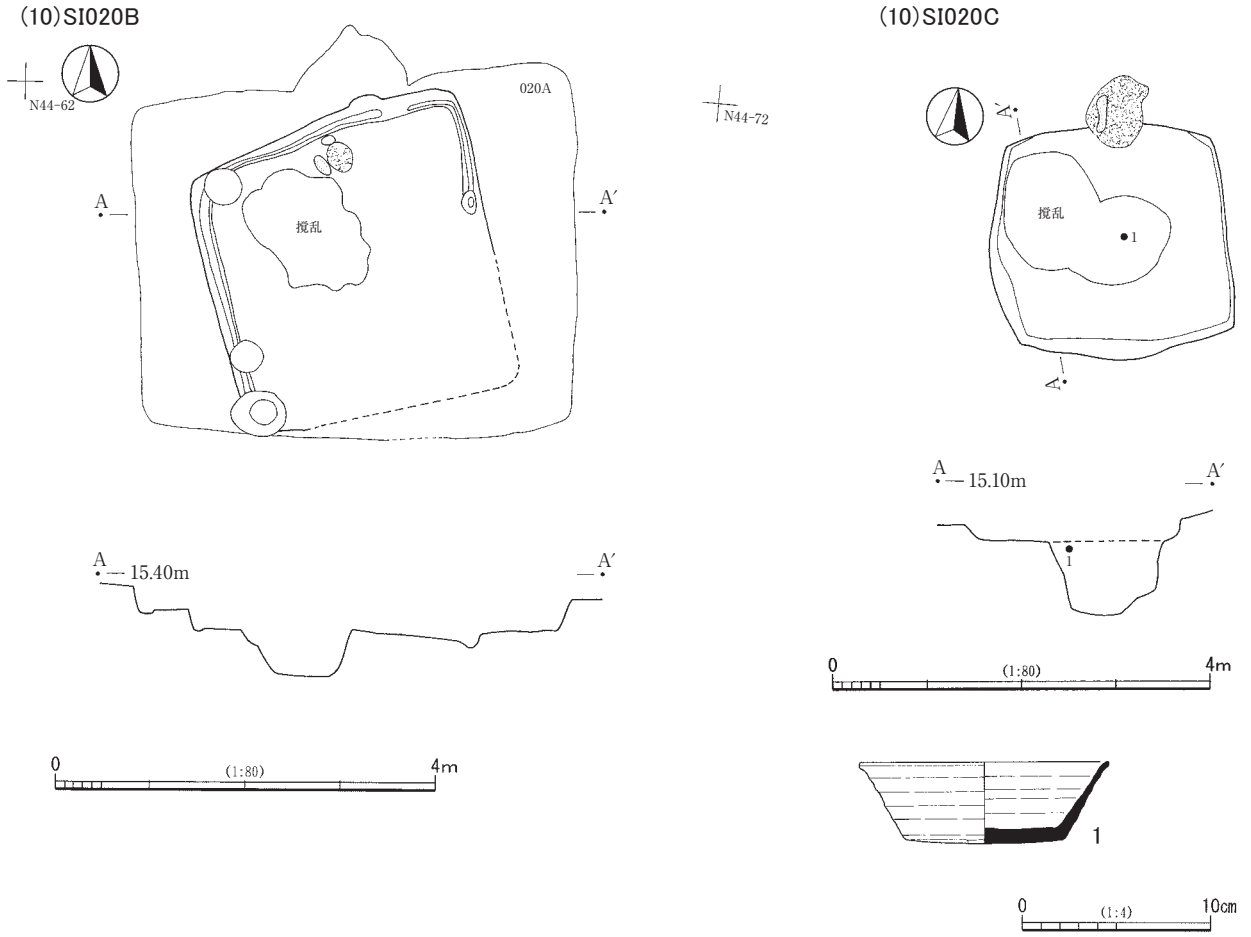
(10)SI020B（第66図、図版12）

位置・形態　N44－62グリッドを主体に検出された。本竪穴は(10)SI020Aの床面下で検出された。検出された周溝から、本竪穴の平面の形態は方形を呈すると考えられ、規模は遺存している東西方向で3.0mを測る。カマドは火床面が検出されたことから北壁にあり、主軸方位はN－16°－Wと考えられる。検出面から床面までの深さは北壁21cm、西壁19cm、東壁８cmである。

覆土　暗褐色土を主体とし粘質で硬く締まっていた。

施設等　周溝とカマドが検出された。周溝は北側と西側及び東側の一部に巡っている。カマドは火床面に焼土粒及び構築材に用いられたと考えられる山砂が僅かに残っていた程度である。

遺物出土状況　遺物は出土しなかった。本竪穴の時期は、本竪穴を壊しているSI020Aが８世紀第Ⅱ四半期であること、竪穴の規模が小規模であることから８世紀第１四半期～第２四半期の竪穴の可能性が高いと考えられる。



第66図　(10)SI020B・(10)SI020C

(10)SI020C（第66図、図版28）

位置・形態　N44－72グリッドを主体に検出された。SI020Aの南側に隣接して検出された。中近世の溝状遺構などに壊されており、竪穴の遺存状態は悪く、北壁はほとんど検出されなかった。平面の形態は方形を呈する。規模は2.5m×2.4mで小規模である。カマドは北壁中央で火床面のみが検出された。主軸方位はN－6°－Wである。検出面から床面までの深さは西壁17cm、南壁18cm、東壁25cmである。

覆土　黒褐色土を主体とし僅かに焼土粒が混入する。下層は暗黄褐色土を主体とし、少量の焼土粒及びローム粒が混入する。

施設等　カマドの火床面のみが検出された。カマド煙道部の張り出しは大きかったようである。

遺物出土状況　出土量は微量である。

出土遺物　図示できた遺物は、須恵器坏１点である。大きな撹乱の中から出土しており、本竪穴に伴うとは断定しきれない。１は胎土に雲母及び砂粒を多く含み新治産と考えられる。底部は回転ヘラ切りの後、回転ヘラケズリが施される。１を本竪穴に伴うものとすれば、本竪穴は８世紀第３四半期と考えられる。

(10)SI021（第67図、図版12・28・29）

位置・形態　N44－91グリッドを主体に検出された。南壁は溝状遺構によって約３分の１が撹乱されている。平面の形態は方形を呈すると考えられる。規模は遺存している東西方向で3.5mを測る。カマドは北壁にあり、主軸方位はN－2°－Wである。検出面から床面までの深さは他の竪穴と比較して深く、北壁85cm、西壁56cm、東壁41cmである。

覆土　黒色土を主体とし、僅かに焼土粒が混入する。

施設等　ピット５基とカマドが検出された。P1～P4は規則的に配列され、主柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が25cm、P2が12cm、P3が26cm、P4が26cmある。東壁近くのP5は深さ26cmあり、入口の梯子ピットの可能性がある。P6は床面からの深さが26cmあり、貯蔵穴の可能性がある。北西コーナーのピットは、不定形であり、撹乱の可能性が高い。周溝は検出されなかった。北壁のカマドは煙道部が大きく張り出している。袖部の遺存は良い。火床面はよく焼けており、焼土が厚く堆積していた。

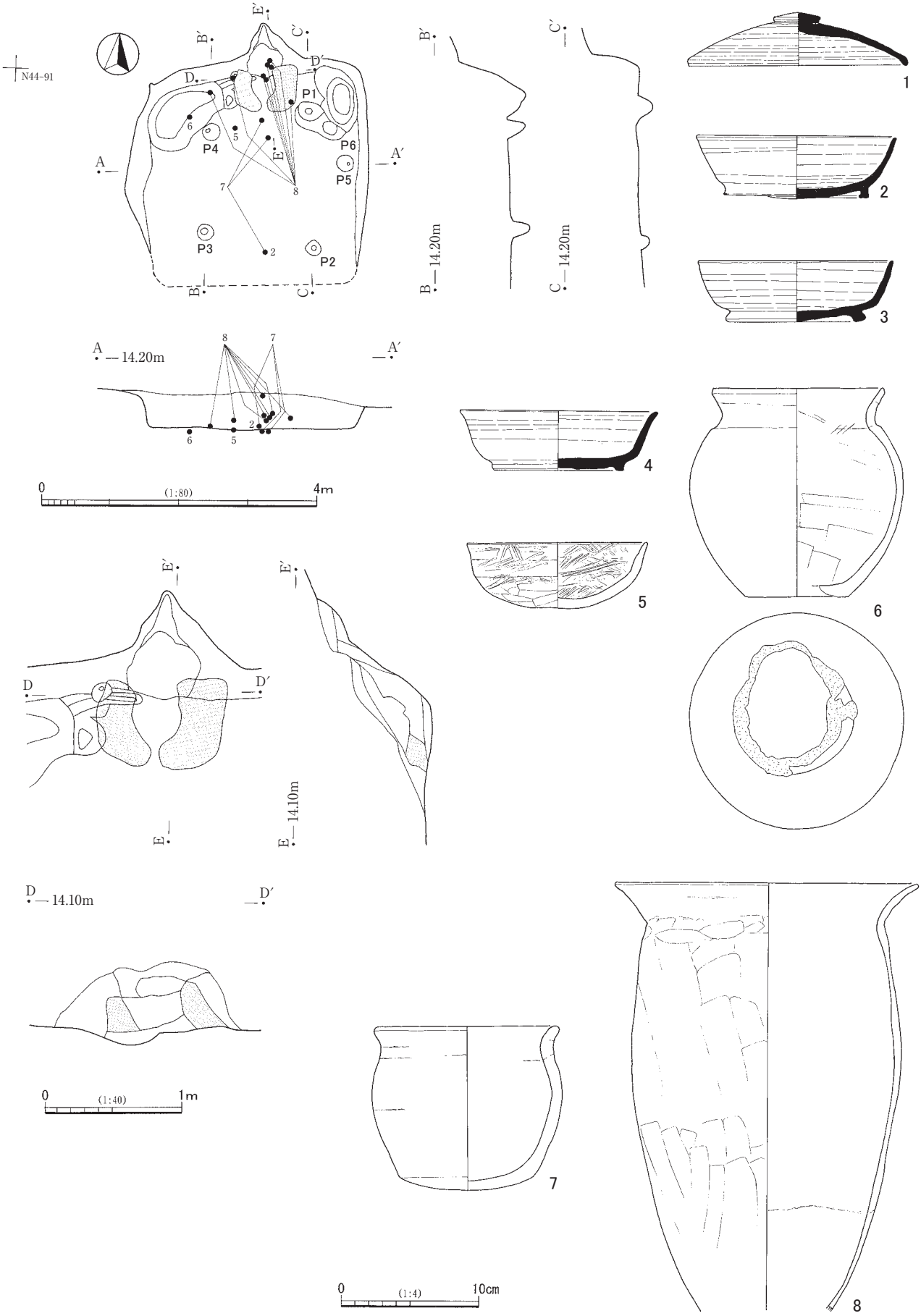
遺物出土状況　出土量は他の竪穴と比較して多い。出土遺物は概ねカマドの周辺に集中しており、カマドからは長胴甕が出土している。

出土遺物　図示できた遺物は、須恵器蓋１点・高台付坏３点、土師器坏１点・小型の甕２点・長胴甕１点である。１の須恵器蓋は胎土が比較的粗い。２～４は須恵器高台付坏である。いずれも胎土に若干の砂粒が混ざる。５は大きめの土師器坏である。体部外面はハケ目が施された後、ヘラケズリが施される。内面はハケ目調整の後、ヘラミガキ調整が施される。６・７は土師器小型甕である。６の底部は焼成後に内面からの敲打で打ち欠かれている。胎土は砂粒などを多く含む。器面は摩滅が著しい。７は体部外面にヘラケズリ調整が施される。底部は丸味があり不安定である。８は土師器長胴甕である。薄手の作りで、体部外面はヘラケズリ調整が施される。出土遺物から、本竪穴は８世紀第１四半期～第２四半期と考えられる。

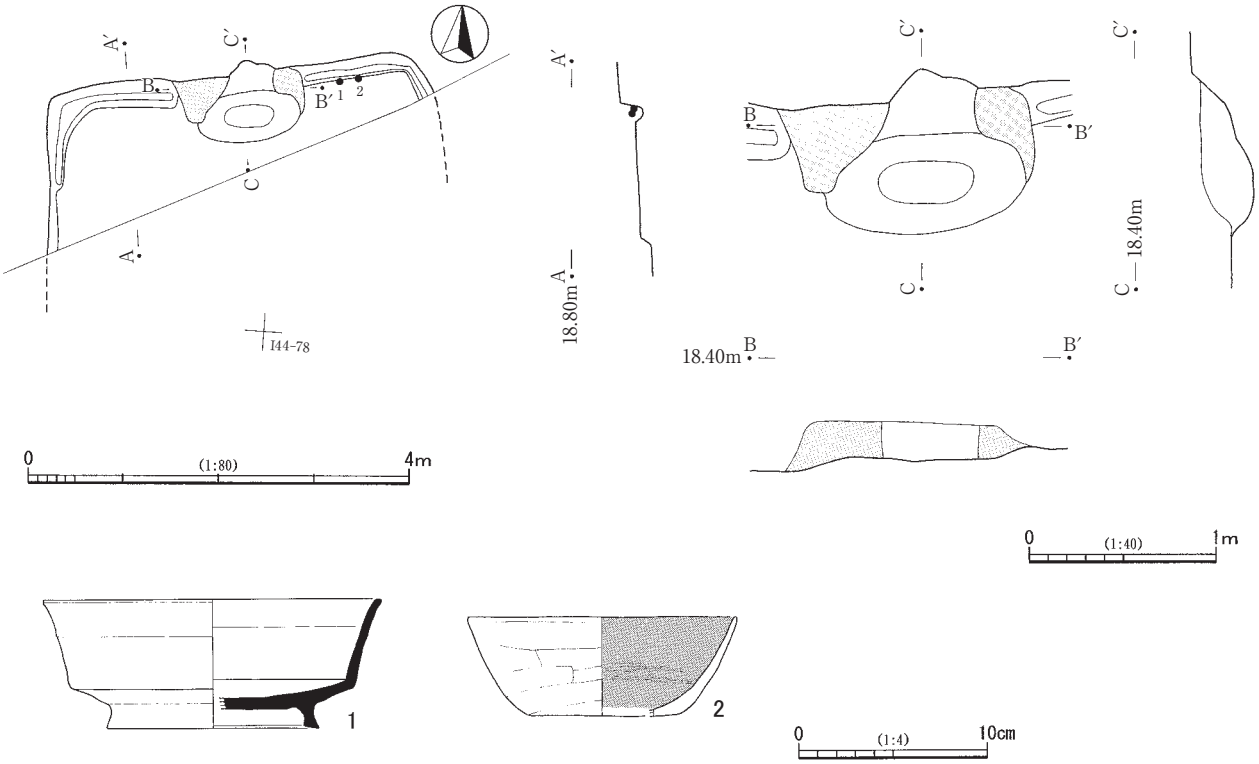
(11)SI002（第68図、図版12）

位置・形態　I44－68グリッドを主体に検出された。北側の一部を残して、大部分は失われている。平面の形態は方形を呈すると考えられる。規模は遺存する東西方向で4.1mを測る。カマドは北壁にあり、主軸方位はN－4°－Wである。検出面から床面までの深さは、北壁18cmである。

覆土　暗褐色土を主体とし、粘性が強い。ソフトローム粒が少量混入する。



第67図　(10)SI021



第68図　(11)SI002

施設等　周溝とカマドが検出された。カマドの煙道部は張り出しがほとんどない。

遺物出土状況　出土量は微量である。カマド右袖脇から出土している。

出土遺物　図示できた遺物は、須恵器高台付坏１点、土師器坏１点である。１は須恵器高台付坏である。胎土に雲母及び砂粒を多く含む。新治産と考えられる。２は土師器坏である。体部内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。出土遺物から、本竪穴は８世紀第２四半期と考えられる。

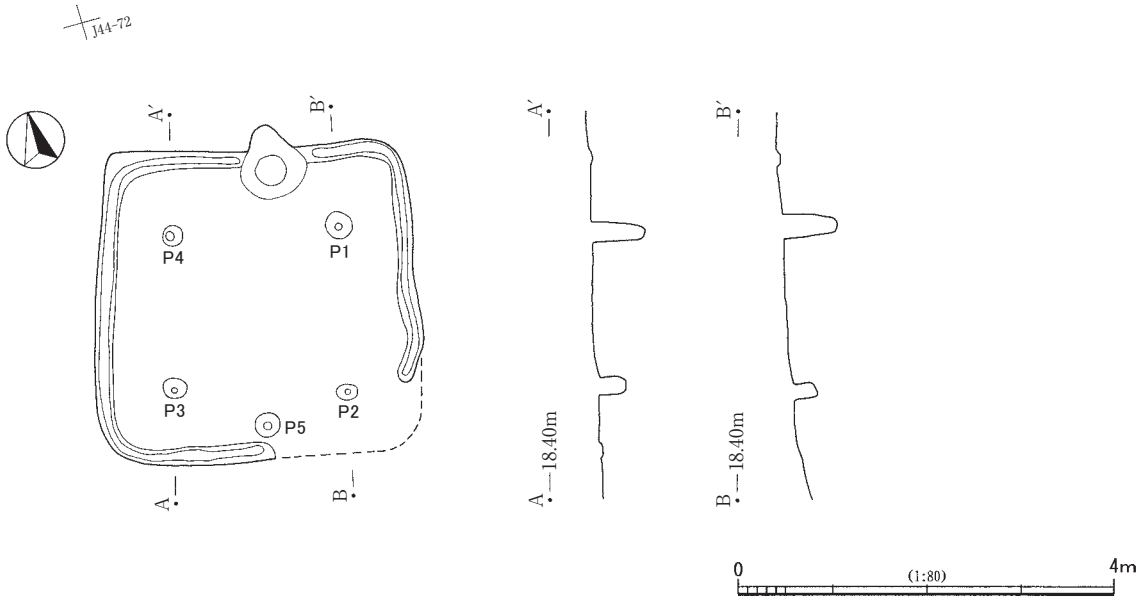
(11)SI003(第69図、図版13)

位置・形態　Ｊ44－72グリッドを主体に検出された。竪穴の遺存状態は良くないが、辛うじて竪穴の全体形を検出することができた。覆土はほとんど残されていない。平面の形態は方形を呈する。規模は3.4m×3.3mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はＮ－11°－Ｅである。検出面から床面までの深さは、残存している北壁４cm、西壁３cmである。

覆土　覆土はほとんど失われている。

施設等　ピット５基と周溝、カマドの火床面のみが検出された。P1～P4は規則的に配列され、主柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が55cm、P2が25cm、P3が31cm、P4が53cmである。南壁近くのP5は深さ17cmあり、入口の梯子ピット考えられる。周溝は全周していたと考えられる。カマドもほとんど遺存しておらず、火床面が僅かに残っていた程度である。

遺物出土状況　遺物は出土しなかったことから、時期を特定することは難しいが、竪穴の規模と周辺の竪穴の状況から８世紀代の竪穴と推測される。



第69図　(11)SI003

(11)SI004(第70図、図版13・29・31)

位置・形態　Ⅰ44－48グリッドを主体に検出された。平面の形態はやや歪んだ方形を呈する。規模は4.5m×4.2mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はN－5°－Eである。検出面から床面までの深さは、北壁16cm、西壁７cm、南壁２cm、東壁13cmである。

覆土　暗褐色土を主体とし、粘性が強い。焼土粒が少量混入する。

施設等　ピット１基と周溝、カマドが検出された。１基だがP1は柱穴の可能性がある。床面からの深さは28cmである。周溝は北東と北西コーナーに一部分巡っている。カマドの遺存状態は比較的良かった。煙道部の張り出しは小さい。

遺物出土状況　出土量は少ない。ほとんどが床面から出土している。

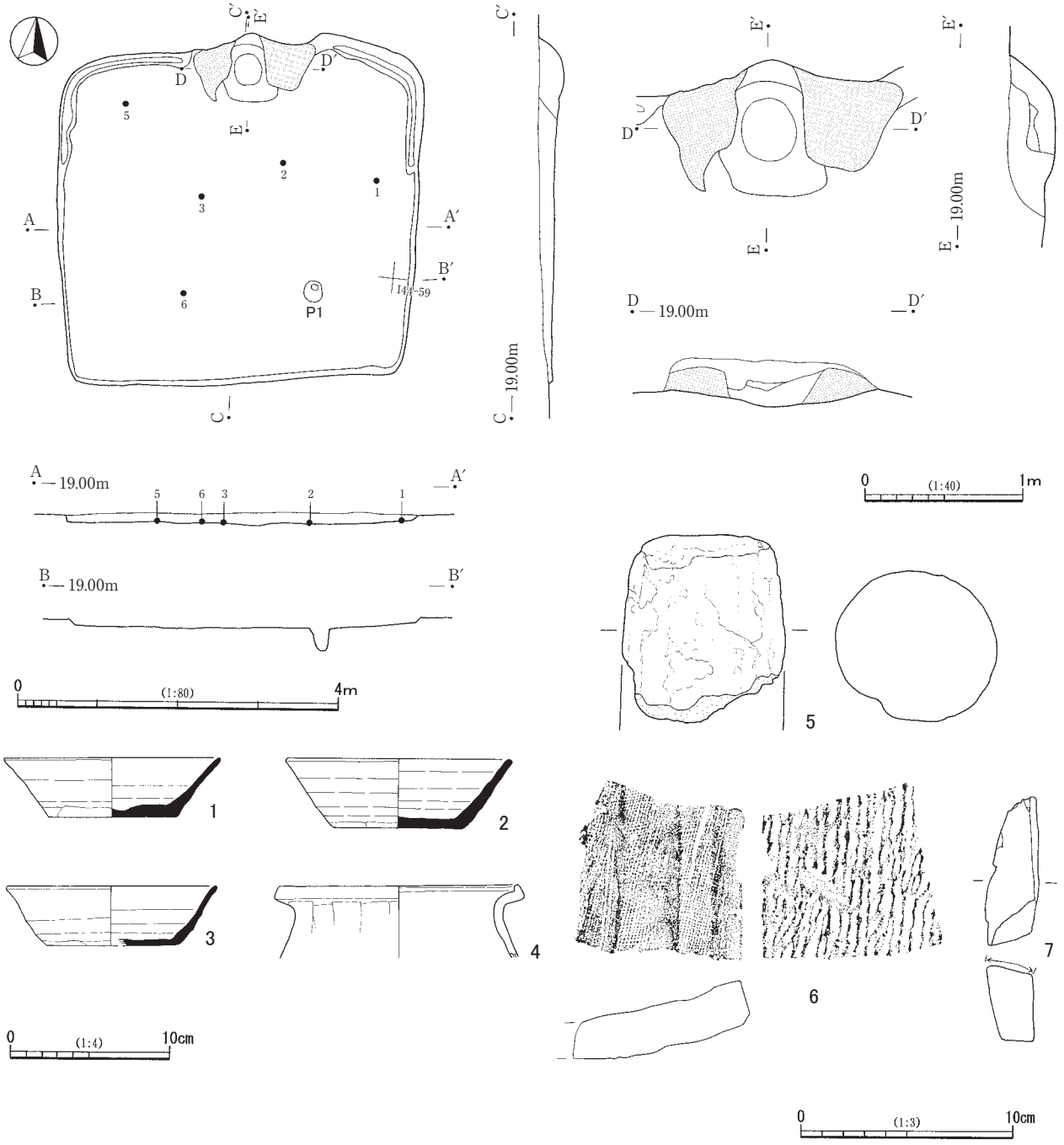
出土遺物　図示できた遺物は、須恵器坏３点、土師器甕１点、支脚１点、平瓦１点である。１～３は須恵器坏である。胎土に雲母及び砂粒を多く含み、新治産と考えられる。４は甕である。胎土に雲母及び砂粒を多く含み、常陸産と考えられる。口縁部の外反が顕著で、受け口縁状である。５は大きな支脚の頭部である。床面から出土している。６は平瓦の破片である。床面から出土している。７は柱状の砥石である。出土遺物から本竪穴は８世紀第３四半期と考えられる。

(11)SI006(第71図、図版13・29)

位置・形態　Ⅰ44－65グリッドを主体に検出された。平面の形態は方形を呈する。規模は3.4m×3.0mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はN－15°－Wである。検出面から床面までの深さは、北壁19cm、西壁７cm、南壁２cm、東壁19cmである。

覆土　暗褐色土を主体とし、粘性が強い。焼土粒及びローム粒が少量混入する。

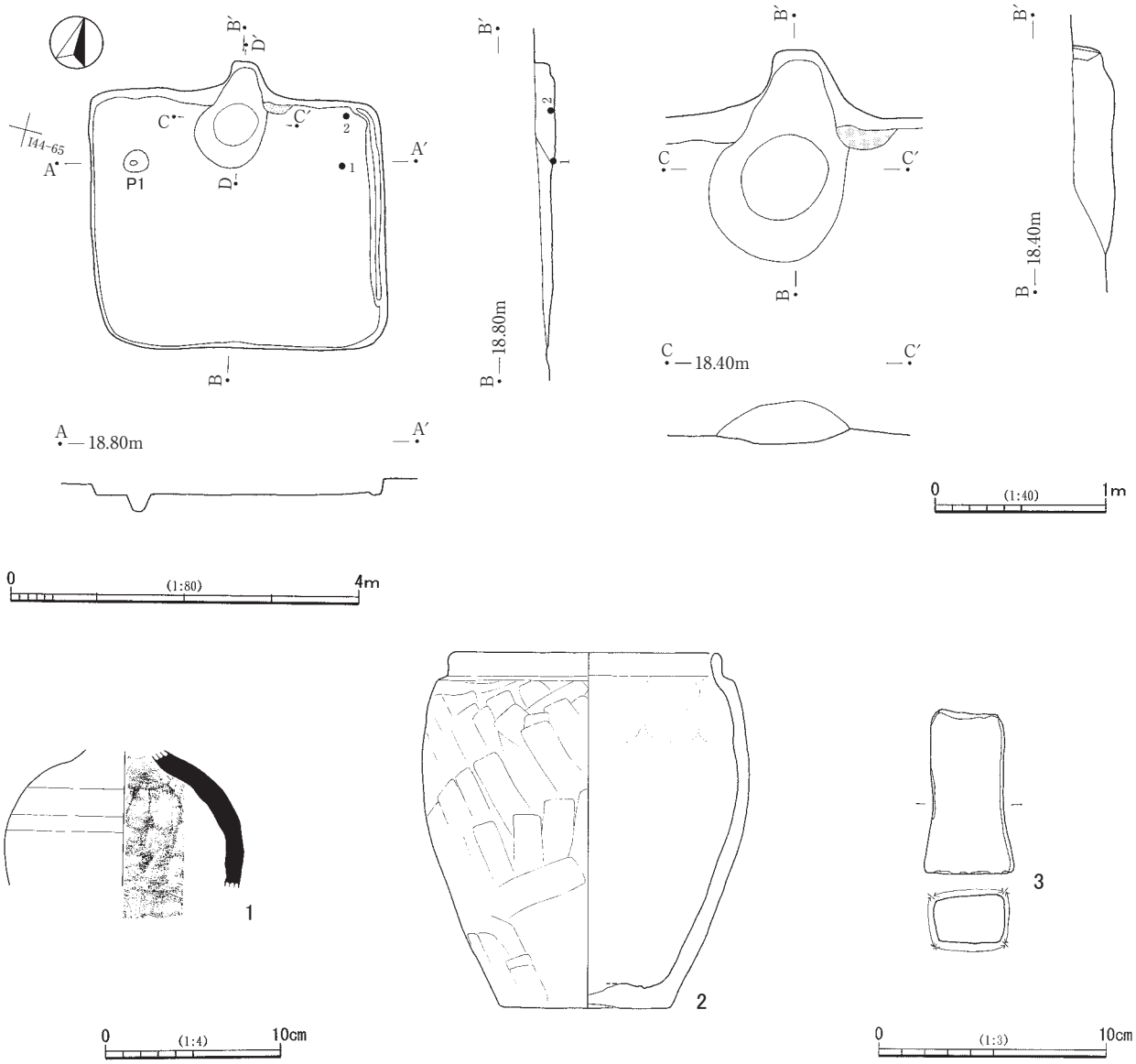
施設等　ピット１基と周溝、カマドが検出された。P1の床面からの深さは18cmである。柱穴の可能性は低い。周溝は東壁の一部で確認された。北壁のカマドはほとんど遺存していない。煙道部の張り出しが大きい。火床面には焼土が薄く堆積していた。



第70図　(11)SI004

遺物出土状況　出土量は微量である。北東コーナーから出土している。

出土遺物　図示できた遺物は、須恵器長頸壺１点、土師器甕１点、砥石１点である。１は小型品である。体部内面には指の押さえが残る。胎土には白色の砂粒が多く含まれる。２は甕としたが、蔵骨器というべき器形である。一般的には竪穴住居跡からの出土は珍しい。口縁部は、受け口縁状で、体部外面はヘラケズリである。３は砥石である。四面すべてを使用している。出土遺物から、本竪穴は８世紀第３～第４四半期と考えられる。



第71図　(11)SI006

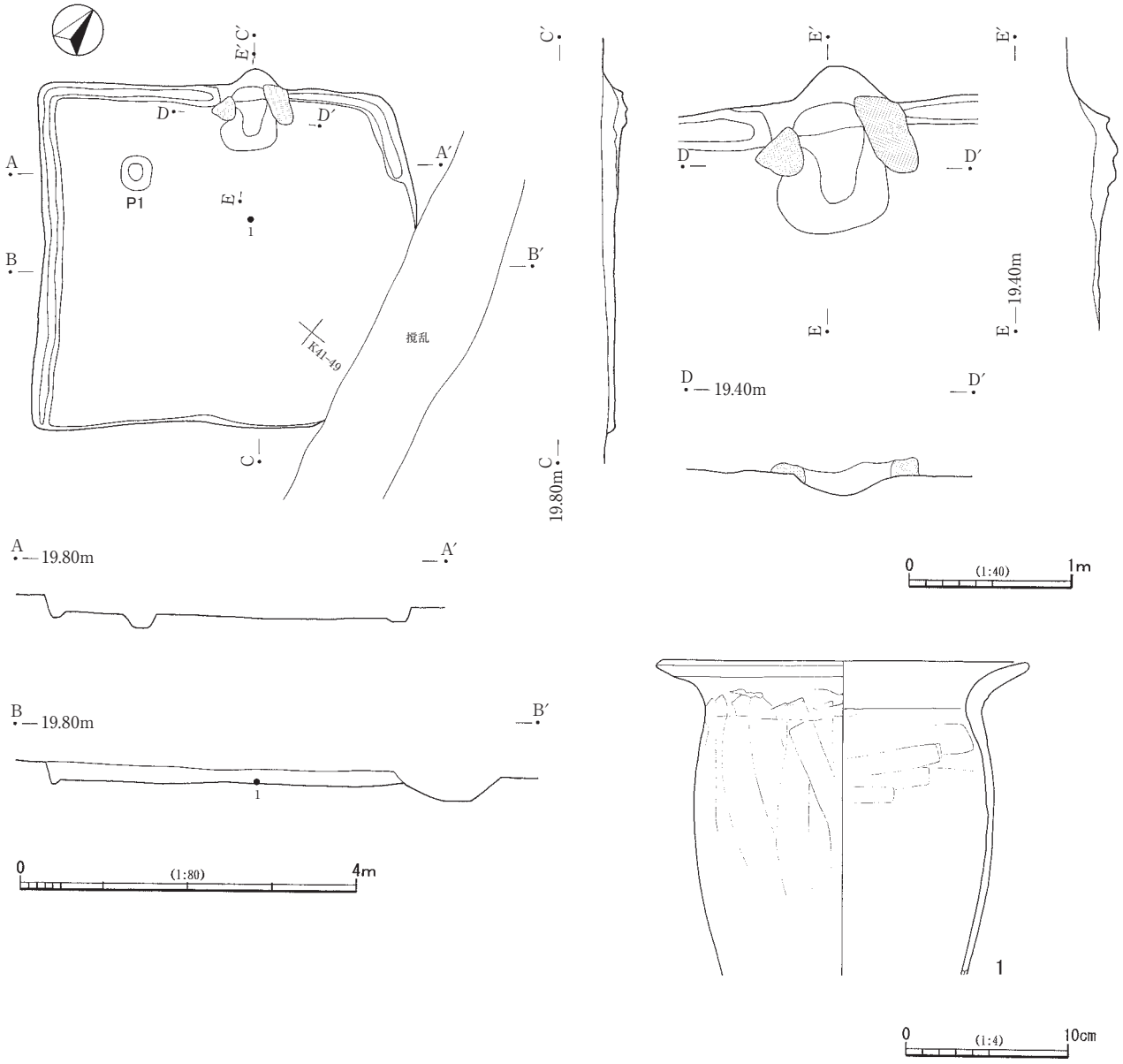
(11)SI011（第72図、図版13・29）

位置・形態　K41－48グリッドを主体に検出された。東側の一部が溝状遺構によって壊されている。平面の形態はやや歪んだ方形を呈する。規模は4.5m×4.1mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はN－37°－Wである。検出面から床面までの深さは、北壁22cm、西壁29cm、南壁12cmである。

覆土　暗褐色土を主体とし、粘性が強く良く締まっている。焼土粒が少量混入する。

施設等　ピット１基と周溝、カマドが検出された。P1は定型的な柱穴の位置にあり柱穴の可能性がある。床面からの深さは12cmである。周溝は東壁の北側から西壁にかけて巡っている。カマドの遺存状態はあまり良くない。袖部の構築材が僅かに残っていた程度である。

遺物出土状況　出土量は微量である。中央の床面から土師器甕が１点出土している。



第72図　(11)SI011

出土遺物　図示できた遺物は、土師器甕１点である。胎土には砂粒を多く含み、薄手の作りである。体部外面はヘラケズリが施される。甕のみのため時期を特定することが難しいが、本竪穴は８世紀代中葉あたりであろう。

(11)SI012（第73図、図版13・31）

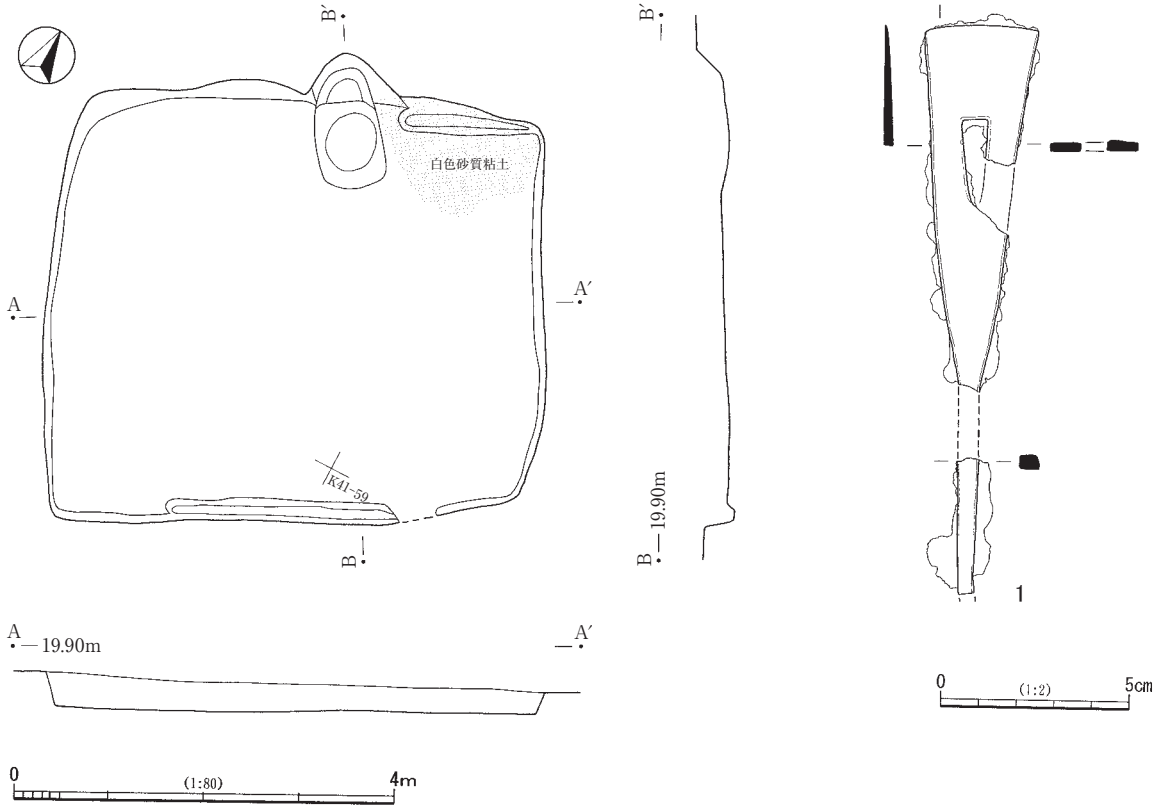
位置・形態　K41－48グリッドを主体に検出された。北東コーナーが撹乱されている。平面の形態は東西方向に若干長い長方形を呈する。規模は5.3m×4.6mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はN－26°－Wである。検出面から床面までの深さは、北壁29cm、西壁31cm、南壁19cm、東壁26cmである。

覆土　暗褐色土を主体とし、粘性が強く、良く締まっている。焼土粒が少量混入する。

施設等　周溝、カマドが検出された。周溝は南壁中央部の一部に限られている。カマドは遺存状態が悪く、カマド構築材はほとんど残っていなかった。カマド右袖から北東コーナーにかけてのトーンで示した範囲には、最高7cmの厚さで白色砂質粘土が検出された。

遺物出土状況　竪穴の遺存の悪さもあり、微量であった。鉄鏃が１点覆土から出土している。

出土遺物　１は大型の鉄鏃で、有茎平根式の方頭を呈する鏃である。二等辺三角形を呈し先端はほぼ直刃である。鏃身の中央に外形と同じ逆三角形の透かしがある。茎は末端と中間を欠損している。全長は17cm程度と推測される。時期を特定できる土器の出土がないが、竪穴の規模と周辺の竪穴住居跡の配置状況などから、８世紀代と考えられる。



第73図　(11)SI012

(11)SI014（第74図、図版14・29）

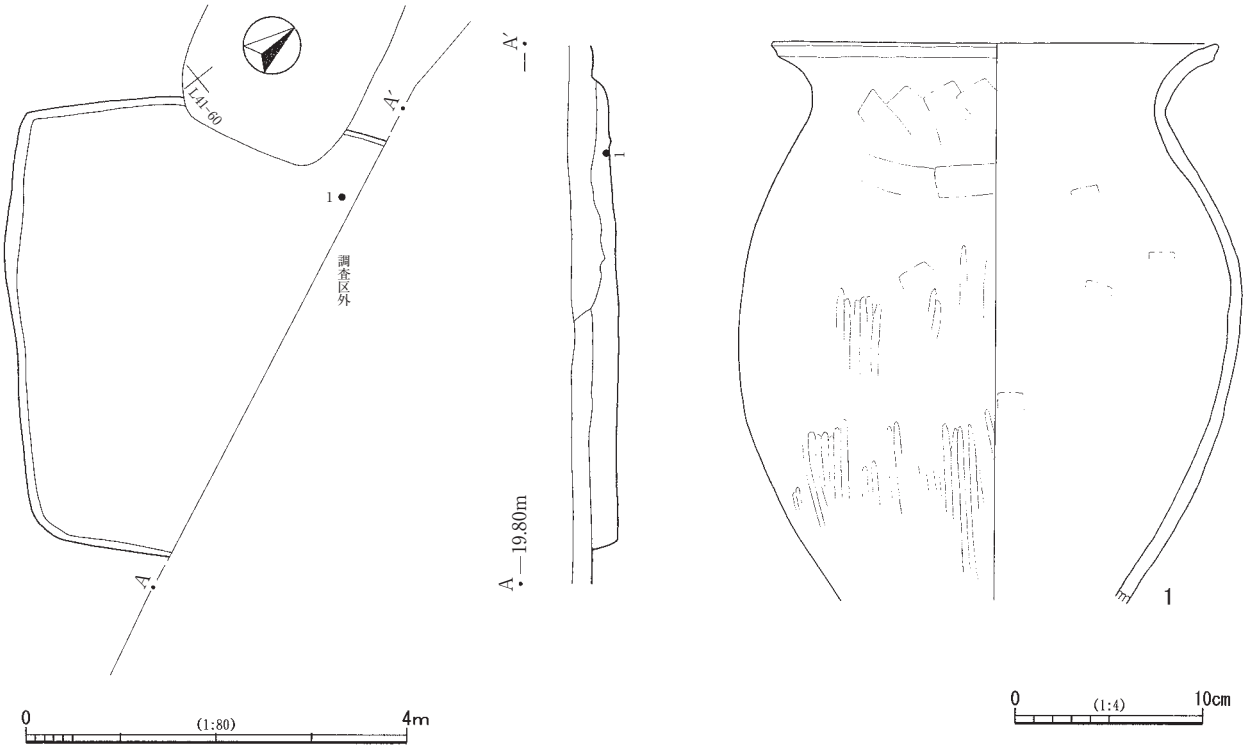
位置・形態　L41－60グリッドを主体に検出された。東側の大部分は調査区外で、竪穴の約半分が検出された。また、カマドが位置するとみられる北壁の中央部分も撹乱されている。平面の形態は方形を呈すると考えられる。規模は遺存している部分で4.6mを測る。主軸方位はN－51°－Wと推定される。検出面から床面までの深さは、北西壁 24cm、南西壁18cm、南東壁21cmである。

覆土　暗褐色土を主体とし、粘性が強く、良く締まっている。少量の焼土粒が混入する。

施設等　ピット、周溝などは検出されなかった。カマドは、北壁に設置されていたと考えられる。

遺物出土状況　出土量は微量である。北東床面から甕が出土している。

出土遺物　図示できた遺物は、土師器甕１点である。胎土に雲母及び砂粒を多量に含んでおり、常陸型甕である。体部外面はヘラケズリ後ヘラミガキが施される。甕のみのため時期を特定するのは難しいが、本竪穴は８世紀代と考えられる。



第74図　(11)SI014

(12)SI001（第75図、図版14）

位置・形態　N44－41グリッドを主体に検出された。南側の大部分と東壁の一部が撹乱を受けているほか、全体に竪穴の遺存状態は悪い。平面の形態は方形を呈し、4.7m×4.5mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はN－20°－Wである。検出面から床面までの深さは、北壁16cm、西壁８cm、南壁６cm、東壁９cmである。

覆土　覆土の堆積は浅い。暗褐色土を主体とし、粘性が強い。

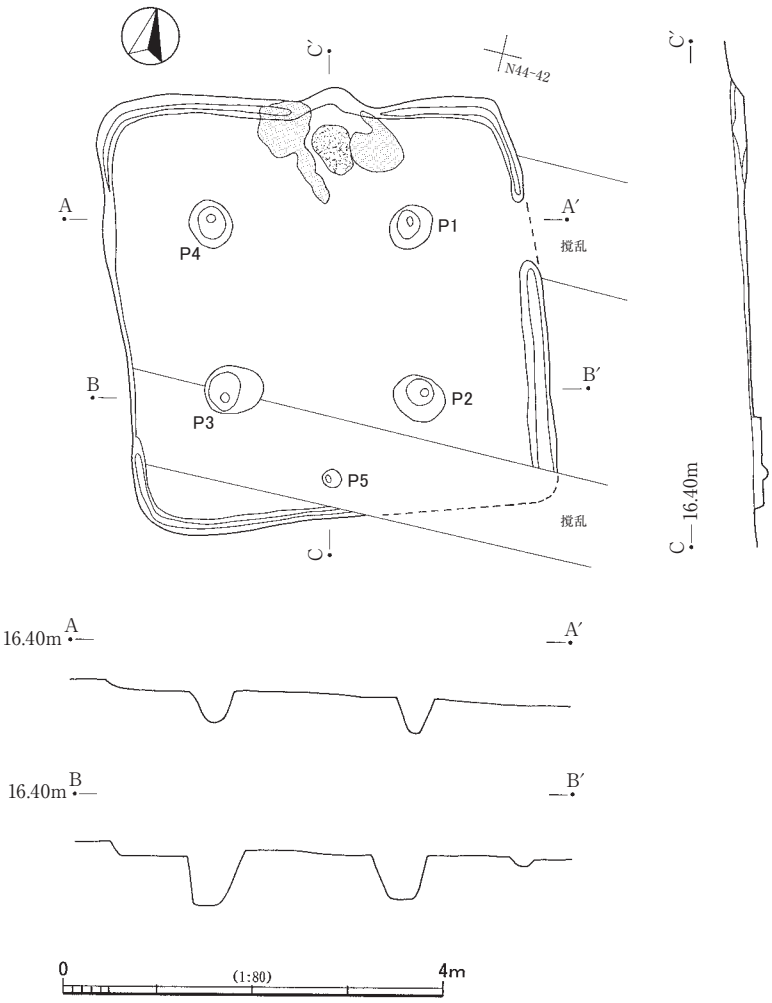
施設等　ピット５基と周溝、カマドが検出された。P1～P4は規則的に配列され、主柱穴と考えられる。床面からの深さはP1が36cm、P2が48cm、P3が56cm、P4が33cmである。南壁近くのP5は深さが10cmあり、入口の梯子ピット考えられる。周溝は西壁の中央部分を除いて巡っている。カマドの遺存状態は悪く、カマド構築材の粘土が周囲に散らばっている。煙道部の張り出しは小さい。火床部は良く焼けていた。

遺物出土状況　出土量は少なく、図示できる遺物はなかった。竪穴の形態や他の竪穴の配置状況から９世紀代の可能性が高いと考えられる。

(15)SI001（第76図、図版14）

位置・形態　K44－19グリッドを主体に検出された。南側の大半と南北方向に走る水道管の敷設工事によって撹乱を受けている。平面の形態は方形を呈すると考えられる。規模は他の竪穴住居跡と比較して大きく、遺存している東西方向で6.1mを測る。主軸方位はN－18°－Eと推定される。検出面から床面までの深さは、北壁18cm、西壁27cm、東壁14cmである。

覆土　覆土はほとんど失われていた。



第75図　(12)SI001

施設等　ピット２基と周溝が検出され、北側のカマドは撹乱により失われていると推測される。P1・P2は規則的に配列され、柱穴の可能性が高いと考えられる。床面からの深さはP1が32cm、P2が84cmである。遺存した範囲では周溝は確認された。

遺物出土状況　遺物が出土しなかったため、時期は特定できないが、８世紀前半の周辺竪穴群の主軸方位と類似することから、本竪穴の時期は８世紀代の可能性が高い。

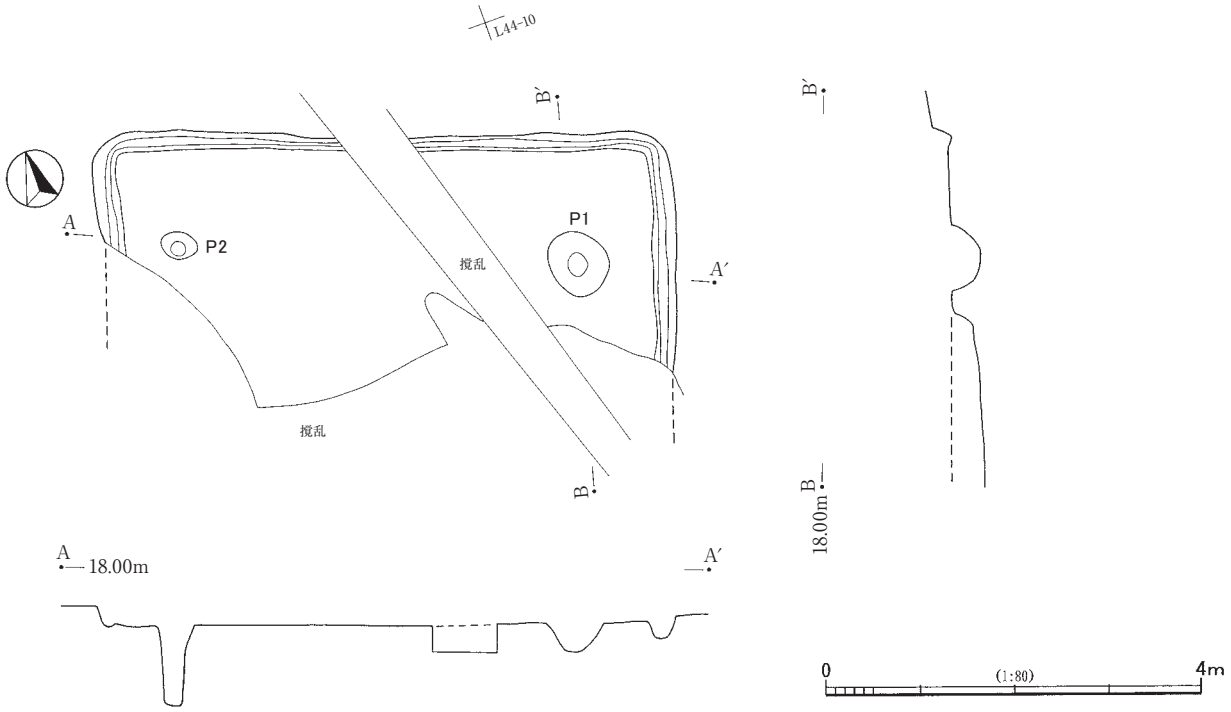
(15)SI002（第77図、図版14・30）

位置・形態　Ｌ44－40グリッドを主体に検出された。南側の大半は調査区外となり、竪穴の北西コーナー部分が僅かに検出された程度である。平面の形態は方形であろう。規模は検出している東西方向ではおおよそ4.0m程度であろう。主軸方位はＮ－13°－Ｅである。検出面から床面までの深さは他の竪穴と比較して深く、北壁61cmである。

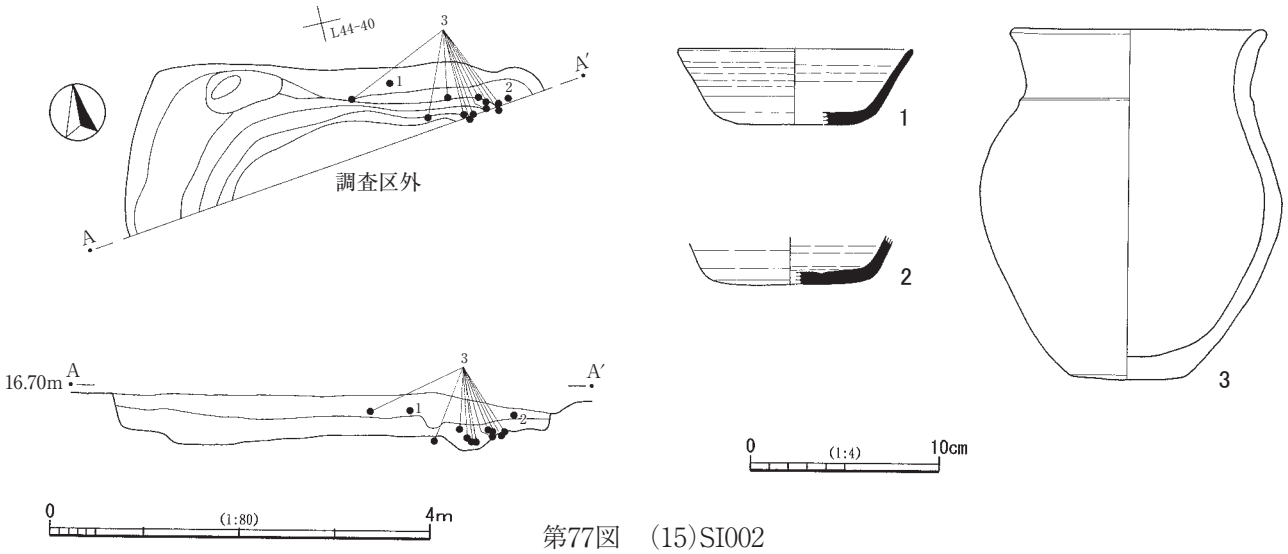
覆土　暗褐色土を主体とし、炭化材及び焼土を少量混入する。良く締まっている。

施設等　周溝が検出された。カマドの痕跡が確認できなかったことから､隅カマドの可能性もあるだろう。

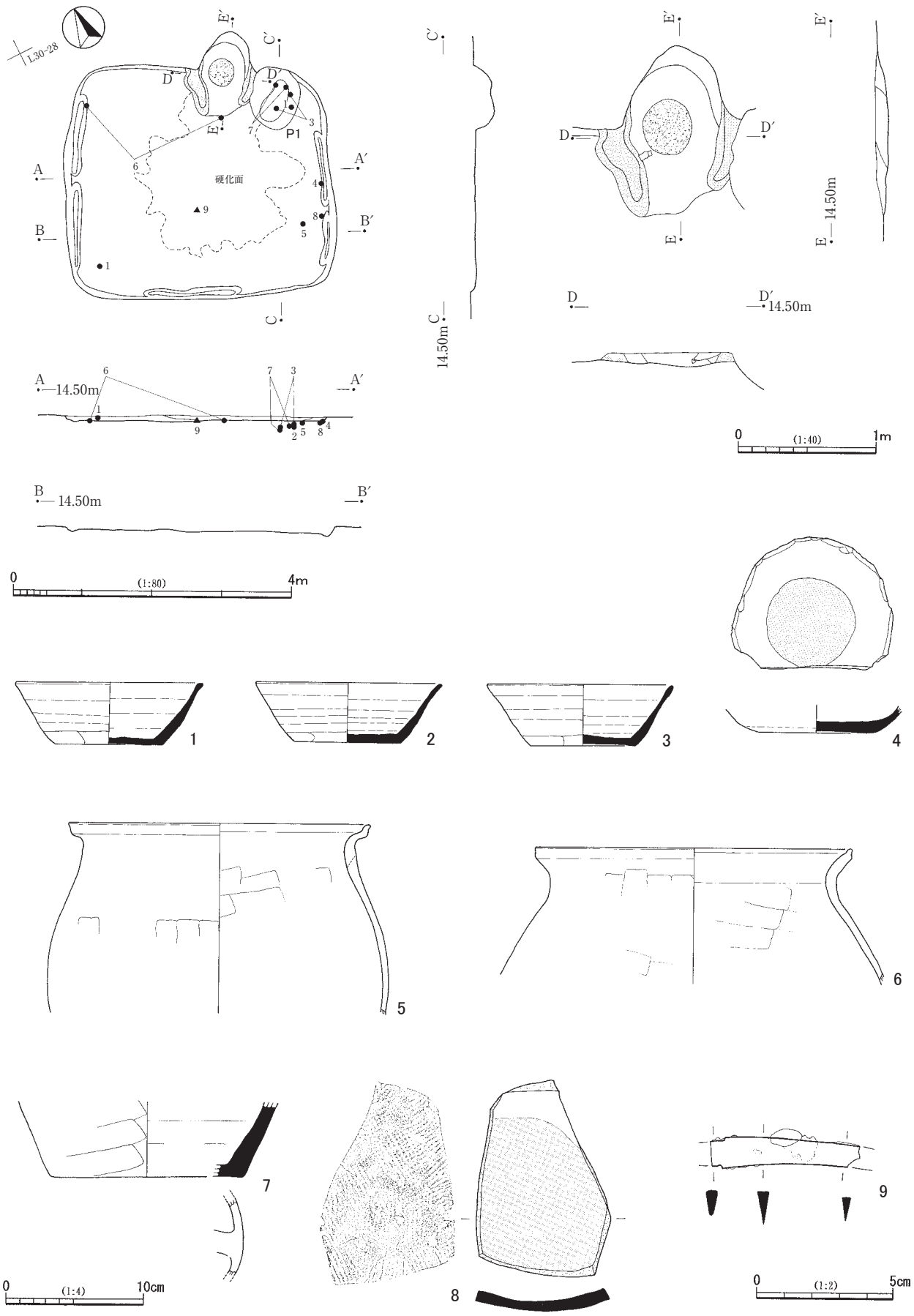
遺物出土状況　出土量は少ない。北東コーナーの周溝上でまとまって出土している。遺物のほとんどは覆土中から出土している。



第76図　(15)SI001



第77図　(15)SI002



第78図　(16)SI031

出土遺物　図示できた遺物は、須恵器坏２点、土師器甕１点である。１・２は須恵器坏である。２は厚手の作りである。３の土師器甕は、口縁部ヨコナデされ、胴部調整との境が明瞭な稜線となっている。器面は摩滅が著しく、胴部の調整は不明瞭である。本竪穴の時期は８世紀第４四半期と考えられる。

(16)SI031（第78図、図版14・30・31）

位置・形態　Ｌ30－28グリッドを主体に検出された。竪穴は小規模で、平面の形態はやや歪んだ方形を呈し、3.9m×3.5mである。カマドは北壁にあり、主軸方位はＮ－28°－Ｅである。竪穴の掘り込みが辛うじて残っており、検出面から床面までの深さは北壁６㎝、西壁７㎝、南壁11㎝、東壁８㎝である。

覆土　覆土が非常に浅く、記録を取れなかった。

施設等　ピット１基と周溝、カマドが検出された。P1はカマドの側に位置し、貯蔵穴と考えられる。床面からの深さは20㎝である。周溝は東西と南壁の中央部分で検出された。カマドは大部分が失われており、遺存状態は悪い。袖部は確認できた。煙道部の張り出しは大きく、火床部は良く焼けていた。竪穴の床面中央が硬化していた。

遺物出土状況　出土量はやや多かった。北東の貯蔵穴周辺及び貯蔵穴内からまとまって出土している。

出土遺物　図示できた遺物は、須恵器坏４点・甑１点、土師器甕２点、甕の破片を利用した転用硯１点、刀子１点である。１～３は須恵器坏である。いずれも胎土に砂粒と雲母を多く含み､新治産と考えられる。底部はヘラ切り後、手持ちヘラケズリが施される。４は須恵器坏で１～３の坏とは趣を異にし産地が異なるようである。内面に明瞭な研磨面があり、縁辺は形態を整えるための打ち欠きが行われており、転用硯と考えられる。底部は回転ヘラケズリが施される。５・６は甕である。いずれも胎土に砂粒と雲母を多く含み、常陸産と考えられる。７は須恵器甑である。胎土に砂粒と雲母を多く含む。体部外面はヘラケズリ調整が施される。８は須恵器甕の胴部破片で内面が平滑になっていることから転用硯と考えられる。９は鉄製刀子である。出土遺物から、本竪穴は８世紀第３四半期～第４四半期と考えられる。

第６章　中・近世の遺構と遺物

第１節　概要

検出された遺構のほとんどは、中世後半期以降と考えられる。一部には、近世前期の可能性が高い遺構が含まれている。遺構の種類としては、地下式坑20基、土坑墓１基、土坑17基、井戸７基、溝状遺構28条などが検出されている。このほか、ピット群が２か所検出されているが、詳細な時期が不明のため本節に含めることとした。また、中世の台地整形区画とみられる遺構が１か所発見されている。遺構の性格は異なるものの、調査地点ごとに遺構群としてのまとまりがあることから、各調査次順で詳述する。

主な中・近世遺構群のまとまりは、台地の最も標高が高く平地となった（８）や(16)などの調査地点のほか、(11)の南緩斜面などから限定した範囲で中世遺構群が検出されている。溝状遺構は、屋敷地の区画溝とみられるものが主で、地境溝や道路の側溝とみられるものの方が少ない。地下式坑なども屋敷地などの居住域内の遺構群として捉えることができるであろう。

第２節　地下式坑・土坑・井戸・その他

(5)SK013（第79図、図版15）

M43－70グリッドに位置する。周辺に中世遺構はなく単独の検出である。平面形は隅丸長楕円形を呈する。検出面の規模は長軸長1.47 m、短軸長0.84 m、検出面からの深さは0.24mである。覆土は黒褐色土を主体としている。出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

(5)SK014（第79図、図版15）

M42－60グリッドに位置する。平面形は円形を呈すると考えられる。検出面の規模は直径2.98mで、検出面からの深さは1.15mと深い。底面は平らである。覆土は暗褐色土を主体としている。底面近くでは焼土が若干堆積していた。出土遺物が微量あったものの、詳細な時期を特定することは難しい。

(5)SK020（第79図、図版15）

Ｌ42－89 グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、底面もほぼ相似形を呈している。(5)SD003が表層を壊しており、本土坑の方が古い。底面の規模は長辺3.00m、短辺2.15m、検出面からの深さは0.92mである。土坑の断面はフラスコ状を呈する。底面は平らである。覆土は黒褐色土を主体としている。

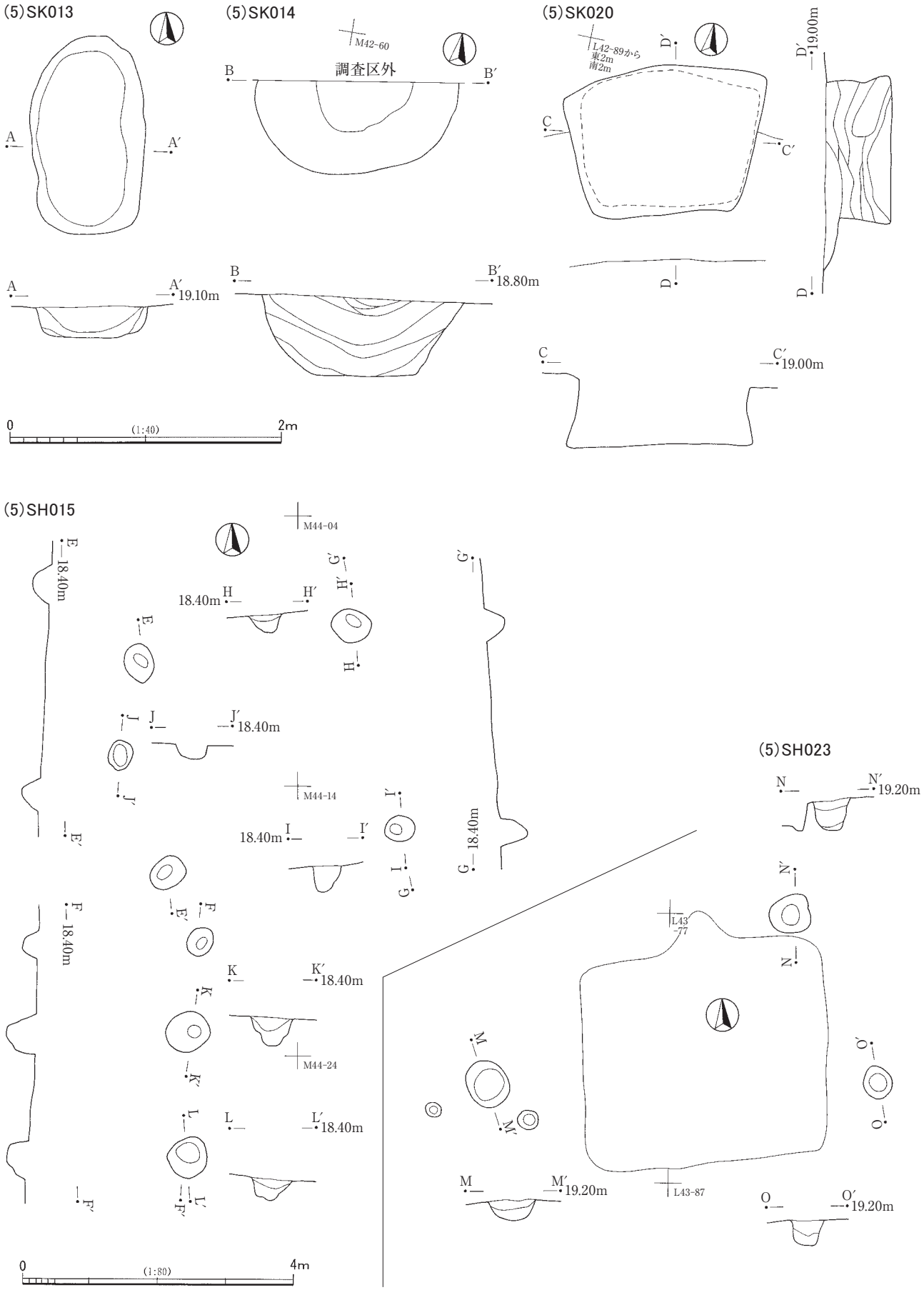
出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

(5)SH015（第79図、図版21）

M44－13グリッドに位置する。ピット群である。(5)SI009の竪穴住居跡に隣接するが、関連性はないと思われる。覆土の状態から中世までの時期のピットと思われるが、出土遺物はなく詳細な時期は不明である。８個のピットは規則性のある柱列にはなっていない。検出面からの深さは、浅いもので0.21m、最も深いもので0.44mあり、深さにバラツキがあり一つの遺構の存在を示唆するものではなさそうである。

(5)SH023（第79図）

Ｌ43－77グリッドに位置する。ピット群である。(5)SI005の竪穴住居跡に隣接するが、関連性はないと思われる。覆土の状態から中世までの時期のピットと思われるが、出土遺物はなく詳細な時期は不明である。検出面からの深さは、浅いもので0.26m、最も深いもので0.47mあり、深さにバラツキがある。



第79図　(5)SK013・(5)SK014・(5)SK020・(5)SH015・(5)SH023

(8)SK100（第80図、図版15）

Ｊ42－19グリッドに位置する。約半分が調査区外である。底面までの深さが相当にあり危険なため完掘するのを断念した。隣接する(14)SK001に類似するＴ字状を呈する地下式坑と推測される。北側が入口部とみられ、内部は抉り込まれて天井部が遺存している。天井部は崩落していると考えられる。覆土は底面近くにおいて暗褐色土を主体とし、後から黒褐色土が内部に流入している。入口の竪坑規模は径1.60m、室内規模は一辺約3.30m、検出面からの深さは1.48mである。出土遺物はないが、中世の地下式坑であろう。

(8)SK101（第80図、図版15）

Ｊ42－74グリッドに位置する。平面形は長方形を呈し、南西側に入口部を伴うようである。主室の規模は底面で長軸長2.40m、短軸長1.89m、検出面からの深さは0.86mである。天井部は崩落していると考えられる。室内の壁はほぼ直に立ち上がっている。底面の規模も検出面規模と同様である。底面は平らである。出土遺物はないが、中世の地下式坑であろう。

(8)SK102（第80図、図版15）

Ｊ42－76グリッドに位置する。地下式坑と考えられる。(8)SK103と隣接しているが、直接の関連はないと考えられる。平面形は長方形を呈する。底面の規模は長軸長2.52m、短軸長1.28m、検出面からの深さは1.30mである。天井部は崩落していると考えられる。入口部が確認できておらず、北側が若干開いていることから、入口部であったのかもしれない。出土遺物はなかった。

(8)SK103（第80図、図版16・33）

Ｊ42－76グリッドに位置する。中世の地下式坑と考えられる。(8)SK102と隣接しているが、直接の関連はないと考えられる。平面形は長方形を呈する。底面の規模は、長軸長1.98m、短軸長1.41m、検出面からの深さは1.80mである。天井部は崩落していると考えられる。東壁側が入口部と考えられ、若干の足掛け状の突出がある。出土遺物は、瓦質の擂鉢が２点出土しており、１点を図化できた。１は擂鉢の底部片で、内面には８本単位の擂り目が施される。

(8)SK104（第80図、図版16）

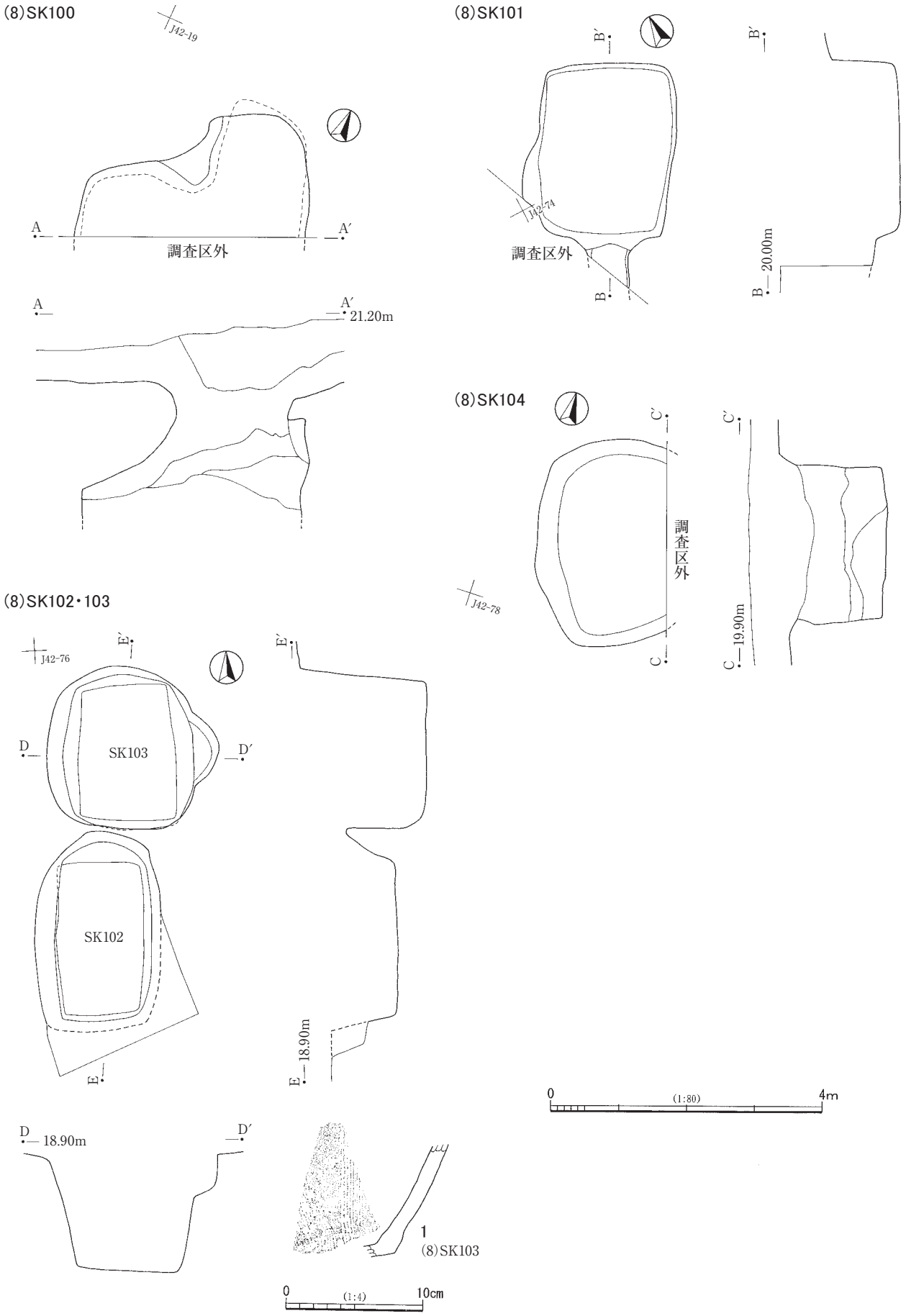
Ｊ42－68グリッドに位置する。中世の地下式坑と考えられる。(8)SK108などと隣接している。平面形は長方形を呈すると考えられる。底面の規模は長軸長2.60m、検出面からの深さは1.62mである。天井部は崩落していると考えられる。入口部は確認できていないが、東側が入口部の可能性が高い。出土遺物はなかった。

(8)SK105（第81図、図版16）

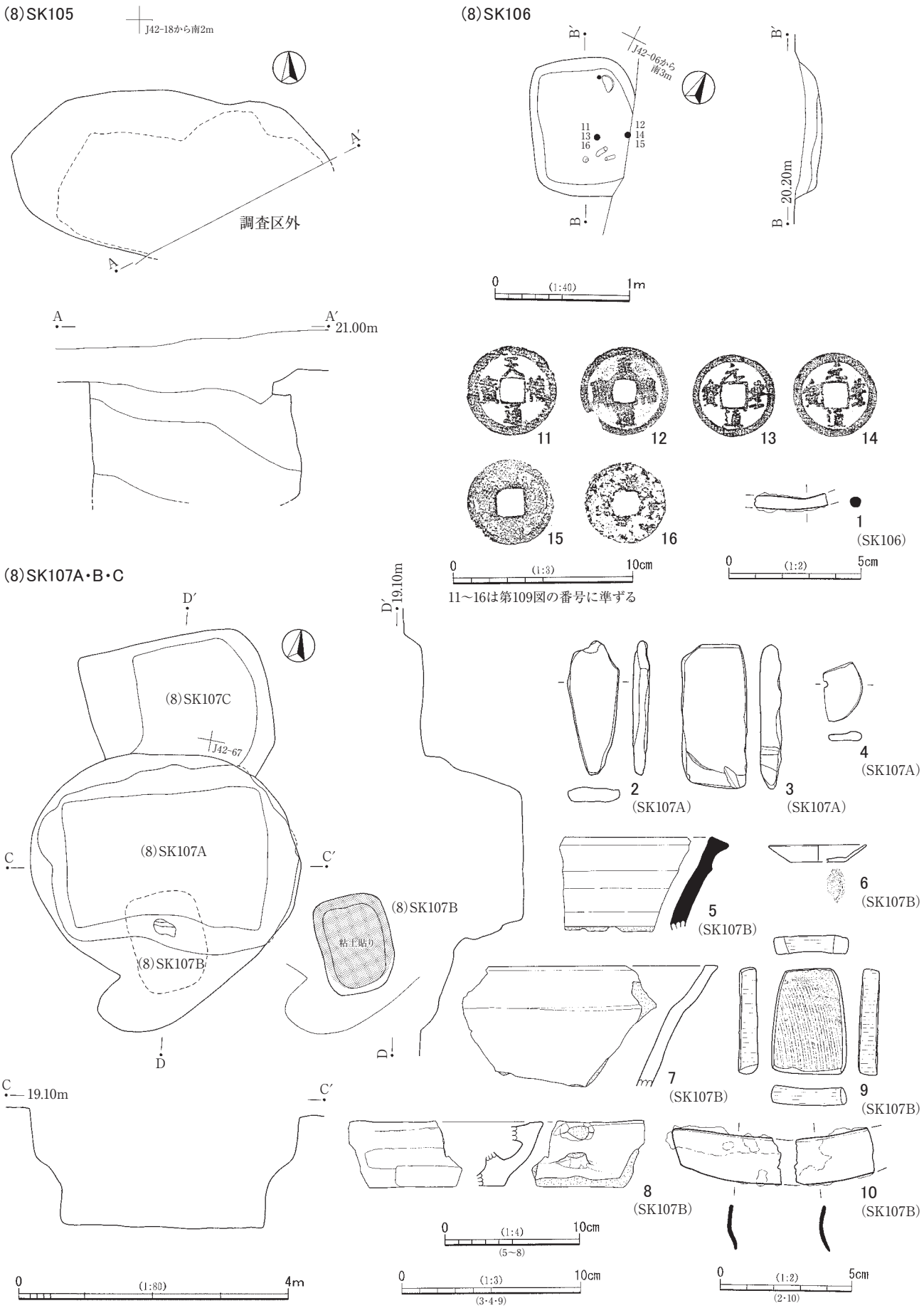
Ｊ42－18グリッドに位置する。中世の地下式坑と考えられる。約半分が調査区外である。検出面は楕円形を呈するが、底面は長方形を呈すると考えられる。底面の規模は短軸長 1.76 m、検出面からの深さは2.00 mである。天井部は崩落していると考えられる。覆土は暗黄褐色土を主体とし北壁側からの流入を示していることから、出入口部は北壁側の若干の突出部分と考えられる。出土遺物はなかった。

(8)SK106（第81・109図、図版16・33・41）

Ｊ42－05グリッドに位置する。埋葬人骨が検出された唯一の土坑墓である。東側が若干削平を受け失われている。検出面は長方形を呈する。長軸長1.02m、短軸長0.78m、検出面からの深さは0.14mである。人骨は土葬されたもので、頭蓋骨の一部と大腿骨の一部のみ検出された。北隅に頭部を置き、西向き横臥屈葬されたものと推測される。人骨の遺存状態が悪く、性別や年齢については分析不能である。土坑の規



第80図　(8)SK100・(8)SK101・(8)SK102・(8)SK103・(8)SK104



第81図　(8)SK105・(8)SK106・(8)SK107A・(8)SK107B・(8)SK107C

模から子供の埋葬墓と推測される。六文銭として副葬された６枚の銭のほか器種不明の鉄製品が出土している。腹部位置の左右から３枚がまとまって出土しており、埋葬時に３枚ずつに分けられたか、あるいは遺体の上に置かれたものがたまたま左右に分かれて落ちたのかもしれない。出土遺物は、銭以外にはなかった。銭文が確認できるのは６枚中４枚で、天喜通寶２枚、元豊通寶２枚である。いずれも北宋銭であることから、中世後期の土坑墓と考えられる。

(8)SK107A（第81図、図版16・33）

Ｊ42－66グリッドに位置する。３基の土坑が重複しているが、関連性はなく(8)SK107B→(8)SK107A→(8)SK107Bの順に構築されたものと考えられる。本土坑は、地下式坑である。検出面は楕円形を呈するが、主室は長方形の底面で、壁はほぼ直に立ち上がっている。底面の規模は長軸長2.96m、短軸長1.80m、検出面からの深さは1.73mあり、規模の大きな地下式坑である。天井部は崩落していると考えられる。南側が入口部と考えられ、南壁中段に足掛け用の抉り込みが確認された。

出土遺物は、２の剣形の石製品、３の砥石、４の用途不明の有孔円形土製品など僅かであった。

(8)SK107B（第81図、図版16・33）

Ｊ42－66グリッドに位置する。(8)SK107A の調査中に覆土内から、粘土貼土坑が検出された。遺物も豊富に出土している。平面形は隅丸長方形を呈する。検出面の規模は長軸長1.46m、短軸長1.06m、検出面からの深さは0.41mである。底面から壁にかけて白色の粘土が貼られており、いわゆる粘土貼土坑である。底面は平らで、覆土は黒褐色土で炭化材、炭化物を若干含む。

出土遺物は多く、６点を図化することができた。５は須恵器の甕である。６は小型のかわらけで、口径7.4cm、底径4.0cm、器高1.25cm を測る。非常に薄く作られており、近世の所産であろう。７は内耳土器である。内耳部は見られないが頸部でくの字に屈曲する器形を持つ。内外面とも灰色を呈し、還元焼成で焼かれている。15世紀後半の所産と思われる。８は内耳焙烙で、内耳は欠損している。胎土には金雲母を含んでいる。近世の所産であろう。９は陶器片を再利用した製品である。擂鉢片の周縁を丁寧に磨いて、長方形に作り出している。擂り目は内面全面に施されており、近世の所産と思われる。10は鉄製品で、摘鎌であろうか。

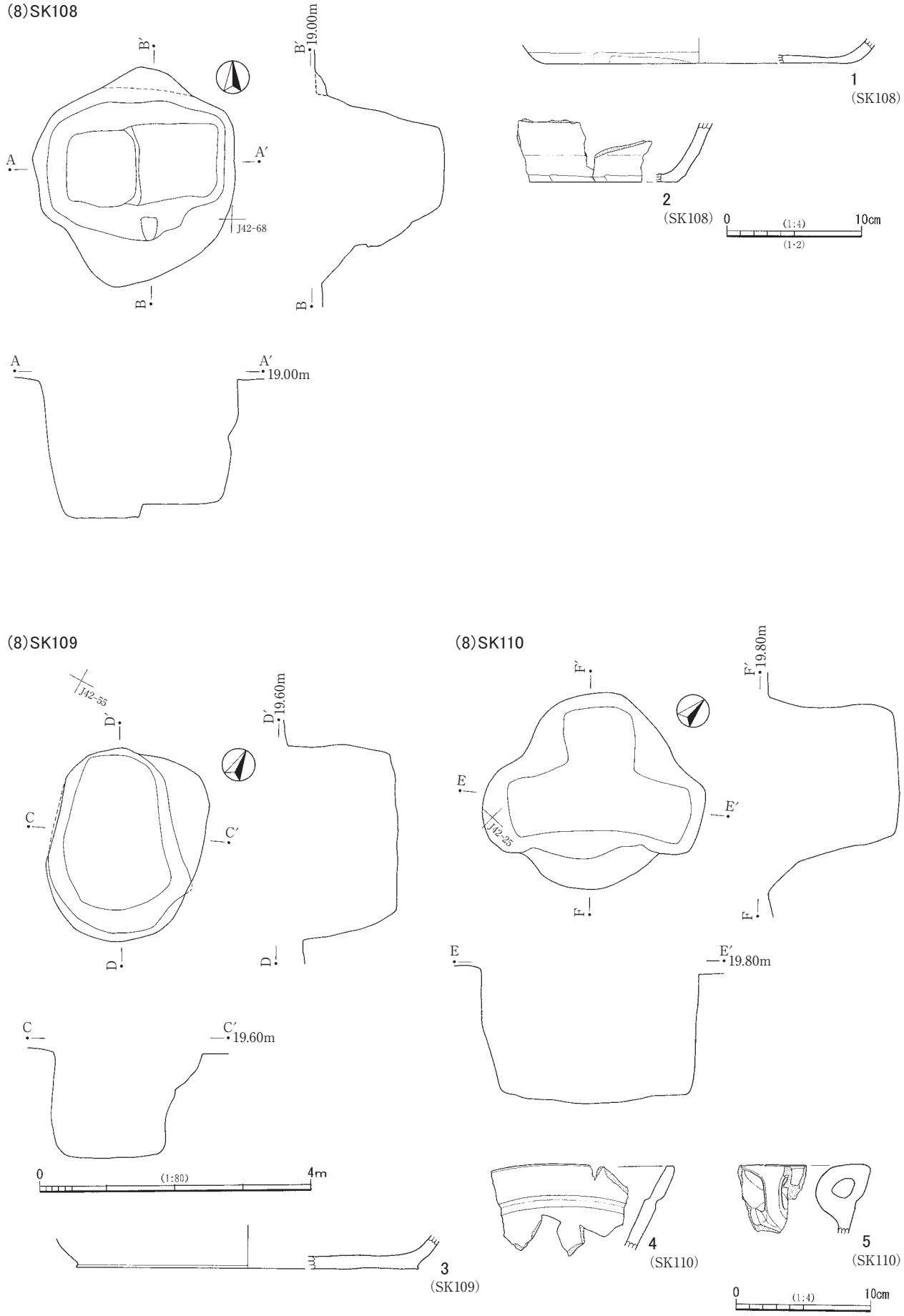
(8)SK107C（第81図）

Ｊ42－56グリッドに位置する。(8)SK107Aに南側が壊されている。平面形は長方形を呈すると考えられる。検出面の規模は長軸長2.62m、検出面からの深さは0.24mである。底面は平らである。出土遺物はなかった。

(8)SK108（第82図、図版16・33）

Ｊ42－57グリッドに位置する。地下式坑と考えられる。検出面の平面形は不定形だが、底面は長方形で、底面中央に若干の段差がある。底面の規模は長軸長2.19m、短軸長1.18m、検出面からの深さは2.08mである。天井部は崩落していると考えられる。一段低い底面は、正方形で一辺約1.10mである。入口部は南壁の可能性があり、壁面中段に足掛け用と思われる凹みがある。

出土遺物は、２点図化することができた。共に内耳土器の底部である。１は平底で、底径23.6cm に復元できた。体部外面には、煤の付着が認められる。２も平底で、体部外面には煤が付着する。２は鍋と思われるが、１は鍋か焙烙かは判然としない。



第82図　(8)SK108・(8)SK109・(8)SK110

(8)SK109（第82図、図版17・33）

Ｊ42－55グリッドに位置する。地下式坑と考えられる。平面形は不整楕円形を呈する。底面も同様で平らである。底面の規模は長軸長2.29m、短軸長1.50m、検出面からの深さは1.63mである。天井部は崩落していると考えられる。壁はほぼ直に立ち上がっている。出入口部の位置は不明。

出土遺物は１点図化できた。３は内耳土器の底部で、底径25.0cm、現存器高2.5cmに復元できた。鍋か焙烙かは不明である。

(8)SK110（第82図、図版17・33）

Ｊ42－15グリッドに位置する。平面形はＴ字状を呈し、特異な地下式坑である。隣接する(8)SK111が類似している。底面の規模は北西方向で2.20m、北東方向で2.72m、検出面からの深さは2.00mあり、いたって深い。天井部は崩落していると考えられる。壁はほぼ直に立ち上がっている。南東壁が上位で開き気味であることから、この部分が出入口部の可能性がある。

出土遺物は、２点図化できた。４は内耳土器の口縁部で、頸部でくの字に屈曲する。５は内耳土器の内耳部である。２点とも鍋と考えられ、外面に煤の付着が認められる。15世紀後半代のものと思われる。

(8)SK111（第83図、図版17）

Ｊ42－47グリッドに位置する。平面形はＴ字状を呈し、特異な地下式坑である。隣接する(8)SK110が類似している。底面の規模は北西方向で2.05m、北東方向で2.80m、検出面からの深さは1.90mといたって深い。天井部は崩落していると考えられる。壁はほぼ直に立ち上がっている。南東壁が上位で開き気味であることから、この部分が出入口部の可能性がある。出土遺物はなく、時期は不明である。

(8)SK112（第83図、図版17）

Ｊ42－34グリッドに位置する。地下式坑と考えられる。平面形は隅丸長方形を呈する。底面の規模は長軸長2.22m、短軸長1.38m、検出面からの深さは2.46mである。天井部は崩落していると考えられる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平らである。南東壁に足掛け状の凹みが確認されているほか、底面には円形の凹みがある。出土遺物はなかった。

(9)SX009（第83図、図版21）

Ｌ44－32～Ｌ44－38グリッドに位置する。南面する斜面を造成した、いわゆる台地整形区画と考えられる。東西25m以上の規模と推測されるが、調査区境にあたり完掘に至っていない。西側約10m程度が確認できたに過ぎない。また、南北方向の奥行きが５m程度しかないことから、さらに南側に広がっていた遺構が、南側の市道によって失われたと考えられる。北側壁に沿って溝が確認されている。このほかには、土坑などは確認されなかった。また、遺構の時期を特定する遺物は出土していない。

(10)SK004（第84図、図版17・33）

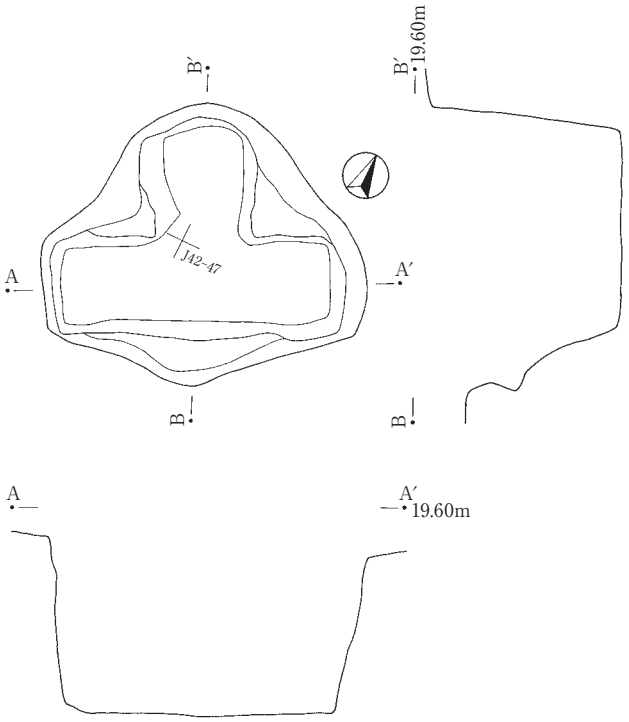
Ｏ44－06グリッドに位置する。平面形は長楕円形を呈する。検出面の規模は長軸長1.58m、短軸長0.89m、検出面からの深さは0.28mである。底面は平らである。覆土は黒色土を主体としている。

出土遺物は、土師質土器が出土している。

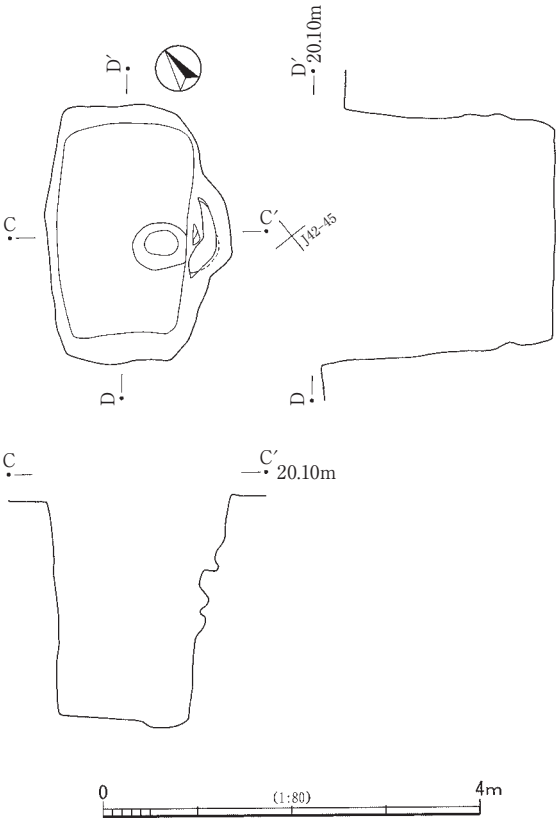
(10)SK023A・B・C（第84図）

Ｏ44－35グリッドを主体に位置する。３連の地下式坑と考えられ、３室がＬ字状に配置され、トンネルで連結されている。平面形はいずれも長方形を呈するが、規模は多少異なっている。検出面の規模は、Ａが長軸長3.20m、短軸長2.22m、検出面からの深さは1.77mである。Ｂは長軸長1.90m、短軸長1.72m、検

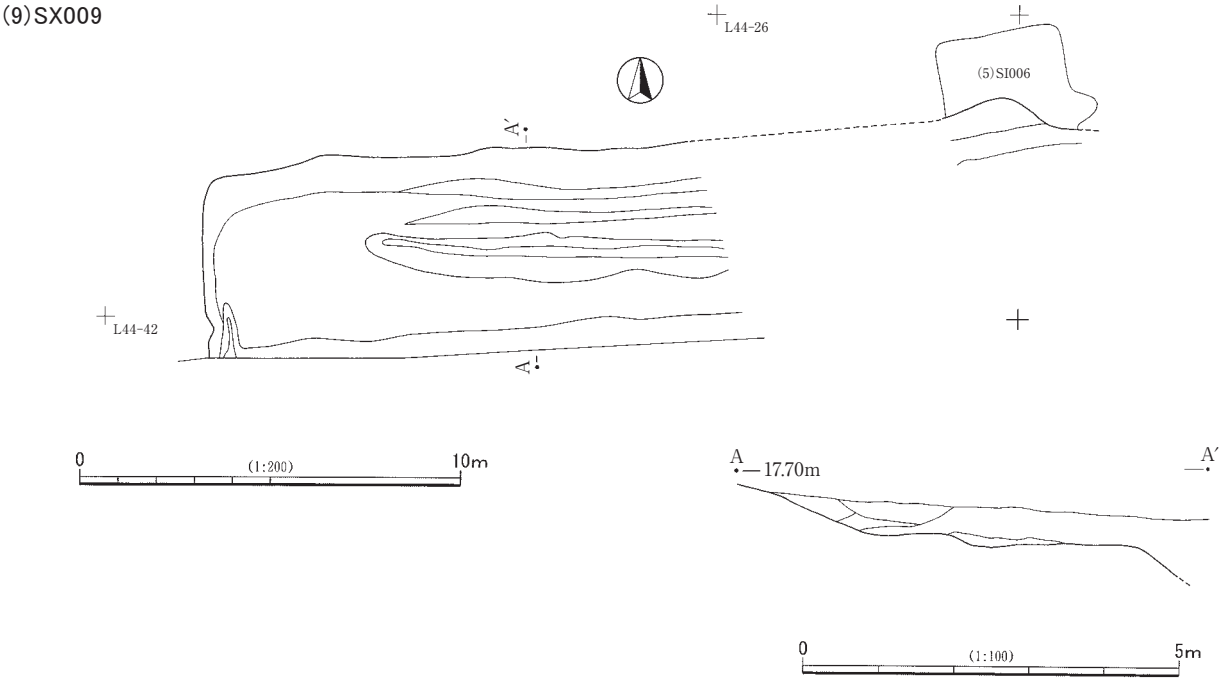
(8)SK111



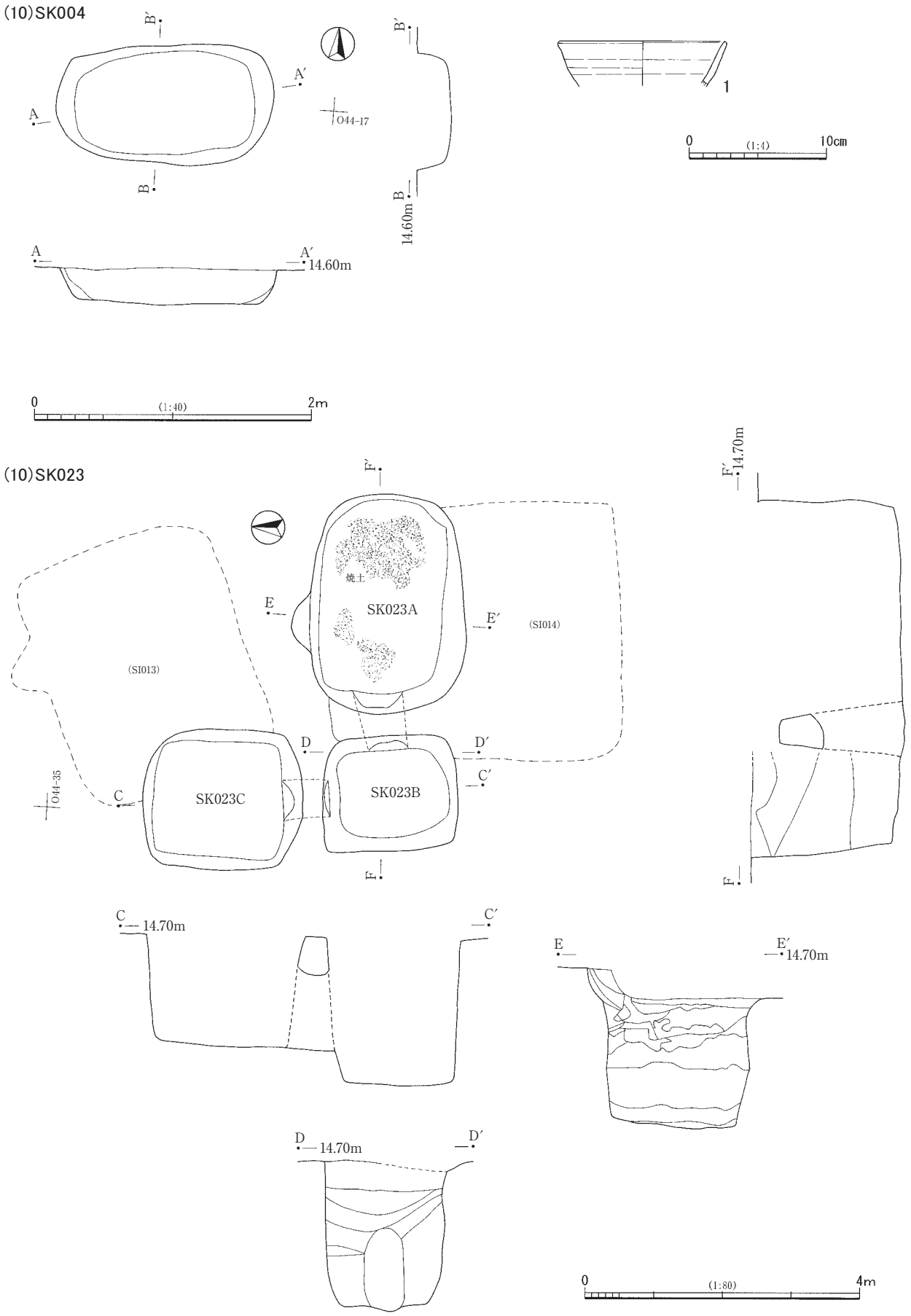
(8)SK112



(9)SX009



第83図　(8)SK111・(8)SK112・(9)SX009



第84図　(10)SK004・(10)SK023

出面からの深さは2.45mである。Cは長軸長2.22m、短軸長1.68m、検出面からの深さは1.67mである。いずれも天井部が崩落していると考えられる。覆土は暗褐色土を主体とし、灰白色粘土のブロックが全体に混入している。各室をつなぐトンネルの大きさは、B・C間で高さ1.22m、幅0.56mあり、充分に人が通過することができる。出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

(11)SK005A（第85図、図版18）

Ⅰ44－48グリッドに位置する。(11)SK005Bとの新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形を呈する。検出面の規模は長軸長1.28m、短軸長0.82m、検出面からの深さは0.28mである。覆土は暗褐色土を主体とし、焼土が若干混入している。底面は平らである。出土遺物はなかった。

(11)SK005B（第85図、図版18）

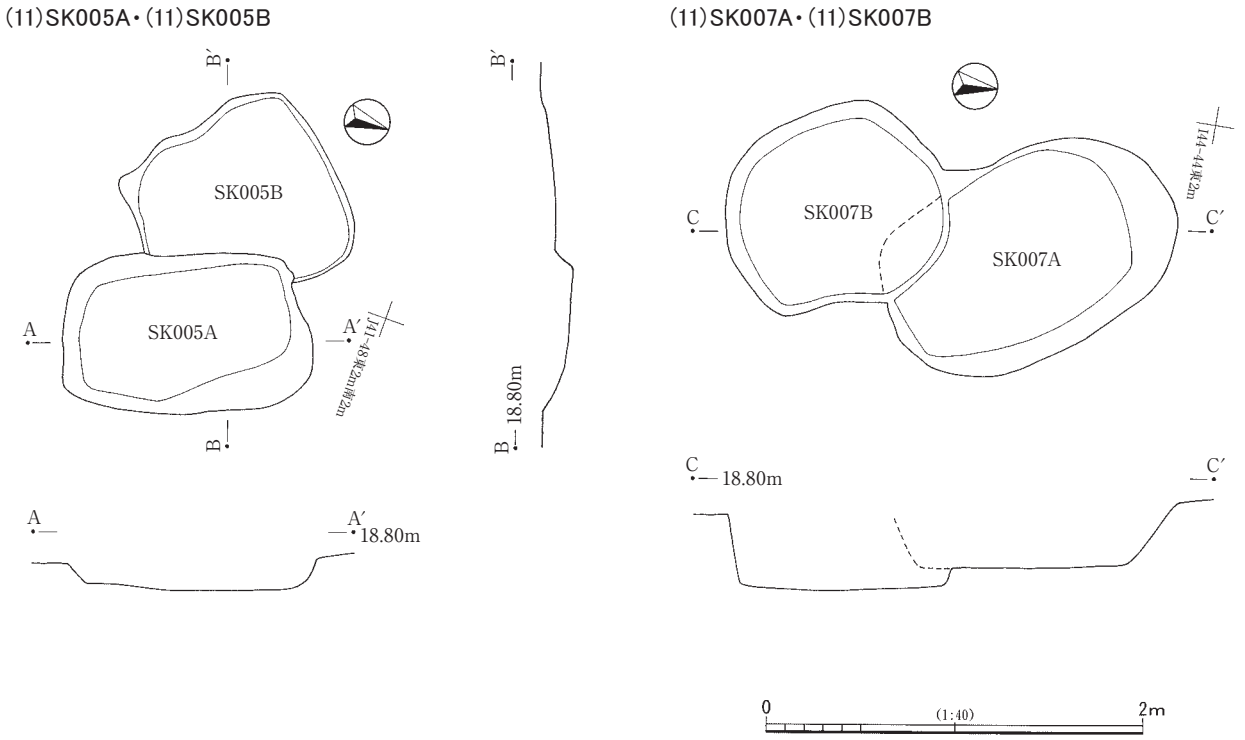
Ⅰ44－48グリッドに位置する。(11)SK005Aとの新旧関係は不明である。平面形は隅丸方形を呈する。検出面の規模は一辺1.05m、検出面からの深さは0.05mである。覆土は暗褐色土を主体とし、底面は平らである。出土遺物はなかった。

(11)SK007A（第85図、図版18）

Ⅰ44－44グリッドに位置する。(11)SK107Bとの新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形を呈する。検出面の規模は長軸長1.64m、短軸長1.02m、検出面からの深さは0.32mである。覆土には若干の焼土が混入していた。底面は平らである。出土遺物はなかった。

(11)SK007B（第85図、図版18）

Ⅰ44－44グリッドに位置する。(11)SK107Aとの新旧関係は不明である。平面形は歪んだ方形を呈する。検出面の規模は長軸長1.18m、短軸長1.00m、検出面からの深さは0.34mである。覆土には若干の焼土が混入していた。底面は平らである。出土遺物はなかった。



第85図　(11)SK005A・(11)SK005B・(11)SK007A・(11)SK007B

(14)SK001（第86図、図版18・32）

K42－20グリッドに位置する。地下式坑と考えられる。平面形は長楕円形を呈し、北側は調査区外で完掘できていないが、中央部北側に突出部があり、平面形がT字状を呈する可能性があり、北側が出入口部と考えられる。底面の規模は長軸長4.35m、短軸長0.75m、検出面からの深さは1.85mで、規模の大きな地下式坑である。

天井部は崩落していると考えられる。底面には中央に低い部分があり、左右の底面が一段高くなっている。段差は0.22mである。壁はほぼ直に立ち上がっている。

出土遺物は、覆土から土製の鉢が１点出土している。鉢は擂鉢状の器形をとるが擂り目は見られず、常滑の片口鉢を模した物と思われる。胎土は金雲母を含んでおり、内耳土器と同一産地の可能性が考えられる。内面には使用された痕跡が見られ、軟質なものであるが、常滑の片口鉢と同様の使われ方をしたものと思われる。

(14)SK004（第86図、図版18・33）

J43－49グリッドに位置する。平面形は不整円形を呈する。底面の規模は長軸長5.06m、短軸長3.72m、検出面からの深さは1.26mで、規模の大きな地下式坑である。天井部は崩落していると考えられる。底面の南側に突出部があり、入口部の可能性が高い。覆土から多量の遺物が出土している。

出土遺物は、７点図化した。２は志戸呂の天目茶碗である。口径16.0cm、底径6.0cm、器高6.1cmに復元された。削り出し高台で、体部内外面は鉄釉、体部下端は鉄化粧が施される。３は古瀬戸の祖母壊壺で、口径11.2cm を測る。古瀬戸後期Ⅳ新にあたろう。４は古瀬戸の平碗である。底部が遺存する。高台は貼付け高台で、底径は5.6cm である。古瀬戸後期Ⅰにあたる。５は常滑片口鉢である。６・７は土製の擂鉢である。共に内面には使用痕が認められる。15世紀代のものであろう。８は転用砥石である。常滑甕の肩部片を再利用している。表面及び断面に使用痕が認められる。

(14)SE003（第87図、図版18・33）

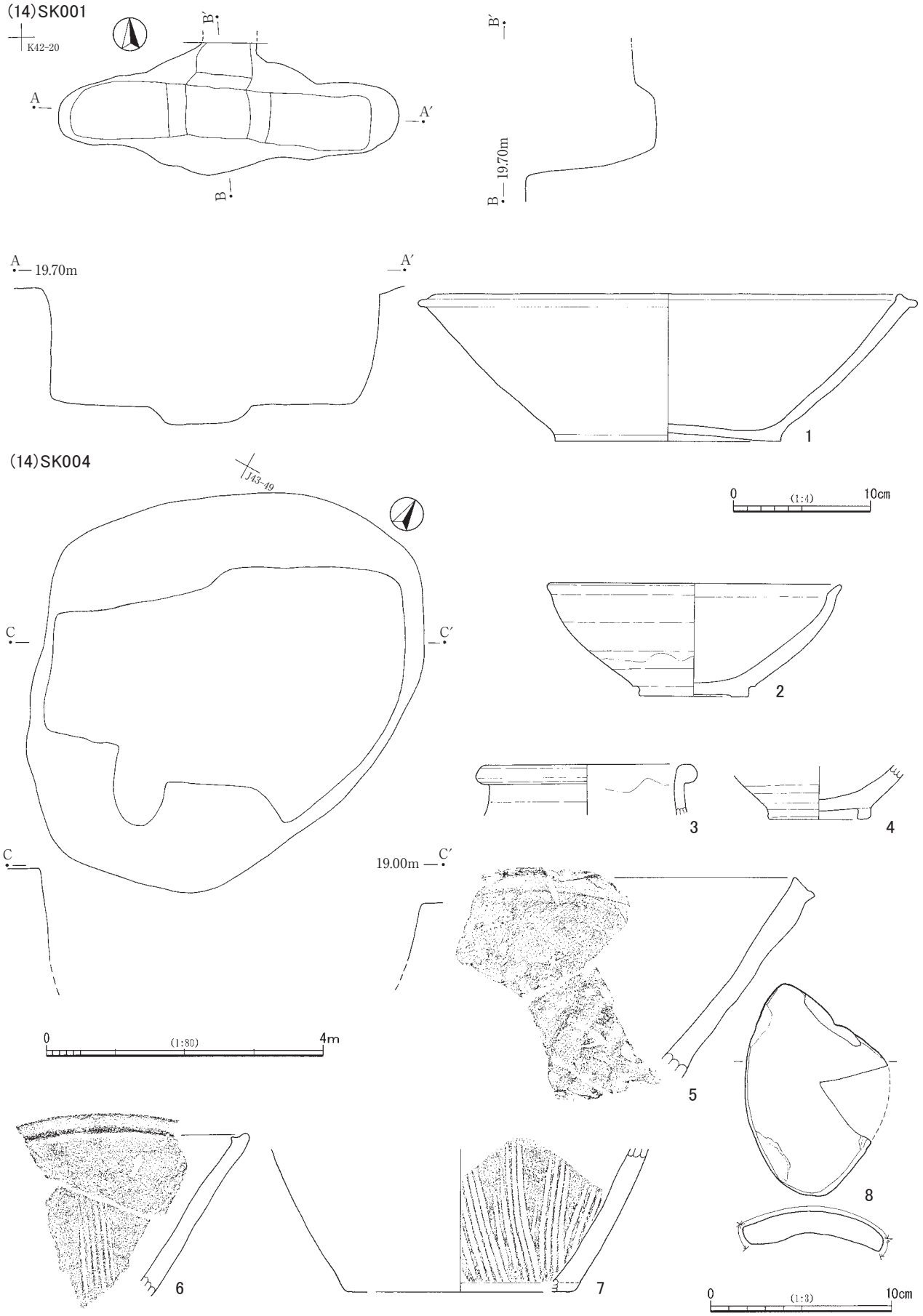
J42－96 グリッドに位置する。井戸である。内径は1.00mで、底面が２mを超えるため完掘は断念した。周辺が一段低くなっており、掘削時に掘られたものか、あるいは一段低くなった井戸端に降りていくための通路であったのかもしれない。井戸内から遺物が出土している。

出土遺物は、５点図化することができた。１～３はカワラケである。１は口径12.0cm、底径5.6cm、器高3.0cm。２は口径11.0cm、底径5.4cm、器高2.6cm。３は口径11.0cm、底径4.8cm、器高2.8cmを測る。これらは内外面が磨滅しているが、ロクロ成形後回転糸切を行い、見込をナデている。４は古瀬戸の折縁深皿である。古瀬戸後期Ⅳ古にあたる。５は常滑の片口鉢である。

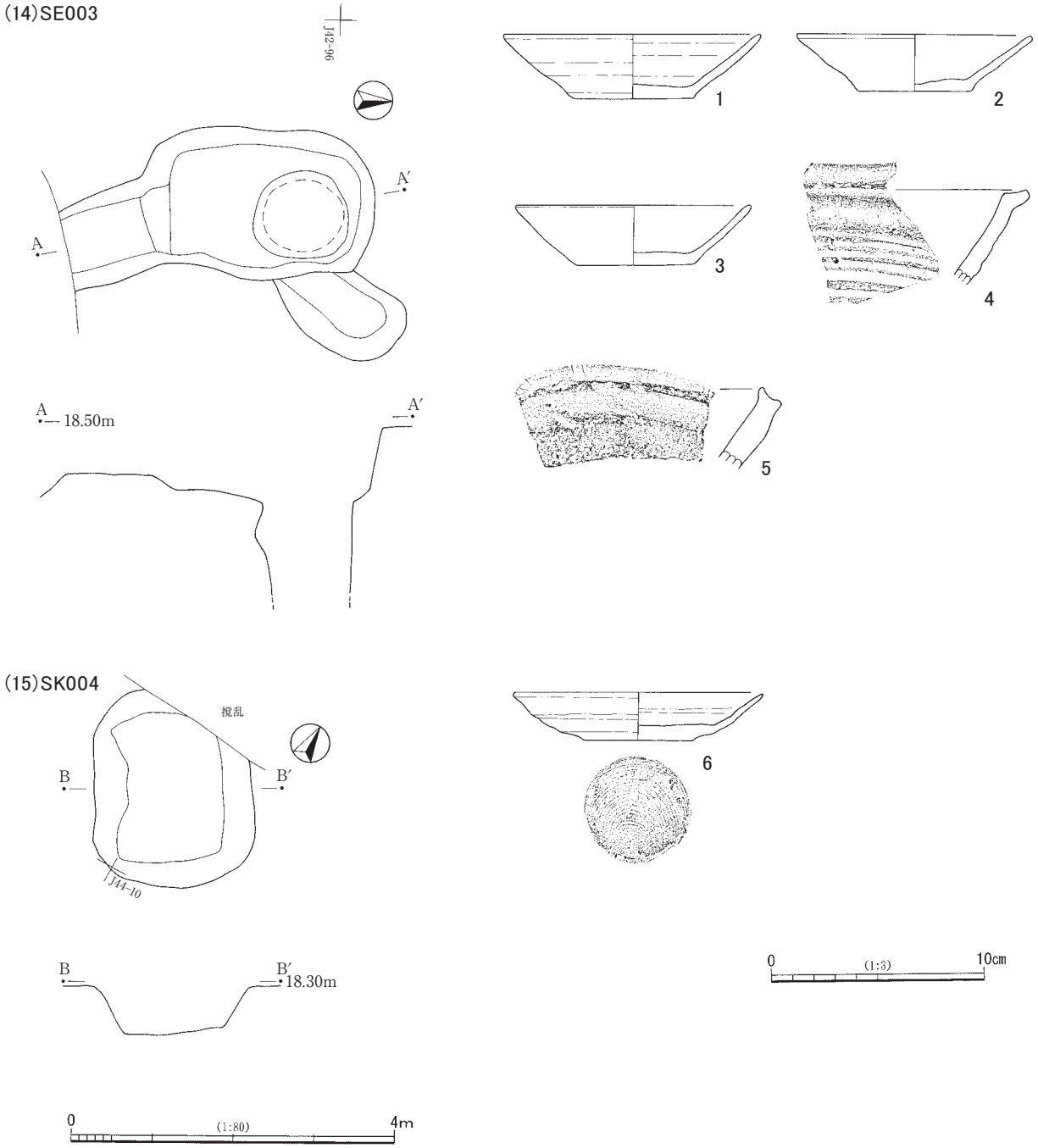
(15)SK004（第87図、図版19・33）

J44－00グリッドに位置する。北側コーナーが撹乱されている。平面形は隅丸長方形を呈する。検出面の規模は、長軸長2.46m、短軸長1.92m、検出面からの深さは0.54mである。覆土は黒褐色土を呈し、焼土を若干含んでいた。覆土からカワラケが出土しており、土坑墓の可能性がある。

図示できた出土遺物は、６の瀬戸の縁釉小皿１点である。約60％遺存し口径11.6cm、底径5.0cm、器高2.2cmである。



第86図　(14)SK001・(14)SK004



第87図　(14)SE003・(15)SK004

(16)SE002（第88図、図版21）

K43－21グリッドに位置する。井戸である。内径は1.35mで、底面が２mを超えるため完掘は断念した。覆土は暗褐色土を主体としている。周辺が一段低くなっており、掘削時に掘られたものか、あるいは一段低くなった井戸端に降りていくための通路であったのかもしれない。出土遺物はなかった。

(16)SK003（第88図、図版19・34）

K43－38グリッドに位置する。撹乱が顕著なため完掘できていないが、平面形は楕円形を呈すると推測される。検出面からの深さは0.49mである。覆土は暗褐色土を主体としている。覆土中から遺物が出土している。

出土遺物は、２点図化できた。１は瀬戸の天目茶碗である。約20％遺存しており、口径12.0cmに復元できた。内外面に鉄釉がかかり、体部下端は露胎である。大窯１にあたろう。２は常滑片口鉢である。約10％程遺存しており、口径26.0cm に復元できた。内面には使用痕が認められる。11型式にあたろうか。

(16)SK004（第88図、図版19）

K42－89グリッドに位置する。平面形はＴ字状を呈し、特異な地下式坑である。(8)SK110・(8)SK111に類似している。底面の規模は北西方向で2.80m、北東方向で1.74m、検出面からの深さは1.59mといたって深い。天井部は崩落していると考えられる。壁はほぼ直に立ち上がっている。(8)SK110などと同様であれば、南東壁側が出入口部の可能性がある。出土遺物はなく時期は不明である。

(16)SK005（第88図、図版19）

K43－18グリッドに位置する。円形土坑が３基連なっており、何らかの施設跡の可能性が高い。底径の大きさは、1.00m～1.28mあり類似している。３基の土坑に囲まれた中央にはドーナツ状の溝が巡っている。隣接してＴ字状の溝(16)SD033 が位置しており、関連した施設なのかもしれない。出土遺物はなかった。

(16)SE008（第88図、図版19）

K42－70グリッドに位置する。井戸である。内径は0.90mで、1.20mを超えた時点で湧水があり完掘を断念した。覆土は暗褐色土を主体としている。出土遺物はなかった。

(16)SK009（第89図、図版19・34）

Ｊ42－69グリッドに位置する。地下式坑である。底面は隅丸長方形を呈する。底面の規模は、長軸長2.40m、短軸長1.46m、検出面からの深さは2.10mである。天井部は崩落しており、暗褐色土を主体とする覆土には天井部の崩落土が確認できた。壁はややオーバーハングしている。入口部は不明。覆土から遺物が出土している。

出土遺物は、４点図化できた。１は土製の擂鉢で、底部から体部にかけ15％程遺存している。底径は11.0cm、内面に９本単位の擂目が見られる。２は瀬戸擂鉢の破片である。擂目は見られないが、内外面に錆釉が施される。なお上面の割れ口は擦られている。３は土製擂鉢の片口部である。１と胎土、色調が似ている。同一個体、あるいは同一産地と思われる。１・３とも、15 世紀代のものであろう。４は砥石である。全長9.2cm、幅2.8cm、厚さ2.2cm で、全面擦られている。

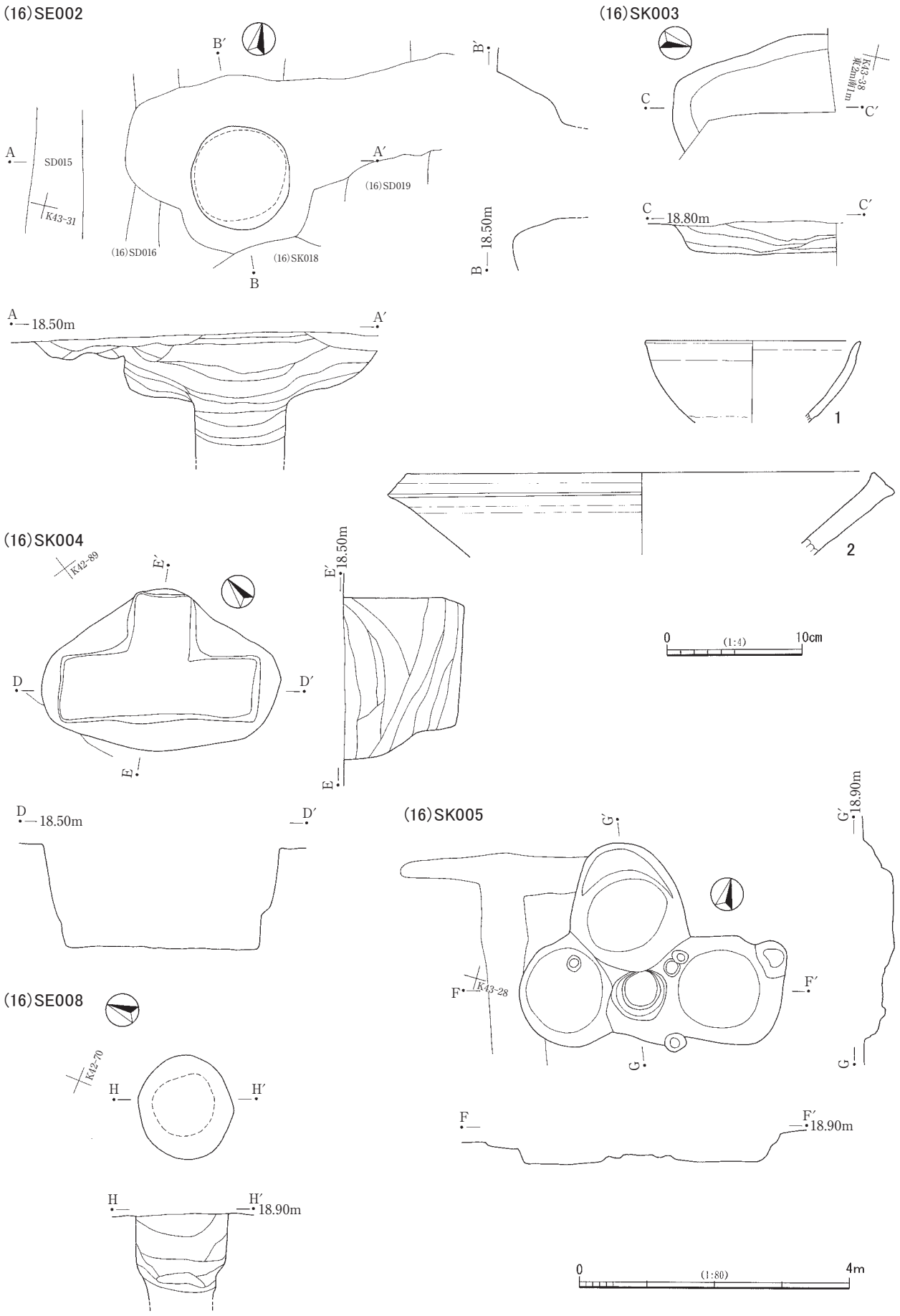
(16)SE011（第89図、図版34）

K43－34グリッドに位置する。井戸である。(16)SE012と隣接している。内径は1.80mで、底面は１ｍを超えた時点で湧水があり完掘を断念した。規模の大きな井戸である。覆土の崩落が激しく土層断面を残しておけなかったため図示できないが、(16)SE012の方が新しい。

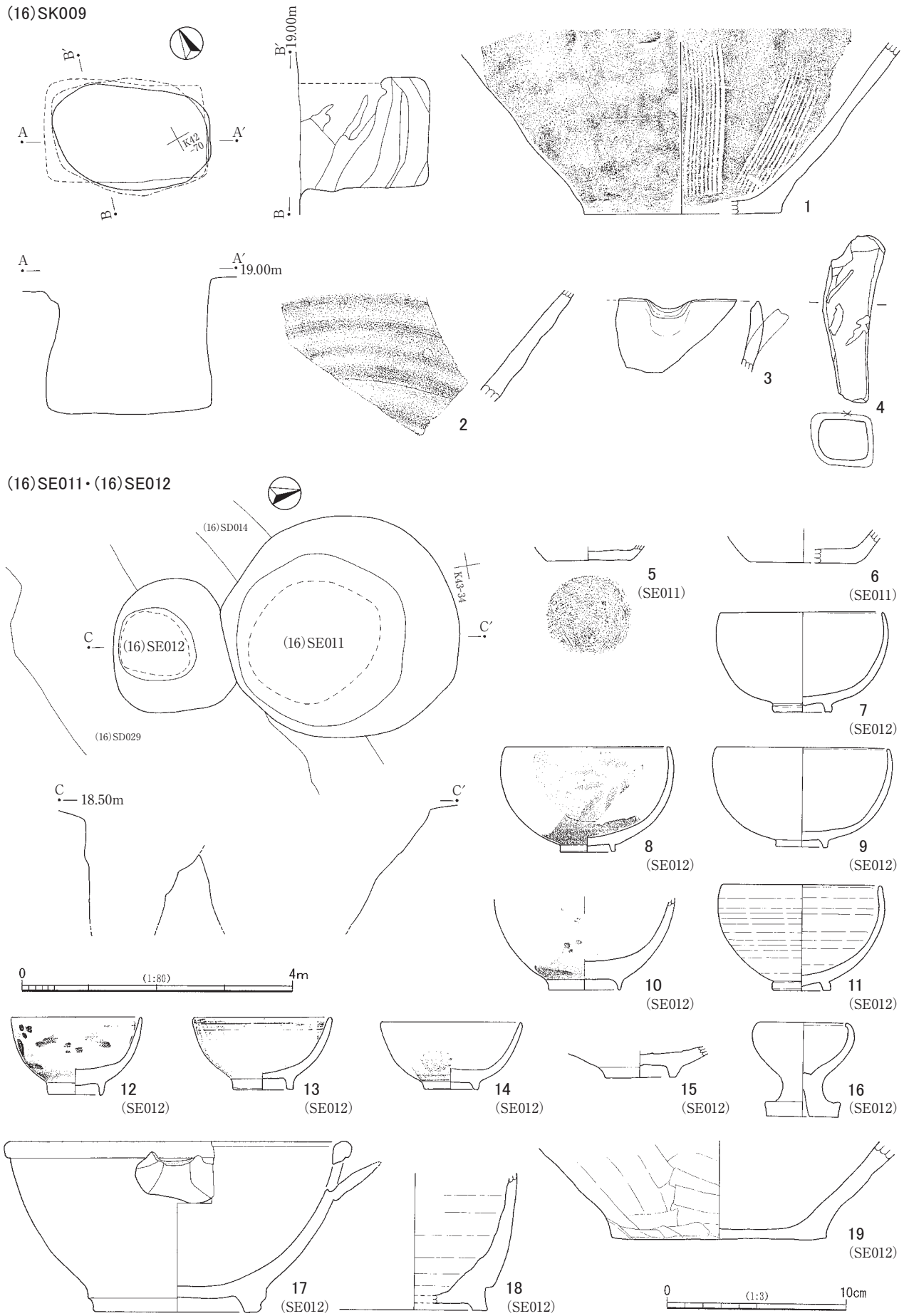
出土遺物は少なく、図示できたのはカワラケ２点である。共に底部片で、５は底径5.0cm、６は底径6.0cmを測る。５は見込にナデを行っている。

(16)SE012（第89 図、図版 32・34）

K43－44グリッドに位置する。井戸である。(16)SE011と隣接している。内径は0.90mで、底面は1.00m



第88図　(16)SE002・(16)SK003・(16)SK004・(16)SK005・(16)SE008



第89図　(16)SK009・(16)SE011・(16)SE012

を超えた時点で湧水があり完掘を断念した。覆土の崩落が激しく、土層断面を残しておけなかったため図示できないが、(16)SE011の方が古い。

出土遺物は多量に出土している。７～９・11は陶器の碗、10・12～15は磁器碗である。16は陶器のひょう燭。17は陶器片口鉢。18は壺である。19は常滑片口鉢である。19以外は近世前期の遺物であることから、遺構の時期は近世前期と判断される。

(16)SK013（第90図、図版19）

Ｋ43－42グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。検出面の規模は直径約1.30m、検出面からの深さは1.24mである。覆土は暗褐色土を主体としている。出土遺物はなかった。

(16)SK017（第90図、図版20・34）

Ｋ43－41グリッドに位置する。地下式坑の可能性が高いが、相当に深く、井戸の可能性もある。深さが２ｍを超えるため、途中で完掘を断念した。平面形は楕円形を呈すると思われる。検出面の規模は、長軸長4.50mである。覆土は暗褐色土を主体とし、中位層では灰白色の粘土を多量に含んでいた。覆土中から遺物が出土している。

出土遺物は２点図化できた。１は古瀬戸の平碗で、内外面に灰釉がかかる。古瀬戸後期Ⅲにあたろう。２は常滑片口鉢で、底部が10％程遺存している。底径は10.0cmで、内面には使用痕が見られる。

(16)SE021（第90図、図版21・34）

Ｊ43－66グリッドに位置する。井戸である。(16)SD024と重複し、(16)SD024の溝に上層部が壊されている。１ｍを超えた時点で湧水があり、完掘を断念した。覆土は暗褐色土を主体としている。内径は1.25ｍである。壁はほぼ直に立ち上がる。覆土内から遺物が出土している。

３は陶器碗で内外面に飴釉が施される。４は磁器の碗。共に近世の所産であろう。５は古瀬戸の折縁深皿で、底部が遺存する。古瀬戸後期Ⅲにあたろう。６は常滑の片口鉢で、底部が遺存する。７は砥石で、全体に擦られている。

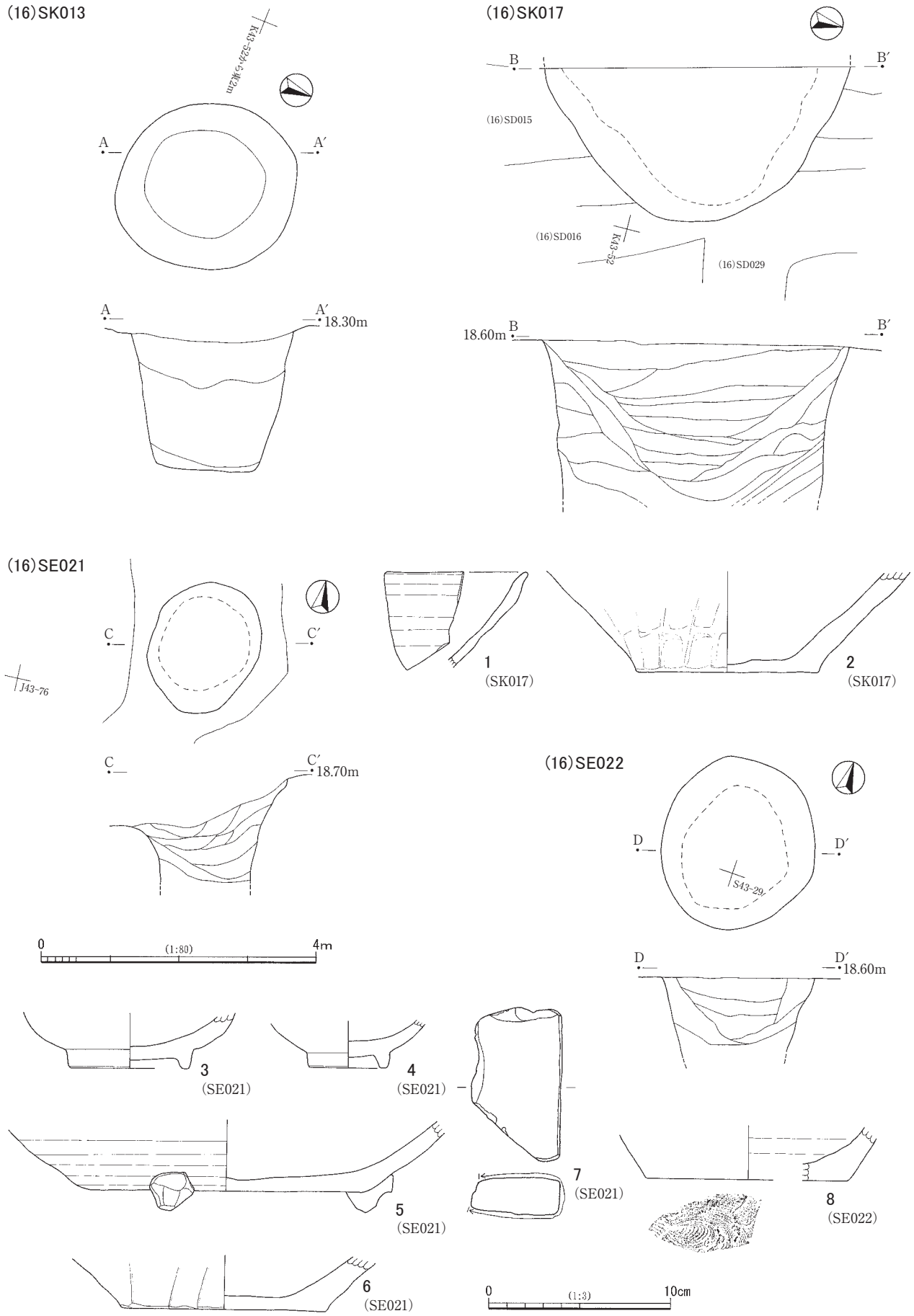
(16)SE022（第90図、図版20・34）

Ｊ43－26グリッドに位置する。井戸である。内径は1.80mで、１ｍを超えた深さで湧水があり完掘を断念した。覆土は暗褐色土を主体としている。覆土内から土器が１点出土している。８は陶器の鉢である。底部が10％遺存し、外面に鉄釉の流れが見られる。近世の所産であろう。

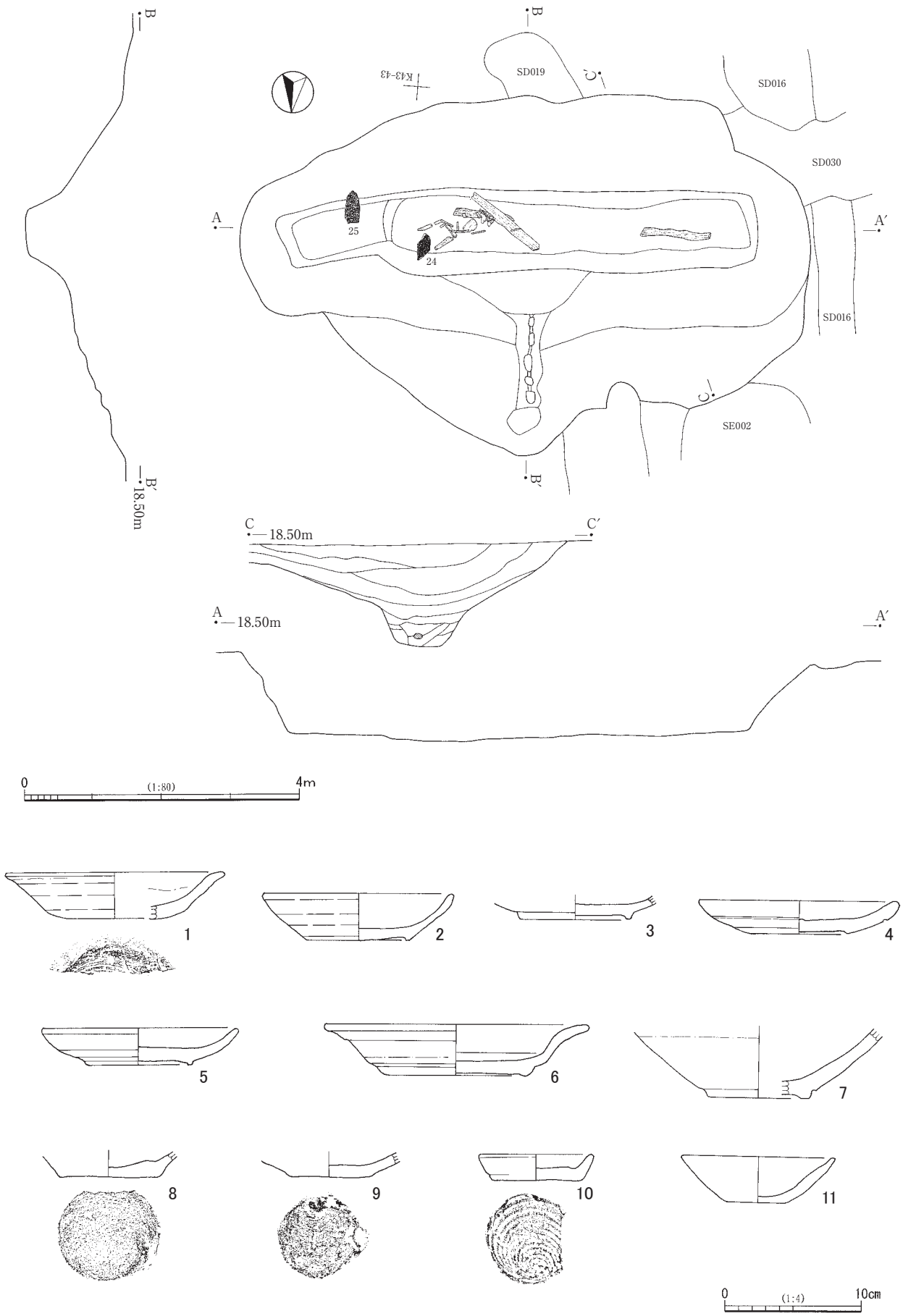
(16)SK018（第91～95図、図版20・32・34・35・37）

Ｋ43－29グリッドに位置する。検出面形は長楕円形を呈し、中央北側が突出している。底面は２辺が長い長方形を呈する。長軸の検出面の規模は、8.30mある。底面に至る壁は緩傾斜で、底面近くで、より深い長方形の掘り込みとなっている。底面は２段になっており東側に約５㎝の一段高い面がある。最も低い底面の規模は、長軸長5.20m、短軸長0.65m、検出面からの深さは1.54mである。また、一段高い東側の底面は長軸長1.68m、短軸長1.60mである。北壁の中央に６段の小規模な階段と思われる段が削り出されている。

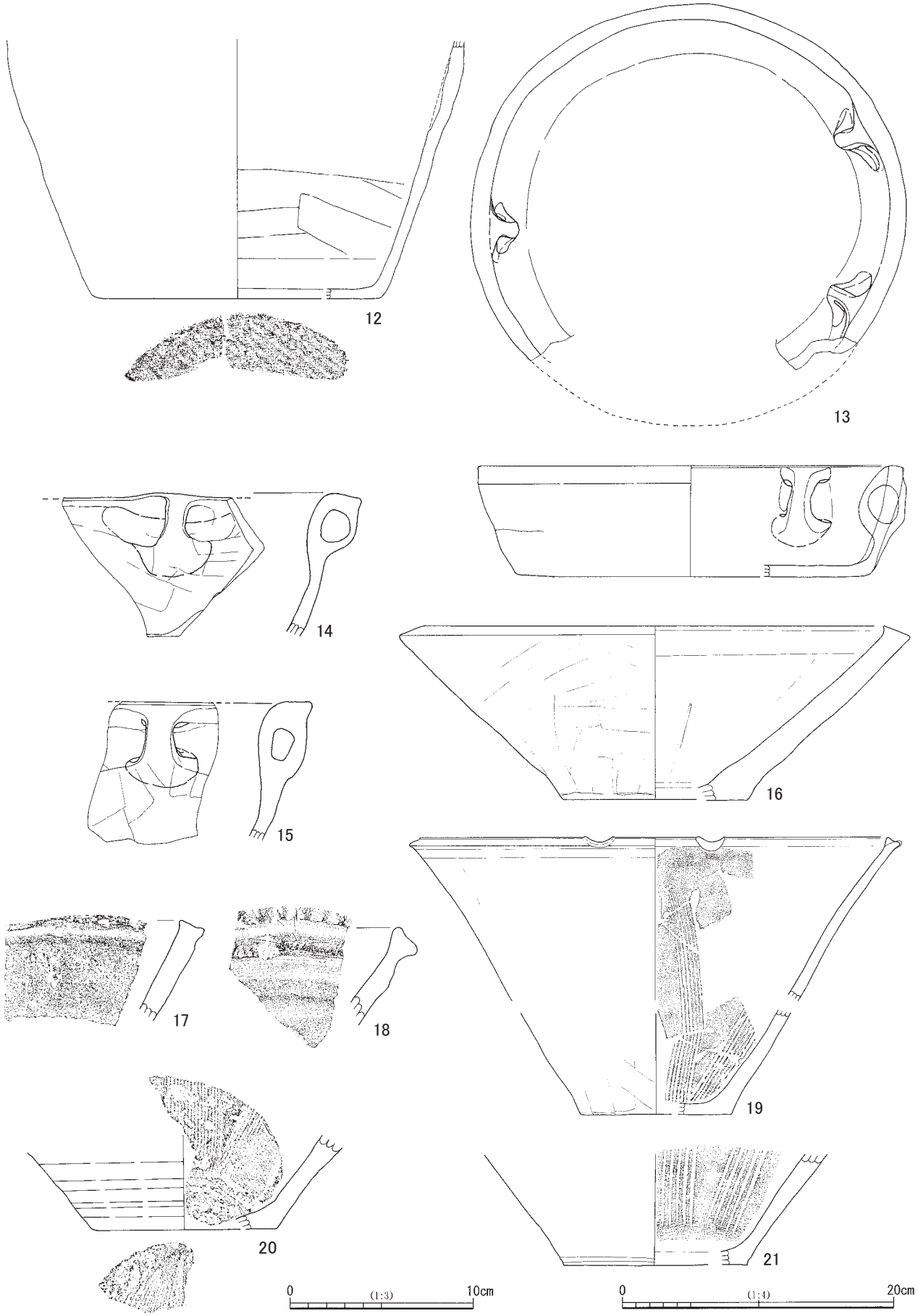
覆土は暗褐色土を主体とし、底面の掘り込み部分には、鉄分を含む砂分の多い覆土が堆積し、その中から加工痕を明瞭に伴わない棒状の木材や板碑、常滑、内耳鍋、擂鉢、カワラケ、石臼、砥石、陶磁器転用砥石、スラグなど雑多な遺物が出土している。底面近くの覆土には水分が多かったことから、木材等の有機質の遺物が保存されたと考えられる。四方の壁の傾斜が緩く開きが大きいことや検出面からの深さが約



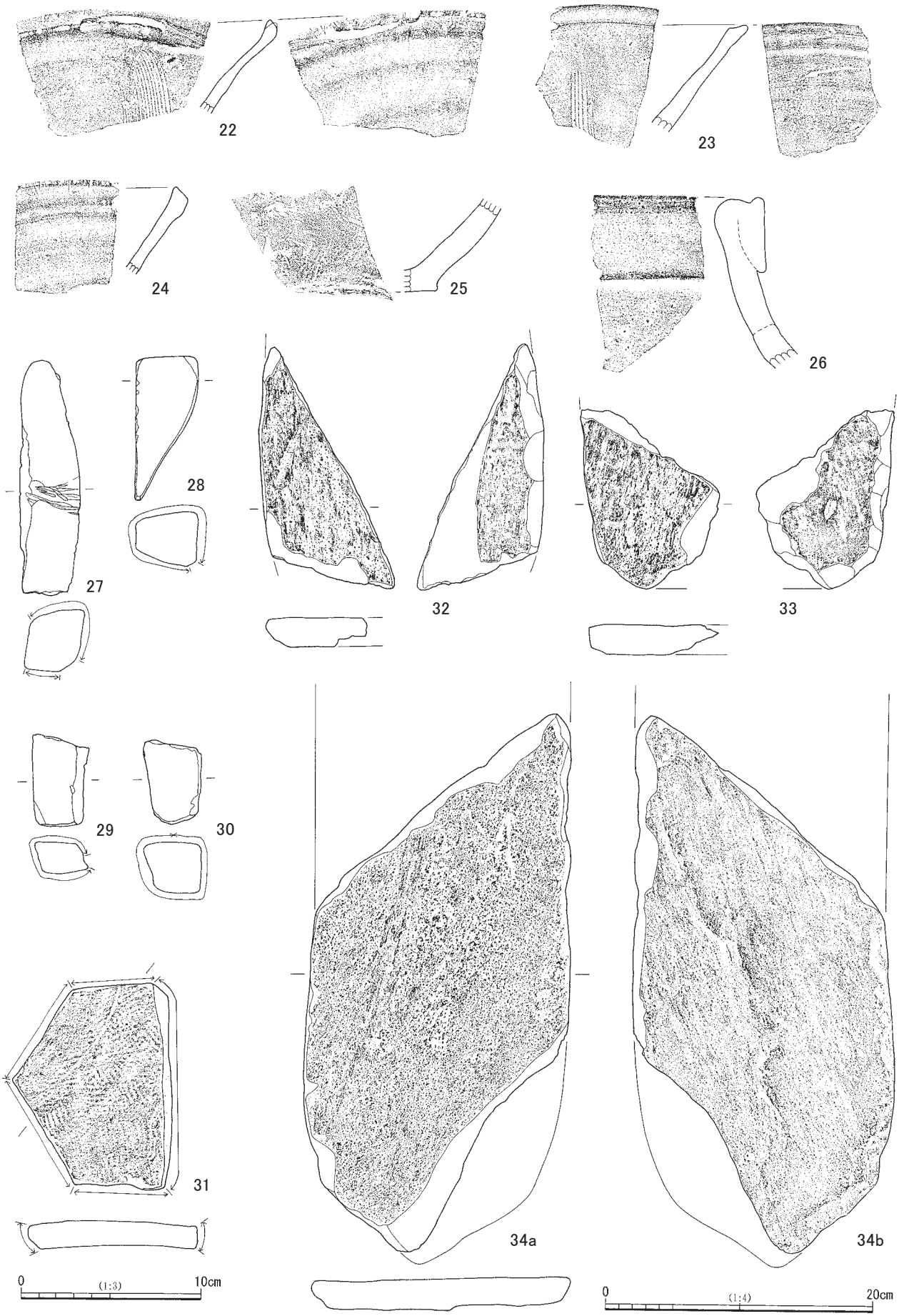
第90図　(16)SK013・(16)SK017・(16)SE021・(16)SE022



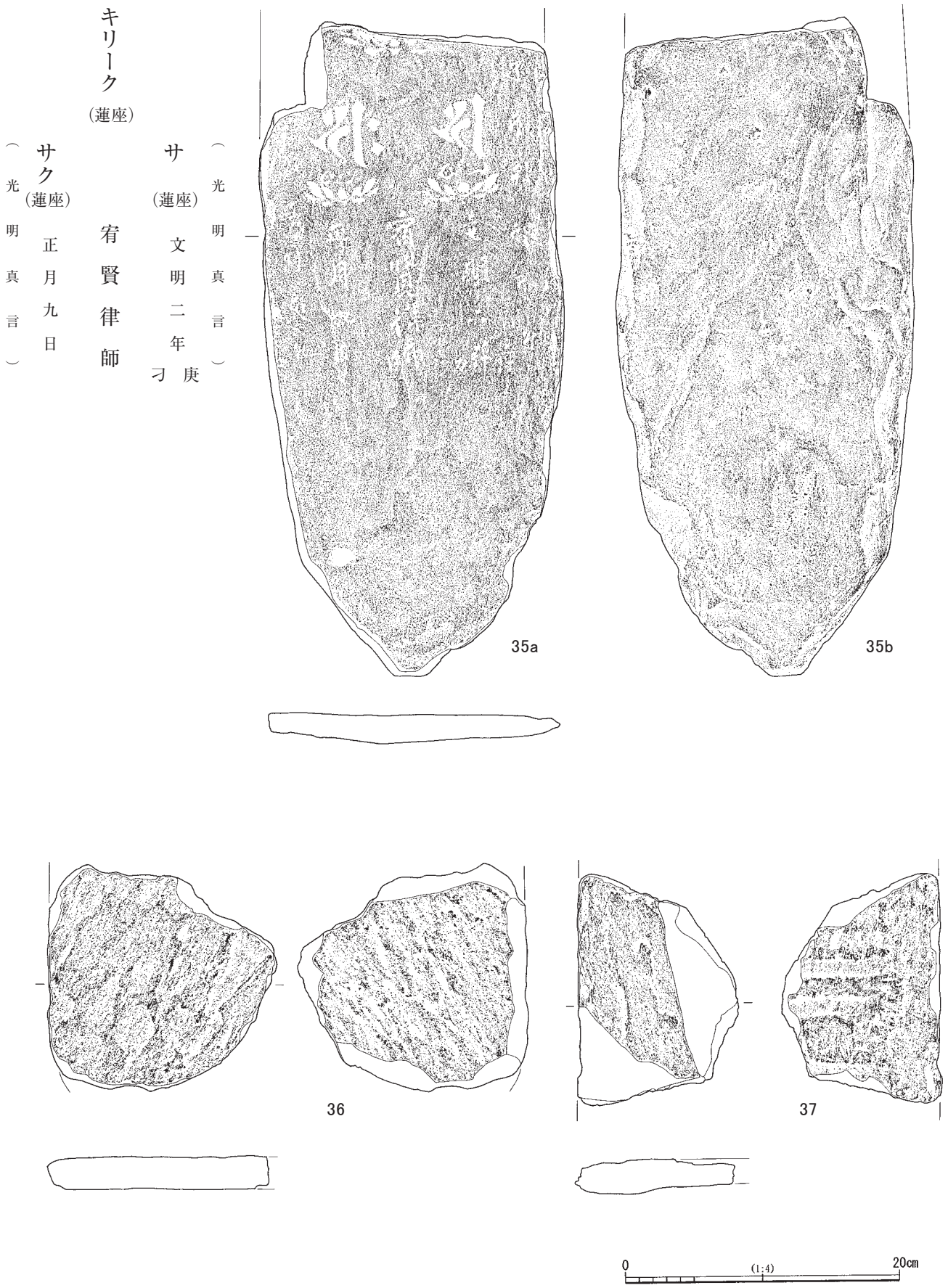
第91図　(16)SK018(1)



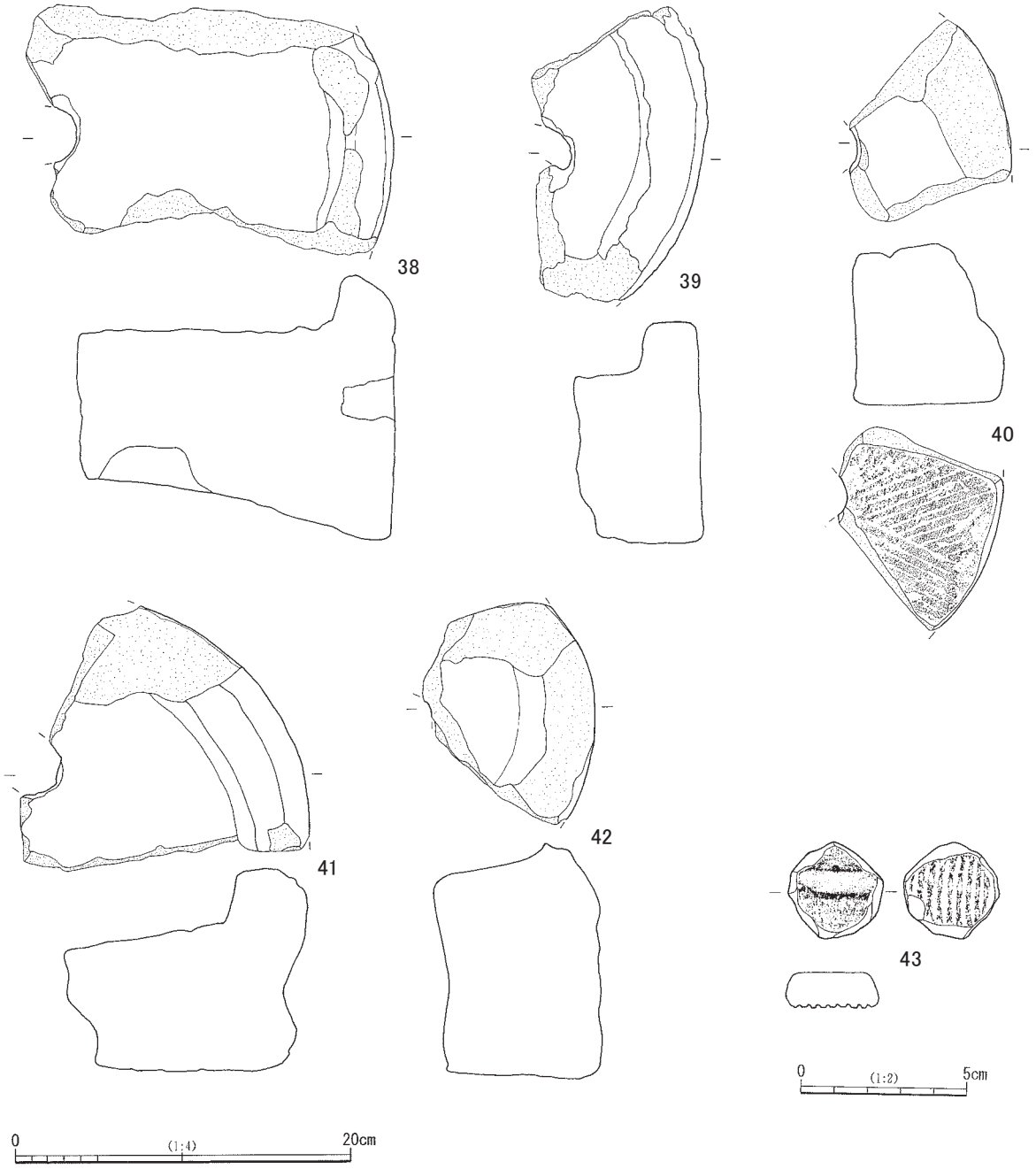
第92図　(16)SK018(2)



第93図　(16)SK018(3)



第94図　(16)SK018(4)



第95図　(16)SK018(5)

1.50m程度しかないこと、覆土にロームの目立った堆積がないことから天井部が存在していた可能性は低いと考えられる。あるいは簡便な屋根が架けられ、地下式の室状を呈していたのかもしれない。土の天井部を伴わないことから、地下式坑とすることは難しく、特殊な用途の土坑と考えられる。板碑など本来土坑内から出土するはずのない遺物が含まれており、雑多な遺物で構成されている点から、最終的にはゴミ穴的に不要となったものを集積、廃棄したのであろうと推測される。

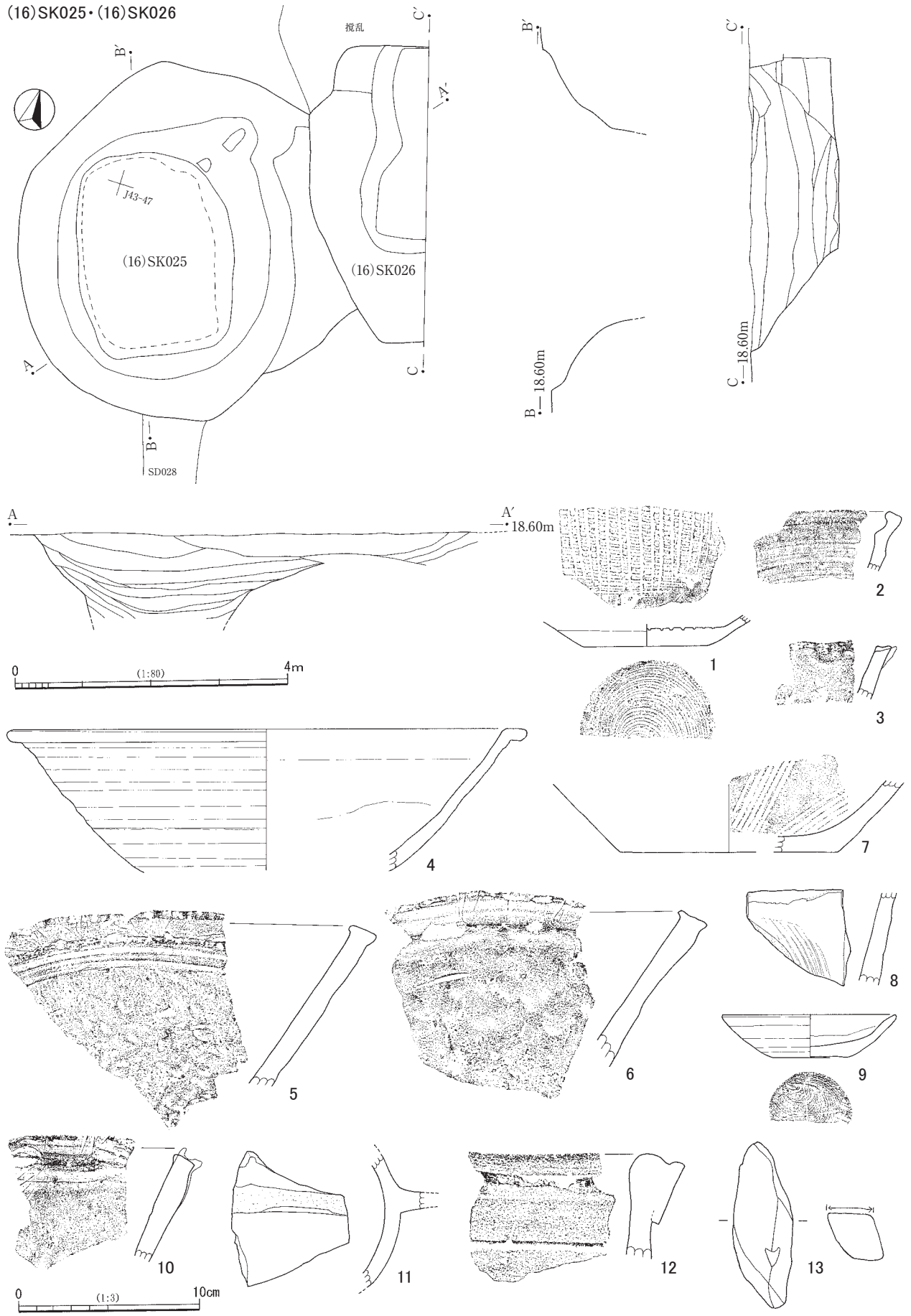
出土遺物は43点図化できた。１は瀬戸の挟み皿で、口径12.0cm、底径6.0cm、器高2.5cmを測る。口縁部内外面に灰釉を施す。２は瀬戸の丸皿で、口径10.4cm、底径5.8cm、器高2.5cmを測る。底部以外、灰

釉がかかる。高台の縁は擦られている。３も瀬戸丸皿で、底部のみが遺存する。底径は6.0cmで、全面に灰釉がかけられる。４も瀬戸丸皿で、ほぼ完形品である。口径11.0cm、底径5.5cm、器高1.8cmを測る。削り出し高台で、碁笥底になる。底部を除いて、灰釉がかかる。５は志野丸皿で、口径10.6cm、底径5.6cm、器高2.0cmに復元できた。全面に釉薬がかかるが、発色が悪い。６は瀬戸腰折皿で、口径14.4cm、底径8.0cm、器高2.8cmを測る。体部下端以外は釉薬がかかる。高台端は擦られている。７は古瀬戸平碗である。15％程遺存しており、底径は5.6cmになる。内外面に灰釉がかかるが、体部下端は露胎である。８～11はカワラケである。器面の摩耗が激しく調整は不明だが、８・10は見込をナデている。12は器種不明の土器である。底径は20.0cm、遺存する器高は19.0cmである。胎土には雲母を含み、底部にスダレ状の圧痕が見られる点など、内耳土器との共通点が見られる。13は内耳土器で、60％程遺存している。口径31.0cm、底径25.7cm、器高8.0cmを測る。耳は３耳と考えられる。胎土には雲母を多く含んでおり、12と似る。近世初頭のものと思われる。14・15も内耳土器で、内耳部のみ遺存する。共に鍋と思われる。15は胎土に雲母を含むが、14は含まれない。15世紀後半代のものであろう。16は常滑片口鉢で、20％程遺存している。口径28.0cm、底径10.0cm、器高9.5cmを測る。８型式にあたるものと思われる。17も常滑片口鉢で、口縁部が遺存する。９型式にあたる。18は瀬戸の擂鉢。19は土製の擂鉢で底部及び体部が10％程遺存している。口径34.4cm、底径11.0cm、器高は20.0cm程になるものと思われる。20も瀬戸擂鉢で、底径は10.0cmを測る。21は備前の擂鉢で、底径10.0cmを測る。22～24は擂鉢で22は古瀬戸後期Ⅳ新、23は大窯３、24は大窯１の時期にあたるだろう。25は常滑片口鉢の底部。26は常滑甕で、10型式にあたろう。27～30・32～42は石製品である。27～30は砥石、32～37は板碑である。板碑は総量で12.7kg、40点あまりが出土しその他に細片となったものがある。34・35を除けば、ほとんどは手の平大の大きさに割られているものであった。手の平大のものは何らかの面取りが行われており、転用のために再加工が行われているようである。形態の遺存がよい34・35も縁辺が研磨ないしは敲打され、再加工の痕跡をよく残している。出土した細片は、板碑を何らかの目的で加工した際の屑なのかもしれない。34・35はともに銘が残るが薄れている。特に36は銘の部分の研磨が顕著である。34は上下を欠損する。右上に蓮華座の痕跡が、中央には「□□二ヵ年ヵ二月日」の銘が何とか確認できる。35は上部を欠損するが、蓮華座の一部が残り、その下の左右に蓮華座と梵字(サク・サ)が見られることから、阿弥陀三尊種子と考えられ、欠損部にはキリークの梵字が刻まれていたと思われる。その下中央に「宥賢律師」その左右に「文明二年(1470年)」と「正月九日」、「年」の左右に「刁」と「庚」が読み取れる。刁は寅の異体字であろう。寅庚は文明二年の干支にあたり整合する。下端に外縁右側に６文字、左側に４文字の光明真言が刻まれている。38～42は石臼である。いずれも上臼で、もの入れの穴を伴っている。38は軸受けと挽き手のほぞ穴も確認できる。31は転用砥石で、常滑大甕の胴部片を再利用している。43は陶器片円盤で、擂鉢片を円形に整形している。

(16)SK025(第96図、図版35)

Ｊ43－47グリッドに位置する。地下式坑と考えられる。(16)SK026と隣接している。検出面の平面形は楕円形を呈する。底面は隅丸長方形を呈する。深度1.4mで湧水があり、完掘を断念した。検出面からの深さは1.50mを超えると推測される。(16)SD018の溝に上層部が撹乱されている。覆土は暗褐色土を主体とし、砂が混入している。北側のコーナー壁に足掛け用とみられる抉り込みが施されており、地下式坑と判断した。破片がほとんどだが覆土中から遺物が出土している。

１は古瀬戸卸皿で、底部が50パーセント遺存し、6.6cmを測る。２は古瀬戸擂鉢の口縁部である。３は



第96図　(16)SK025・(16)SK026

擂鉢の口縁部で、片口部が残る。４は古瀬戸折縁深皿である。８％ほど遺存し、口径は28.6cmに復元できた。５・６は常滑片口鉢。７は擂鉢で、底部の20％が遺存する。底径は12.0cmに復元でき、表面は明褐色、内面は明黄褐色を呈し、焼成は良好である。擂り目の入れ方は備前だが、胎土が違うので、備前を模した焼き物の可能性が考えられる。８は転用砥石で、割れ口に使用痕が見られる。９は古瀬戸の縁釉小皿で、口径9.6cm、底径4.1cm、器高2.4cmを測る。10は常滑片口鉢、12は常滑甕である。11は瓦質の羽釜である。色調は灰色で胎土は密である。体部が球形をなすので、あるいは茶釜かもしれない。13は凝灰岩製の砥石である。時期的には15世紀代のものが主体をなしている。

(16)SK026（第96図、図版20）

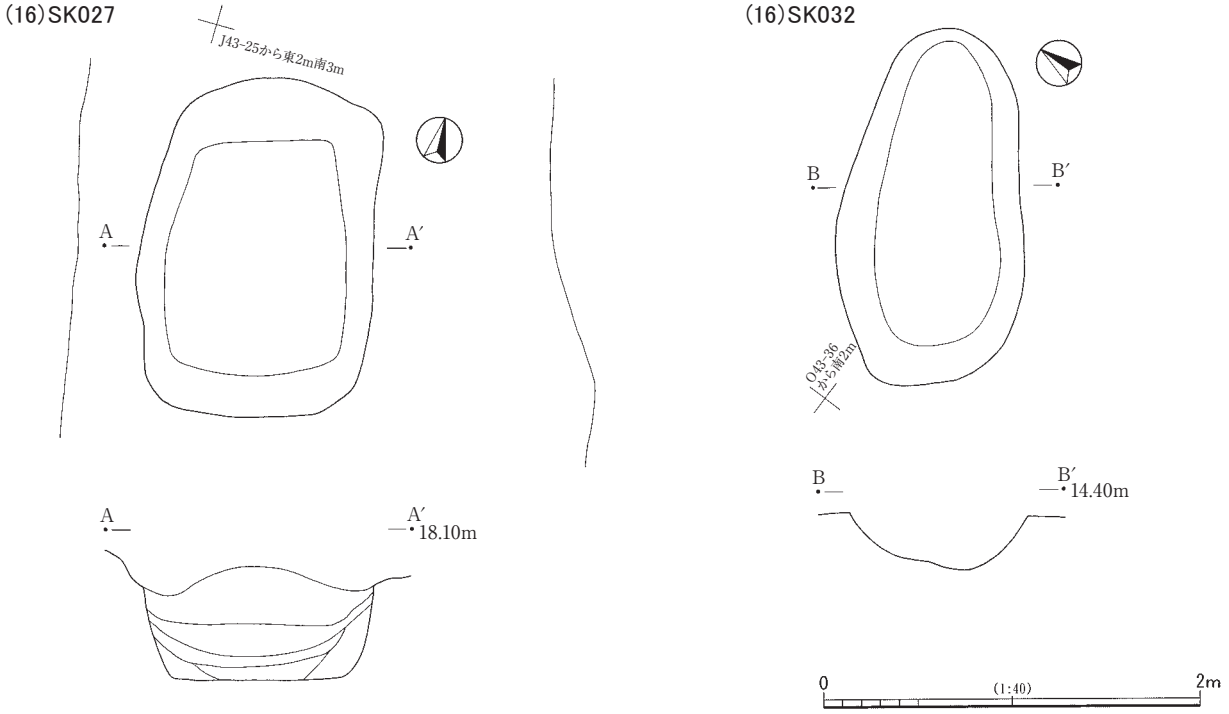
Ｊ43－37グリッドに位置する。地下式坑と推測される。(16)SK025の地下式坑が隣接している。約半分が調査区外となっており、未検出である。平面形は楕円形を呈すると推測される。底面は隅丸長方形であろう。検出面からの深さは1.32mで底面は平らである。覆土は暗褐色土を主体とし、底面近くには炭化物が混入していた。出土遺物はなかった。

(16)SK027（第97図、図版20）

Ｊ43－35グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形を呈する。底面もほぼ相似形で、検出面の規模は長軸長1.78m、短軸長1.22m、検出面からの深さは0.59mである。(16)SD023 によって上層部は撹乱を受けている。覆土は暗褐色土を呈し、底面直上に粘土のブロックが堆積していた。土坑墓の可能性は低い。出土遺物はなかった。

(16)SK032（第97図、図版20）

Ｏ43－36グリッドに位置する。平面形は不整楕円形を呈する。検出面の規模は長軸長1.88m、短軸長0.99m、検出面からの深さは0.32mである。出土遺物はなかった。



第97図　(16)SK027・(16)SK032

第３節　溝状遺構

(5)SD004A・(5)SD004B（第98図、図版21）

(5)SD004Aは、Ｌ43－84～M43－74グリッドにかけて位置している。総延長距離は約50mである。東西方向に延びている。調査前に溝の存在は確認されておらず、完全に埋没していた。近接して農道があったことから道路関連の溝の可能性がある。溝幅は一定しており約1.40m、検出面からの深さは0.24mである。底面の幅は狭い。(5)SD004Bが並行している。溝に直接関連すると思われる出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

(5)SD004Bは、Ｌ43－84～M43－63及びM43－12～M42－73グリッドにかけて位置している。総延長距離は、約90mである。調査区を異にしているが、溝２条が同一の溝と判断されたことから同一番号を付している。(5)SD004Aと並行し、一端北上して再度クランク状に曲がっている。近接して農道があったことから道路関連の溝の可能性がある。幅はほぼ一定しており、約1.30m、検出面からの深さは約0.40mである。底面の幅は狭い。溝に直接関連すると思われる出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

(5)SD003・(5)SD016・(5)SD017・(5)SD018・(5)SD019（第99・100図、図版21・36）

５条の東西方向に延びる溝が検出されている。調査前に溝の存在は確認されておらず、完全に埋没していた。北側に現道があることから道路に関連した溝であろうと考えられる。

(5)SD003は、Ｌ43－13～M43－90グリッドにかけて位置している。総延長距離は約35mである。本遺構のほか(5)SD016～(5)SD019の４条が並行して走っているが、これらの溝との新旧関係は不明である。溝幅は広く、3.00m、検出面からの深さは最大で0.40mである。底面は凹凸があり、径の小さなピットが不規則に検出されている。

(5)SD016は、Ｌ43－23～M42－93グリッドにかけて位置している。総延長距離は約35mである。本遺構のほか(5)SD017～(5)SD019の４条が接して走っており、セクションから南側ほど新しいと考えられる。溝幅は約1.70mである。検出面から深さは0.80mである。

(5)SD017は、Ｌ43－23～M42－83グリッドにかけて位置している。総延長距離は約35mである。左右の溝に壊されており幅を確認できず底面のみである。検出面から深さは0.60mである。

(5)SD018は、Ｌ43－33～M42－93グリッドにかけて位置している。総延長距離は、約35mである。溝幅は約1.60mであるが一定していない。検出面から深さは0.40mである。

(5)SD019 は、Ｌ43－33～Ｎ43－35グリッドにかけて位置している。総延長距離は、約10mである。溝幅は約0.70mである。検出面から深さは 0.42 mである。

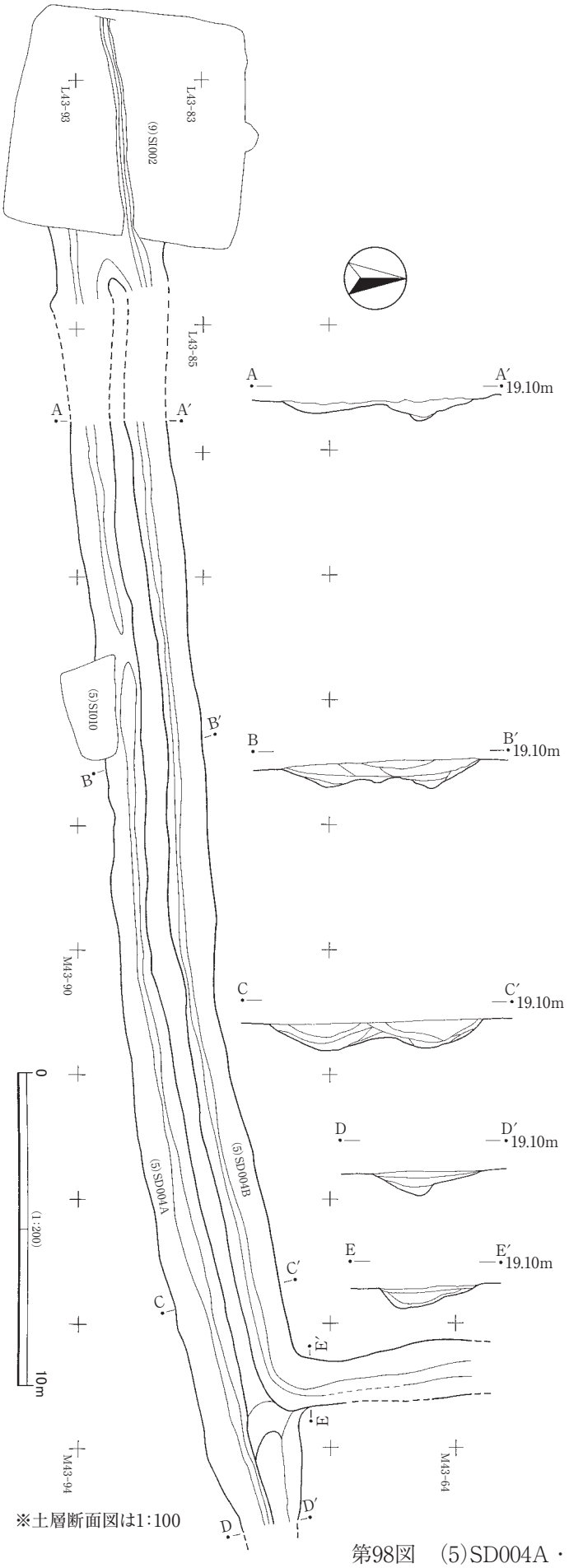
出土遺物には時期幅があり、本遺構の時期を特定することは難しいが、最も新しい遺物によって中世後期以降と考えられる。

出土遺物は、１～３が(5)SD003から、４～７が(5)SD018から、８が(5)SD019から出土している。１は須恵器長頸壺、２・４は土師器坏、３は板碑片、５は瓦、６は陶器片円盤、７・８は砥石などである。いずれも各溝に伴うと判断できる根拠には乏しい。

(10)SD022（第101 図）

Ｎ44－63～Ｎ44－69グリッドにかけて位置している。総延長距離は約24mである。東西方向に延びている。溝幅は一定しておらず約1.40m、検出面からの深さは約0.10mと浅い。底面は平らである。

出土遺物は、奈良・平安時代の竪穴住居跡を壊していることから、これら竪穴住居跡に伴っていた遺物



第98図　(5)SD004A・(5)SD004B

が出土しており、溝本来の時期を特定できる遺物は出土していない。

(11)SD010A・(11)SD010B・(11)SD010C・(11)SD010D・(15)SD003（第102図）

(11)SD010A・(11)SD010Dは南北方向、(11)SD010B・(11)B010Cは東西方向に延びている。出土遺物がなく、それぞれの時期を特定できないが、大きな時期差はないようである。

(11)SD010A は、Ｊ44－10～Ｊ44－41グリッドにかけて位置している。総延長距離は、約14mである。溝幅は約1.90m、検出面からの深さは0.19mと浅い。(11)SD010Cと切り合っており、本溝の方が新しい。

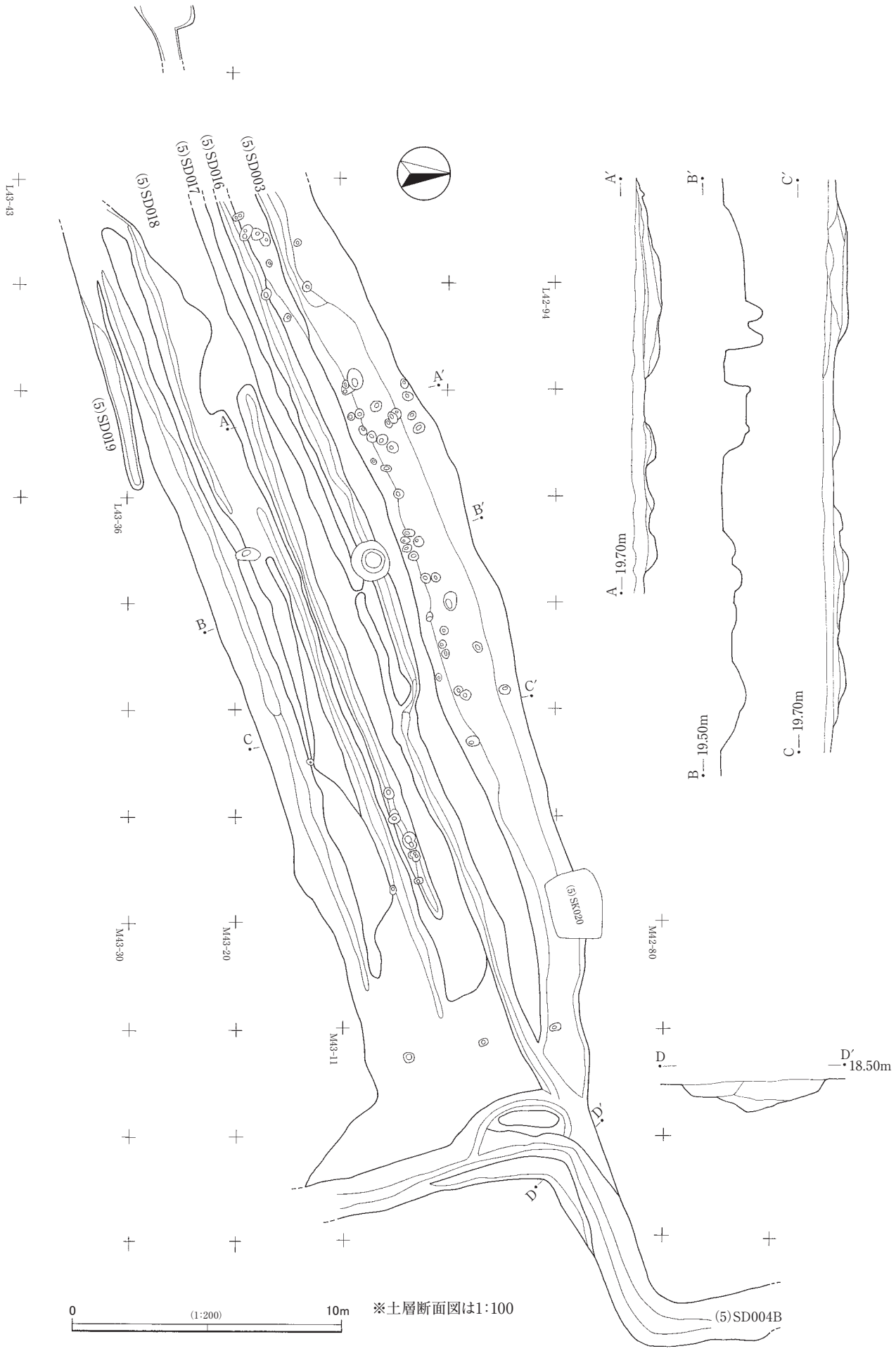
(11)SD010Bは、Ｉ44－20～Ｉ44－18グリッドにかけて位置している。総延長距離は、約33mである。溝幅は1.80m、検出面からの深さは0.30mである。底面の幅は狭い。

(11)SD010Cは、Ｉ44－33～Ｊ44－10グリッドにかけて位置している。総延長距離は、約28mである。溝幅は約2.60mで一定していない。検出面からの深さは約0.30mである。

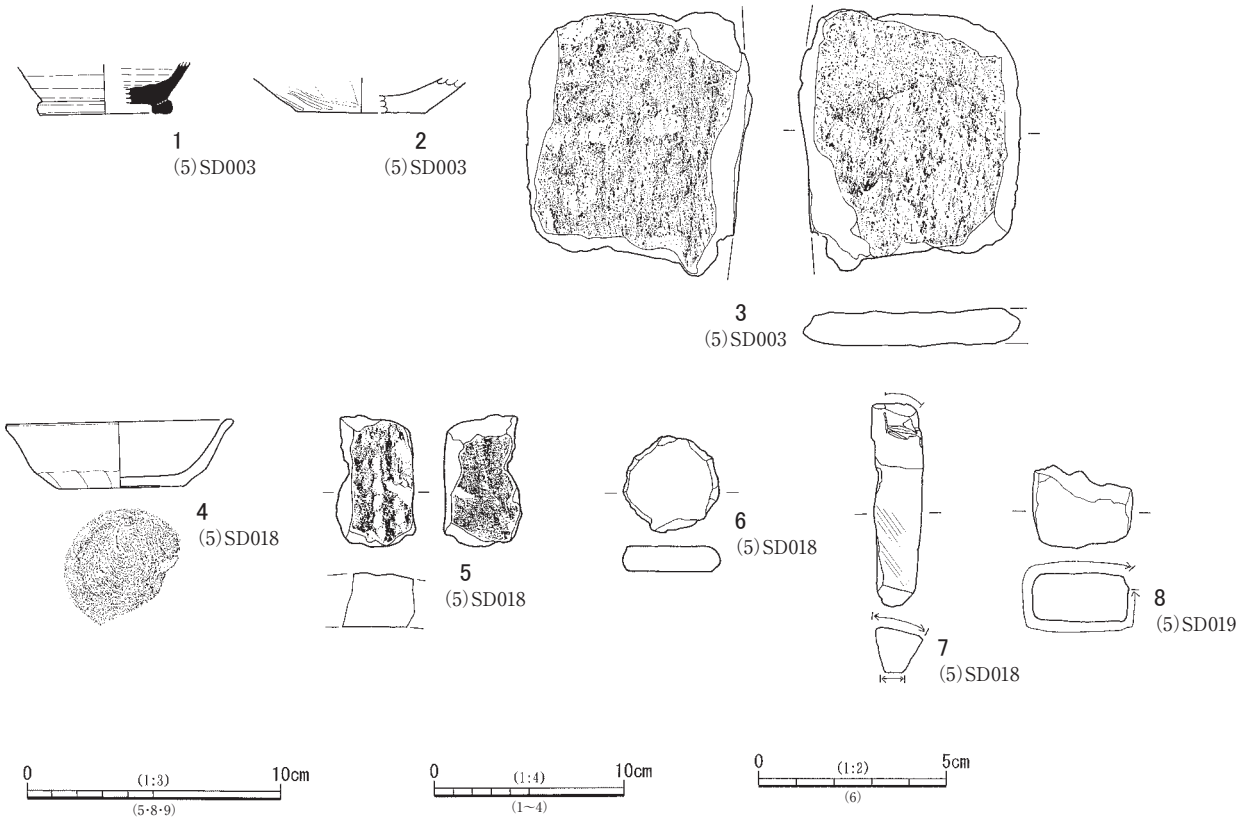
(11)SD010Dは、Ｉ44－22～Ｉ44－33グリッドにかけて位置している。総延長距離は、約８mである。

(11)SD010Cと同一の溝で南北方向に方向が変わるのであろう。溝幅は約2.50mである。

(15)SD003は、Ｉ44－15～Ｉ44－16グリッドにかけて位置している。総延長距離は、約７mである。(11)SD010Bなどと同一方向に延びている。溝幅は約0.90m、検出面からの深さは0.12mで浅い。底面は平らである。



第99図　(5)SD003・(5)SD004B・(5)SD016・(5)SD017・(5)SD018・(5)SD019



第100図　(5)SD003・(5)SD018・(5)SD019 出土遺物

(16)SD015・(16)SD023・(16)SD024・(16)SD028・(16)SD030（第103～105図、図版32・35・36）

中世の土坑群が位置する区域に伴う溝状遺構群である。屋敷地に関連した区画溝の可能性があり、溝で仕切られた区画内には、地下式坑などが検出されている。溝はコの字形を呈している。出土遺物は、中世陶器や砥石などが出土しているが、これらの溝の時期が特定できる資料には乏しい。

(16)SD015は、Ｊ43－87～Ｋ42－90グリッドにかけて位置している。総延長距離は、約50mである。南北に延びる溝で、溝幅は一定しており約1.00m、検出面からの深さは0.25mである。南端で西に曲がり、(16)SD024と共に区画溝を構成している。

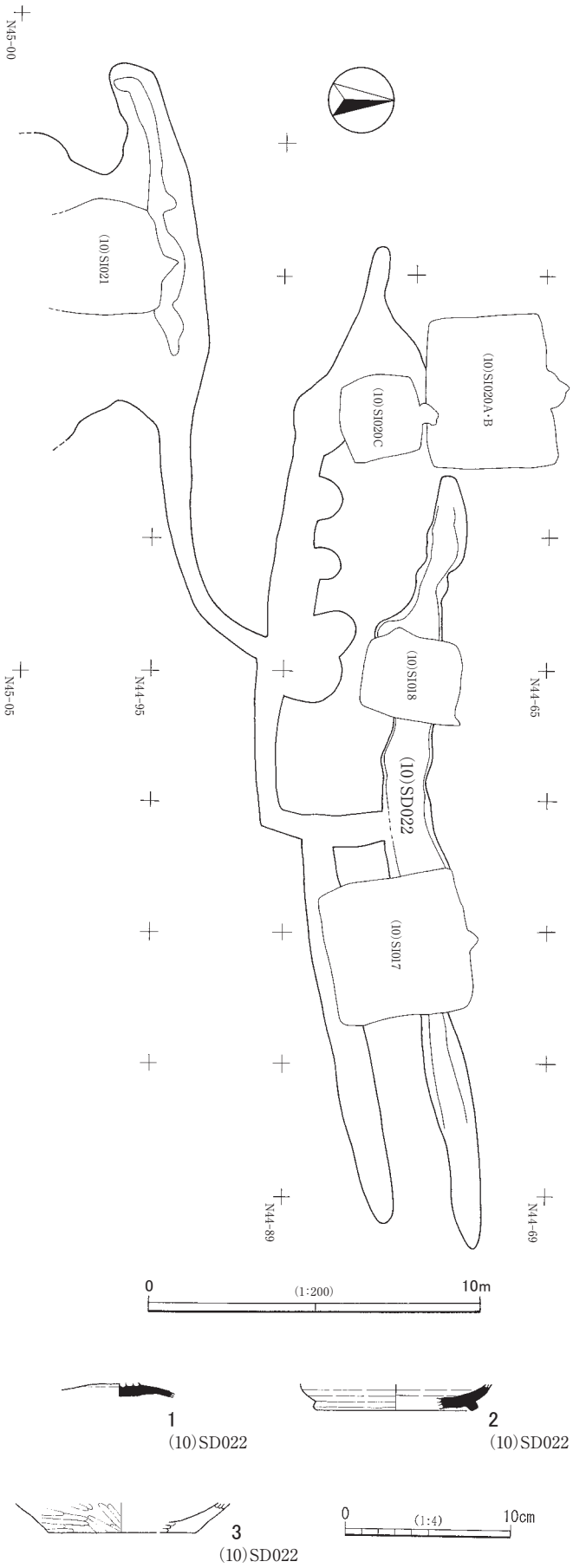
(16)SD023は、Ｊ43－25～Ｊ43－55グリッドにかけて位置している。総延長距離は、約12mである。溝幅は約0.80m、検出面からの深さは0.13mである。(16)SD024と並行している。(16)SK007の中世土坑などが溝と切り合っている。新旧関係は不明である。

(16)SD024は、Ｊ43－15～Ｊ43－87グリッドにかけて位置している。総延長距離は約30mである。溝幅は約2.00m、検出面からの深さは0.57mである。(16)SD015と合わせコの字形の区画を呈する。

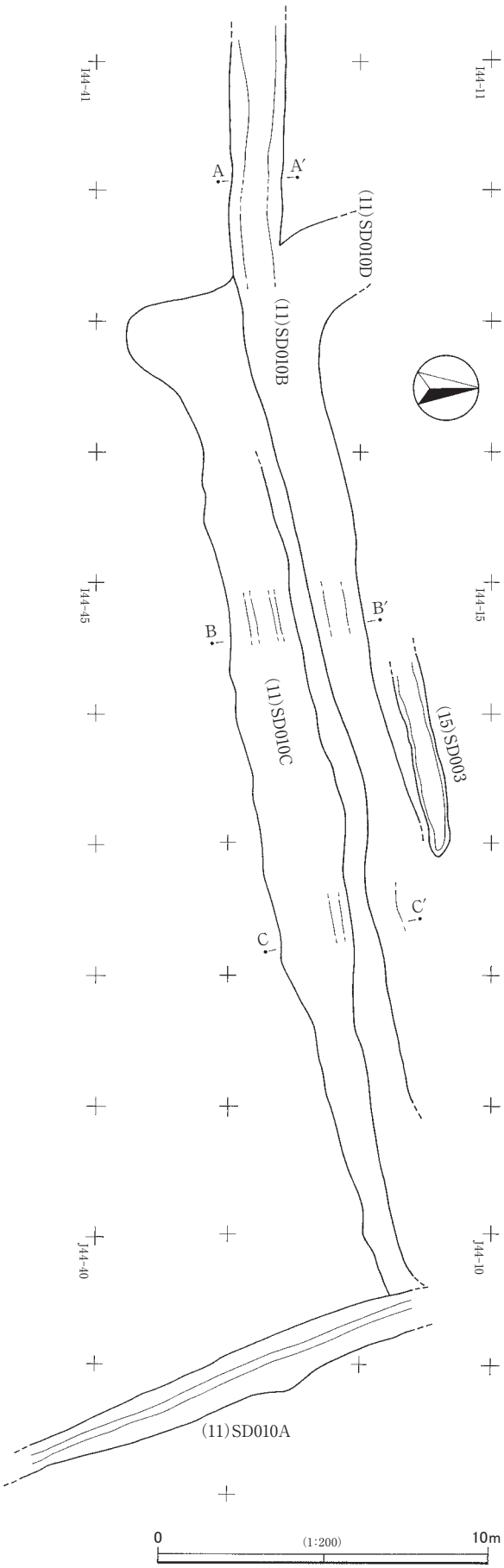
(16)SD028は、Ｊ43－47～Ｊ43－78グリッドにかけて位置している。総延長距離は、約10mである。溝幅は約0.60m、検出面からの深さは0.17mである。コの字形の区画内にある。

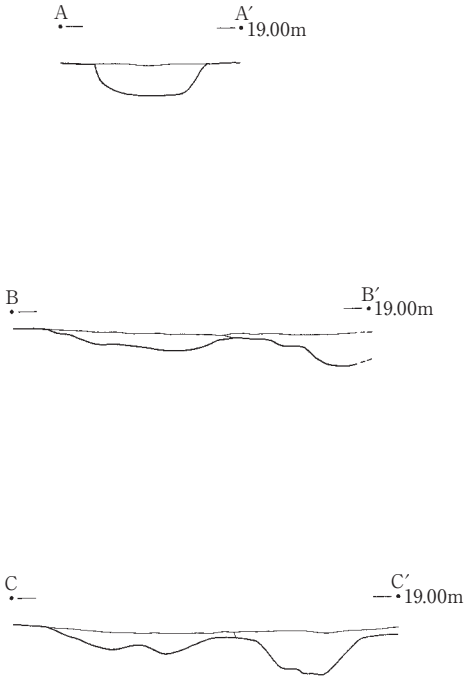
(16)SD030は、Ｋ43－31グリッドに位置している。総延長距離は、約４mである。溝幅は約1.80m、検出面からの深さは0.25mである。(16)SD015を壊しているが、特殊な土坑の(16)SK018から延びており、何らかの関連施設かもしれない。

第104図１～８は、(16)SD024出土遺物である。１は磁器碗で、表面に花鳥文が描かれる。２は竜泉窯



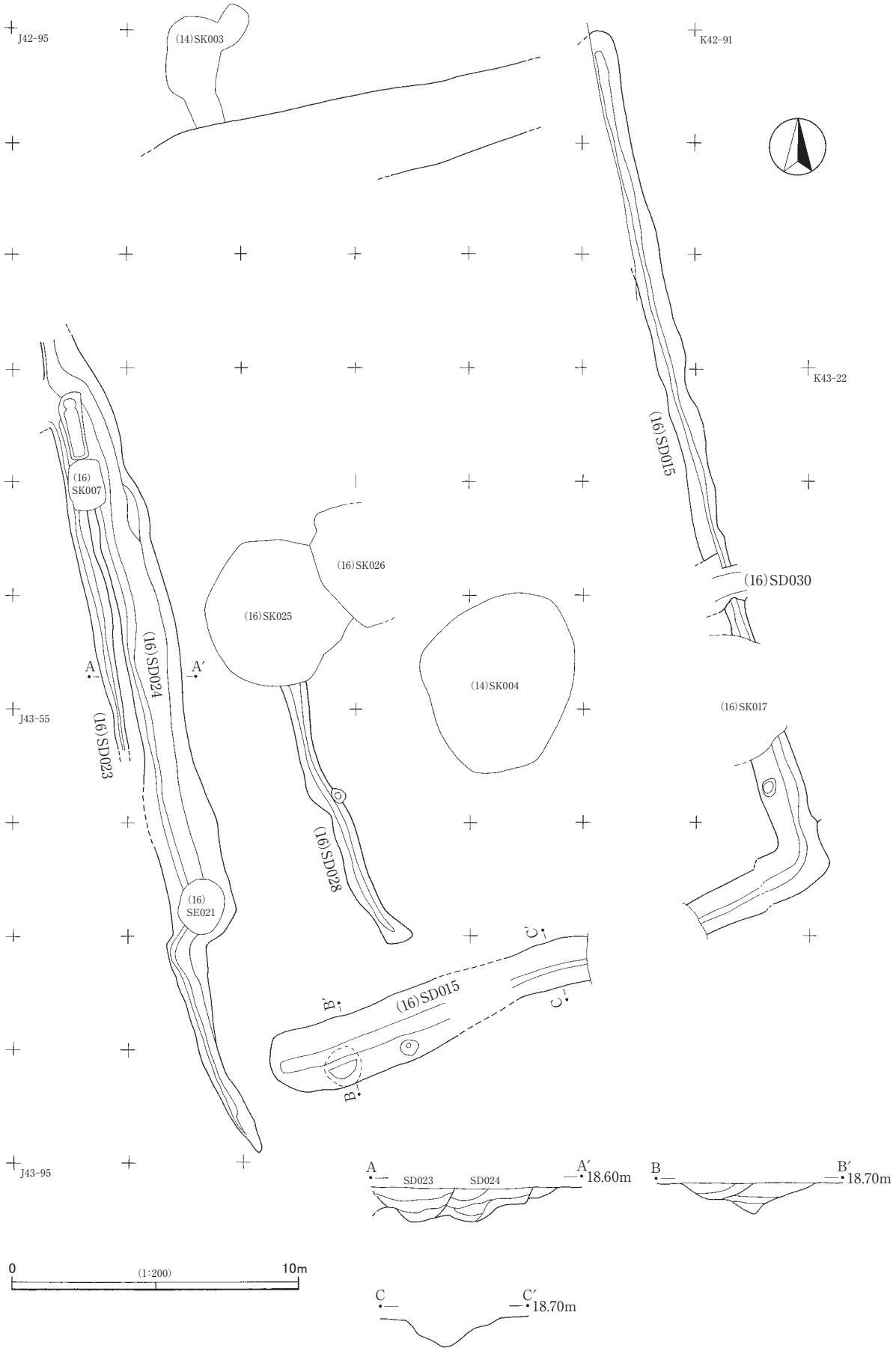
第101図　(10)SD022



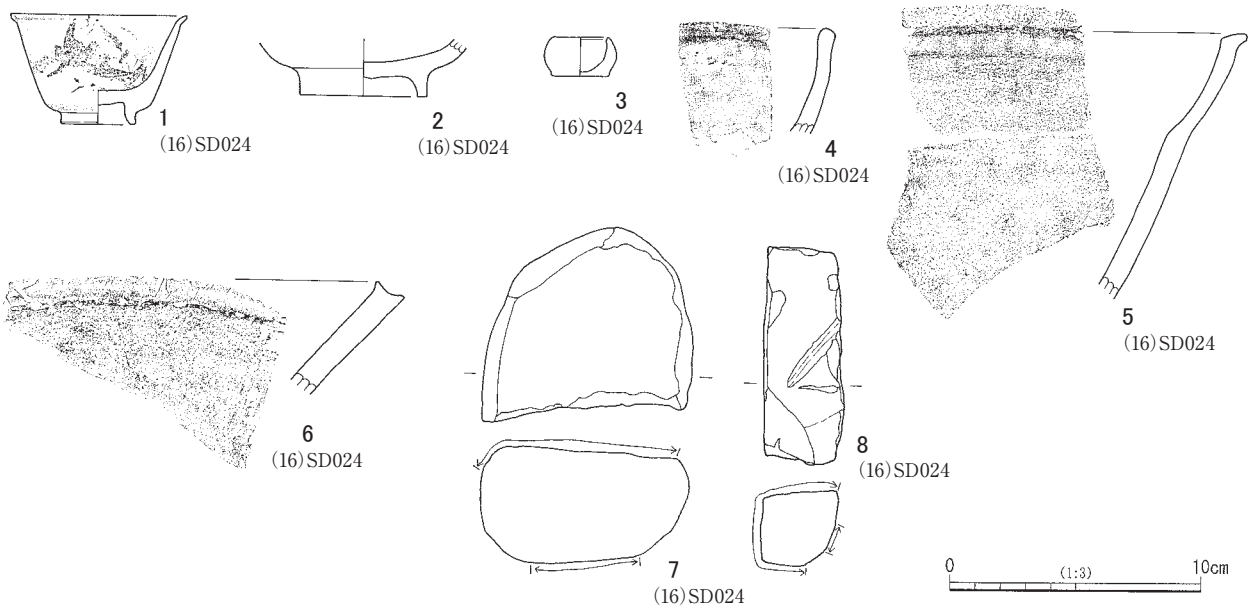


※土層断面図は1:100

第102図　(11)SD010A・(11)SD010B・(11)SD010C・(11)SD010D・(15)SD003



第103図　(16)SD015・(16)SD023・(16)SD024・(16)SD028



第104図　(16)SD024 出土遺物

系の青磁碗。３はミニチュア土器。４は古瀬戸の平碗である。５は内耳土器。６は常滑の片口鉢である。７は砂岩製の砥石で、全体に焼けている。８は凝灰岩製の砥石である。１と３は近世の遺物であるが、他は中世の所産である。

(16)SD001・(16)014・(16)016・(16)019・(16)020・(16)029(第105・106図、図版36)

中世の土坑群が位置する区域に伴う溝状遺構群である。屋敷地に関連した区画溝の可能性があり、溝で仕切られた区画内には、地下式坑などが検出されている。Ｌ字に曲がる溝などが見られる。出土遺物は、中世陶器や鉄製品、砥石、石製紡錘車などが出土しているが、これらの溝の時期が特定できる資料には乏しい。

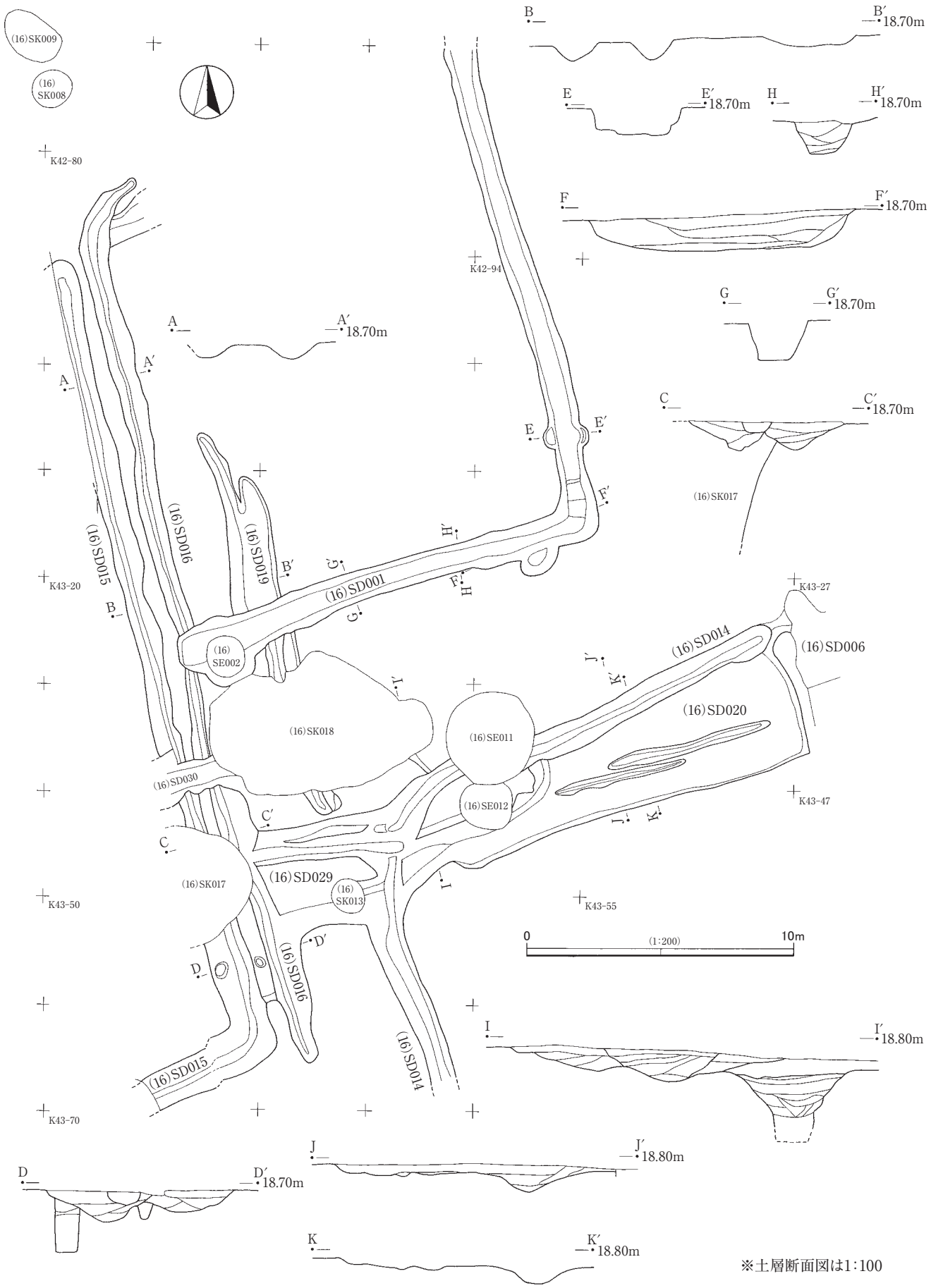
(16)SD001は、Ｋ42－73～Ｋ43－21グリッドにかけて位置している。総延長距離は、約35mである。溝幅は約0.60m、検出面からの深さは約0.46mである。断面は逆台形状を呈する。Ｌ字形に曲がり、北へ延びている。

(16)SD014は、Ｋ43－26～Ｋ43－63グリッドにかけて位置している。総延長距離は約24mである。溝幅は約1.90ｍ、検出面からの深さは0.26mである。東西方向から南にＬ字に曲がっている。(16)SD020に関連した溝かもしれない。

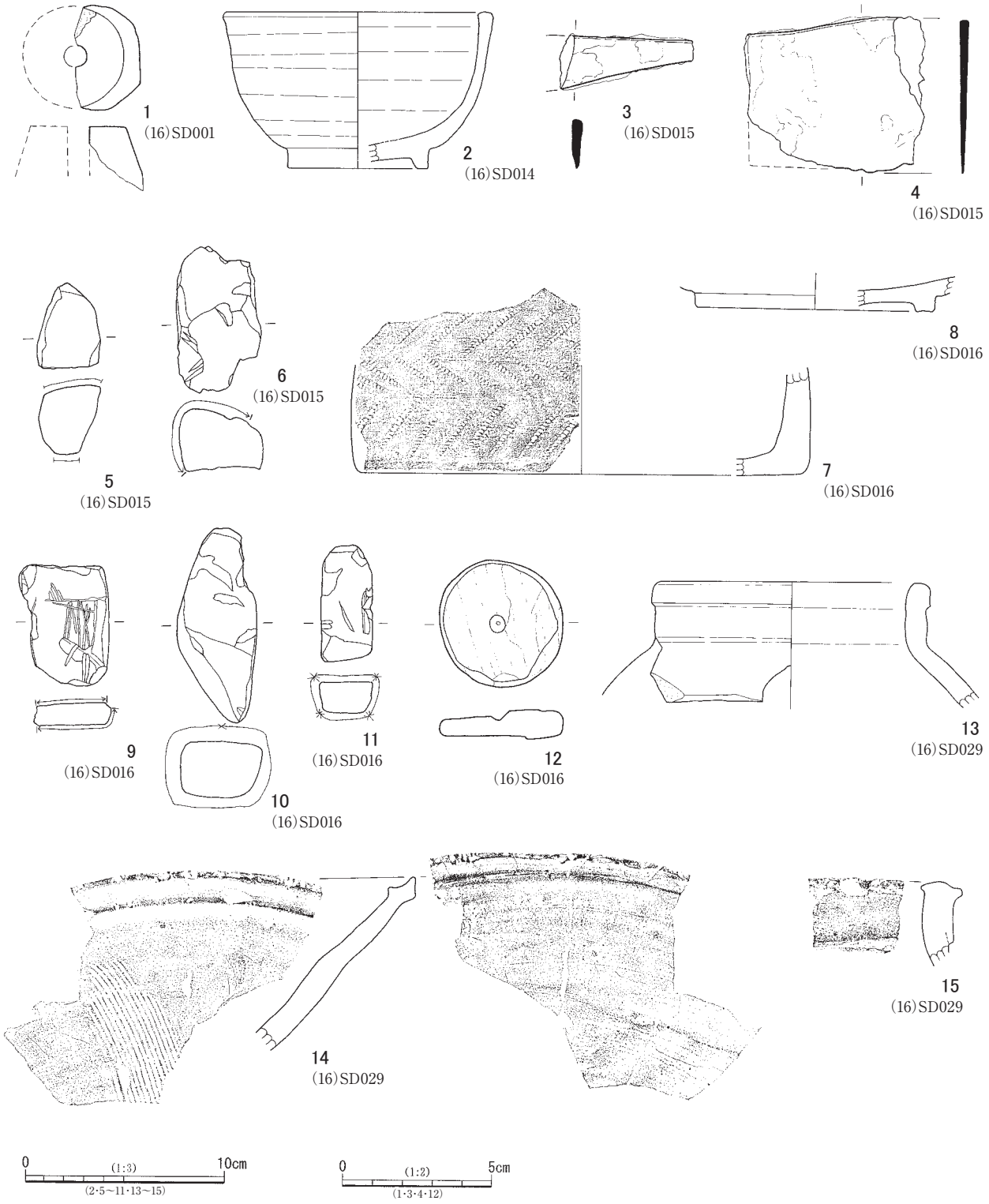
(16)SD016は、Ｋ42－80～Ｋ43－62グリッドにかけて位置している。総延長距離は、約34mである。西側の(16)SD015に並行し、溝幅は約0.80m、検出面からの深さは0.20mである。北端で東方向に曲がっている。

(16)SD019は、Ｋ43－01～Ｋ43－42グリッドにかけて位置している。総延長距離は、約15mである。溝幅は約1.70m、検出面からの深さは0.08mである。北側で２条に分かれることから、本来は２条だった可能性がある。(16)SD015・(16)016と並行している。

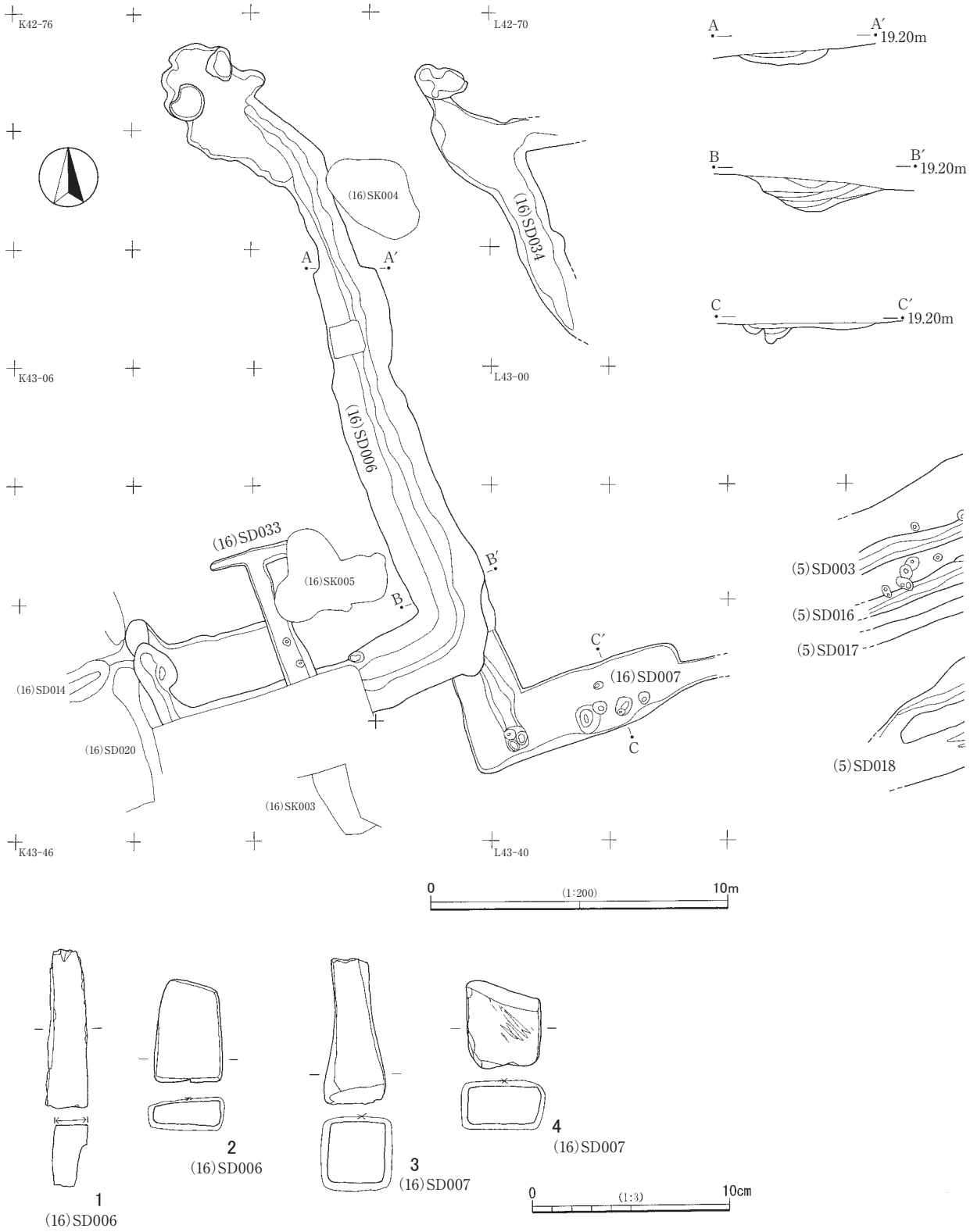
(16)SD020は、Ｋ43－37～Ｋ43－43グリッドにかけて位置している。総延長距離は、約15mである。溝幅は約0.40m、検出面からの深さは0.12mである。溝というよりも台形様の浅い落ち込みと言った方が良



第105図　(16)SD001・(16)SD014・(16)SD015・(16)SD016・(16)SD019・(16)SD020・(16)SD029・(16)SD030



第106図　(16)SD001・(16)SD014・(16)SD015・(16)SD016・
(16)SD029 出土遺物



第107図　(16)SD006・(16)SD007・(16)SD033・(16)SD034

いかもしれない。何らかの施設跡の可能性がある。底面中央に２条の細い溝が検出されている。

(16)SD029は、Ｋ43－42～Ｋ43－43グリッドにかけて位置している。総延長距離は、約６ｍで、(16)SD014とは異なる溝と考えられる。溝幅は約0.40m、検出面からの深さは0.19mである。

第106図１は石製の紡錘車で、(16)SD001出土。２は陶器碗で、内外面に黄釉がかかる。(16)SD014出土で近世の所産。３・４は(16)SD015出土の鉄製品。３は刀子、４は鎌であろうか。５・6は(16)SD015出土の砥石。７～12は(16)SD016出土遺物である。７は瓦質の土器で、底径22.0cm に復元でき、表面には刺突による模様が描かれる。手あぶりもしくは風炉と考えられる。近世の所産であろう。８は陶器碗の底部で、30％遺存する。

９～11 は砥石である。12は円形の石製品で、中央に穿孔の痕跡があるが貫通していない。紡錘車の未成品であろうか。13～15は（16）SD029 出土の遺物である。13は常滑の壺である。口径14.0cmで玉縁口縁のものである。なお下端の割れ口は擦られており、砥石に転用された可能性がある。14は瀬戸の擂鉢。15は常滑甕の口縁部片である。中世末から近世初頭のものであろう。

(16)SD006・(16)SD007・(16)SD033・(16)SD034（第107図、図版21・36）

中世の土坑群が位置する区域に伴う溝状遺構群である。屋敷地に関連した区画溝の可能性がある。Ｌ字に曲がる溝などが見られる。出土遺物は少なく、砥石などが出土している。

(16)SD006は、Ｋ42－77～Ｋ43－38グリッドにかけて位置している。総延長距離は約27mである。北から南南東方向に向かい、Ｌ字に西に曲がっている。溝幅は約2.50mの太い溝である。検出面からの深さは約0.42mである。北端は溝幅が広がり何らかの施設があったようである。

(16)SD007は、Ｋ43－29～Ｌ43－21グリッドにかけて位置している。総延長距離は約10mである。溝幅は約2.30m、検出面からの深さは0.16mの浅い溝である。底面は平らで、(16)SD006と切り合っている。Ｌ字に曲がっており、底面に小ピットが不規則に検出されている。

(16)SD033は、Ｋ43－17～Ｋ43－28グリッドにかけて位置している。総延長距離は、約５ｍである。溝幅は最大1.00m、検出面からの深さは0.05mである。Ｔ字状を呈する。東側に(16)SK005が隣接しており、何らかの施設の一部である可能性が高い。

(16)SD034は、Ｋ42－79～Ｌ42－90グリッドにかけて位置している。総延長距離は、約12mである。溝幅は約1.50m、検出面からの深さは0.13mと浅い。(16)SD006にほぼ並行しており、北側が広がって何らかの施設の存在を示している点も(16)SD006に類似している。

第107図１～４は砥石である。１・２は(16)SD006出土、３・４は(16)SD007出土である。

第７章　遺構外出土遺物

第１節　概要

本章では、古墳時代以降の遺構外出土遺物について扱う。本来は竪穴住居跡などの遺構に伴っていたであろう古墳時代や奈良・平安時代及び中・近世の遺物などである。

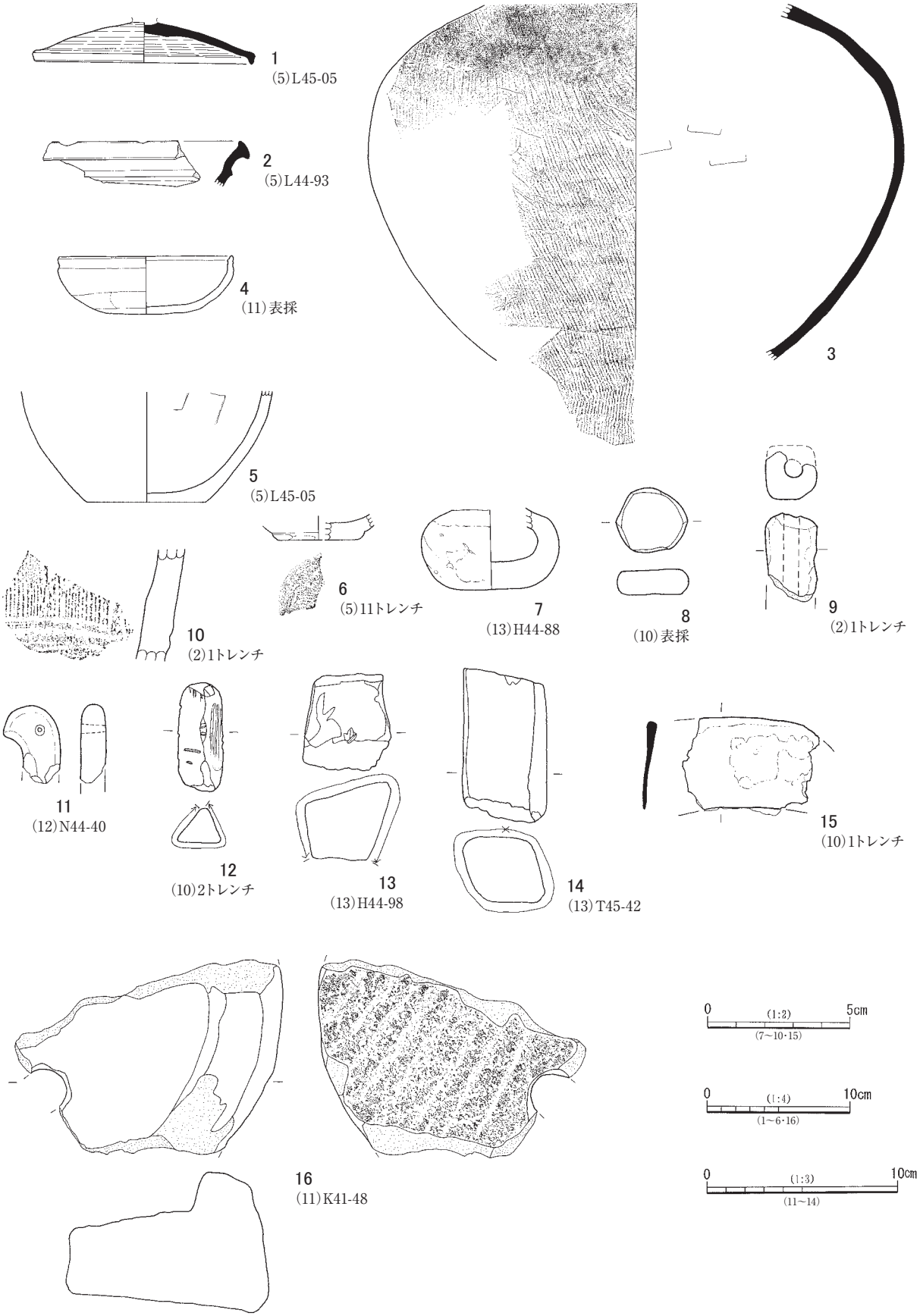
調査区全域から出土した遺構外の遺物で図示できるものは少なかった。掲載はしないが、全域から時期の特定できないスラグが出土している点が特徴の一つである。中世の地下式坑からもスラグが出土していることから、中世にこの地域で精錬・鍛冶などの操業が行われていた可能性がある。本遺跡に限らず、本区画整理事業地内の各遺跡の調査においてもスラグの出土が目立つものの、操業の痕跡を示す生産遺構は、これまで確認されていない。

第２節　出土遺物（第108・109図、図版30・36）

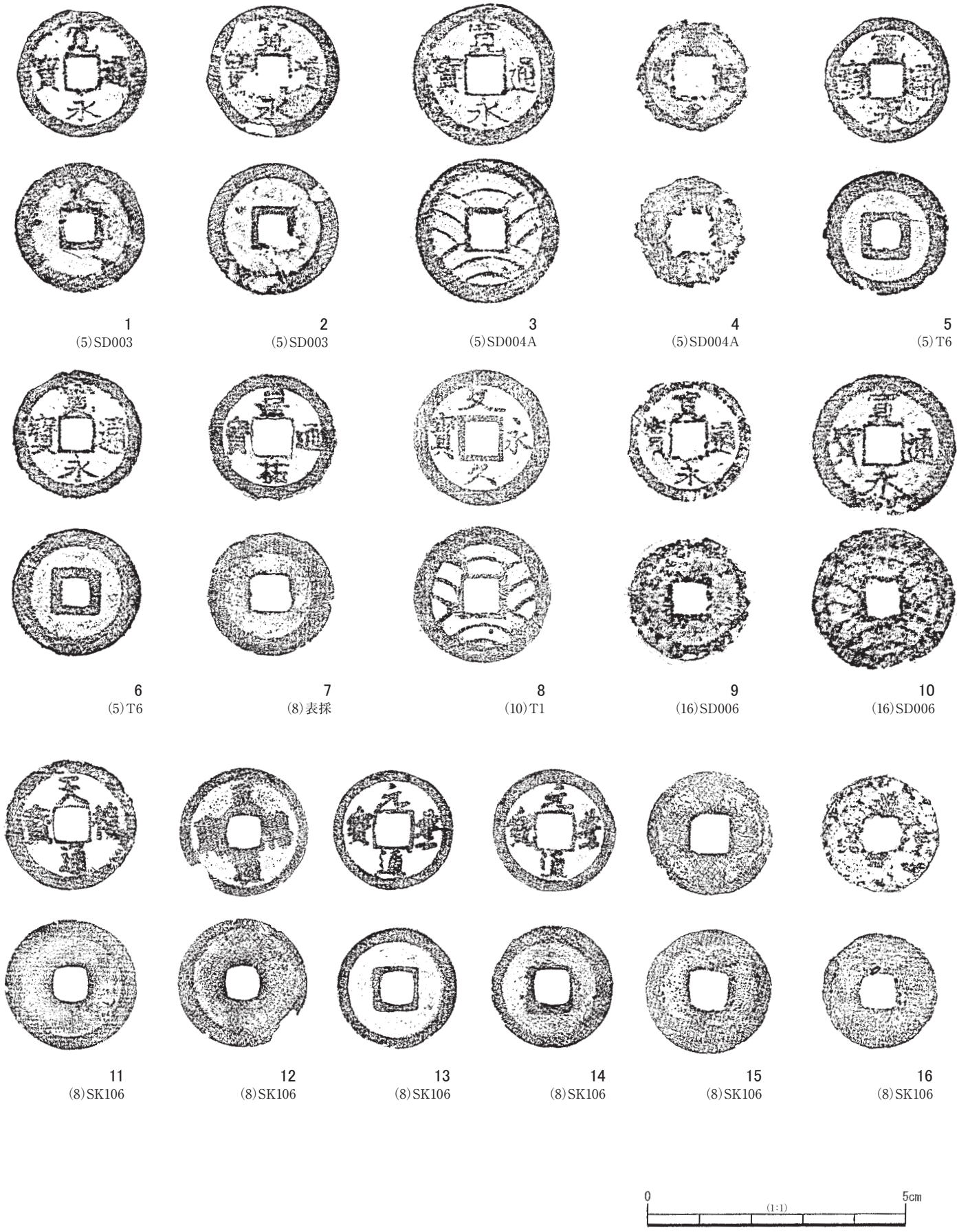
第108図１は須恵器の蓋で、宝珠を欠損する。２は須恵器甕の口縁部片で、自然釉がかかる。３は須恵器甕の胴部で、上半には自然釉がかかる。４は土師器坏である。丁寧な作りで、体部外面はヘラケズリ、口縁部、体部内面は横ナデを行う。５は土師器甕である。表面の磨滅が激しいが、体部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデを行っているものと思われる。６は土師器坏の底部である。摩耗が激しいが、回転糸切後無調整のものであろう。７はミニチュア土器で、口縁部を欠損する。８は土製円盤で、土器片の周縁を磨き加工している。９は管状土錘である。10は円筒埴輪片。11は水晶製の勾玉で、下端を欠損する。

12～14は砥石である。12・13は凝灰岩、14は砂岩を使用している。15は鉄製品の鎌であろう。16は石臼である。もの入れの穴を伴う上臼である。前調査区内から出土した石臼は、全て破片である。下臼は１点も確認されなかった。下臼は転用されることが多いのかもしれない。

第109図１～16は、全調査区から出土した銭貨である。調査面積や中世の遺構数などからすれば、量的には少ないと言えるだろう。土坑墓から出土したもの６点、溝状遺構から出土したものが６点、遺構外が４点である。１・２・５・６・９が古寛永通寶、３・10が新寛永通寶、８が文久永寶である。４は渡来銭であろう。銭文は不明である。７は嘉祐通寶である。11～16は土坑墓から出土した六文銭である。11・12は天喜通寶、13・14は元豊通寶、15は拓本では文字が見えないが皇宋通寶などの北宋銭からなっている。



第108図　遺構外出土遺物


1
(5)SD003
2
(5)SD003
3
(5)SD004A
4
(5)SD004A
5
(5)T6
6
(5)T6
7
(8)表採
8
(10)T1
9
(16)SD006
10
(16)SD006
11
(8)SK106
12
(8)SK106
13
(8)SK106
14
(8)SK106
15
(8)SK106
16
(8)SK106
0
5cm
(1:1)

第109図　出土銭貨

第６表　砥石一覧表

No.	挿図番号	調査年次	出土地点	遺物番号	種　類	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重　量 (g)	石　材	備　考
1	第 37 図12	（５）	SI005	3	砥石	58.0	49.6	12.5	55.99	凝灰岩	
2	第 40 図 4	（５）	SI008	4	砥石	43.0	43.5	46.4	63.29	凝灰岩	
3	第 52 図19	（９）	SI007	35	砥石	96.8	41.8	41.1	255.98	凝灰岩	
4	第 54 図 3	(10)	SI002	3	砥石	34.6	28.6	11.7	8.74	凝灰岩	
5	第 28 図 6	(10)	SI010	10	砥石	(156.0)	119.9	97.9	2881.13	安山岩	縄文時代石棒を転用
6	第 70 図 7	(11)	SI004	1	砥石	71.2	22.5	40.4	66.66	凝灰岩	
7	第 81 図 3	（８）	SK107A	1	砥石	80.8	35.6	12.2	60.25	凝灰岩	
8	第 86 図 8	(14)	SK004	1	転用砥石	110.6	81.3	12.6	128.05	陶器	
9	第 89 図 4	(16)	SK009	1	砥石	92.7	23.7	26.8	85.56	凝灰岩	
10	第 93 図27	(16)	SK018	2	砥石	120.0	27.3	34.6	134.58	凝灰岩	
11	第 93 図28	(16)	SK018	2	砥石	81.7	30.7	34.2	95.98	凝灰岩	
12	第 93 図29	(16)	SK018	2	砥石	50.6	26.2	18.2	40.84	凝灰岩	
13	第 93 図30	(16)	SK018	2	砥石	46.8	30.0	30.1	58.87	凝灰岩	
14	第 93 図31	(16)	SK018	−	転用砥石	113.6	88.5	12.0	180.09	陶器	
15	−	(16)	SK018	2	砥石	59.0	27.0	38.0	54.92	凝灰岩	
16	−	(16)	SK018	2	砥石	48.3	34.9	21.9	33.85	凝灰岩	
17	第 96 図13	(16)	SK025	2	砥石	91.2	31.6	25.3	52.06	凝灰岩	
18	−	(16)	SE012	2	砥石	80.4	40.8	64.0	266.44	安山岩	
19	第 90 図 7	(16)	SE021	2	砥石	74.4	48.4	18.8	146.01	凝灰岩	
20	−	（５）	SD016	1	砥石	26.5	33.0	25.3	26.29	凝灰岩	
21	第100図 7	（５）	SD018	10	砥石	79.7	20.8	17.3	36.23	凝灰岩	
22	第100図 8	（５）	SD019	1	砥石	32.5	39.5	22.6	35.75	凝灰岩	
23	第 71 図 3	(11)	SI006	1	砥石	70.5	39.2	24.5	101.29	砂岩	
24	第107図 1	(16)	SD006	4	砥石	80.0	35.0	20.9	65.35	頁岩	
25	−	(16)	SD006	3	砥石	25.8	19.7	24.8	13.42	凝灰岩	
26	−	(16)	SD006	3	砥石	43.5	37.8	9.0	21.05	凝灰岩	
27	第107図 2	(16)	SD006	3	砥石	51.8	34.1	12.9	36.11	凝灰岩	
28	−	(16)	SD006	3	砥石	24.6	33.0	7.3	6.87	凝灰岩	
29	−	(16)	SD006	3	砥石	26.8	39.0	9.1	10.11	凝灰岩	
30	第107図 3	(16)	SD007	2	砥石	73.0	30.0	34.6	75.43	凝灰岩	
31	第107図 4	(16)	SD007	2	砥石	45.0	37.3	19.4	51.56	凝灰岩	
32	−	(16)	SD020	2	砥石	25.0	22.4	11.0	5.32	凝灰岩	
33	第106図 5	(16)	SD015	2	砥石	42.1	32.5	34.9	49.27	凝灰岩	
34	第106図 6	(16)	SD015	2	砥石	73.7	41.6	31.3	91.38	凝灰岩	
35	−	(16)	SD015	2	砥石	49.5	27.5	22.6	43.29	凝灰岩	
36	−	(16)	SD015	2	砥石	71.2	41.4	21.2	62.02	凝灰岩	
37	−	(16)	SD015	4	砥石	36.8	33.5	43.9	52.18	凝灰岩	
38	第106図 9	(16)	SD016	1	砥石	60.0	43.8	13.6	50.86	凝灰岩	
39	第106図10	(16)	SD016	2	砥石	97.4	39.9	30.8	122.25	凝灰岩	
40	第106図11	(16)	SD016	2	砥石	58.3	26.4	15.9	39.34	凝灰岩	
41	第104図 7	(16)	SD024	2	砥石	73.0	80.6	44.9	353.01	砂岩	
42	第104図 8	(16)	SD024	2	砥石	84.6	31.2	30.3	112.56	凝灰岩	
43	−	(17)	SD006	3	砥石	49.0	37.9	15.8	38.50	凝灰岩	
44	第108図13	(13)	H44-98	1	砥石	51.0	43.2	42.6	113.27	凝灰岩	
45	第108図14	(13)	I45-42	1	砥石	72.4	43.3	35.0	178.19	砂岩	
46	−	（２）	9801T	1	砥石	40.2	26.5	25.6	39.99	凝灰岩	
47	−	（５）	T10	1	砥石	56.3	54.8	7.9	28.14	頁岩	
48	−	(10)	T1	1	砥石	20.3	34.4	28.0	35.08	凝灰岩	
49	−	(10)	T1	1	砥石	36.5	34.8	9.9	9.84	凝灰岩	
50	−	(10)	T1	1	砥石	38.0	27.5	19.1	12.22	凝灰岩	
51	−	(10)	T1	1	砥石	97.7	24.8	15.3	73.28	頁岩	
52	第108図12	(10)	T2	1	転用砥石	56.7	19.8	22.0	18.85	瓦	
53	−	(10)	T4	1	砥石	41.0	19.1	9.8	8.14	凝灰岩	

第７表　石臼一覧表

No.	挿図番号	調査年次	出土地点	遺物番号	部　位	重　量 (g)	石　材	備　考
1	第 95 図38	(16)	SK018	27	上臼	4,100	安山岩	軸受け、もの入れ穴、挽き手の差込穴あり
2	第 95 図39	(16)	SK018	27	上臼	2,251	安山岩	もの入れ穴あり
3	第 95 図40	(16)	SK018	27	上臼	936	安山岩	もの入れ穴あり
4	第 95 図41	(16)	SK018	27	上臼	2,829	安山岩	もの入れ穴あり
5	第 95 図42	(16)	SK018	27	上臼	2,261	安山岩	もの入れ穴あり
6	第108図16	(11)	K41-48	5	上臼	2,107	安山岩	もの入れ穴あり

第８表　板碑一覧表

※全て破片のため計測値は重量のみとした

No.	挿図番号	調査年次	出土地点	遺物番号	種　類	重　量 (g)	石　材	No.	挿図番号	調査年次	出土地点	遺物番号	種　類	重　量 (g)	石　材
1	第100図 3	(5)	SD003	2	板碑	555.6	緑泥片岩	41	−	(16)	SK018	26	板碑	52.9	緑泥片岩
2	−	(5)	SD003	63	板碑	53.5	緑泥片岩	42	−	(16)	SK018	26	板碑	32.1	緑泥片岩
3	−	(5)	SD003	63	板碑	24.2	緑泥片岩	43	−	(16)	SK018	26	板碑	53.6	緑泥片岩
4	−	(5)	SD003	63	板碑	3.7	緑泥片岩	44	−	(16)	SK018	26	板碑	91.4	緑泥片岩
5	−	(5)	SD004	2	板碑	101.4	緑泥片岩	45	−	(16)	SK018	26	板碑	64.5	緑泥片岩
6	−	(5)	SD016	5	板碑	48.2	緑泥片岩	46	−	(16)	SK018	26	板碑	95.5	緑泥片岩
7	−	(5)	M42-80	1	板碑	24.6	緑泥片岩	47	−	(16)	SK018	26	板碑	88.2	緑泥片岩
8	−	(5)	T18	1	板碑	3.8	緑泥片岩	48	−	(16)	SK018	26	板碑	115.6	緑泥片岩
9	−	(9)	SI003	6	板碑	240.5	緑泥片岩	49	−	(16)	SK018	26	板碑	46.9	緑泥片岩
10	−	(9)	SX009	2	板碑	22.3	緑泥片岩	50	−	(16)	SK018	26	板碑	76.2	緑泥片岩
11	−	(10)	SD022	1	板碑	38.0	緑泥片岩	51	−	(16)	SK018	26	板碑	21.4	緑泥片岩
12	−	(10)	T2	1	板碑	12.8	緑泥片岩	52	−	(16)	SK018	26	板碑	51.3	緑泥片岩
13	−	(14)	SK004	1	板碑	212.2	緑泥片岩	53	−	(16)	SK018	26	板碑	46.6	緑泥片岩
14	−	(14)	SK004	1	板碑	91.2	緑泥片岩	54	−	(16)	SK018	26	板碑	152.9	緑泥片岩
15	−	(16)	SD006	2	板碑	228.5	緑泥片岩	55	−	(16)	SK018	26	板碑	71.8	緑泥片岩
16	−	(16)	SE011	3	板碑	228.5	緑泥片岩	56	−	(16)	SK018	26	板碑	536.5	緑泥片岩
17	−	(16)	SE011	3	板碑	133.6	緑泥片岩	57	−	(16)	SK018	26	板碑	51.8	緑泥片岩
18	−	(16)	SE011	3	板碑	92.6	緑泥片岩	58	−	(16)	SK018	26	板碑	16.1	緑泥片岩
19	−	(16)	SE011	3	板碑	15.3	緑泥片岩	59	−	(16)	SK018	26	板碑	12.3	緑泥片岩
20	−	(16)	SE011	3	板碑	4.7	緑泥片岩	60	−	(16)	SK018	26	板碑	21.3	緑泥片岩
21	−	(16)	SE011	3	板碑	8.1	緑泥片岩	61	−	(16)	SK018	26	板碑	14.8	緑泥片岩
22	−	(16)	SE012	2	板碑	150.1	緑泥片岩	62	−	(16)	SK018	26	板碑	12.3	緑泥片岩
23	−	(16)	SE012	2	板碑	41.6	緑泥片岩	63	−	(16)	SK018	26	板碑	12.1	緑泥片岩
24	−	(16)	SK013	1	板碑	166.3	緑泥片岩	64	−	(16)	SK018	26	板碑	28.6	緑泥片岩
25	−	(16)	SK013	1	板碑	41.8	緑泥片岩	65	−	(16)	SK018	26	板碑	13.8	緑泥片岩
26	−	(16)	SD015	3	板碑	156.9	緑泥片岩	66	−	(16)	SK018	26	板碑	6.0	緑泥片岩
27	−	(16)	SK017	1	板碑	32.8	緑泥片岩	67	−	(16)	SK018	26	板碑	8.8	緑泥片岩
28	第 94 図 35	(16)	SK018	3	板碑	4,300.0	緑泥片岩	68	6cm以下の細片合計	(16)	SK018	26	板碑	174.7	緑泥片岩
29	第 93 図 34	(16)	SK018	4	板碑	2,800.0	緑泥片岩	69	−	(16)	SD020	3	板碑	141.0	緑泥片岩
30	第 93 図 32	(16)	SK018	26	板碑	419.6	緑泥片岩	70	−	(16)	SD020	3	板碑	5.4	緑泥片岩
31	第 93 図 33	(16)	SK018	26	板碑	440.1	緑泥片岩	71	−	(16)	SD020	3	板碑	1.5	緑泥片岩
32	第 94 図 36	(16)	SK018	26	板碑	1,146.5	緑泥片岩	72	−	(16)	SD020	3	板碑	4.6	緑泥片岩
33	第 94 図 37	(16)	SK018	26	板碑	761.0	緑泥片岩	73	−	(16)	SD020	3	板碑	6.6	緑泥片岩
34	−	(16)	SK018	26	板碑	56.5	緑泥片岩	74	−	(16)	SD020	3	板碑	5.0	緑泥片岩
35	−	(16)	SK018	26	板碑	24.5	緑泥片岩	75	−	(16)	SE022	1	板碑	16.5	緑泥片岩
36	−	(16)	SK018	26	板碑	52.8	緑泥片岩	76	−	(16)	SE022	1	板碑	13.4	緑泥片岩
37	−	(16)	SK018	26	板碑	229.6	緑泥片岩	77	−	(16)	SD024	2	板碑	21.5	緑泥片岩
38	−	(16)	SK018	26	板碑	434.4	緑泥片岩	78	−	(16)	SK025	2	板碑	575.7	緑泥片岩
39	−	(16)	SK018	26	板碑	55.6	緑泥片岩	79	−	(16)	SK025	2	板碑	322.9	緑泥片岩
40	−	(16)	SK018	26	板碑	32.3	緑泥片岩	80	−	−	−	−	板碑	224.8	緑泥片岩

第９表　銭貨一覧表

挿図番号	調査年次	出土地点	遺物番号	種　類	時　期	初鋳年	外郭外径 (cm)	内郭内径 (cm)	備　考
第109図 1	(5)	SD003	2	寛永通寶	江戸	−	2.50	0.53	
第109図 2	(5)	SD003	2	寛永通寶	江戸	−	2.56	0.56	
第109図 3	(5)	SD004A	8	新寛永通寶	江戸	−	2.78	0.65	
第109図 4	(5)	SD004A	8	−	−	−	2.09	0.78	腐食顕著、模鋳銭？
第109図 5	(5)	T6	1	寛永通寶	江戸	−	2.41	0.58	
第109図 6	(5)	T6	1	寛永通寶	江戸	−	2.47	0.53	
第109図 7	(8)	表採	2	嘉祐通寶	北宋	1056	2.44	0.71	
第109図 8	(10)	T1	1	文久永寶	江戸	−	2.64	0.64	
第109図 9	(16)	SD006	6	寛永通寶	江戸	−	2.40	0.62	
第109図 10	(16)	SD006	6	新寛永通寶	江戸	−	2.79	0.63	
第109図 11	(8)	SK106	7	天喜通寶	北宋	1017	2.53	0.65	
第109図 12	(8)	SK106	3	天喜通寶？	北宋	1017?	2.47	0.63	模鋳銭？
第109図 13	(8)	SK106	7	元豊通寶	北宋	1078	2.31	0.62	行書
第109図 14	(8)	SK106	3	元豊通寶	北宋	1078	2.36	0.65	行書
第109図 15	(8)	SK106	3	皇宋通寶	−	−	2.41	0.72	腐食顕著、模鋳銭？
第109図 16	(8)	SK106	7	？	−	−	2.20	0.65	腐食顕著、模鋳銭？

第８章　まとめ

すでに各章で、遺構・遺物についての概要を述べたが、改めて前平井堀米遺跡から検出された遺構・遺物について、時代別にまとめてみたい。

旧石器時代

本遺跡から出土した旧石器時代の遺物は、極めて限定的なものであった。その要因としては、立川ローム層が台地の斜面部ではほとんど失われていること、台地の中央部においても立川ロームⅥ層以下の下層部のみが確認される状況であったことなどが挙げられる。

流山市域では、ほぼ全域でⅡ層～Ⅲ層にかけての層位に撹乱が顕著であり、Ⅳ層以下の所謂ハードローム上層部の遺存も、本遺跡周辺ではあまり良くない。このことは、旧石器時代の活動が少なかったとは一概には言えず、立川ロームの遺存状況に影響され、その痕跡が失われていることも加味する必要があるだろう。

今回の調査では、僅かに２ブロックの石器群が確認された程度である。第１ブロックは、被熱した礫群からなり、層位の確認が成されていないため、時期を確定することが難しい。立川ローム層の遺存状況からすれば、Ⅵ層以下の可能性が高い。第２ブロックは、Ⅸ層から２点の剥片が出土した小ブロックである。このほか単独だがナイフ形石器などが出土している。

縄文時代

縄文時代の遺構は、陥穴２基のみであった。遺物は縄文時代早期、前期、中期、後期の土器や石器が少量出土しているほか、石棒、玦状耳飾などが出土している。旧石器時代と同様にⅡ層～Ⅲ層の遺存が悪いことや、後世の耕作などの影響も考えられるものの、本遺跡内における縄文時代の痕跡は概ね希薄である。出土した縄文土器は少なかったが、このうち前期黒浜式が最も多く出土しており、縄文海進が海退に転じた頃の黒浜式期には、本台地においても小規模ながら集落が営まれていた可能性がある。また、中期とみられる大型石棒などが出土していることから、中期においても短期間ではあるが集落が営まれていた可能性がある。

古墳時代

５世紀から７世紀の竪穴住居跡が８軒検出されている。このうち５世紀中葉の古墳時代中期の竪穴住居跡はわずかに１軒しかなく特異な存在である。石製模造品が出土しているが、成品のみであることから、工房跡の可能性は低い。残る７軒は古墳時代後期７世紀後葉と考えられ、８世紀代の集落へと継続していくものと考えられる。７世紀後葉の竪穴住居跡は、散漫な展開を示しており、居住域としてのまとまりはあまりない。８世紀代の竪穴住居跡群と混在しており、各地点で細々と集落が継続していくようである。竪穴住居跡の遺存状態についてはあまり良くない。奈良・平安時代の竪穴住居跡についても同様である。竪穴住居跡内のカマドは総じて北西方向に設置されている。遺物の出土量は、中期の竪穴住居跡を除けば少なかった。

奈良・平安時代

８世紀から９世紀にかけての竪穴住居跡が43軒検出されている。この他に土坑などの遺構は検出されていない。このうち遺物を伴い時期が決定できた竪穴住居跡が30軒、遺物が伴わないため時期を特定す

ることが難しいものの、竪穴の規模や施設、カマドの設置位置などから８世紀～９世紀代と考えられる竪穴住居跡が10軒となっている。竪穴の総数としては多いものの、台地の大きさからすれば、かなりまばらな分布を示している。この台地では、古墳時代終末の７世紀後葉から集落が営まれ、８世紀にかけて小規模な集落が継続的に営まれたと考えられる。東西に長い台地は中央の最も高い所で標高20m前後を示しており、この地形から見た集落の展開状況は、20 m前後の平らな部分に展開するグループと南緩斜面に展開するグループの２つからなっていることがわかる。ただし、本来一つの遺跡と見なしてもよい西隣の前平井遺跡においては、100 軒を超える竪穴住居跡が調査により発見され、同時期の集落がより広い展開を示している。残念ながら前平井遺跡については未整理のため、集落の展開状況について言及することは難しく、この付近の集落の動静については、前平井遺跡の報告を待って改めて検討する必要がある。

奈良・平安時代の竪穴住居跡群も古墳時代の竪穴住居跡群と同様に竪穴の遺存状態はよくなかった。竪穴の規模は、一辺が６ｍを越える大型の竪穴住居跡はほとんどなく、一辺４ｍ前後の小規模な竪穴住居跡が主体となっている。カマドは概ね北側の壁に設置されており、古墳時代の竪穴とは主軸方位が若干異なってくるようである。

時期的な変遷を詳しくみると、８世紀前半期の竪穴住居跡が14軒、８世紀後半期が最も多い15軒で、９世紀代は４軒と少なくなる。８世紀後半がピークとなり、９世紀に入ると集落は急速に規模を縮小していくようで、９世紀後葉には集落が営まれなくなる。

本遺跡の南約2.5㎞に流山市思井堀ノ内遺跡があり、限られた面積の調査ではあったが奈良・平安時代の集落が検出されている（注１）。思井堀ノ内集落は８世紀後半に出現し、９世紀代になって集落が拡大しており、本遺跡の集落を引き継ぐような形で周辺近隣地において集落が展開することがわかってきている。

竪穴に伴う出土遺物の中には、須恵器の坏、高台付坏、蓋、長頸壺、甕などがみられ、(9)SI007の竪穴住居跡からは13点もの須恵器が出土している。少なくとも２点～４点の須恵器を伴う竪穴住居跡が多く、８世紀前半の一般的な様相を反映している。須恵器には湖西産とみられる坏や高台付坏、長頸壺などがある程度は含まれるが、雲母を胎土に含む新治産須恵器の坏、高台付坏、蓋などが割合としては多いといえ、この地域の特徴を示している。土師器については、武蔵などの影響と思われる長胴の甕が多くみられ、常陸甕などはあまりみられなかった。このほか、鉄製品が出土しているものの、刀子や鎌などの生産用具は微量であった。鉄鏃などが若干だが出土している点で目を引いている。思井堀ノ内遺跡では、137点もの墨書土器が出土しているが、本遺跡からは墨書土器が１点も出土していない。

中・近世

検出された遺構の主体は、中世後期15世紀～16世紀と考えられ、一部に近世江戸期のものも含まれている。遺構の種類としては、地下式坑20基、土坑墓１基、土坑17基、井戸７基、溝状遺構28条などが検出され、中世の台地整形区画とみられる遺構が１か所発見されている。この台地整形区画については、調査区の端にあたり充分な調査には至っておらず、時期など詳細は不明である。

主な遺構群のまとまりは、台地の最も標高が高く平地となった地点や南緩斜面などの比較的限定した範囲で検出されている。溝状遺構は、屋敷地の区画溝とみられるものが主で、地下式坑などは屋敷地など居住域内に伴う遺構群の一部と考えられる。20基の地下式坑は全て天井部が崩落しており、入口部の位置やその規模が不明なものが大半である。検出面から底面までの深さは、１ｍを超えて２ｍ程度に及ぶものもみられる。２ｍ程度の深さのものでは、天井部が存在したとしても坑内の高さは1.5m前後、平面の広さ

は２m四方あって、坑内での作業が充分に行える広い空間となっているものがみられる。地下式坑の平面形態は、楕円形、長方形、T字形などがある。地下式坑に伴う遺物が全体に少なく、時期がおおよそ決定できるのは一部である。(14)SK004の地下式坑では、祖母壊壺や平碗など、古瀬戸後期の15世紀代の遺物のほか、志戸呂の天目茶碗なども出土しており、出土遺物には時期幅がある。最も新しい遺物から(14)SK004は16世紀後葉の地下式坑とみられる。検出された地下式坑の時期は、概ね15世紀後半～16世紀代にかけてのものと考えられる。

17基の土坑は、隅丸長方形ないしは楕円形を呈するものが主体である。ほとんど出土遺物を伴わなかった。人骨、六文銭を伴う土坑墓は僅かに１基だったが、土坑群の一部は土坑墓の可能性もあるだろう。土坑として扱った(16)SK018は、長楕円形を呈し、検出面の規模が長軸8.30mの規模の大きな土坑で、検出された他の土坑とは全く異質である。底面近くで、より深い長方形の掘り込みとなり、周囲の壁は緩い傾斜面となっている。壁の開きが大きく、地下式坑のような天井部が存在した可能性は低い。長辺の片側に底に降りる階段状の作り出しがあることから、底面まで降りて何らかの作業が行われたのではないかと考えられる。底部は湧水による水気があり、棒状の材などが遺存していた。出土遺物は多様で、瀬戸の挟み皿や丸皿、瀬戸腰折皿、古瀬戸平碗、志野丸皿、常滑片口鉢、古瀬戸後期Ⅳ新～大窯１期の擂鉢などのほか内耳土器などが出土している。また破損した板碑が多数出土している。銘が判読できたものとしては「文明二年(1470年)」「正月九日」の銘があるものが１点だけである。また、石臼の破片も複数出土している。内耳土器などは近世初頭にあたると考えられるものがあり、これらの最も新しい遺物によるならば、本土坑の時期は16世紀後葉～17世紀前葉と考えられる。(16)SK018は特異な形態の土坑であり、類例が乏しく、その用途は不明である。出土した多くの遺物は、この土坑の廃絶に伴い廃棄されたものと考えられ、土坑の用途を直接反映している可能性は低いと推測される。日常の多様な什器が廃棄されていることから、屋敷の廃絶に伴う廃棄などが考えられる。一方、生活道具とは異質な板碑なども一括して廃棄されており、刻印された銘が磨れて見えなくなっている事例などは板碑の転用のされ方を検討する上で興味深い点である。なお、銘が判読できた第94図35の板碑は、個人の追善供養として造立された卒塔婆と考えられる。個人名に付された「律師」銘のある板碑は、流山市内では他に１例のみである。

板碑の文明二年(1470年)前後は、流山市内の板碑が最も多く造立された時期にあたっている(注２)。本事業地内の複数の遺跡の調査でも多数の板碑が出土しており、出土した板碑は破損がひどいものが多い。近世になると卒塔婆の意識が薄れて、他の用途に転用される事例が多くなるのかもしれない。

井戸については７基が検出されている。このうち(16)SE012からは磁器碗や常滑片口鉢などが出土したほかは近世遺物が主体であった。また(16)SE021では、古瀬戸後期Ⅲ折縁深皿などが出土したものの、近世の磁器碗なども出土しており、出土遺物に時期幅がある。井戸については廃絶時が近世と考えられるものがほとんどのようである。15世紀代の遺物を出土することから、中世から使用され続けたものが一部にはあるのかもしれない。

注

1　財団法人千葉県教育振興財団　2010『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書２－流山市思井堀ノ内遺跡(旧石器時代～奈良・平安時代編)－』

2　流山市教育委員会　2010『中世の流山を探る　附．流山市内板碑集成』流山市立博物館調査研究報告書26

写　真　図　版

遺跡周辺航空写真（1：10,000）

図版２

調査前風景（2）地区

調査前風景（2）地区

調査前風景（2）地区

図版3

遺構配置状況（5）地区

遺構配置状況（5）地区

遺構配置状況（5）地区

図版４

遺構配置状況（5）地区

旧石器時代第１ブロック
遺物出土状況（8）地区

遺構配置状況（9）地区

旧石器時代第２ブロック
遺物出土状況（10）地区

遺構配置状況（16）地区

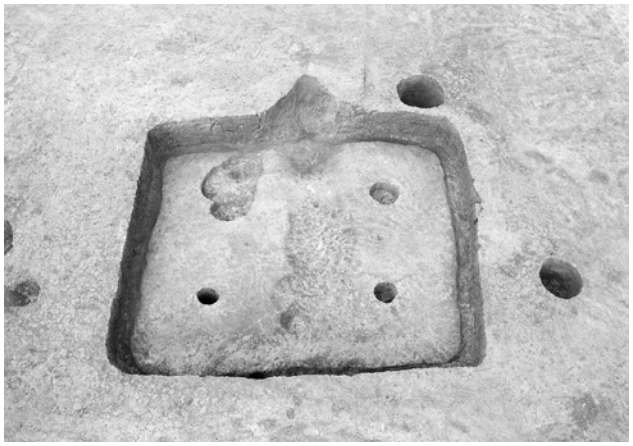
調査風景（5）地区

(4)SI001

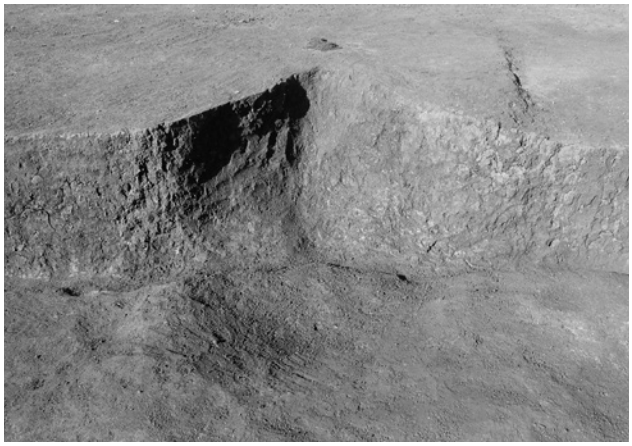
(4)SI001 カマド

(4)SI002

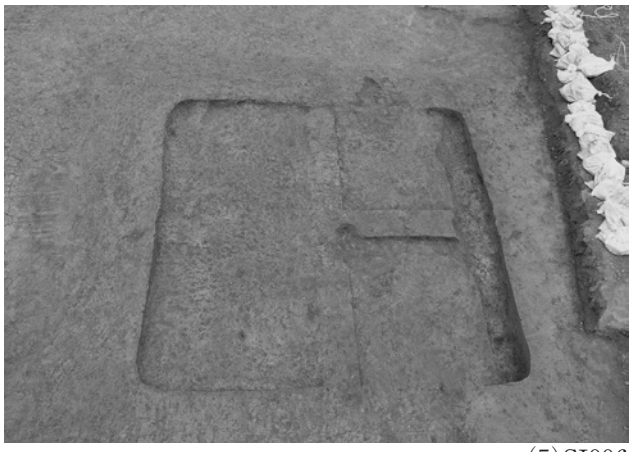
(4)SI002 カマド



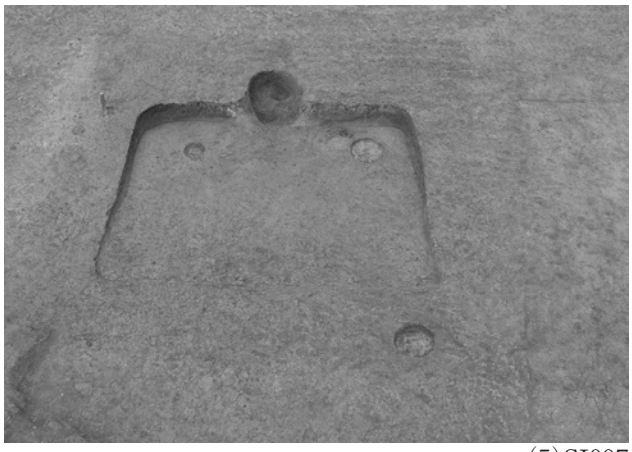
(5)SI005



(5)SI005 カマド



(5)SI006



(5)SI007

(5)SI008

(5)SI008 カマド

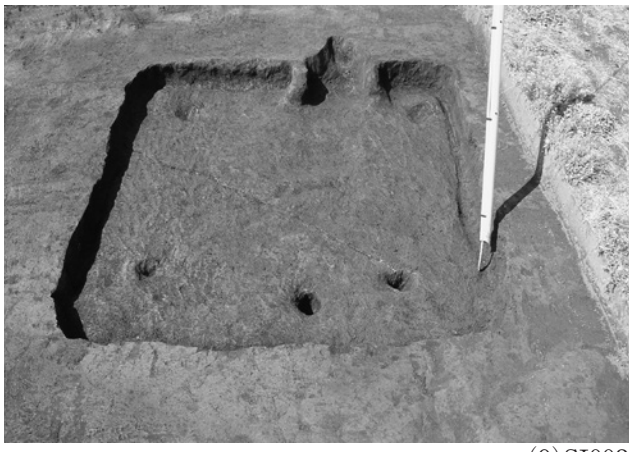
(5)SI009

(5)SI010

(5)SI012

(9)SI001

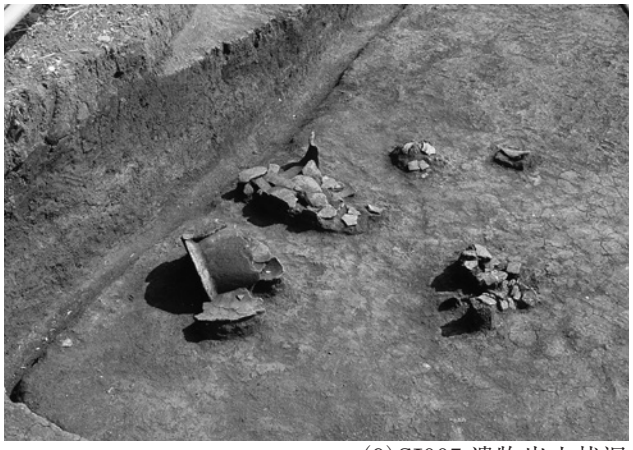
(9)SI002



(9)SI003

(9)SI004

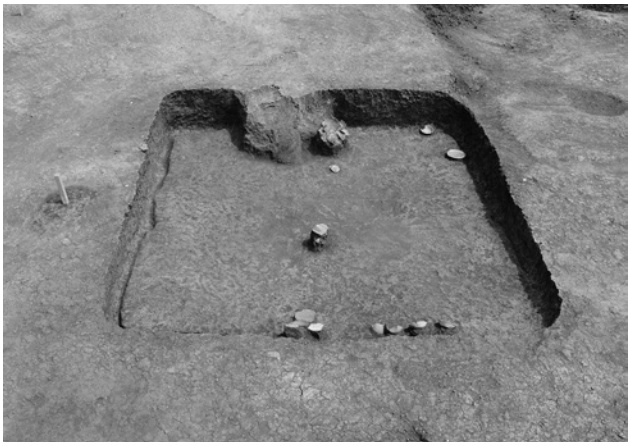
(9)SI005



(9)SI005 遺物出土状況

(9)SI006

(9)SI007



(9)SI007 遺物出土状況

(9)SI007 カマド内遺物出土状況

(9)SI007 遺物出土状況

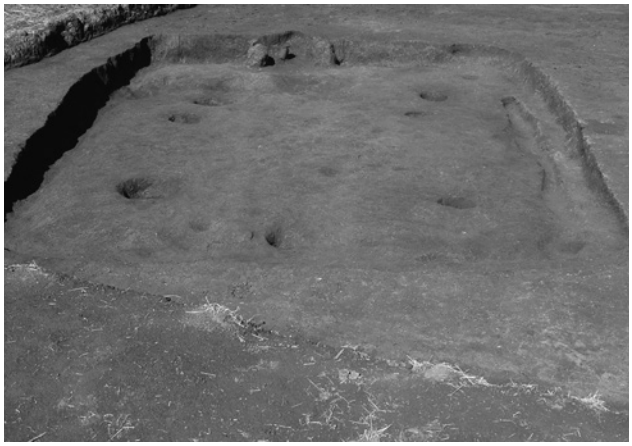
(9)SI008

(9)SI008 遺物出土状況

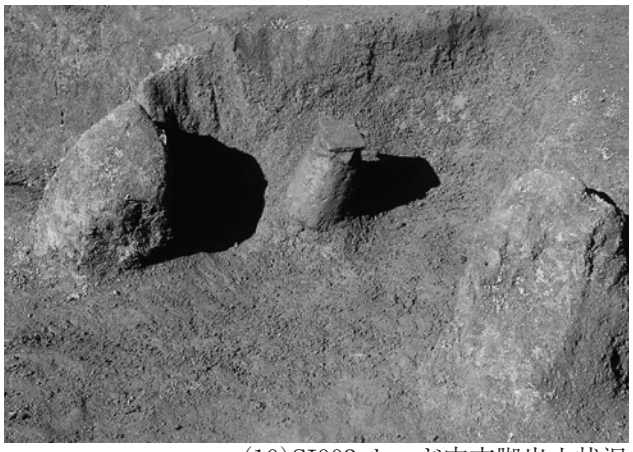
(10)SI001

(10)SI001 炭化物・遺物出土状況

(10)SI002



(10)SI003



(10)SI003 カマド内支脚出土状況

(10)SI005

(10)SI006

(10)SI007

(10)SI008

(10)SI008 カマド

(10)SI010

(10)SI010 カマド

(10)SI010 遺物出土状況

(10)SI011

(10)SI011 カマド

(10)SI012

(10)SI012 カマド

(10)SI013

(10)SI013 カマド内遺物出土状況

(10)SI014

(10)SI017

(10)SI018

(10)SI019

(10)SI020A

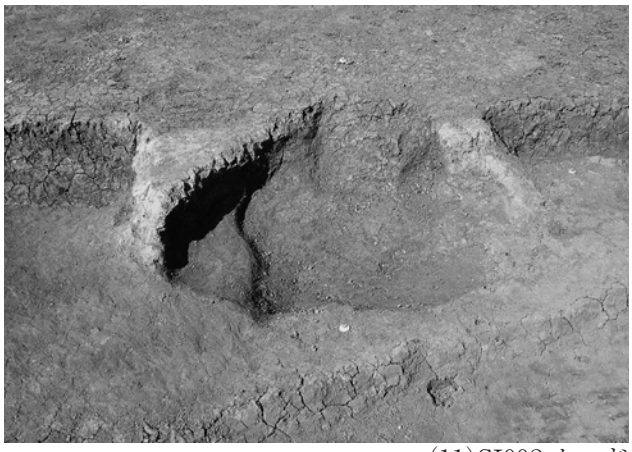
(10)SI020B

(10)SI021

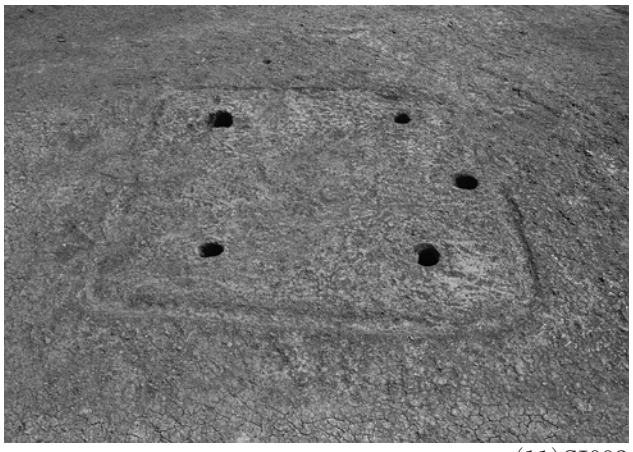
(10)SI021 遺物出土状況

(11)SI001

(11)SI002



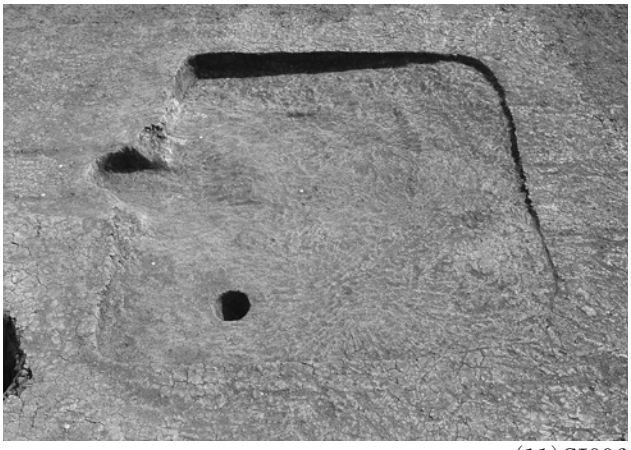
(11)SI002 カマド



(11)SI003

(11)SI004

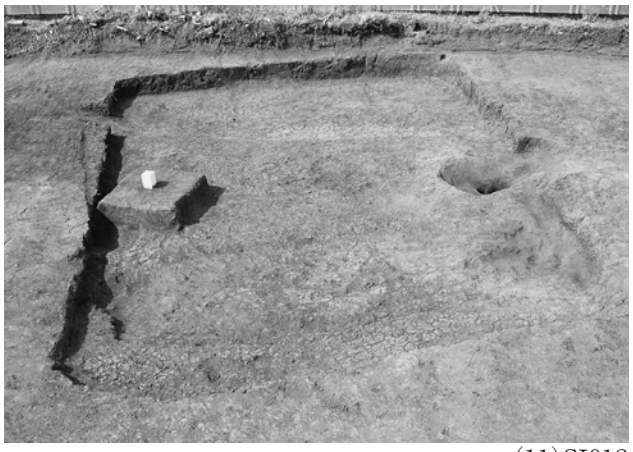
(11)SI004 カマド



(11)SI006

(11)SI011

(11)SI011 カマド



(11)SI012

(11)SI013

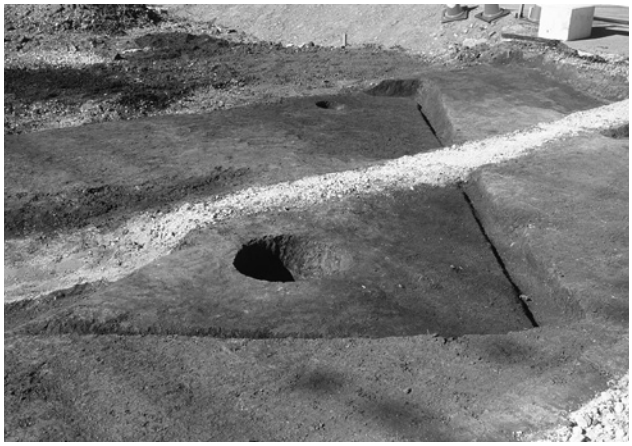
(11)SI013 カマド

(11)SI014

(12)SI001

(13)SI001

(13)SI001 遺物出土状況



(15)SI001

(15)SI002

(16)SI031

(16)SI031 カマド

(16)SI031 遺物出土状況

(5)SK013

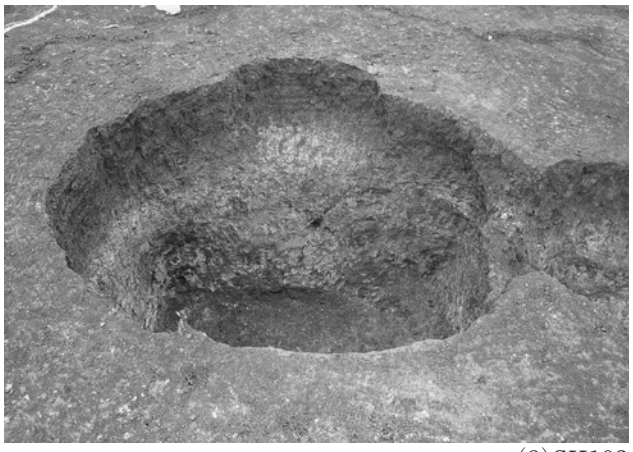
(5)SK014

(5)SK020

(8)SK100

(8)SK101

(8)SK102



(8)SK103

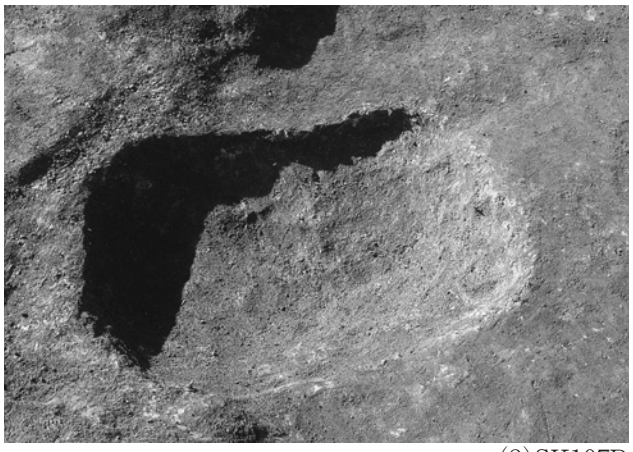
(8)SK104

(8)SK105

(8)SK106

(8)SK106 人骨検出状況

(8)SK107A

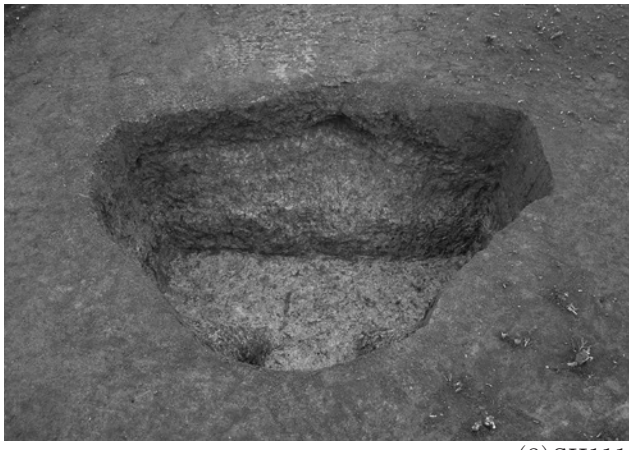


(8)SK107B

(8)SK108

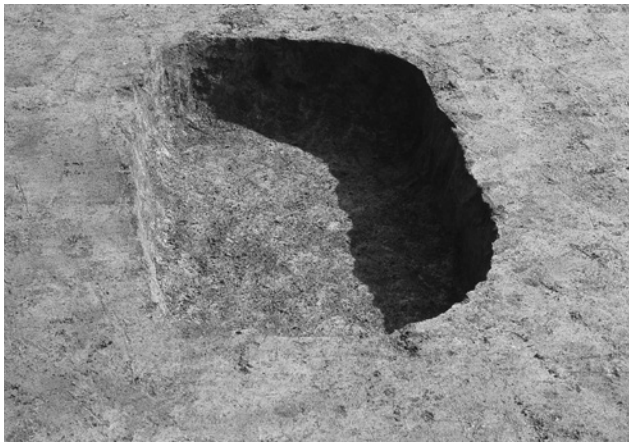
(8)SK109

(8)SK110



(8)SK111

(8)SK112



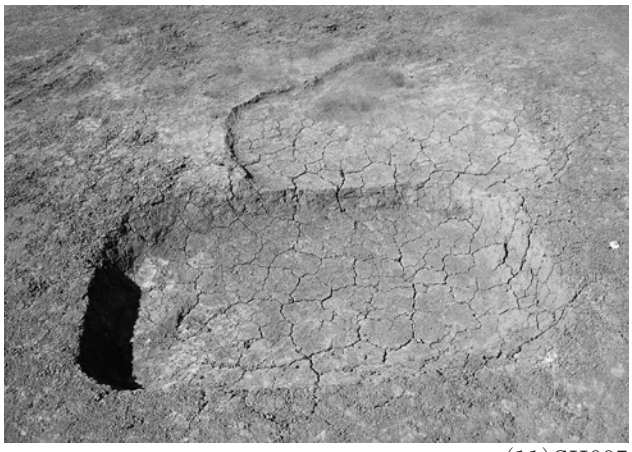
(10)SK004

(10)SK014B・(10)SK014C(南から)

(10)SK014A・(10)SK014B(東から)

(10)SK014C・(10)SK014D(西から)

(10)SK014C

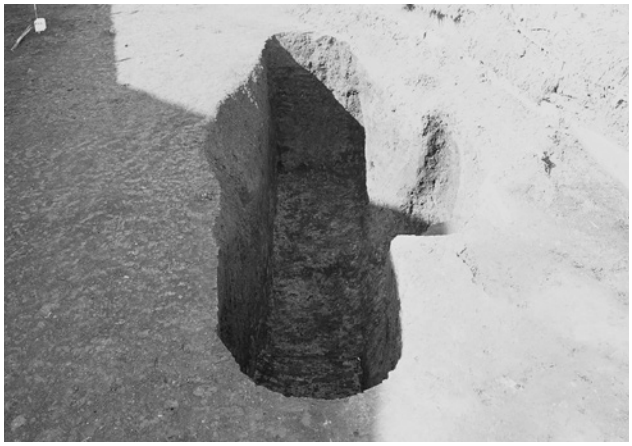


(11)SK005

(11)SK007

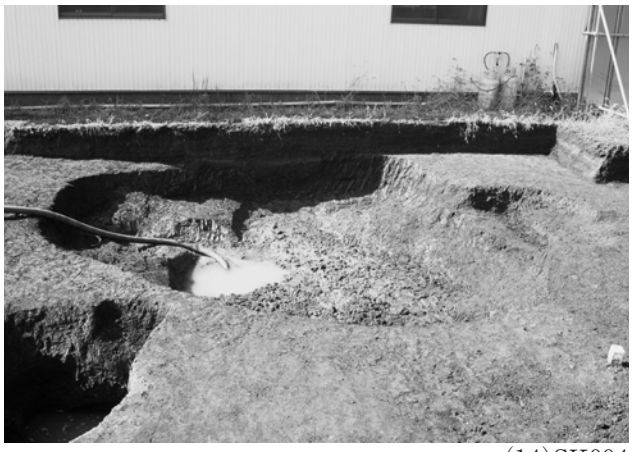
(11)SK008

(11)SK009



(14)SK001

(14)SE003

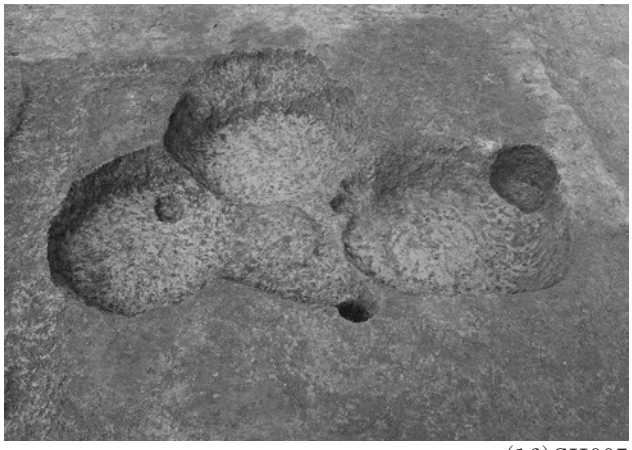


(14)SK004

(15)SK004

(16)SK003

(16)SK004



(16)SK005

(16)SE008

(16)SK009

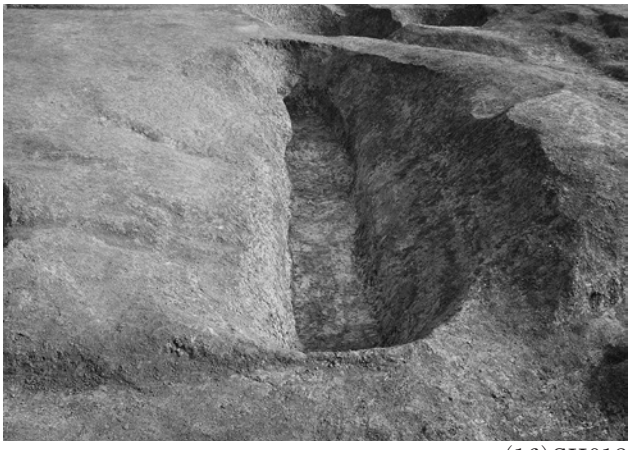
(16)SK011

(16)SK013

(16)SK017

(16)SK017 土層断面

(16)SK018 遺物出土状況



(16)SK018

(16)SE022

(16)SK026

(16)SK027

(16)SK032

(5)SH015

(16)SE002

(15)SD003

(5)SD004A・(5)SD004B

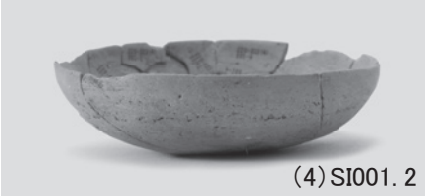
(16)SE021

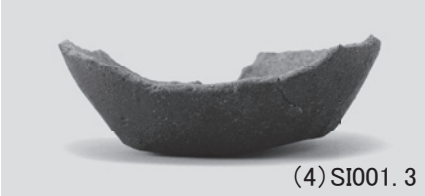
(16)SD001

(16)SD007

(9)SX009

(4)SI001.1

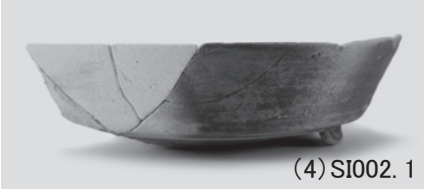

(4)SI001.2

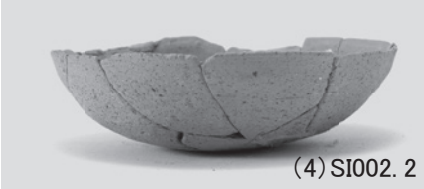

(4)SI001.3

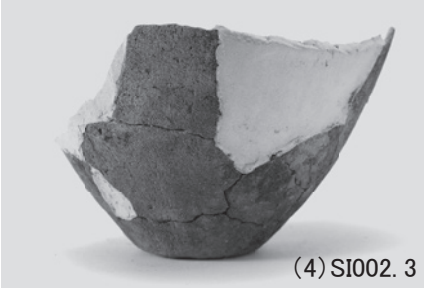
(4)SI001.4

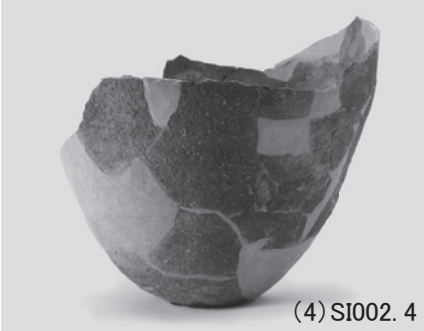
(4)SI001.5

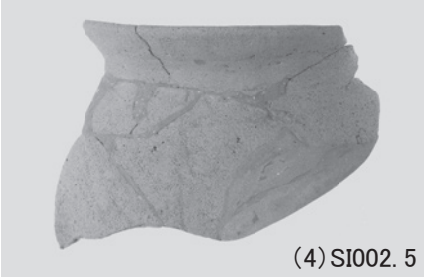
(4)SI001.6

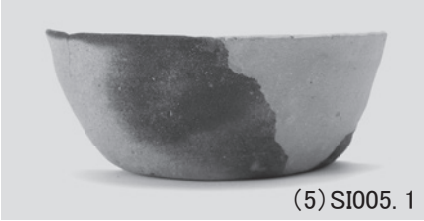

(4)SI002.1


(4)SI002.2


(4)SI002.3

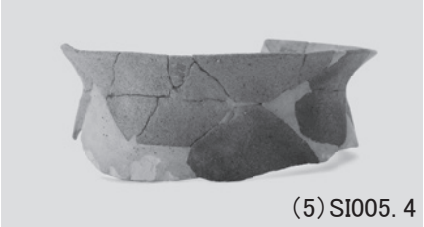

(4)SI002.4


(4)SI002.5


(5)SI005.1

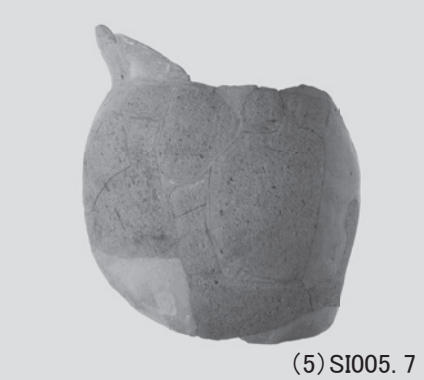
(5)SI005.2

(5)SI005.3

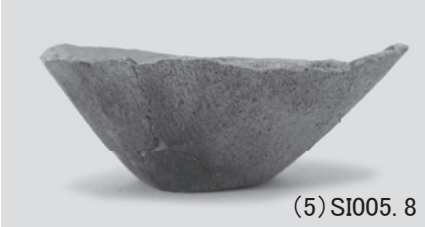

(5)SI005.4

(5)SI005.5

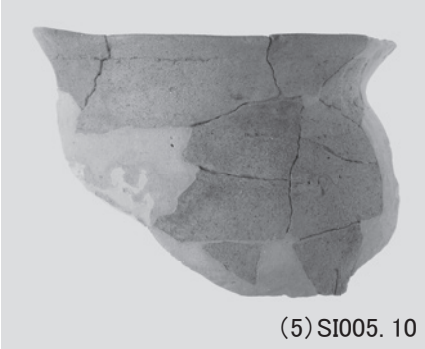
(5)SI005.6

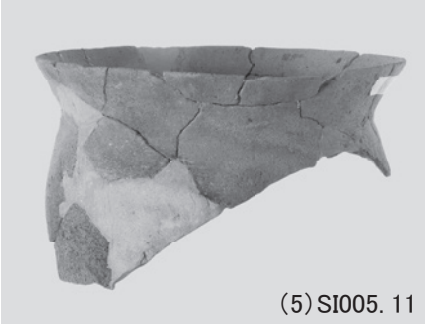

(5)SI005.7

竪穴住居跡出土土器(1)


(5)SI005.8

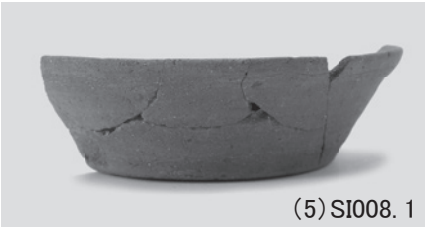
(5)SI005.9

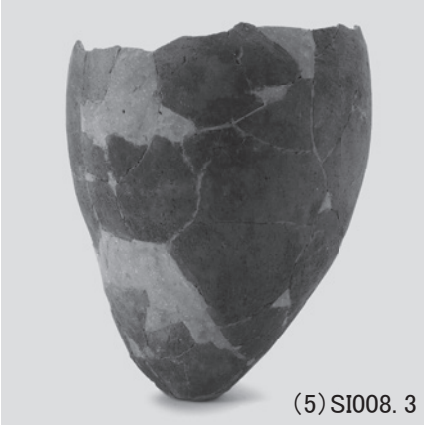

(5)SI005.10


(5)SI005.11

(5)SI006.2

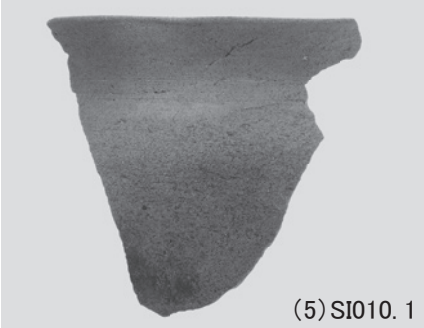
(5)SI007.1

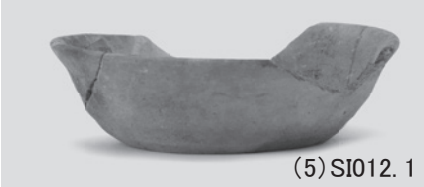

(5)SI008.1


(5)SI008.3

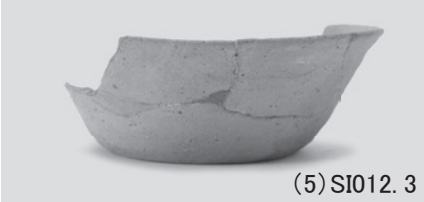
(5)SI009.1

(5)SI009.2


(5)SI010.1

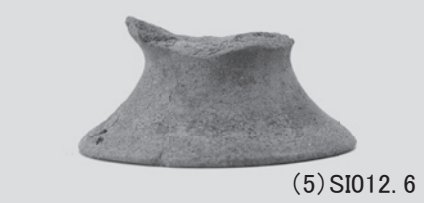

(5)SI012.1

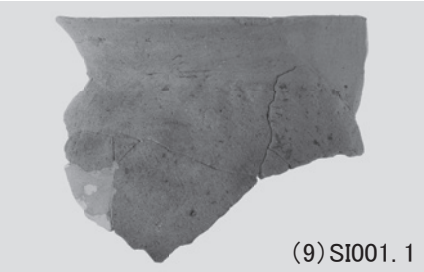
(5)SI012.2

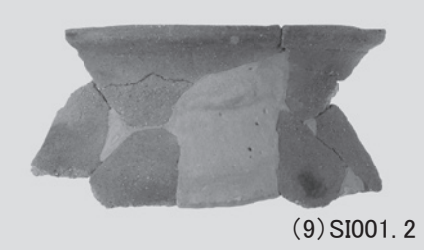

(5)SI012.3

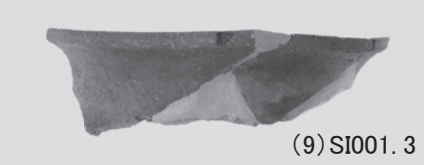
(5)SI012.4

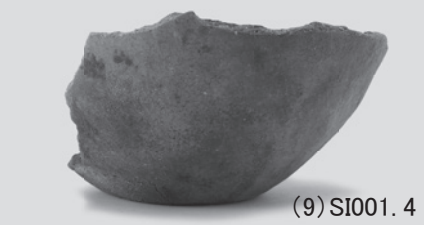
(5)SI012.5

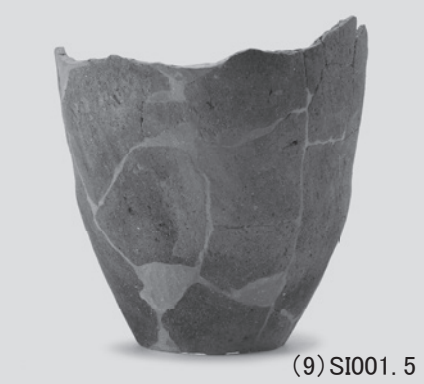

(5)SI012.6


(9)SI001.1

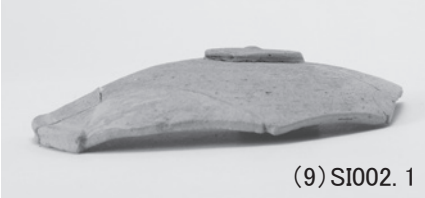

(9)SI001.2

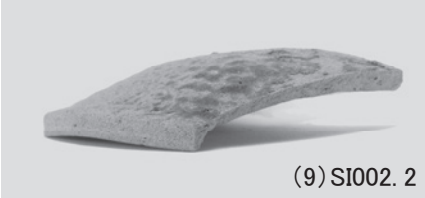

(9)SI001.3

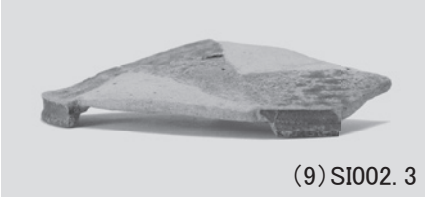

(9)SI001.4

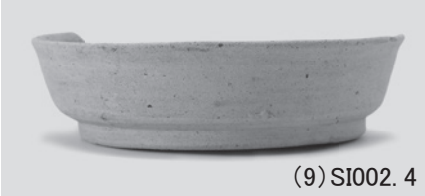

(9)SI001.5

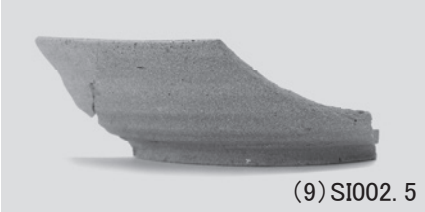
竪穴住居跡出土土器(2)


(9)SI002. 1


(9)SI002. 2


(9)SI002. 3


(9)SI002. 4


(9)SI002. 5

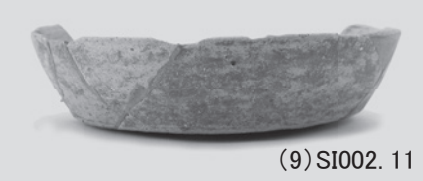
(9)SI002. 6

(9)SI002. 7

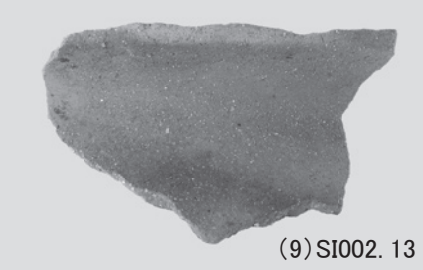
(9)SI002. 8

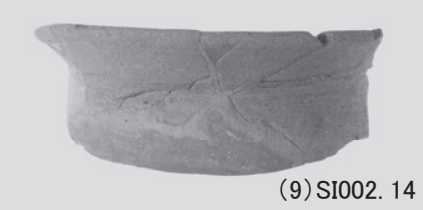
(9)SI002. 9

(9)SI002. 10

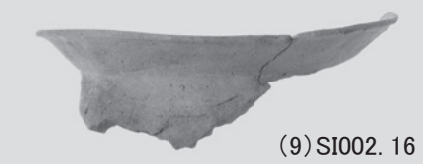

(9)SI002. 11

(9)SI002. 12

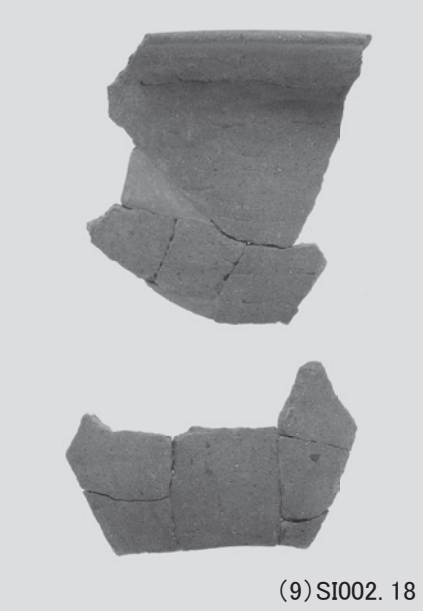

(9)SI002. 13


(9)SI002. 14

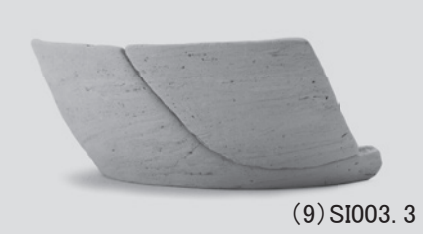
(9)SI002. 15


(9)SI002. 16

(9)SI002. 17


(9)SI002. 18

(9)SI003. 2


(9)SI003. 3

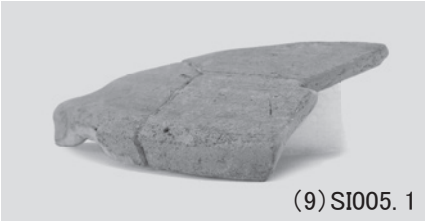
(9)SI003. 4

(9)SI003. 5

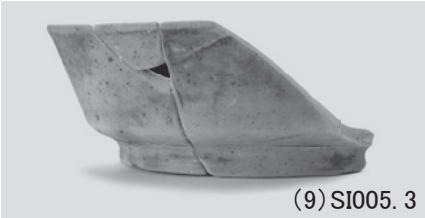
竪穴住居跡出土土器(3)

(9)SI003. 6

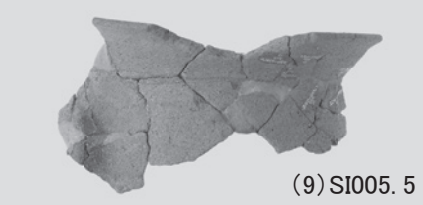
(9)SI004. 1


(9)SI005. 1

(9)SI005. 2


(9)SI005. 3

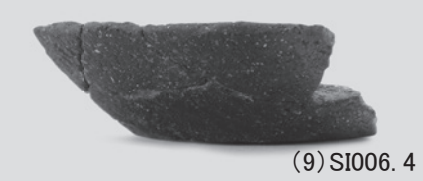
(9)SI005. 4


(9)SI005. 5

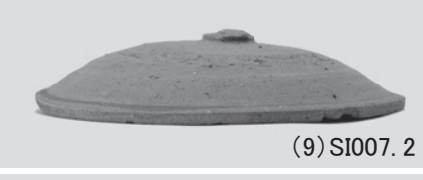
(9)SI005. 6

(9)SI006. 2

(9)SI006. 3

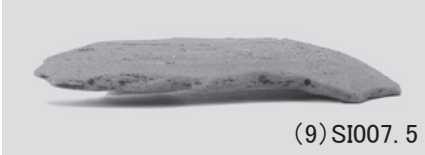

(9)SI006. 4

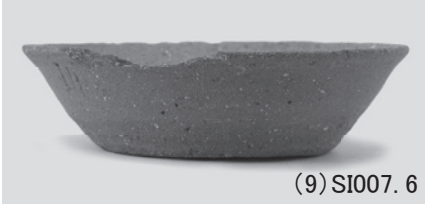
(9)SI007. 1


(9)SI007. 2

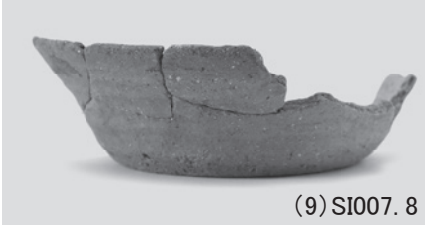
(9)SI007. 3

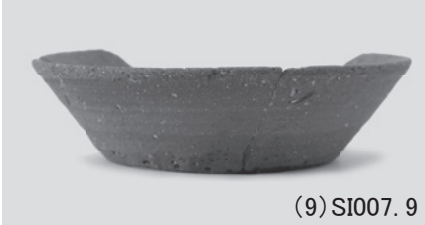
(9)SI007. 4


(9)SI007. 5


(9)SI007. 6

(9)SI007. 7


(9)SI007. 8

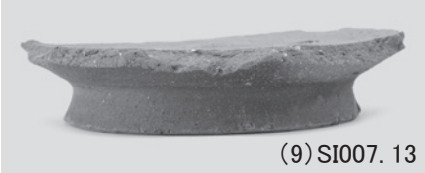

(9)SI007. 9

(9)SI007. 10

(9)SI007. 11

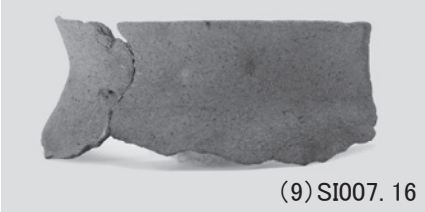
(9)SI007. 12

竪穴住居跡出土土器(4)


(9)SI007. 13

(9)SI007. 14

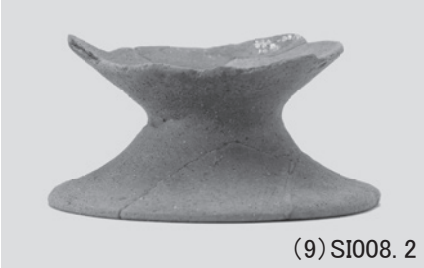
(9)SI007. 15


(9)SI007. 16

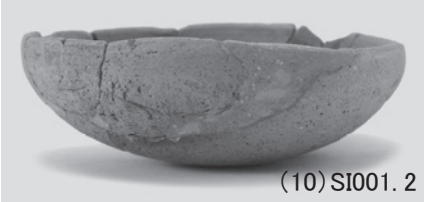
(9)SI007. 17

(9)SI007. 18

(9)SI008. 1

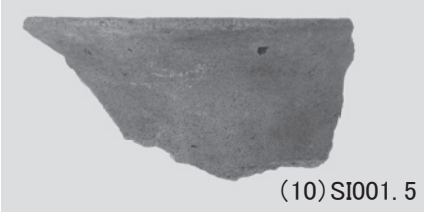

(9)SI008. 2

(10)SI001. 1


(10)SI001. 2

(10)SI001. 3

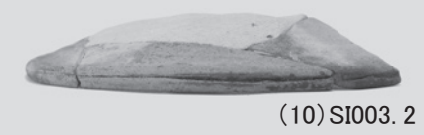
(10)SI001. 4


(10)SI001. 5

(10)SI002. 1

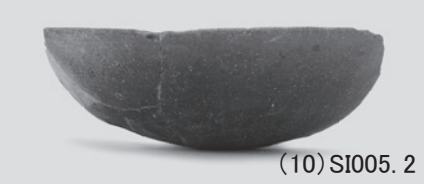
(10)SI002. 2

(10)SI003. 1

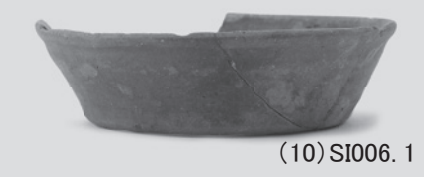

(10)SI003. 2

(10)SI003. 3

(10)SI003. 4

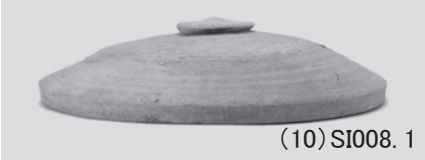

(10)SI005. 2

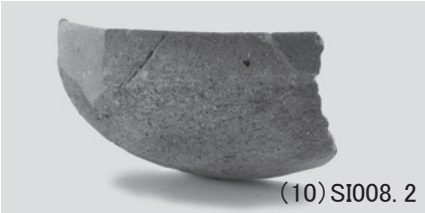
(10)SI005. 3


(10)SI006. 1

(10)SI007. 1

竪穴住居跡出土土器(5)


(10)SI008.1

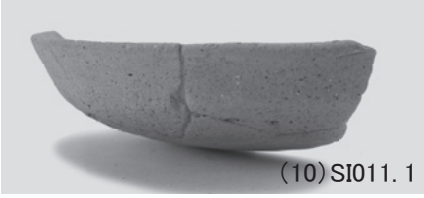

(10)SI008.2

(10)SI010.1

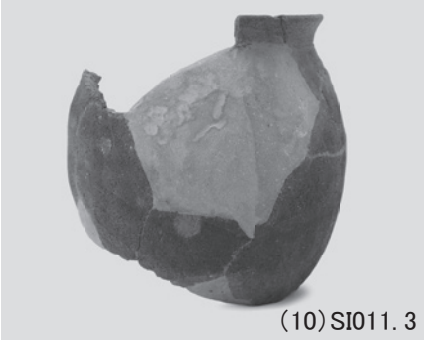
(10)SI010.2

(10)SI010.3

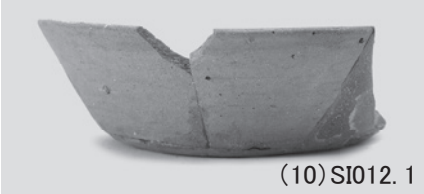
(10)SI010.4

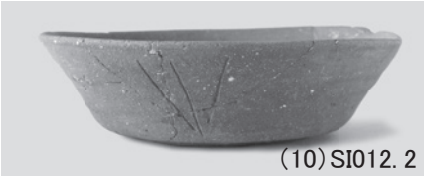

(10)SI011.1

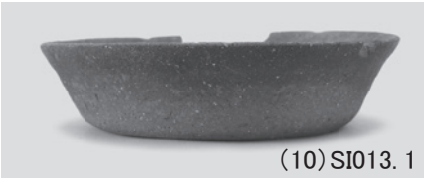
(10)SI011.2

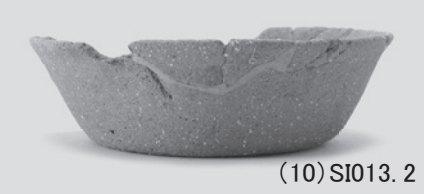

(10)SI011.3

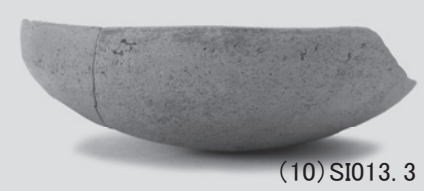
(10)SI011.4

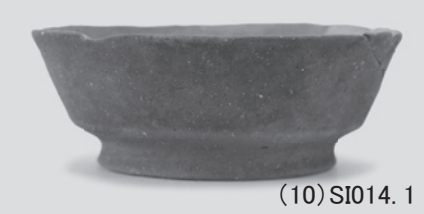

(10)SI012.1

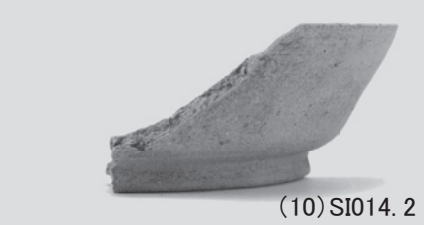

(10)SI012.2

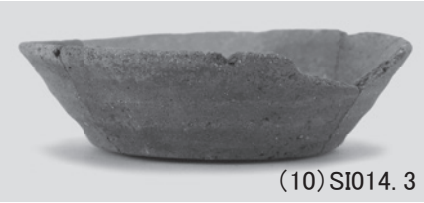

(10)SI013.1

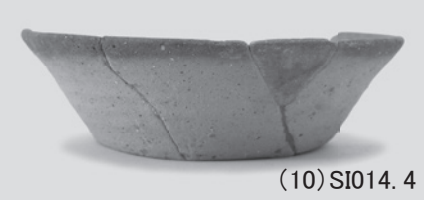

(10)SI013.2

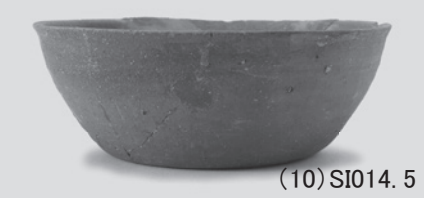

(10)SI013.3

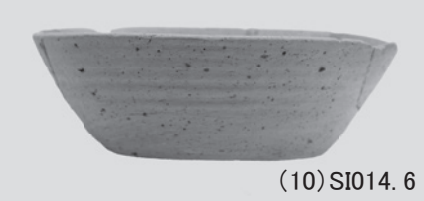

(10)SI014.1

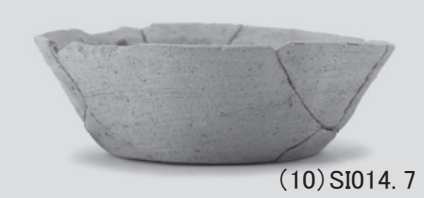

(10)SI014.2


(10)SI014.3


(10)SI014.4

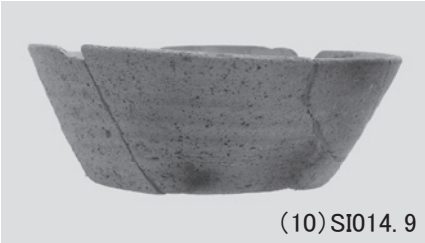

(10)SI014.5


(10)SI014.6


(10)SI014.7

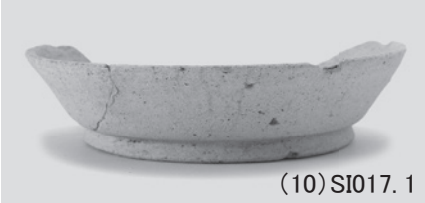
竪穴住居跡出土土器(6)

(10)SI014. 8


(10)SI014. 9

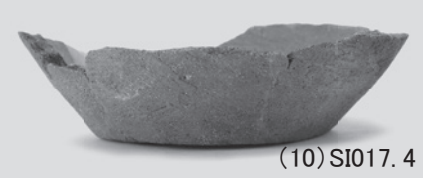
(10)SI014. 10

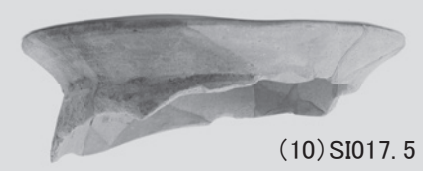
(10)SI014. 11


(10)SI017. 1

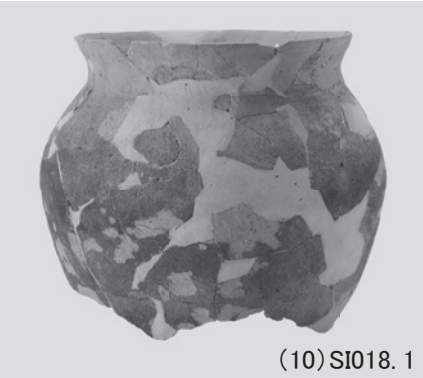
(10)SI017. 2

(10)SI017. 3


(10)SI017. 4

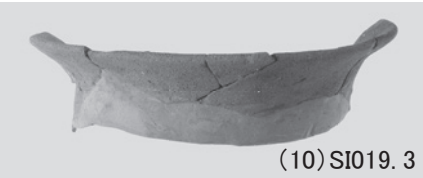

(10)SI017. 5

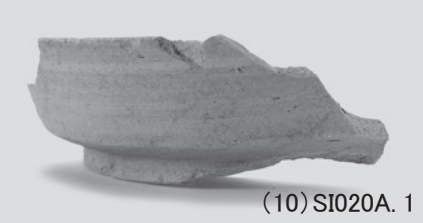
(10)SI017. 6

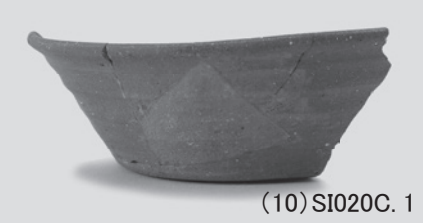

(10)SI018. 1

(10)SI019. 1

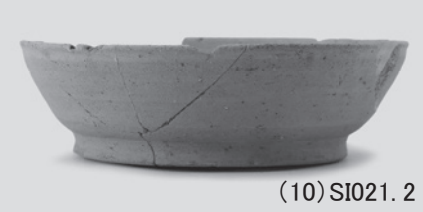
(10)SI019. 2


(10)SI019. 3


(10)SI020A. 1


(10)SI020C. 1

(10)SI021. 1


(10)SI021. 2

(10)SI021. 3

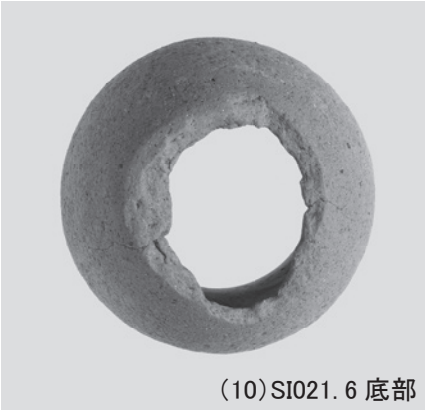
(10)SI021. 4

(10)SI021. 5

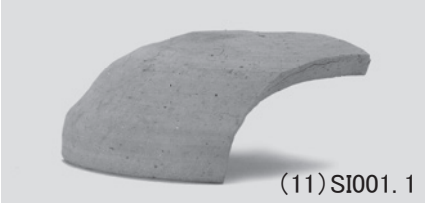
(10)SI021. 7

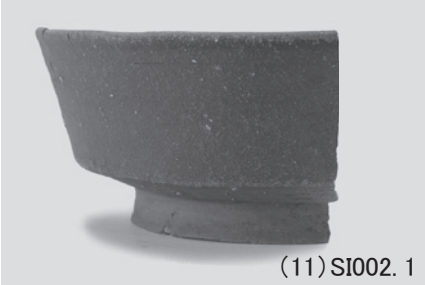
竪穴住居跡出土土器(7)

(10)SI021.6

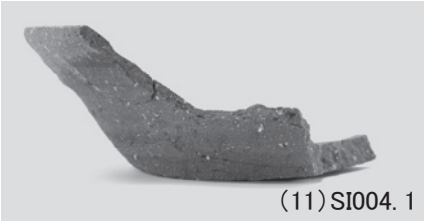

(10)SI021.6 底部

(10)SI021.8


(11)SI001.1

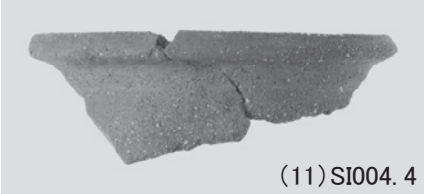

(11)SI002.1

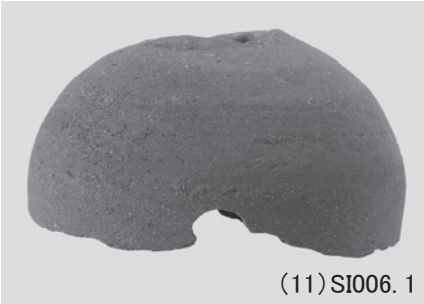
(11)SI002.2


(11)SI004.1

(11)SI004.2

(11)SI004.3

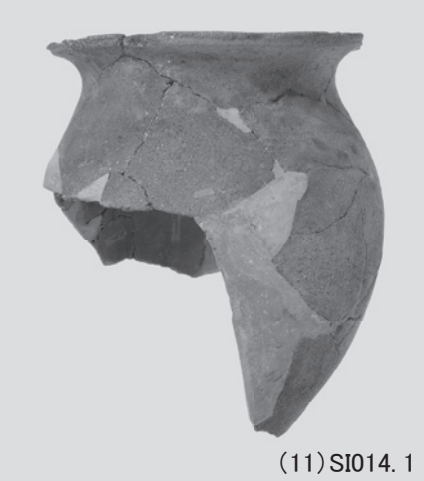

(11)SI004.4


(11)SI006.1

(11)SI006.2

(11)SI011.1

(11)SI013.1


(11)SI014.1

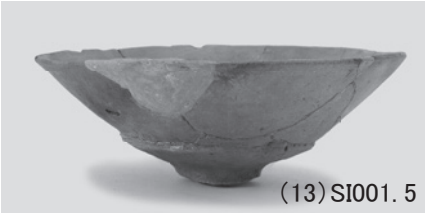
(13)SI001.1

(13)SI001.2

竪穴住居跡出土土器(8)

(13)SI001.3

(13)SI001.4


(13)SI001.5

(13)SI001.6

(13)SI001.7

(13)SI001.8

(13)SI001.9

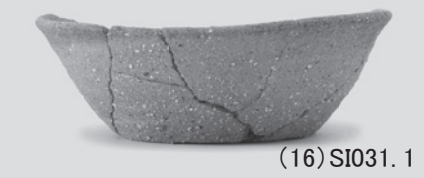
(13)SI001.10

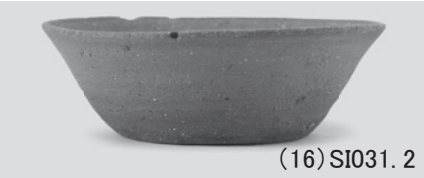
(13)SI001.11

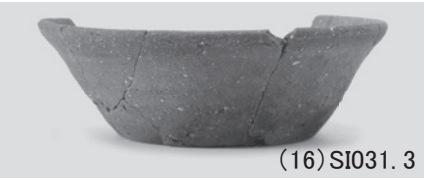
(13)SI001.12

(13)SI001.13

(15)SI002.3

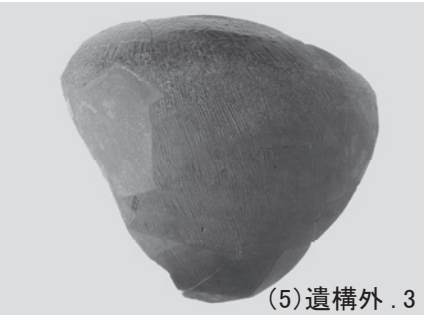

(16)SI031.1


(16)SI031.2


(16)SI031.3

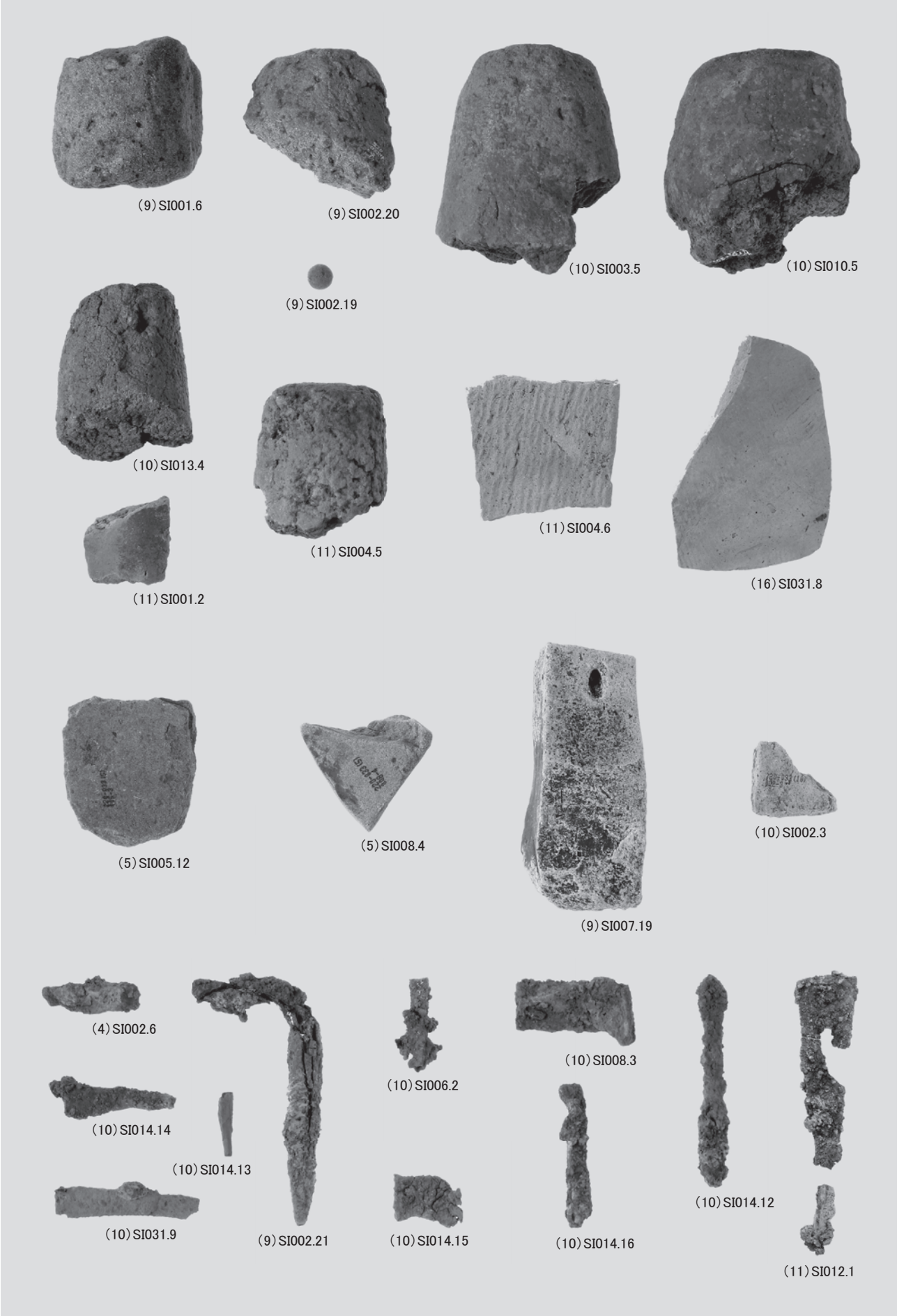
(16)SI031.4

(16)SI031.5


(5)遺構外.3

(11)遺構外.4

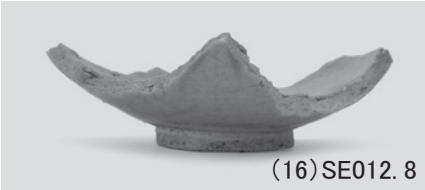
竪穴住居跡出土土器(9)・遺構外出土土器


(9)SI001.6
(9)SI002.20
(10)SI003.5
(10)SI010.5
(9)SI002.19
(10)SI013.4
(11)SI004.5
(11)SI004.6
(16)SI031.8
(11)SI001.2
(5)SI005.12
(5)SI008.4
(9)SI007.19
(10)SI002.3
(4)SI002.6
(10)SI008.3
(10)SI006.2
(10)SI014.14
(10)SI014.13
(10)SI014.12
(10)SI031.9
(9)SI002.21
(10)SI014.15
(10)SI014.16
(11)SI012.1

土製品・砥石・金属製品

(14)SK001.1

(16)SE012.7


(16)SE012.8

(16)SE012.9

(16)SE012.10

(16)SE012.11

(16)SE012.12

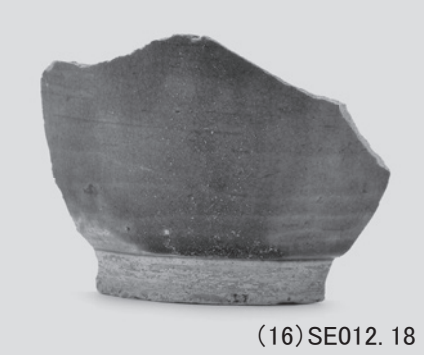
(16)SE012.13

(16)SE012.14

(16)SE012.15

(16)SE012.16

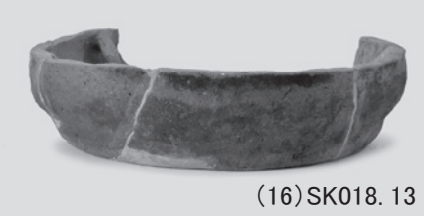
(16)SE012.17


(16)SE012.18

(16)SE012.19

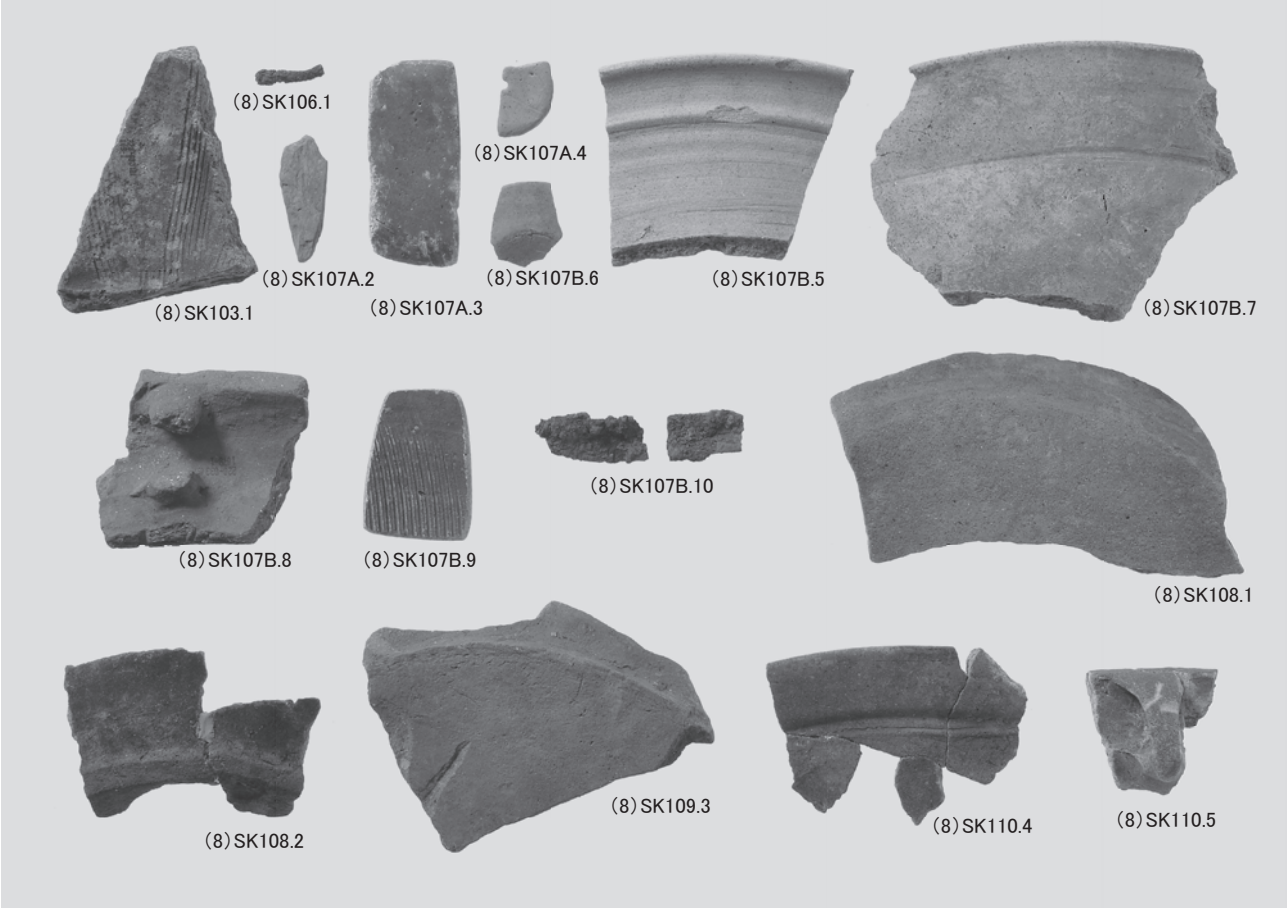
(16)SD014.2

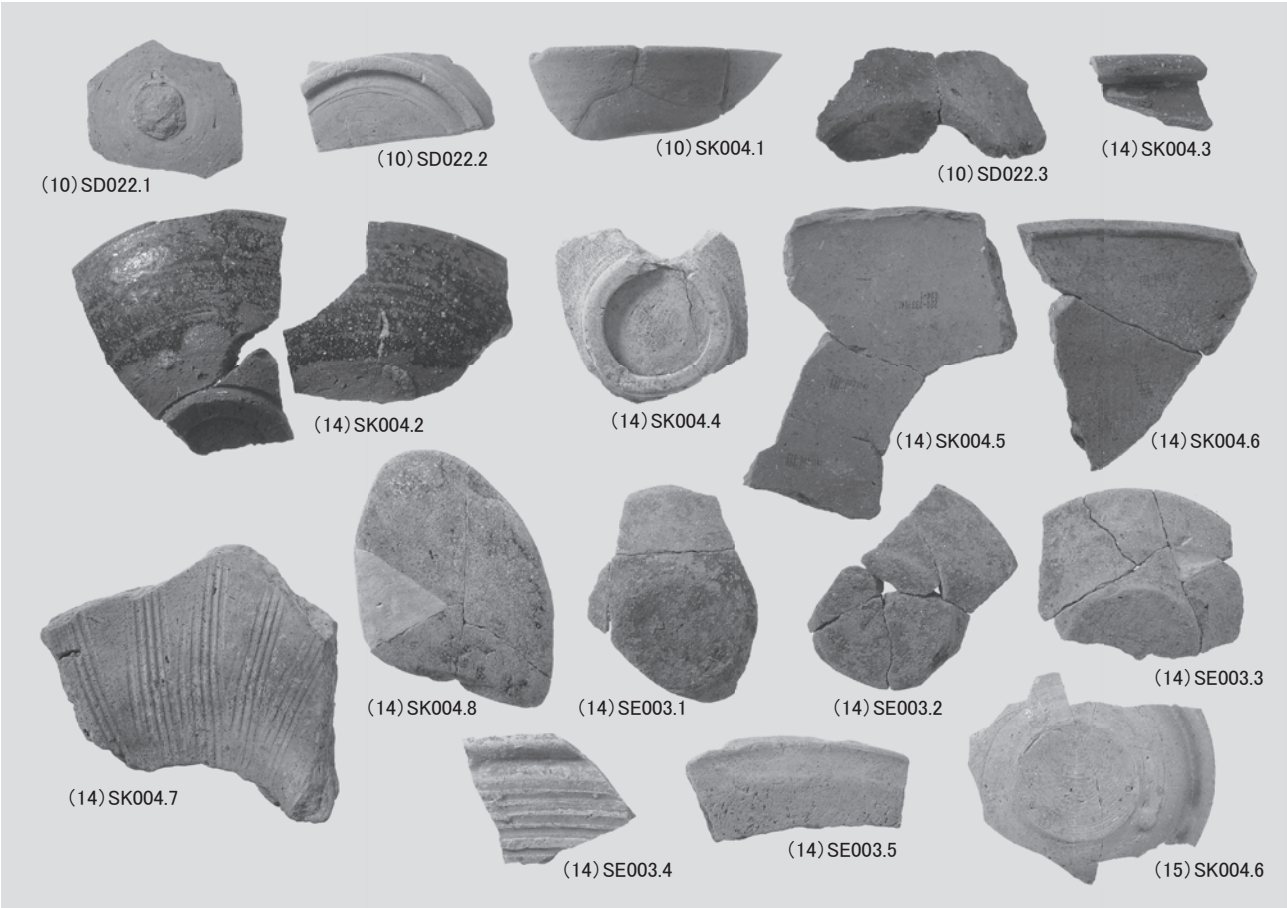
(16)SK018.12


(16)SK018.13

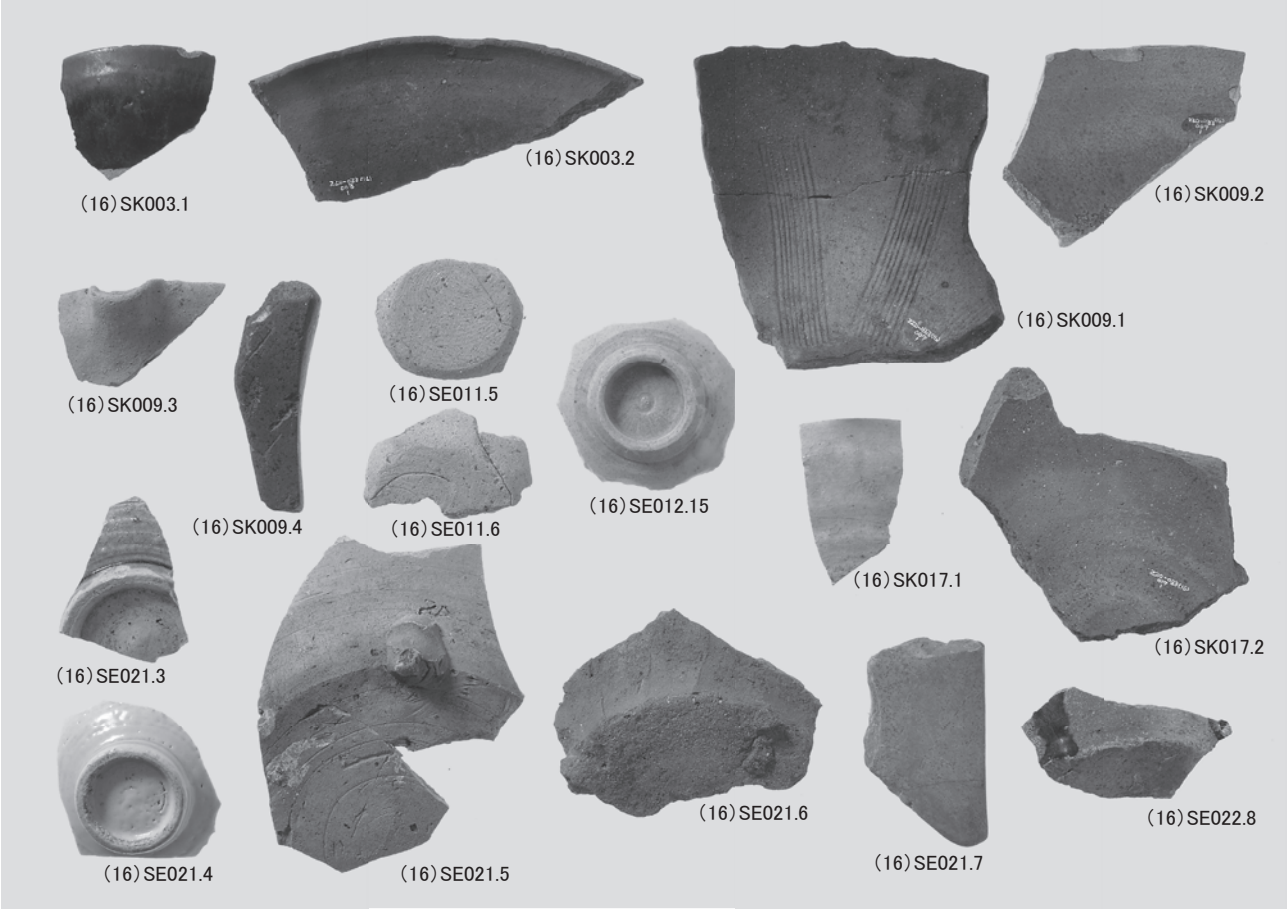
(16)SD024.1

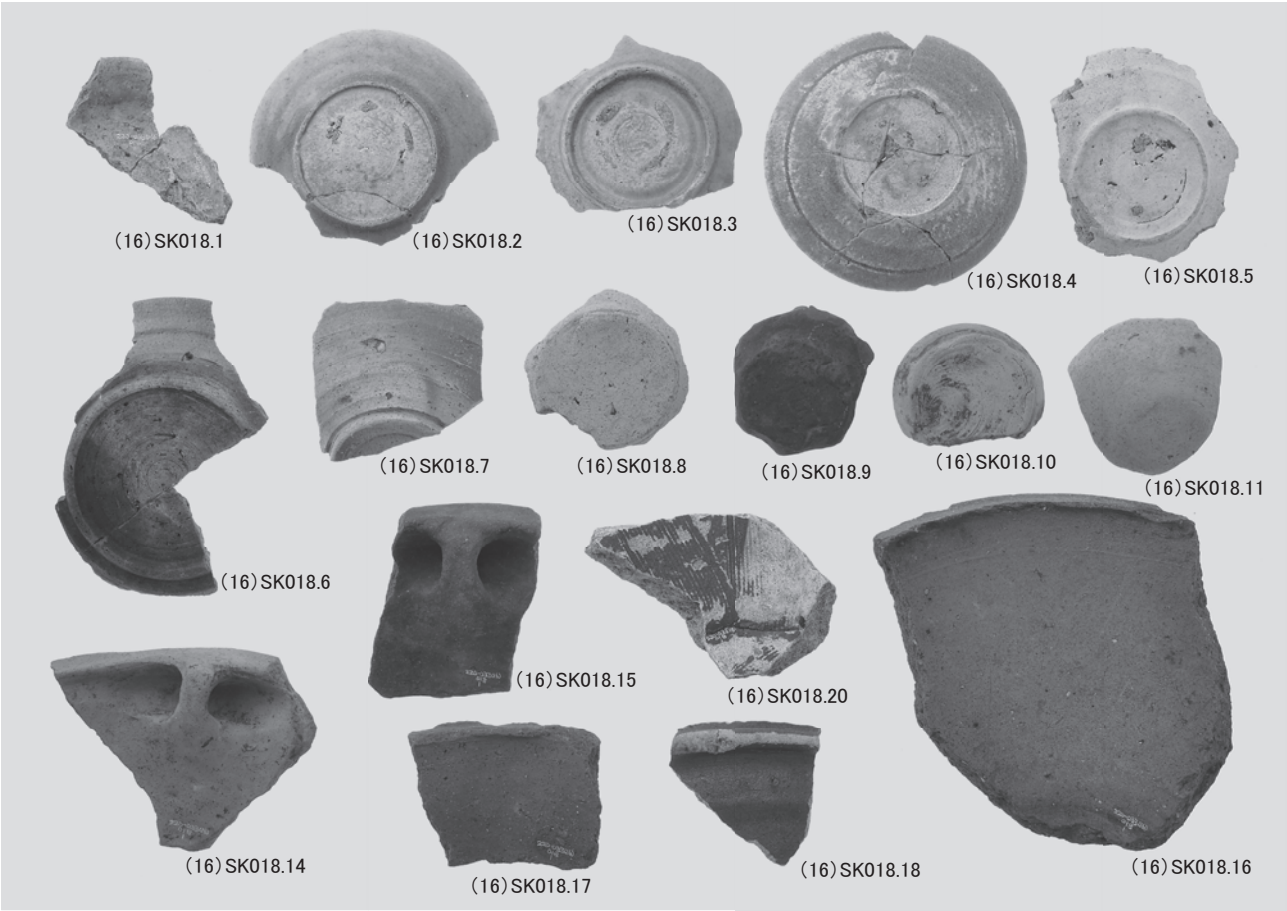
中・近世遺物(1)


(8)SK106.1
(8)SK107A.4
(8)SK107A.2
(8)SK107B.6
(8)SK107B.5
(8)SK103.1
(8)SK107A.3
(8)SK107B.7
(8)SK107B.10
(8)SK107B.8
(8)SK107B.9
(8)SK108.1
(8)SK109.3
(8)SK110.4
(8)SK110.5
(8)SK108.2

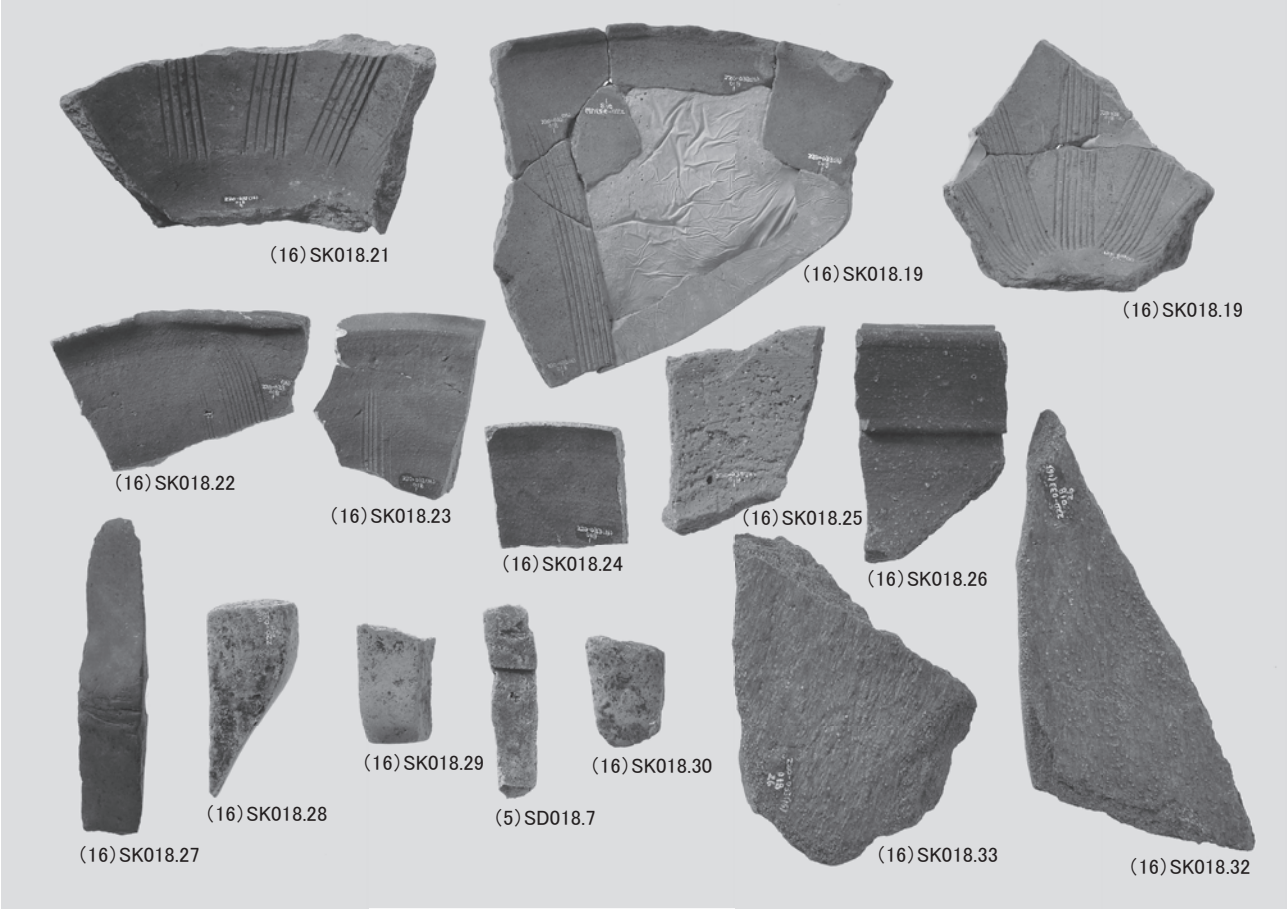

(10)SD022.1
(10)SD022.2
(10)SK004.1
(10)SD022.3
(14)SK004.3
(14)SK004.2
(14)SK004.4
(14)SK004.5
(14)SK004.6
(14)SK004.8
(14)SE003.1
(14)SE003.2
(14)SE003.3
(14)SK004.7
(14)SE003.4
(14)SE003.5
(15)SK004.6

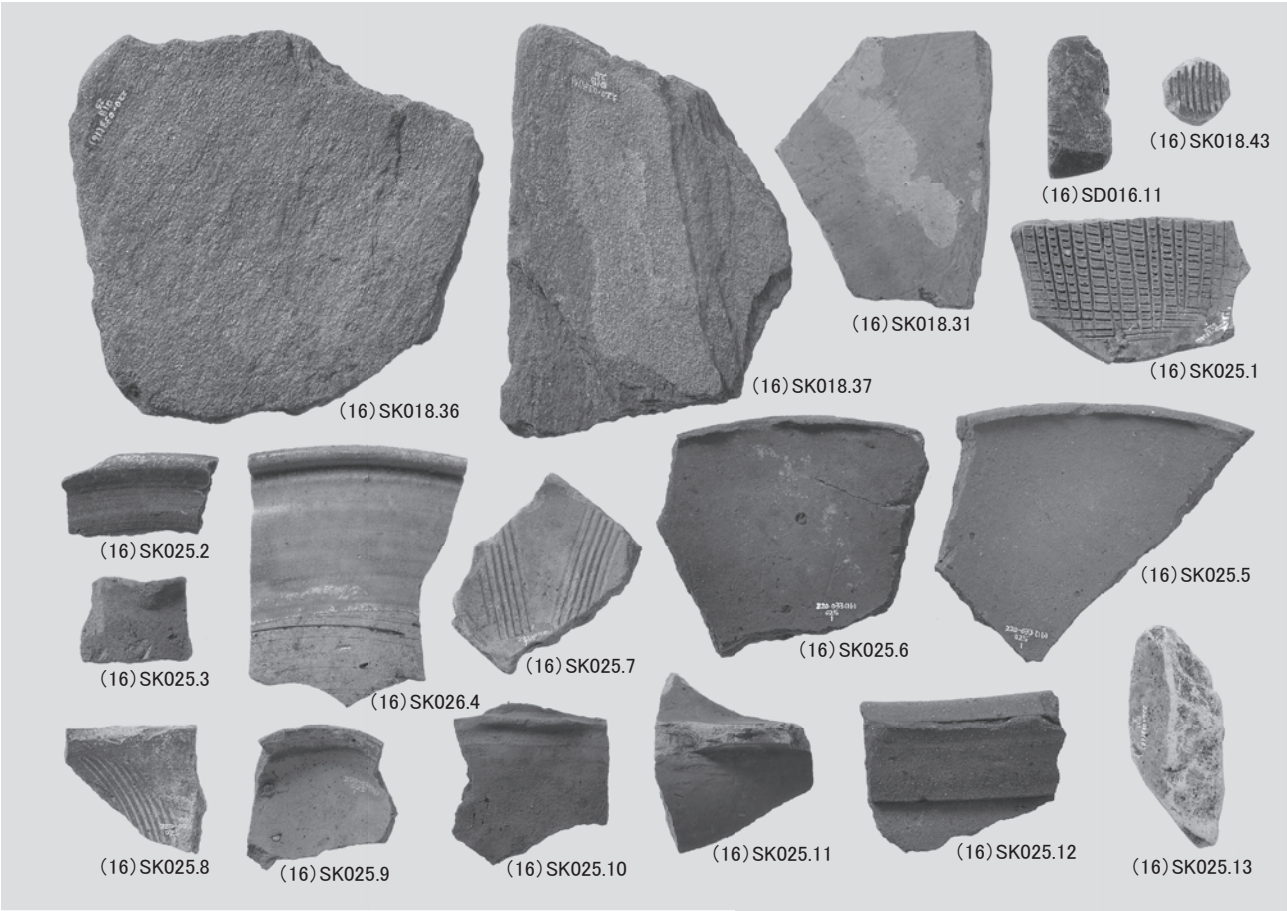
中・近世遺物(2)


(16)SK003.1
(16)SK003.2
(16)SK009.1
(16)SK009.2
(16)SK009.3
(16)SK009.4
(16)SE011.5
(16)SE011.6
(16)SE012.15
(16)SK017.1
(16)SK017.2
(16)SE021.3
(16)SE021.4
(16)SE021.5
(16)SE021.6
(16)SE021.7
(16)SE022.8


(16)SK018.1
(16)SK018.2
(16)SK018.3
(16)SK018.4
(16)SK018.5
(16)SK018.6
(16)SK018.7
(16)SK018.8
(16)SK018.9
(16)SK018.10
(16)SK018.11
(16)SK018.14
(16)SK018.15
(16)SK018.16
(16)SK018.17
(16)SK018.18
(16)SK018.20

中・近世遺物(3)


(16)SK018.21
(16)SK018.19
(16)SK018.19
(16)SK018.22
(16)SK018.23
(16)SK018.24
(16)SK018.25
(16)SK018.26
(16)SK018.27
(16)SK018.28
(16)SK018.29
(5)SD018.7
(16)SK018.30
(16)SK018.33
(16)SK018.32


(16)SK018.36
(16)SK018.37
(16)SK018.31
(16)SD016.11
(16)SK018.43
(16)SK025.1
(16)SK025.2
(16)SK025.3
(16)SK026.4
(16)SK025.7
(16)SK025.6
(16)SK025.5
(16)SK025.8
(16)SK025.9
(16)SK025.10
(16)SK025.11
(16)SK025.12
(16)SK025.13

中・近世遺物(4)

(5)L45-05.1
(5)L44-93.2
(5)11トレンチ.6
(10)表採.8
(2)1トレンチ.9
(2)1トレンチ.10
(12)N44-40.11
(10)2トレンチ.12
(13)H44-88.7
(13)H44-98.13
(13)T45-42.14
(10)1トレンチ.15
(5)SD018.5
(5)SD003.3
(5)SD003.1
(5)SD003.2
(15)SD018.4
(5)SD018.6
(5)SD019.8
(16)SD024.2
(16)SD024.4
(16)SD024.6
(16)SD024.3
(16)SD024.7
(16)SD024.8
(16)SD024.5

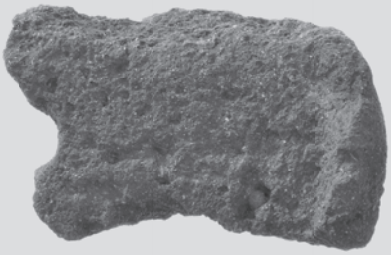
(16)SD001.1
(16)SD015.3
(16)SD015.4
(16)SD015.5
(16)SD015.6
(16)SD016.8
(16)SD016.7
(16)SD016.9
(16)SD016.10
(16)SD016.12
(16)SD029.13
(16)SD029.15
(16)SD006.1
(16)SD006.2
(16)SD007.3
(16)SD007.4
(16)SD029.14

中・近世遺物(5)

表

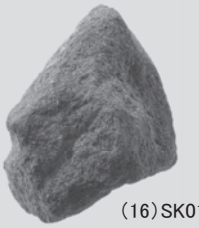
(16)SK018.34

裏



(16)SK018.38

(16)SK018.39

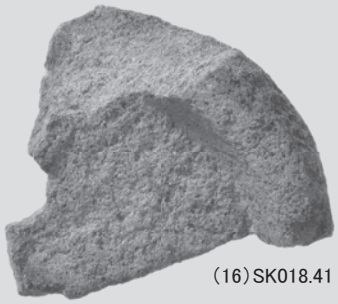


(16)SK018.40

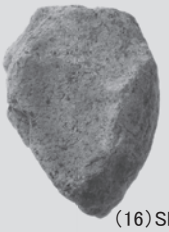
表

(16)SK018.35

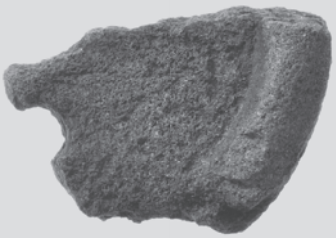
裏



(16)SK018.41

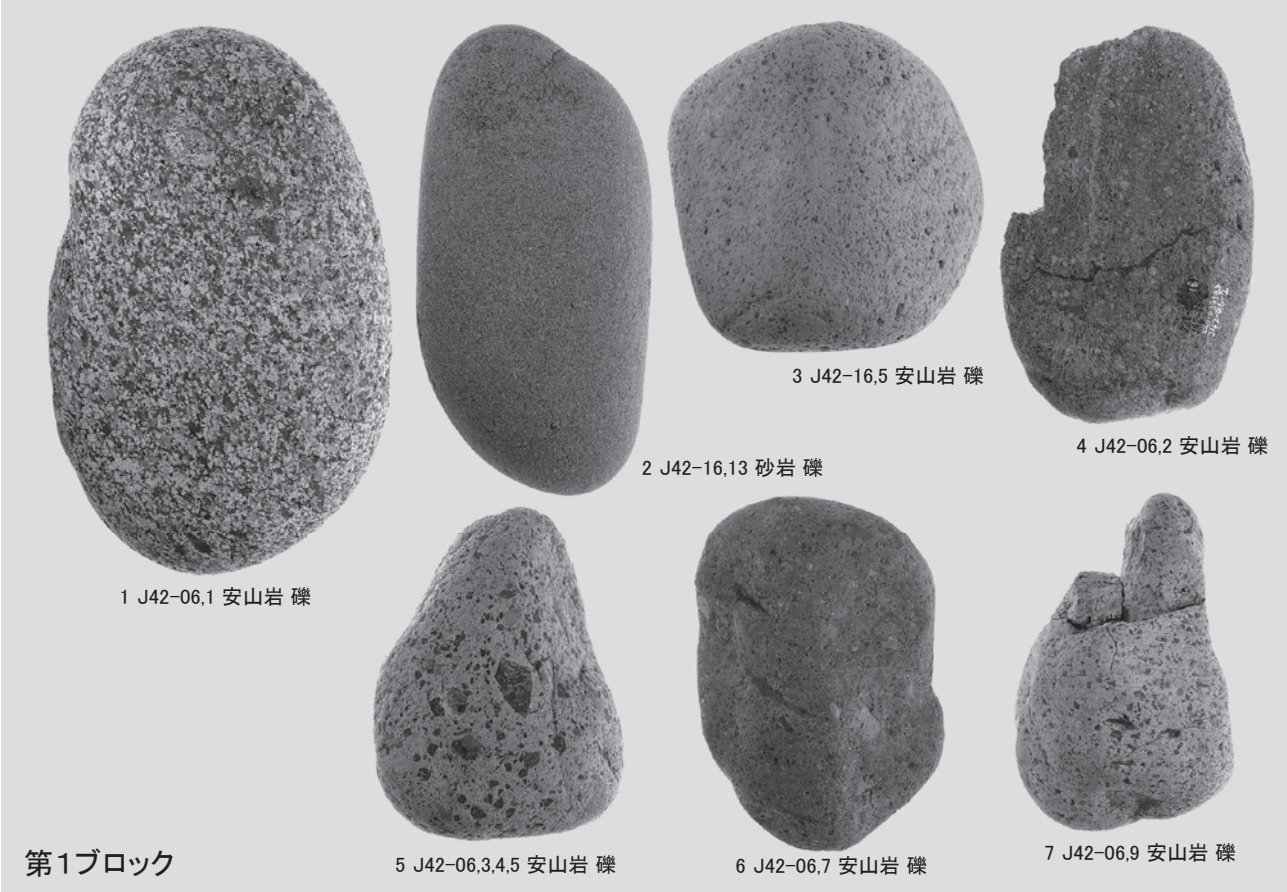


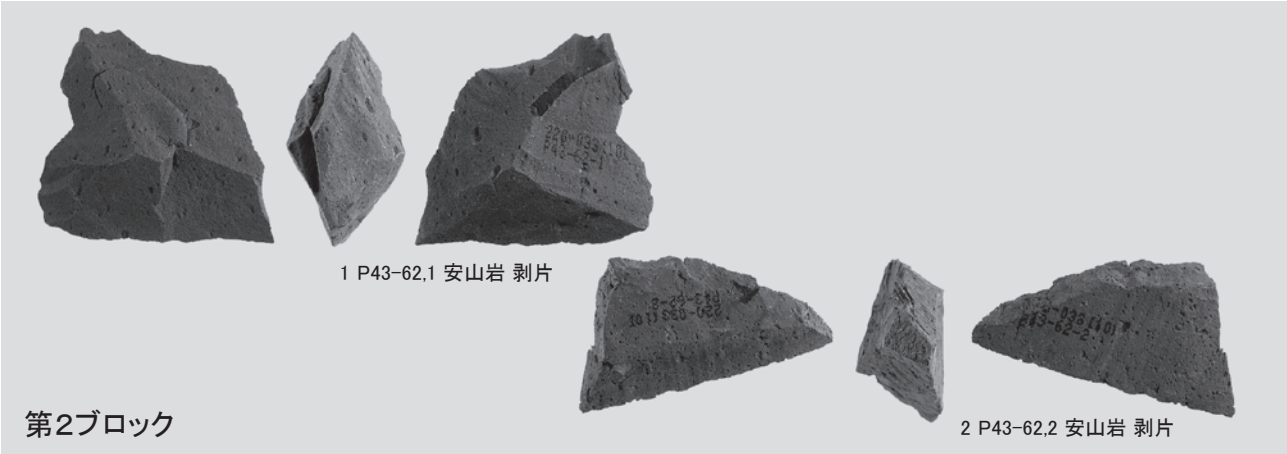
(16)SK018.42

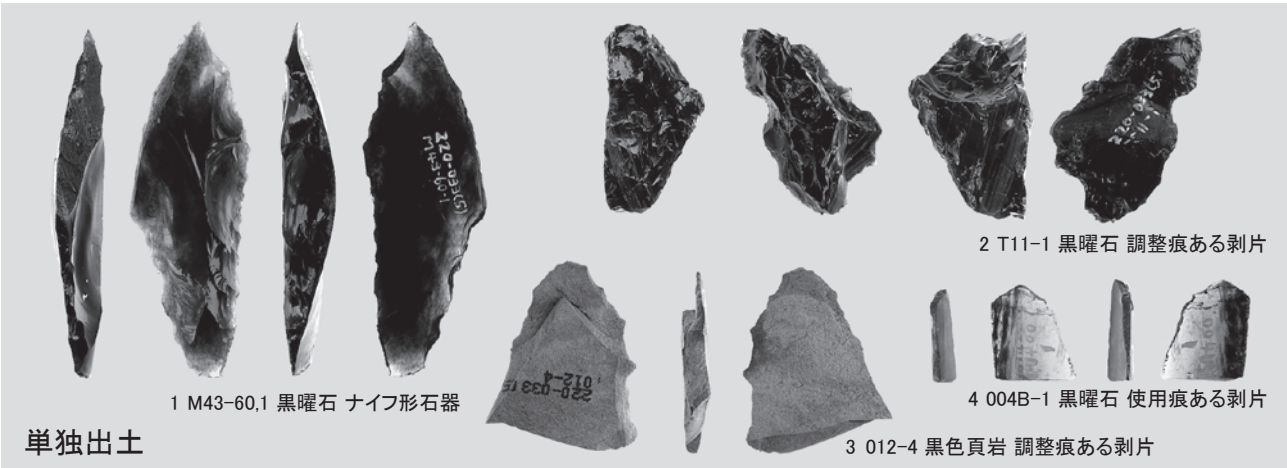


(11)遺構外.16

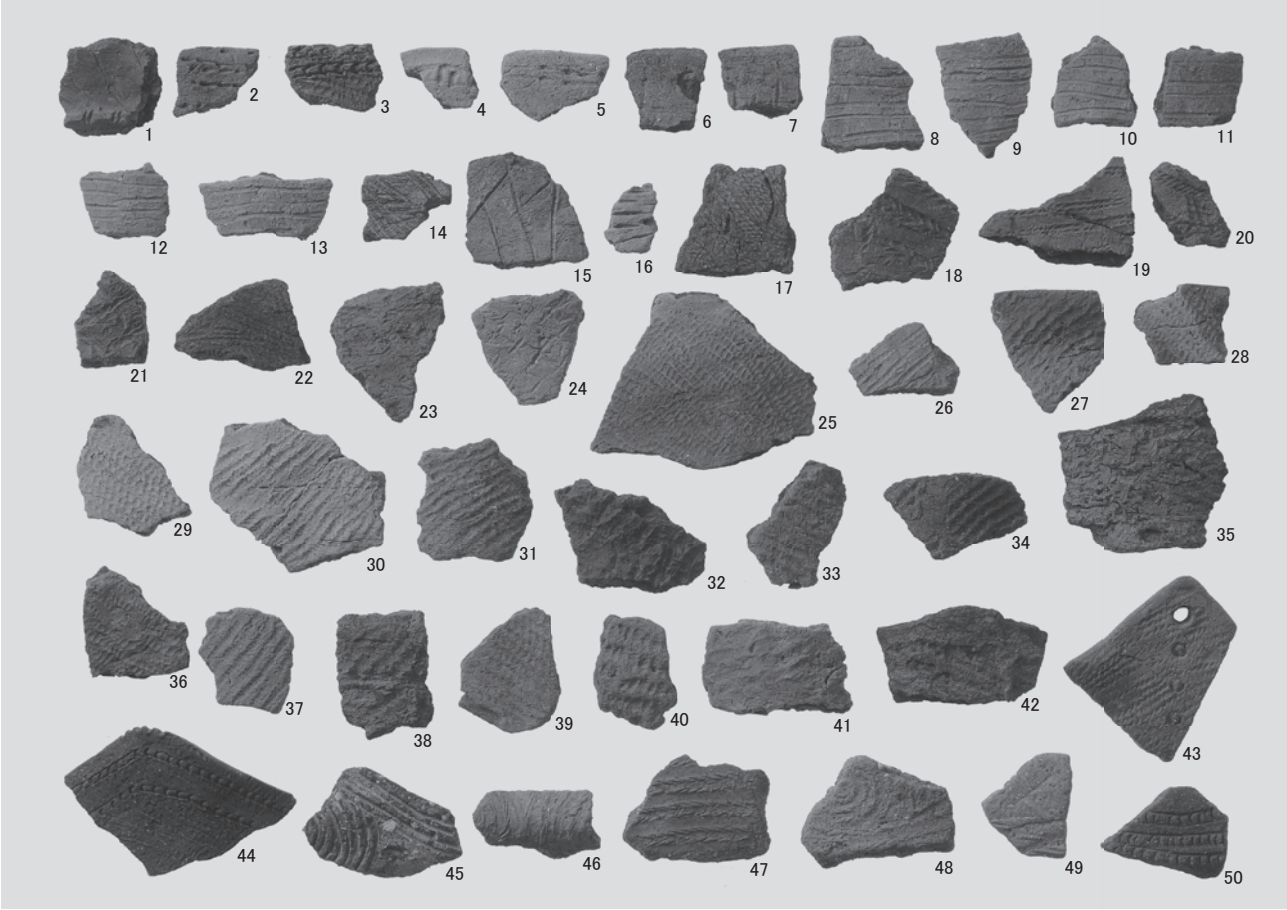
板碑・石臼

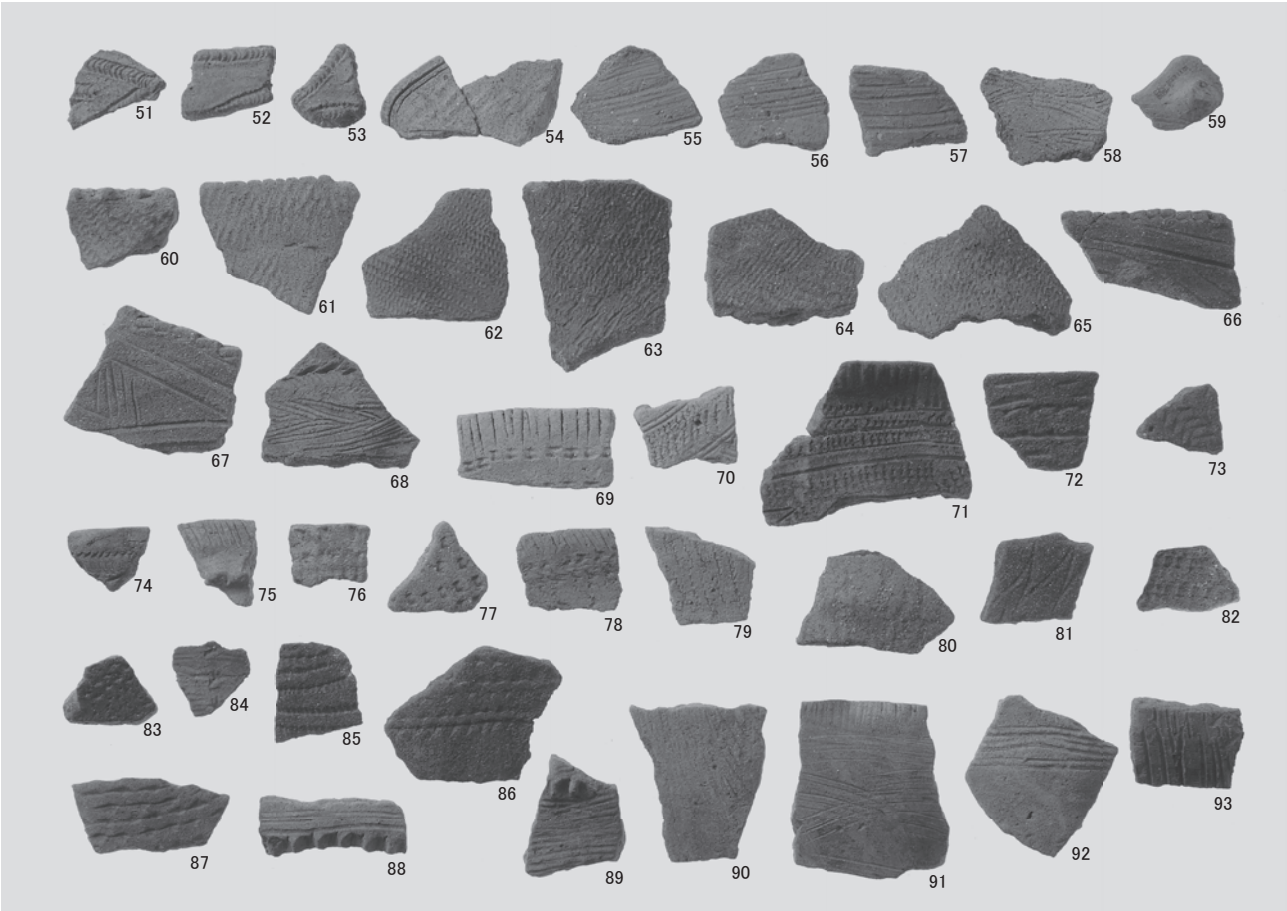

1 J42-06,1 安山岩 礫
2 J42-16,13 砂岩 礫
3 J42-16,5 安山岩 礫
4 J42-06,2 安山岩 礫
5 J42-06,3,4,5 安山岩 礫
6 J42-06,7 安山岩 礫
7 J42-06,9 安山岩 礫
第1ブロック


1 P43-62,1 安山岩 剥片
2 P43-62,2 安山岩 剥片
第2ブロック

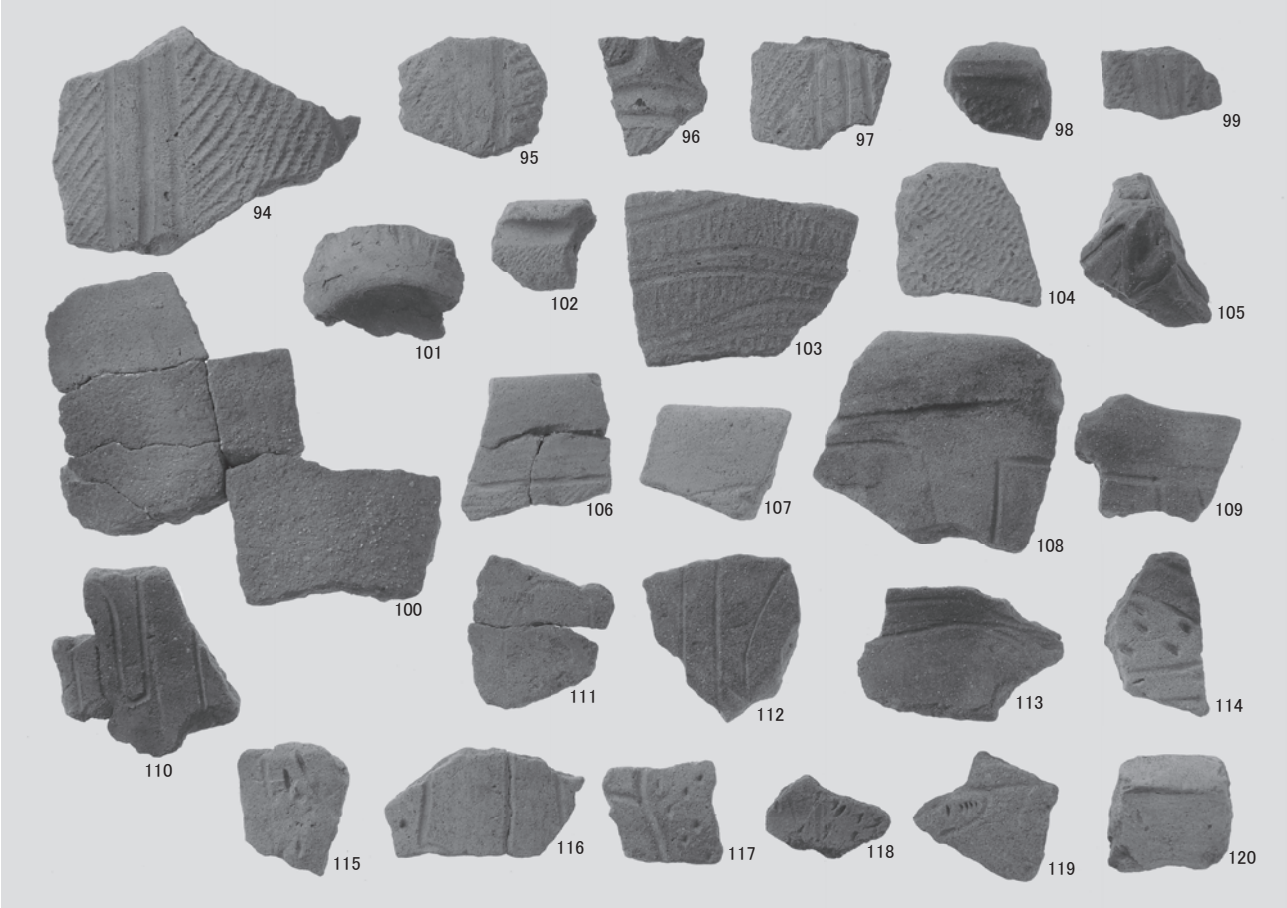

1 M43-60,1 黒曜石 ナイフ形石器
2 T11-1 黒曜石 調整痕ある剥片
3 012-4 黒色頁岩 調整痕ある剥片
4 004B-1 黒曜石 使用痕ある剥片
単独出土

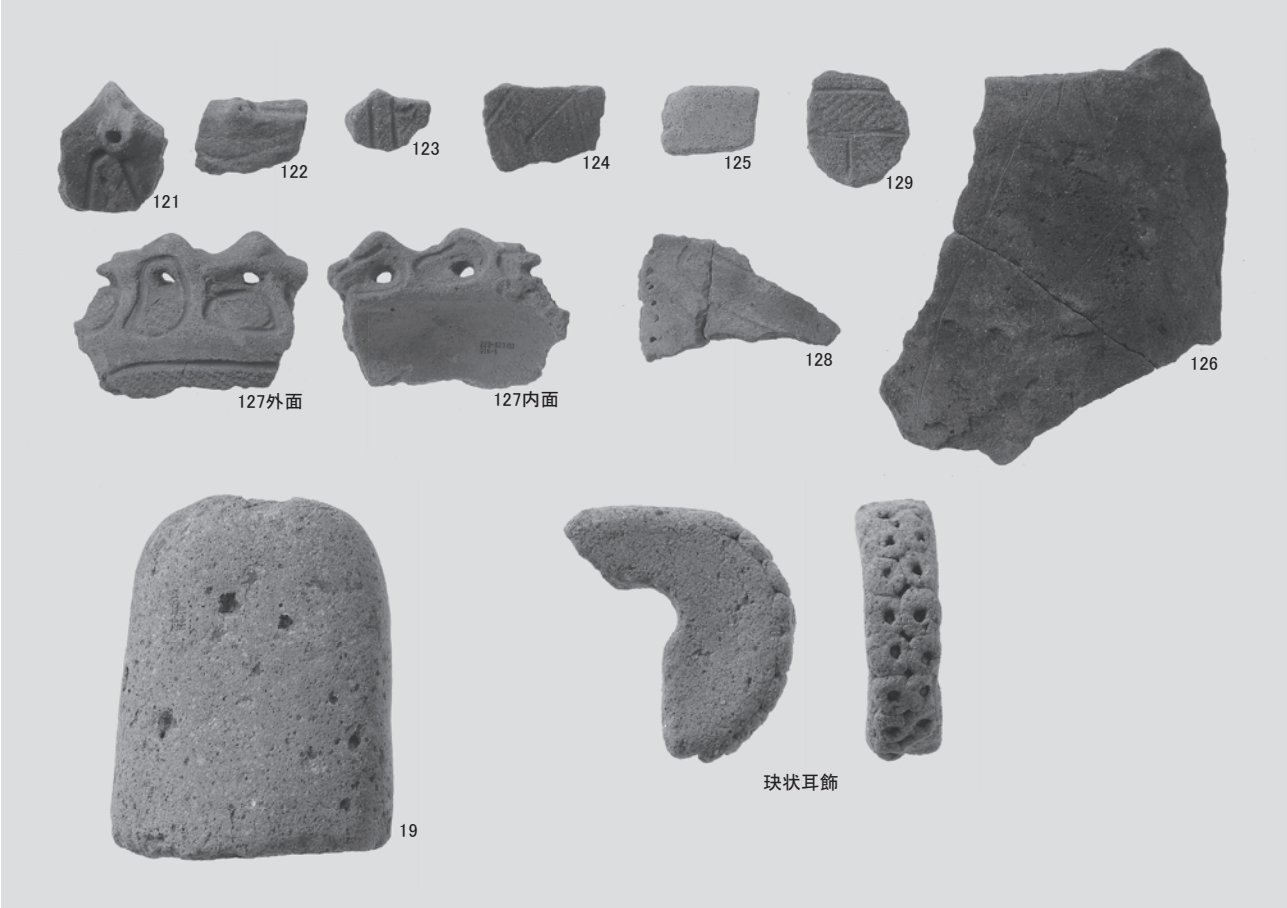
旧石器時代石器





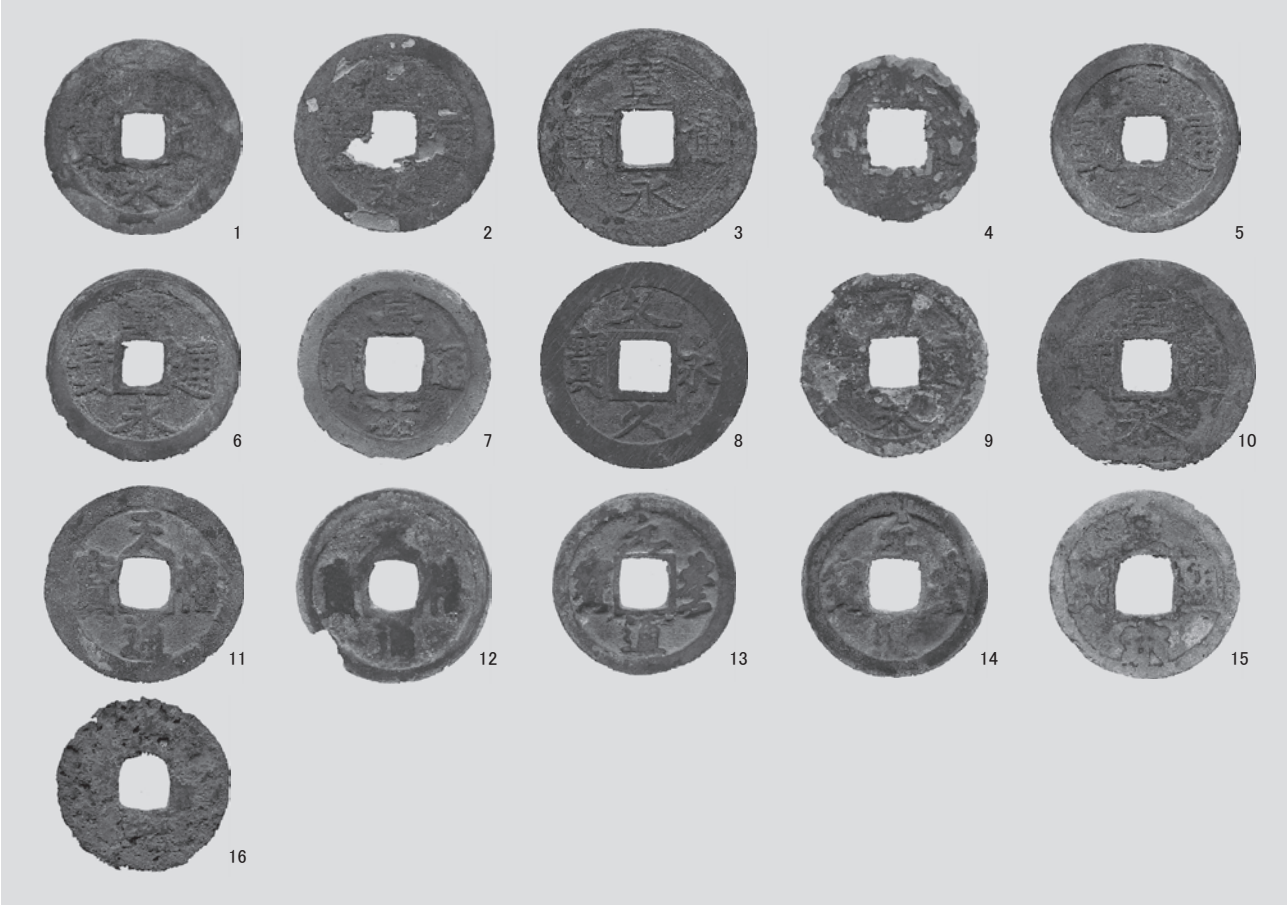
縄文土器(1)





縄文土器(2)・縄文時代石器・土製品

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16

縄文時代石器・銭貨

報　告　書　抄　録

ふりがな	ながれやまうんどうこうえんしゅうへんちくまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書
副書名	流山市前平井堀米遺跡
巻次	5
シリーズ名	千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第34集
編著者名	蜂屋孝之　落合章雄
編集機関	千葉県教育委員会
所在地	〒260-8662　千葉県千葉市中央区市場町 1-1　　TEL043-223-4129
発行年月日	西暦2020年12月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積等	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まえひらいほりごめ 前平井堀米	ながれやましまえひらい 流山市前平井 あざほりごめ 字堀米 110 ほか	12220	033	35度 51分 16秒	139度 54分 46秒	19980220 ～ 20120511	40,840㎡	土地区画整理事業
				日本測地系				

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
前平井堀米	包蔵地	旧石器	石器集中地点　２か所	ナイフ形石器、剥片、礫	
	包蔵地	縄　文	陥穴　２基	縄文土器（早期～晩期）、縄文時代石器（石鏃、打製石斧、磨製石斧、磨石類、石皿）、土製品（玦状耳飾）	
	集落跡	古　墳	竪穴住居跡８軒	須恵器、土師器、石製模造品・瓦・砥石	
		奈良・平安	竪穴住居跡 43 軒	須恵器、土師器、金属製品（鏃・刀子・鎌・釘）、支脚、砥石	
		中・近世	地下式坑　20基 土坑墓　１基 井戸　７基 土坑　17基 ピット群　２か所 溝状遺構　28条	陶磁器、土師質土器、カワラケ、内耳土器、土製品（転用砥石）、石製品（板碑、石臼、砥石・円盤）、金属製品（鎌）、銭貨	紀年名のある板碑が出土

要　約	旧石器時代は、2つの石器集中地点が検出されている。縄文時代の遺構は陥穴が検出されているほか、縄文土器・石器が僅かに出土している。土器は早期～後期の時期である。古墳時代以降では、5世紀中葉の竪穴住居跡が1軒検出されているほかは、7世紀後半～9世紀前半までの小規模な集落が継続して営まれていたことが明らかとなった。中世後期15世紀～16世紀の地下式坑や土坑などが検出され、区画溝とみられる溝状遺構などから屋敷地の存在が推測される。多量の陶磁器類のほか紀年銘のある板碑が出土している。

千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第 34 集

流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書５

－流山市前平井堀米遺跡－

令和２年12月25日発行

編 集・発 行　　千葉県教育委員会
千葉市中央区市場町１－１

印　　刷　　有限会社　八千代折込広告
八千代市ゆりのき台７－５－３